

島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書ⅩⅦ

平成 31 年 3 月

茨 城 県
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第9集 島名熊の山遺跡
茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第437集

しま な くま やま
島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅻ

平成31年3月

茨 城 県
公益財団法人茨城県教育財団



調査区全景 (平成23年度調査)



第3092号竪穴建物跡遺物出土状況 (平成22年度調査)

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県による鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業に伴って実施した、茨城県つくば市鳥名熊の山遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

当遺跡は茨城県から委託を受け、平成7年度から平成28年度にわたって、約27万平方メートルについて発掘調査を実施しました。その成果については、既に『茨城県教育財団文化財調査報告第120集』以下20冊を順次刊行し、本年度が最終報告となります。

今回の調査区は当遺跡の南端部にあたり、古墳時代から平安時代にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡などが確認でき、遺跡全体の集落の様相が明らかになりました。これらの成果は、当地域の社会の成り立ちや歴史を知る上で、欠くことのできない貴重な資料となります。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県に対して厚く御礼申し上げるとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会はじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長 野口 通

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成22・23年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市島名字寺ノ前1,672-3番地ほかに所在する島名熊^{しまなこま}の山遺跡^{やま}12区の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査 平成22年4月1日～6月30日 8月1日～9月30日

平成23年11月1日～平成24年3月31日

整理 平成30年4月1日～平成31年3月31日

- 3 発掘調査は、平成22年度が調査課長池田見一、平成23年度が調査課長櫻村宣行のもと、以下の者が担当した。

平成22年度

首席調査員兼班長 仲村浩一郎

首席調査員 小澤 重雄 平成22年4月1日～5月31日

首席調査員 酒井 雄一 平成22年4月1日～6月30日

主任調査員 本橋 弘巳 平成22年8月1日～9月30日

主任調査員 大関 隆 平成22年4月1日～5月31日

調査員 宮崎 剛 平成22年4月1日～6月30日

調査員 大久保隆史 平成22年8月1日～9月30日

平成23年度

首席調査員兼班長 稲田 義弘

主任調査員 兼子 博史

副主任調査員 清水 哲

- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長皆川修のもと、以下の者が担当した。

調査員 海老澤 稔

調査員 見越 広幸 平成30年10月1日～10月31日

- 5 本書の執筆分担任は、下記のとおりである。

海老澤 稔 第1章～第3章第3節1(1)、2(1)・(2)、3(1)・(2)、5、第4節

見越 広幸 第3章第3節1(2)、2(3)、3(3)・(4)、4

- 6 下記の金属製品の保存処理については、パリオ・サーヴェイ株式会社へ委託した。

第1520号竪穴建物跡出土の鎌1点、第1604号竪穴建物跡出土の帯金具1点、第3077号竪穴建物跡出土の鎌2点、第3078号竪穴建物跡出土の鎌1点、第3079号竪穴建物跡出土の刀子1点、第3095号竪穴建物跡出土の鎌1点、第3130号竪穴建物跡出土の刀子1点、第3136号竪穴建物跡出土の鎌2点、第3144号竪穴建物跡出土の刀子1点

- 7 当遺跡から出土した砥石6点の石材鑑定について、産業技術総合研究所地質調査総合センターイノベーションコンコーディネーター齋藤眞氏、宮崎一博氏、昆慶明氏にご指導いただいた。

- 8 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真等の資料は、一括して茨城県埋蔵文化財センターにて保管している。

凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = +7,320\text{ m}$ 、 $Y = +20,200\text{ m}$ の交点を基準点 (A 1a) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a区」のように呼称した。

- 2 抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を()を付けて併記した。

- 3 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 SB-掘立柱建物跡 SE-井戸跡 SI-竪穴建物跡 SK-土坑

遺物 DP-土製品 M-金属製品・銭貨 Q-石器・石製品・剥片

土層 K-攪乱

- 4 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・施釉

 火床面

 竈部材・粘土範囲・黒色処理

 柱痕跡・柱あたり

硬化面 - - - - -

●土器

○土製品

□石器・石製品

△金属製品

- 5 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 6 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm、cm、gで示した。なお、現存値は()を、推定値は[]を付して示した。

(2) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(3) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

- 7 竪穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。

- 8 今回の報告分で、整理の段階で遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SI1527 → SI3141 SI3141 → SI1527 SI3130 → SI3096 SK7162 → SI2969 P1

SK7166 → SI2969 P2 SB557 P12 → SK7002 SB586 P4 → SK7176 SI3137 P1 → SK7644

SI3137 P2 → SK7645 SI3095 P8 → SB569 P7 SB184 P2 → SK7647 SI3111 P7 → SK7650

SK7178 → SB590 P4 SK7179 → SB590 P3

欠番 SI3046 SI3076 SI3101 SI3106 SI3126 SI3135 SI3147 SI3152 SI3154 SK7029 SK7152 SK7164

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
鳥名熊の山道跡の概要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	12
第1節 調査の概要	12
第2節 基本層序	12
第3節 12区の遺構と遺物	13
1 古墳時代の遺構と遺物	13
(1) 堅穴建物跡	13
(2) 土 坑	60
2 奈良時代の遺構と遺物	62
(1) 堅穴建物跡	62
(2) 掘立柱建物跡	99
(3) 土 坑	121
3 平安時代の遺構と遺物	125
(1) 堅穴建物跡	125
(2) 掘立柱建物跡	195
(3) 土 坑	213
(4) 井戸跡	221
4 時期不明の遺構	223
土 坑	223
5 遺構外出土遺物	227
第4節 まとめ	231
写真図版	PL 1～PL48
抄 録	

しまなぐま やま 島名熊の山遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

島名熊の山遺跡は、つくば市の南西部、やだがわ谷田川右岸の標高約 24 m の台地上から 13 m の低地にかけて立地しています。遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、調査を平成 7 年度から平成 28 年度にわたり断続的に行いました。今回報告する区域は、平成 22・23 年度に調査を行った面積 1,800㎡で、遺跡南端部の平坦部から斜面部にあたります。



調査の内容

今回の調査では、たてあなたてものあと竪穴建物跡 70 棟（古墳時代 19・奈良時代 16・平安時代 35）、ほったてばらたてものあと掘立柱建物跡 28 棟（奈良時代 15・平安時代 13）、どこう土坑 167 基、いどあと井戸跡 2 基などを確認しました。大きな集落が遺跡全体に、古墳時代後期から平安時代中頃まで継続していたことがわかりました。



平成 23 年度調査区近景（北から）



重なり合う竪穴建物跡



古墳時代の竪穴建物跡から出土した提瓶



奈良時代の竪穴建物跡から出土した硯



硯が出土した奈良時代の竪穴建物跡

調査の成果

本報告が当遺跡の最終報告書で、これまでに、270,000㎡を超える面積を調査しています。当遺跡の中心時期は、古墳時代後期から平安時代前半（約1,400～1,000年前）にかけてです。確認された遺構は、竪穴建物跡約2,600棟、掘立柱建物跡約450棟、堀・溝跡約400条、井戸跡約230基などです。

この遺構数は古代の河内郡内で最大であることから、当遺跡は河内郡嶋名郷の中心地域と考えられます。このことを裏付けるように、搬入品と考えられる古墳時代後期の埴・長頸瓶・甕・提瓶などの須恵器や地方の役人が使用したと考えられる奈良・平安時代の円面硯、帯金具などが出土しています。また、掘立柱建物跡が並んで建てられた地区は役所の機能をもった施設と考えられ、数多い竪穴建物跡と合わせて、継続型大集落と呼ぶにふさわしい遺跡と考えられます。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成6年8月18日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長あてに鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成6年9月19日から27日にかけて現地踏査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成7年3月8日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事あてに事業地内に鳥名熊の山遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成7年3月14日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長あてに文化財保護法第57条の3（現同法第94条）に基づく土木工事の通知を提出した。平成7年3月16日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事あてに、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成22年2月10日、茨城県つくばまちづくりセンター長は、茨城県教育委員会教育長あてに、鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成22年2月24日及び平成23年2月25日、茨城県教育委員会教育長は茨城県つくばまちづくりセンター長あてに、鳥名熊の山遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団（現公益財団法人茨城県教育財団）を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県つくばまちづくりセンター長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成22年4月1日から6月30日までと8月1日から9月30日まで、平成23年11月1日から平成24年3月31日まで発掘調査を実施した。

第2節 調査経過

鳥名熊の山遺跡の一部である12区の調査は、平成22年4月1日から6月30日までと8月1日から9月30日まで、平成23年11月1日から平成24年3月31日まで実施した。以下、その概要を表で記載する。

期間 工程	平成22年度					平成23年度				
	4月	5月	6月	8月	9月	11月	12月	1月	2月	3月
調査準備 表土除去 遺構確認	■	■	■			■	■			
遺構調査		■	■	■	■		■	■	■	■
遺物洗浄 注記 写真整理		■	■	■	■		■	■	■	■
撤収				■						■

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

鳥名熊の山遺跡12区は、茨城県つくば市鳥名字寺ノ前1.6723番地ほかに所在している。

つくば市は筑波山を北端に、そこから南東へ延びる標高20～25mほどの平坦な台地上に位置している。この台地は筑波・稲敷台地と呼ばれ、東を霞ヶ浦へ流入する桜川、西は利根川に合流する小貝川によって区切られている。両河川の間には、東から花室川、蓮沼川、小野川、谷田川、西谷田川などの中小河川が北から南に向かって流れているため、台地は複雑に開析され、谷津や低地が細長く入り込んでいる。

筑波・稲敷台地は、貝化石を含む海成層の成田層を基盤として、さらにその上に黄褐色砂や黄褐色荒砂層である竜ヶ崎層、さらに灰白色の粘土層である常総粘土層、そして表土下を厚く覆う褐色の関東ローム層が堆積し、最上部は腐食土層となっている¹⁾。

つくば市南西部の鳥名地区は、谷田川と西谷田川によって開析された、狭長な台地上の中央部に位置している。当遺跡は谷田川に面した標高約24mの台地上に立地し、遺跡の範囲は南北880m、東西560mである。当遺跡を囲むように周辺には谷津が入り込み、台地基部から独立した南北約700m、東西約500mの島状を呈している。これまでの調査から、台地上に複数の埋没谷が入り込む様子が明らかとなっており、起伏に富んだ地形であったことがうかがえる。

今回報告する12区は、遺跡南東部に鎮座する香取神社の西側に位置し、標高13～16mの台地斜面部から標高17～22mの台地縁辺部にかけて立地している。また、北部及び西部の台地上から延びている埋没谷が合流する部分にあたる。調査前の現況は畑地である。

第2節 歴史的環境

鳥名熊の山遺跡周辺の小貝川、西谷田川、谷田川、蓮沼川流域の台地には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している。ここでは、主に谷田川と西谷田川流域の遺跡について概観する。

旧石器時代は、平北田遺跡²⁾(37)、下河原崎谷中台遺跡³⁾(75)、元宮本前山遺跡⁴⁾(77)で石器集中地点が確認され、ナイフ形石器や角錐状石器、搔器、尖頭器をはじめ、石枝や剥片などが出土している。また、鳥名前野東遺跡⁵⁾(7)、鳥名一町田遺跡⁶⁾(9)、鳥名境松遺跡¹⁰⁾、鳥名ツバタ遺跡⁷⁾(16)でナイフ形石器や尖頭器、サイドスクレイパー、面野井北ノ前遺跡⁸⁾(25)で荒屋型彫器、当遺跡でナイフ形石器や尖頭器、細石刃石核などが採集されており⁹⁾、当遺跡における石器製作と狩猟生活の様子を示す資料が蓄積されている。

縄文時代では、元宮本前山遺跡で早期の炉穴、下河原崎谷中台遺跡で早期の炉穴や中期から晩期にかけての建物跡、鳥名ツバタ遺跡で早期と中期の建物跡やフラスコ状土坑、鳥名境松遺跡で中・後期の建物跡や土器焼成遺構、土坑などがそれぞれ確認されている。これらの遺跡は河川を望む台地の縁辺部に立地し、特に早期の集落が西谷田川左岸で成立する様子がうかがえる。そのほか、各調査区で前期から後期にかけての土器片や石鏃、石斧、磨石、石皿などが採集されており、当時の人々の生活の痕跡をうかがうことができる。

弥生時代の遺跡は当地域では少なく、当遺跡でも12区の埋没谷周辺から後期後半の土器片が採集されているだけである。出土した土器片には糊痕が認められ¹⁰⁾、当地域の稲作を考える上で興味深い資料となっている。

古墳時代前期になると、谷田川沿いに小規模な集落が点在するようになる。鳥名一町田遺跡では、南関東系の土器を伴う初期の集落が出現し、当遺跡や鳥名前野遺跡¹¹¹〈6〉では集落跡、鳥名前野東遺跡では集落に付随した形で方形周溝墓3基が確認されている。また、面野井古墳群¹²²〈28〉では、方形周溝墓4基と円墳1基が確認され、周溝からは南関東系の装飾壺、及び底部穿孔壺の土器が出土しており、谷田川上流域に南関東系の文化を持った集団が移住してきたことが明らかとなっている。特に第2号方形周溝墓からは、方台部に木棺直葬の埋葬施設が確認され、副葬品として石製の勾玉と管玉、ガラス製の玉類が出土し、県内でも貴重な調査事例である。

中期になると、集落が西谷田川沿いにも広がりを見せ、前述した遺跡に加えて鳥名ツバタ遺跡や谷田部漆遺跡¹³⁰〈56〉、上笠丸古屋敷遺跡¹³¹〈57〉、真瀬三度山遺跡¹³²〈58〉などで集落跡が確認されている。特に、元宮本前山遺跡では滑石製模造品の製作跡が確認され、下河原崎谷中台遺跡では県内初の琴柱形石製品の出土が注目される。これらの集落は、台地縁辺部や低湿地へ向かう緩斜面部に適度な距離を置いて営まれており、その立地や経営には、台地裾部の自然湧水を利用した谷津田との関わりが強く考えられる。

後期になると、6世紀後半以降、台地全体に集落域が拡大していく様子が確認できる。当遺跡周辺では鳥名八幡前遺跡¹⁴¹〈3〉、鳥名前野遺跡、鳥名前野東遺跡、平北田遺跡などの集落が継続して営まれており、当遺跡の集落は、近接するこれらの遺跡と補充し合う形をとりながら、古墳時代の終わりまで存続したものと考えられる。また、当該期は古墳が急増し、当遺跡南東部の台地先端部で径約19mと約8mの円墳2基が確認されている。当遺跡周辺では鳥名前野古墳〈8〉、鳥名榎内古墳群〈13〉、鳥名榎内西古墳群〈14〉、鳥名関ノ台古墳群〈18〉、面野井古墳群、下河原崎高山古墳群〈74〉などがあり、いずれも径10～20mの小円墳を主とした構成からなる地域的な群集墳の在り方を示している。中でも、当遺跡の北側に隣接する鳥名関ノ台古墳群は、全長約40mの前方後円墳と円墳27基が存在したと言われ、被葬者は鳥名地区の盟主的存在であった可能性が高い。

奈良時代になると、鳥名地区は急速に集落の再編が進んでいる。その背景には、律令国家の成立と国郡制の整備が考えられ、当地区は河内郡嶋名郷に編入される。当遺跡や鳥名八幡前遺跡の集落跡は、大型建物跡とそれに付随する掘立柱建物跡が中心で、いずれも真北を主軸とした配置をとるようになる。さらに、当集落の中央部に「し」字状に掘立柱建物群が配置され、郷関連の官衙的施設の可能性も指摘されている。一方、7世紀に一旦集落が途絶えていた鳥名前野遺跡や鳥名前野東遺跡では、8世紀中頃に再び集落が形成される。それは、空閑地となっていた土地が律令体制の進展と共に再開発の適地となったためと考えられる。しかし、これらの遺跡以外に鳥名地区では集落跡が認められなくなり、当遺跡周辺だけに集落が集中する現象が認められる。

平安時代になると遺跡数はさらに減少し、現在集落跡として明確に捉えられるのは当遺跡と鳥名八幡前遺跡のみである。両遺跡では、鍛冶生産や紡績などの手工業関連の遺構・遺物が確認でき、9世紀への集落の継続性を考えたとき、極めて示唆的である。また、大規模な集落を残し、8世紀以来の集落が消滅していく状況は、律令体制の行き詰まりに伴う集落の再編成と考えることもできる。

また、当遺跡12区の南東部の斜面では湧水点に木枠を設置した水場が構築されており、その周辺からは多量の土器や木製品が出土している。特に「嶋名」と記された墨書土器や人名が記された木簡が注目される。この水場において、当集落の人々による祭祀行為の可能性が想定されている¹⁵⁰。9世紀の集落再編も10世紀を迎えると新たな展開を示し、鳥名八幡前遺跡の集落は終焉を迎えている。一方、当遺跡の集落はそれ以降も存続し、11世紀まで断続的に営まれている。その後の集落の様相は、不明瞭であるが、墓坑や井戸跡から平安時代末期と考えられる和鏡¹⁶¹や小銅仏¹⁶²が出土しており、遺物の面から有力者の存在をうかがうことができる。

平安時代末期には、鳥名地区周辺は八条院領として立荘された田中荘に組み込まれ、鎌倉時代以降に田中荘

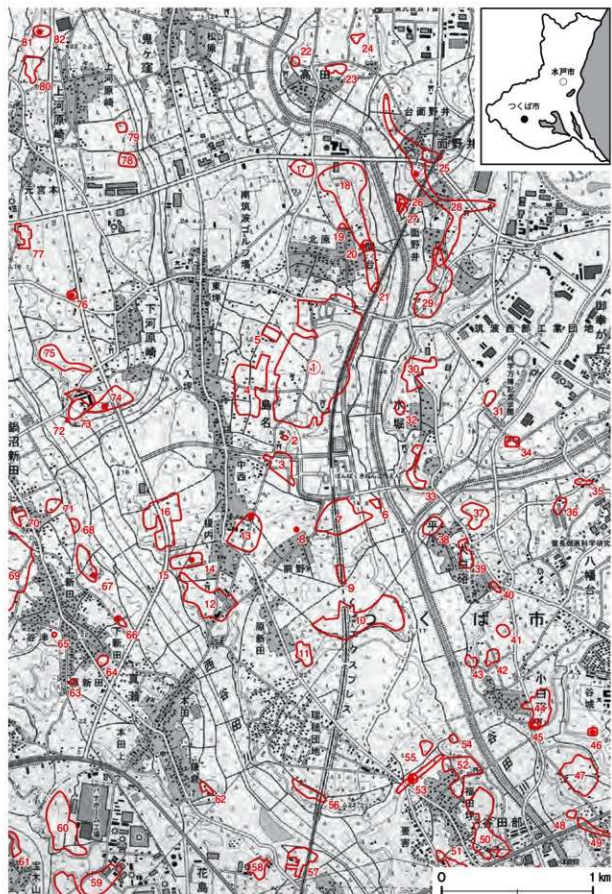
は小田氏の支配下となる。当該期の周辺の遺跡は、平出氏の居城と伝えられる面野井城跡(27)や鳥名前野東遺跡がある。鳥名前野東遺跡では、方一町に巡る堀に囲まれた方形居館が確認され、鳥名地区一帯を治めていた有力者の居宅と思われる。永仁五年(1297)には、当遺跡の中央部西寄りに妙徳寺が開山し、当遺跡では梵鐘の乳や鯉口などの鋳型片が出土した鋳造土坑が確認されている¹⁰⁾。また、15世紀後半から17世紀前半にかけての墓域が確認され、妙徳寺との関連をうかがうことができる。妙徳寺の周辺では幅5m、深さ2mの薬研堀が確認され、寺域周辺は防御施設としての機能も果たしていたことが明らかとなった¹⁰⁾。

※ 本章は、既刊の「鳥名熊の山遺跡」を参照し、加筆した。文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1の当該番号と同じである。

註

- 1) 日本の地質「関東地方」編集委員会「日本の地質3 関東地方」共立出版 1986年10月
- 2) 舟橋理「平北田遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財団文化財調査報告第336集 2011年3月
- 3) a 高野裕暉「下河原崎谷中台遺跡・鳥名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3」茨城県教育財団文化財調査報告第282集 2007年3月
b 齋藤真弥「下河原崎谷中台遺跡・下河原崎高山古墳群 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4」茨城県教育財団文化財調査報告第292集 2008年3月
- 4) 高野裕暉「元宮本前山遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」茨城県教育財団文化財調査報告第265集 2006年3月
- 5) a 寺門千勝・田原康司・梅澤貴司「鳥名前野東遺跡・鳥名埜松遺跡・谷田部漆遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」茨城県教育財団文化財調査報告第191集 2002年3月
b 飯泉達司「鳥名前野東遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ」茨城県教育財団文化財調査報告第215集 2004年3月
c 小松崎和治「鳥名埜松遺跡・鳥名前野東遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ」茨城県教育財団文化財調査報告第281集 2007年3月
- 6) 鹿島直樹「鳥名一町田遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財団文化財調査報告第230集 2004年3月
- 7) a 依野正「科学博関連道路谷田部明野線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 ツバタ遺跡・高山古墳群」茨城県教育財団文化財調査報告第22集 1983年3月
b 皆川修「鳥名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1」茨城県教育財団文化財調査報告第203集 2003年3月
- 8) 鹿島直樹「鳥名岡/台南遺跡・面野井北ノ前遺跡 常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書2」茨城県教育財団文化財調査報告第231集 2004年3月
- 9) 酒井琢一・渡邊浩美・齋藤貴史・清水哲「鳥名熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ」茨城県教育財団文化財調査報告第280集 2007年3月
- 10) 福田義弘・飯泉達司「鳥名熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ」茨城県教育財団文化財調査報告第214集 2004年3月
- 11) 福田義弘「鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ 鳥名前野遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第175集 2001年3月
- 12) 小林和彦「面野井古墳群 都市計画道路新都市中央通りバイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財団文化財調査報告第391集 2014年3月
- 13) 白田正子「(仮称) 茨九地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 三度山遺跡・古原敷遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第132集 1998年3月

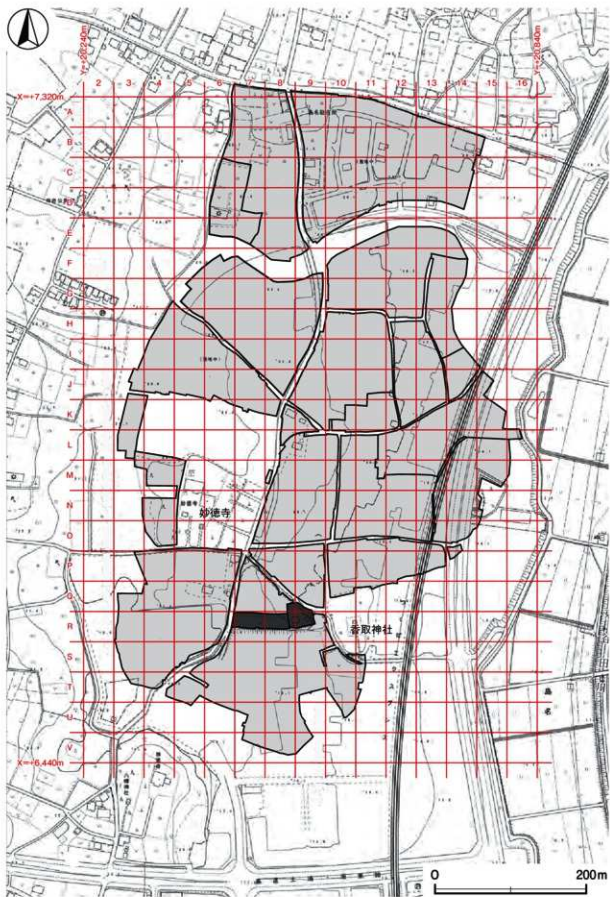
- 14) a 青木仁昌『鳥名八幡前遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書IX』茨城県教育財団文化財調査報告第201集 2003年3月
- b 菊池直哉『鳥名八幡前遺跡 都市計画道路鳥名上河原崎線道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第283集 2007年3月
- 15) 清水哲『鳥名熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XX』茨城県教育財団文化財調査報告第380集 2013年3月
- 16) 新井聡・川村満博『(仮称)鳥名・福田坪地区土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書I 鳥名熊の山遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第120集 1997年3月
- 17) 吉原作平・原信田正夫『(仮称)鳥名・福田坪地区特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書III 鳥名熊の山遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第149集 1999年3月
- 18) 註9に同じ
- 19) 兼子博史・坂本勝彦・田中万里子・櫻井二郎『鳥名熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XXI』茨城県教育財団文化財調査報告第390集 2014年3月



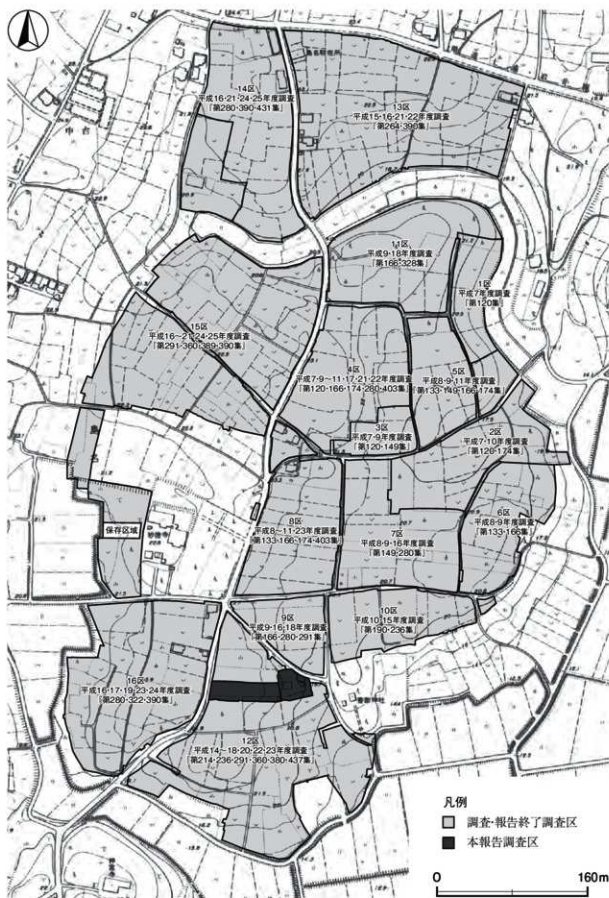
第1図 鳥名熊の山遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の 1「谷田部」）

表1 鳥名熊の山遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室戸			江	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室戸
①	鳥名熊の山遺跡	○	○	○	○	○	○	42	小白窟民部山遺跡				○			
2	鳥名薬師遺跡				○			43	小白窟水表遺跡				○			
3	鳥名八幡前遺跡	○	○	○	○	○	○	44	小白窟海道端遺跡		○				○	○
4	鳥名本田遺跡		○		○	○	○	45	小白窟海道端塚群						○	○
5	鳥名中代遺跡		○		○	○	○	46	谷田部カロウド塚古墳				○			
6	鳥名前野遺跡		○		○	○	○	47	谷田部台成井遺跡		○					
7	鳥名前野東遺跡	○	○	○	○	○	○	48	谷田部下成井遺跡		○					○
8	鳥名前野古墳				○			49	谷田部台町古墳群				○			
9	鳥名一町田遺跡	○	○	○			○	50	谷田部福田前遺跡		○		○	○		
10	鳥名境松遺跡	○	○		○			51	谷田部漆出口遺跡		○		○		○	○
11	鳥名タカド口遺跡		○	○				52	谷田部福田遺跡		○		○			
12	鳥名榎内南遺跡	○			○	○		53	谷田部大堀遺跡						○	○
13	鳥名榎内古墳群				○			54	谷田部山合遺跡		○				○	○
14	鳥名榎内西古墳群				○			55	谷田部陣馬遺跡		○		○			
15	鳥名榎内遺跡				○			56	谷田部漆遺跡		○		○	○		
16	鳥名ツバタ遺跡	○	○				○	57	上菅丸古屋敷遺跡						○	○
17	鳥名関ノ台遺跡							58	真瀬三度山遺跡		○		○			○
18	鳥名関ノ台古墳群				○			59	二本松遺跡		○					
19	鳥名関ノ台塚						○	60	西山遺跡		○				○	○
20	鳥名関ノ台南A遺跡				○	○		61	苗代山遺跡		○					
21	鳥名関ノ台南B遺跡	○	○				○	62	真瀬戸崎遺跡						○	○
22	高田和田台遺跡				○			63	真瀬西原遺跡						○	○
23	高田遺跡					○	○	64	真瀬中畑遺跡		○		○			○
24	高田原山遺跡				○	○		65	真瀬新田谷津遺跡		○					
25	面野井北ノ前遺跡	○			○	○	○	66	真瀬新田古墳群				○			
26	面野井西ノ台塚						○	67	真瀬堀附南遺跡		○		○			
27	面野井城跡						○	68	真瀬堀附北遺跡				○			
28	面野井古墳群				○			69	真瀬山田遺跡		○		○	○		
29	面野井南遺跡				○	○	○	70	真瀬山田北遺跡				○			
30	水堀下道遺跡				○	○		71	鍋沼新田長峰遺跡		○		○			
31	水堀遺跡				○			72	下河原崎高山遺跡							
32	水堀屋敷添遺跡		○	○				73	下河原崎高山遺跡				○			
33	水堀道後前遺跡					○		74	下河原崎高山古墳群					○		
34	大和田氏屋敷跡						○	75	下河原崎谷中台遺跡		○		○	○		
35	柳橋仲畑遺跡				○	○	○	76	下河原崎古墳群							
36	柳橋遺跡				○		○	77	元宮本前山遺跡		○	○	○			
37	平北田遺跡	○	○		○	○	○	78	元中北東藤四郎遺跡				○			
38	平後遺跡				○	○	○	79	元中北鹿島明神古墳				○			
39	大白窟西ノ裏遺跡				○			80	上河原崎本田遺跡				○	○	○	
40	大白窟桜下遺跡							81	上河原崎小山台古墳							
41	大白窟民部山遺跡				○			82	上河原崎八幡臨遺跡				○			



第2図 鳥名熊の山遺跡調査区設定図（つくば市研究学園都市都市計画図2500分の1から作成）



第3図 鳥名熊の山遺跡調査区割図（つくば市研究学園都市都市計画図2,500分の1から作成）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

高名熊の山遺跡は、つくば市の南西部に位置し、谷田川右岸の標高約24mの台地上に立地している。調査区は便宜上1～16区(第3図)に分けられており、今回の報告分は平成22年度に調査した12区A地区1,137㎡とA地区に隣接し、平成23年度に調査した12区D地区663㎡、合計1,800㎡についてである。

調査の結果、A地区とD地区合わせて、竪穴建物跡70棟(古墳時代19・奈良時代16・平安時代35)、掘立柱建物跡28棟(奈良時代15・平安時代13)、土坑167基(古墳時代3・奈良時代6・平安時代12・時期不明146)、井戸跡2基(平安時代)を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に87箱出土している。主な遺物は、土師器(坏・碗・高台付坏・高台付碗・皿・小皿・高坏・鉢・甕・飯・手捏土器)、須恵器(坏・高台付坏・蓋・盤・瓶・鉢・甕・飯・短頸壺・長頸瓶・甕・提瓶)、灰軸陶器(碗・皿・長頸瓶)、土製品(土玉・勾玉・羽口)、石器(鎌・砥石・紡錘車)、石製品(五輪塔部材)、金属製品(刀子・鎌・鎌・釘)、銭貨などである。

第2節 基本層序

A地区とD地区の境界部の台地上に位置するR8b7区でテストピットを設定し、土層の堆積状況を観察した。土層は8層に分層できる。基本層序は以下のとおりである。

第1層は、暗褐色を呈する表土層である。粘性は普通で、締まりはやや強く、層厚は8～46cmである。

第2層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性は強く、締まりは普通で、層厚は12～45cmである。

第3層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともにやや強く、層厚は4～32cmである。

第4層は、褐色を呈するハードローム層である。粘性はやや強く、締まりは強く、層厚は28～36cmである。

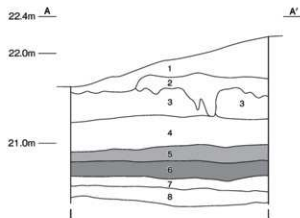
第5層は、白色粒子を微量含む暗褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともにやや強く、層厚は12～18cmである。第2黒色帯上層に相当する。

第6層は、白色粒子を少量含む暗褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともにやや強く、層厚は16～20cmである。第2黒色帯下層に相当する。

第7層は、赤色粒子を微量含む灰褐色を呈する粘土層である。粘性・締まりともにやや強く、層厚は10～18cmである。

第8層は、灰褐色を呈する粘土層である。粘性はやや強く、締まりは強い。下層が未掘のため、本来の層厚は不明である。

遺構は、第2層上面で確認している。



第4図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

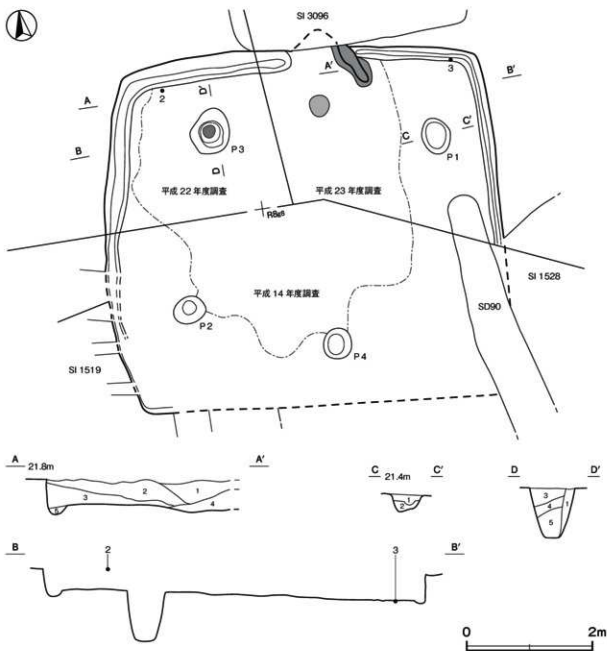
1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡19棟、土坑3基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第1520号竪穴建物跡（第5・6図）

調査年度 平成22・23年度に調査した。南部は平成14年度に調査し、当財団調査報告「第214集」において報告している。柱穴の番号については、今回報告分と合わせて、既調査分を新しい番号に更新した。



第5図 第1520号竪穴建物跡実測図

位置 12区中央部のR 8 g 8区、標高22mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第1519・1528号竪穴建物跡を掘り込み、第3096号竪穴建物、第90号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.30m、短軸5.40mの長方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁は高さ34~40cmで、直立している。

床 平坦で、中央部から北部にかけて踏み固められている。壁溝が南部以外の壁下に巡っている。

竈 北壁の中央から東寄りに付設されている。煙道部を第3096号竪穴建物に、火床面と左袖部を耕作の攪乱により壊されており、右袖部だけの確認である。そのため、詳しい形状や規模は不明である。

ピット 4か所。P1・P3は深さ30cm・82cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P2・P4については、『第240集』を参照されたい。覆土の第1・2層は埋土で、第3~5層は柱抜き取り痕である。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	4 暗褐色	ロームブロック微量
2 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	5 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量		

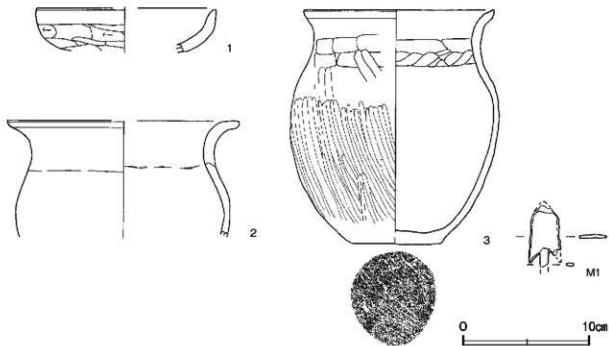
覆土 5層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	4 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量		
3 暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片225点(坏29、高台付坏1、甕類195)、須恵器片32点(坏11、蓋2、高台付坏1、高坏1、壺2、甕類14、瓶1)、灰軸陶器片2点(柄)、金属製品1点(鏝)が覆土中から散乱した状態で出土している。3は北東コーナー部の床面から横位の状態でも出土しており、遺棄されたものと思われる。2は北西コーナー部の覆土上層から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第6図 第1520号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 1520 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 6 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考	
1	土師部	坏	[144]	(3.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部内面横ナテ	体部外面横区への面	覆土中	40%
2	土師部	甕	[186]	(9.4)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナテ	体部外・内面横ナテ	覆土上層	10%
3	土師部	甕	151	187	69	長石・石英・雲母・赤色粒子・磁粒	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部内面ヘラナテ	体部外面へうりつき 体部内面ヘラナテ	北東コーナー 床面	90% Pl.32

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	鐵	[43]	66- 22	0.3	(6.0)	鉄	有茎五角形式 鐵身部両丸造り 鐵身間陶拵 頸部断面長方形	覆土中	Pl.47

第 1740 号竪穴建物跡（第 7・8 図）

調査年度 平成 22 年度に調査した。北部は平成 15 年度に調査し、当財団調査報告『第 236 集』において報告している。柱穴の番号については、今回報告分と合わせて、既調査分を新しい番号に更新した。

位置 12 区中央部の R 7 a4 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 206 号掘立柱建物、第 6841 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.78 m、短軸 5.60 m の方で、主軸方向は N-4°-E である。壁は高さ 20～44cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、主柱穴に開かれた部分が踏み固められている。壁溝が壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部のやや東寄りに付設されている。詳しくは『第 236 集』を参照されたい。

ピット 5 か所。P 2・P 3 は深さ 34cm・48cm で、規模と配置から主柱穴である。P 5 は深さ 12cm で、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 1・P 4 については、『第 236 集』を参照されたい。覆土の第 1・2 層は柱抜き取り痕で、第 3・4 層は柱を立てた時の充填土である。

ピット土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	3 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	4 褐色	ローム粒子少量

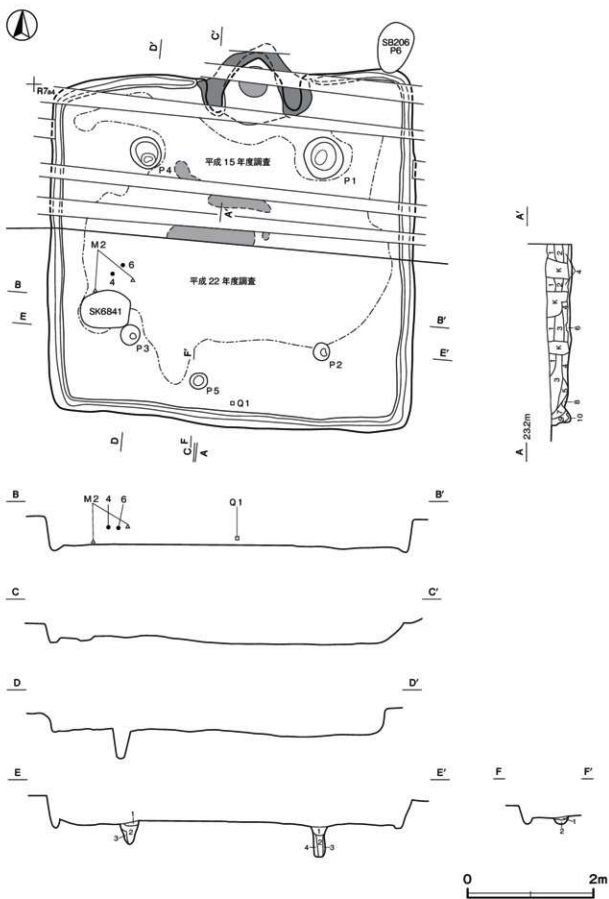
覆土 10 層に分層できる。ロームブロックなどが含まれる層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

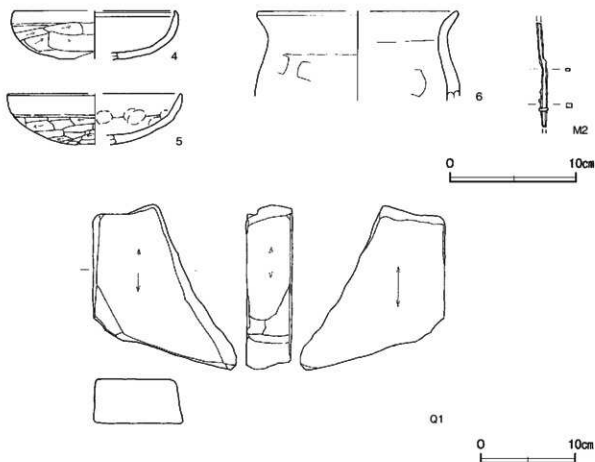
1 にぶい黄褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量	6 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	7 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・焼土粒子微量	8 褐色	ロームブロック中量
4 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量	9 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 366 点（坏 79、高台付坏 1、甕類 285、瓶 1）、須恵器片 95 点（坏 34、高台付坏 5、蓋 11、甕類 45）、石器 1 点（砥石）、金属製品 1 点（鐵鎌）が覆土中から散乱した状態で出土している。4・6 は中央部から南西寄りの覆土中層から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。M 2 は床面から出土したものと覆土中層から出土したものが接合していることから、折ってから投棄されたものと思われる。Q 1 は南壁際の床面から出土しており、遺棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から 7 世紀後葉と考えられる。



第7図 第1740号竪穴建物跡実測図



第8図 第1740号竪穴建物跡出土遺物実測図

第1740号竪穴建物跡出土遺物観察表（第8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
4	土師器	坏	[120]	(3.8)	-	長石・石英・赤色粒子	灰褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ と 体部内面横ナデ	体部外面横位のヘラ削	覆土中層	50%
5	土師器	坏	[138]	(4.0)	-	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ と 体部内面横位削	体部外面横位のヘラ削	覆土中	40%
6	土師器	薬	[158]	(7.1)	-	長石・石英・赤色	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外・内面ヘラナデ	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	17.5	15.2	4.9	1.755	粘板岩	断面長方形 砥面3面	南壁跡 覆土下層	PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M2	簾	(8.2)	0.4~ 0.7	0.2~ 0.4	(6.5)	鉄	頭部長く屈折 頭部・基部断面は長方形 頭脚開閉	南壁跡 覆土中層	PL47

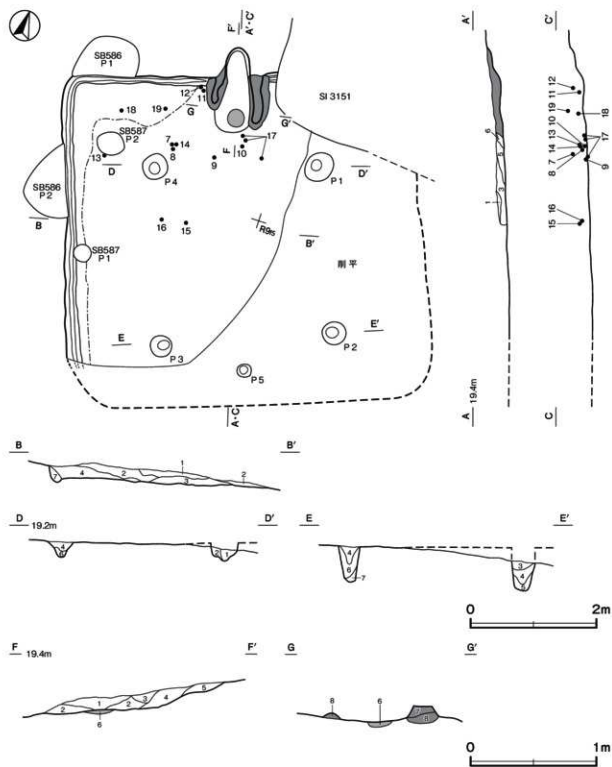
第2808号竪穴建物跡（第9～11図 PL3）

位置 12区東部のR9区4区、標高19mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3151号竪穴建物、第586・587号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 南東部が削平されているが、壁や柱穴の状況から長軸560m、短軸522mの方形で、主軸方向はN-21°-Wと推測される。壁は西部で遺存しており、高さ19cmでほぼ直立している。

床 中央部から北西部は平坦で、踏み固められている。壁溝が北壁西側と西壁下に巡っている。



第9図 第2808号竈穴建物跡実測図

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで146cm、燃焼部幅は58cmである。火床部は床面から6cm掘りくぼめ、ロームブロックを含む第6層を埋土して構築されている。袖部は地山のローム層上に粘土ブロックを含む第7・8層を積み上げて構築されている。火床面は第6層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に45cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

覆土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	6 赤褐色	粘土ブロック少量 焼土ブロック多量、ロームブロック少量、炭化 粒子微量
2 灰褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量	7 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物・ 粘土ブロック少量
3 にぶい褐色	焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロッ ク・炭化物微量	8 にぶい黄褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化 粒子微量
4 にぶい赤褐色	焼土ブロック多量、炭化物中量、ロームブロッ ク・粘土ブロック少量		
5 暗褐色	炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック・		

ピット 5か所。P1～P4は深さ46～60cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ28cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットと考えられる。覆土の第1・2層は柱抜き取り後の埋土で、第3～7層は柱抜き取り後の堆積土である。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物微量	5 黒褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
2 にぶい黄褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
3 褐色	ロームブロック多量	7 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量		

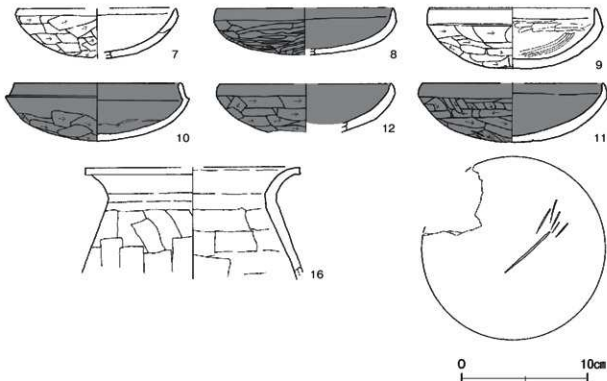
覆土 7層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

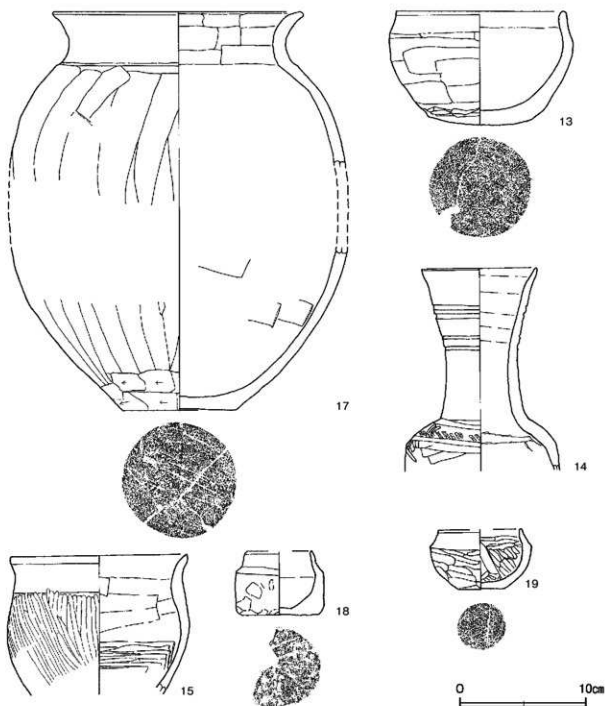
1 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量	5 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	6 灰黄褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック少量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量	7 灰黄褐色	ロームブロック中量
4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土器器片143点(坏34, 鉢3, 甕類106), 須恵器片7点(坏3, 長頸瓶1, 甕類3)が、竈南側から北西コーナー部を中心に散乱した状態で出土している。9・10は竈前面の床面からはほぼ完形で出土していることから、遺棄されたものと思われる。そのほかの遺物の多くは覆土中層を中心に破片で出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第10図 第2808号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第 11 図 第 2808 号竪穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第 2808 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 10・11 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
7	土師器	坏	[126]	(40)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい腔	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面横ナデ	体部外面横位のへう張り	覆土中層	40%
8	土師器	坏	[140]	(37)	-	長石・石英	にぶい腔	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面へう張り	覆土中層	40%
9	土師器	坏	134	48	-	長石・石英・赤緑・細塵	黄腔	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面へう張り	体部外面横位のへう張り	床面	100% PL29
10	土師器	坏	132	46	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい腔	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外面横位・斜位のへう張り	床面	90% PL29
11	土師器	坏	[143]	46	-	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	腔	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	体部外面横位・斜位のへう張り 底部に条線状の裝飾痕	覆土中層	80% PL29
12	土師器	坏	[136]	(38)	-	長石・石英	にぶい黄腔	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	体部外面横位のへう張り	覆土中層	50%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
13	土師器	鉢	132	89	82	長石・石英・細礫	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラナデ 下部部ヘラ磨き 体部内面ナデ	覆土中層	95% PL.29
14	須恵器	長頸瓶	91	(160)	-	長石・石英	灰	普通	口縁部外・内面横ナデ 2重子線の波線文付 須恵器 産出上の研究文 波線文 体部外面ヘラ磨き 体部内面磨削	覆土中層	50% PL.30 北関東産
15	土師器	甕	139	(111)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ 口縁部内面ヘラナデ 体部内面ヘラ磨き 体部内面ナデ	覆土中層	40% PL.32
16	土師器	甕	(170)	(90)	-	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラナデ 体部内面ナデ	覆土中層	40%
17	土師器	甕	195	[31.7]	90	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラナデ 横位のヘラ磨き 底部ヘラ磨き	床面	25%
18	土師器	鉢	[5.2]	5.1	[6.4]	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面指頭押圧 体部内面横ナデ 底部木葉痕	覆土中層	50% PL.30
19	土師器	鉢	[6.6]	4.8	4.0	長石・石英・黒色粒子	浅黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ 底部木葉痕	覆土上層	50%

第 2969 号竪穴建物跡 (第 12 図 PL.4)

位置 12区中央部のQ 8h9区, 標高20mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2970号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 北半部が調査区域外へ延びているため, 東西幅は2.76mで, 南北軸は1.80mだけ確認した。方形で, 主軸方向はN-13°-Wと推測される。壁は高さ10-12cmで, 外積している。

床 北半部は未調査で東部は削平されているが, 西部はほぼ平坦で, さほど踏み固められてはいない。壁溝が東部と南壁の一部を除いて巡っている。

ピット 2か所。P1・P2は深さ22cm・16cmで, 規模や配置から主柱穴と考えられる。P1の第1-3層は柱抜き取り後の埋土である。P2の第4層は柱抜き取り痕である。

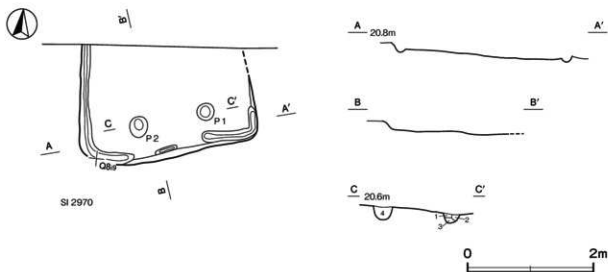
ピット土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |

覆土 第2970号竪穴建物跡の床面精査の際, 本跡が確認されたため, 覆土の状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片8点(変類)が, 床面及び壁溝覆土から出土している。小片のため図示できない。

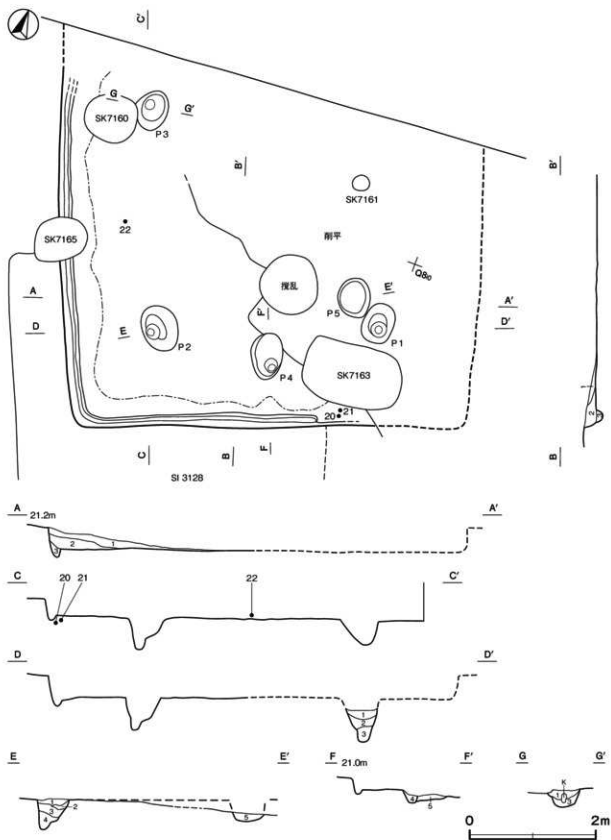
所見 第2970号竪穴建物に掘り込まれていることから, 時期は7世紀中葉以前と考えられる。



第 12 図 第 2969 号竪穴建物跡実測図

第 2970 号竪穴建物跡 (第 13・14 図 PL 4)

位置 12 区中央部の Q 8 9 区, 標高 20 m の台地縁辺部に位置している。



第 13 図 第 2970 号竪穴建物跡実測図

重複関係 第2969・3128号堅穴建物跡を掘り込み、第7160・7161・7163・7165号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外へ延びているため、南北軸は6.24mだけ確認した。東部が削平されており、東西軸は柱穴の状況から6.72mで、主軸方向はN-21°-Wと推測される。壁は高さ35cmで、ほぼ直立している。
床 東部は削平されているが、南西部はほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁溝が南壁西側と西壁壁下に通っている。

ピット 5か所。P1～P3は深さ36～68cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P4は深さ20cmで、南壁際に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P5は深さ36cmで、性格は不明である。覆土の第1～5層は、すべて柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック中量 | | |

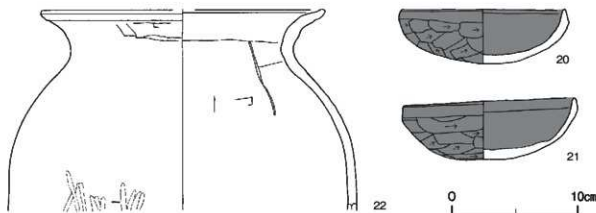
覆土 3層に分層できる。西側からの流入が認められる自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------|-------|---------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 褐灰色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片88点（坏15、甕類73）、須恵器片13点（坏5、蓋3、甕類5）が、南西部を中心に出土している。20・21は南壁際の床面からはほぼ完形でそれぞれ出土し、遺棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から7世紀中葉と考えられる。



第14図 第2970号堅穴建物跡出土遺物実測図

第2970号堅穴建物跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
20	土師器	坏	131	43	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ張り 体部内面ナデ	床面	80% PL.29
21	土師器	坏	136	49	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ張り 体部内面ナデ	床面	70% PL.29
22	土師器	甕	[226]	[160]	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	明黄褐色	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 体部外面下位ヘラ磨き 体部内面ヘラナデ	覆土下層	30%

第3083A号堅穴建物跡（第15図 PL5）

位置 12区中央部のR7e0区、標高22mの台地中央部に位置している

重複関係 当初は1棟の堅穴建物跡として調査を進めたが、第3083B・C号堅穴建物の2回にわたり建て替えが行われていると判断した。そのほか、第138・578号掘立柱建物、第6987土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.42 m、短軸 4.90 m の隅丸長方形で、主軸方向は N-7°-W である。壁はすべて削平されており不明である。

床 平坦で、主柱穴で囲まれた部分が踏み固められている。壁溝が北東部と北西部・南西部を除いて、壁下に巡っている。北東部と北西部・南西部で壁溝が確認できなかったのは、本跡を拡張した第 3083B 号竪穴建物の掘方により壊されたと考えられる。

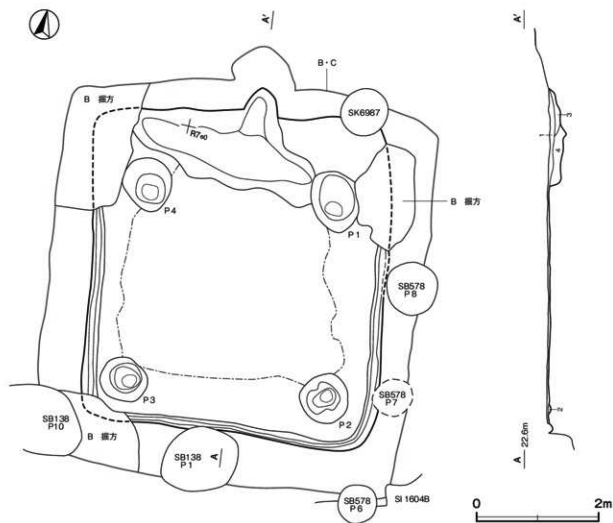
竈 北壁の中央部に付設されている。第 3083B 号竪穴建物のための掘り込みで、袖部や燃焼部は壊されており、第 3083B 号竪穴建物の床面で、竈の掘方が確認されている。火床部は確認面から 14cm ほど掘り込まれ、粘土粒子・ロームブロックなどを含む層を埋土し、構築されている。煙道部は壁外へ 45cm 掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈・貼床土層解説

- | | | |
|--------|-----------------------|----------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 土粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック多量 | ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘 | 化粒子微量 |
| 4 黒暗褐色 | | |

ピット 4 か所。P1～P4 は深さ 32～54cm で、規模や配置から、主柱穴と考えられる。

遺物出土状況 土師器片 3 点（坏 1、甕類 2）が、本跡の床面である第 1 層の下のローム層上面から出土している。土器片はいずれも細片で図示できない。



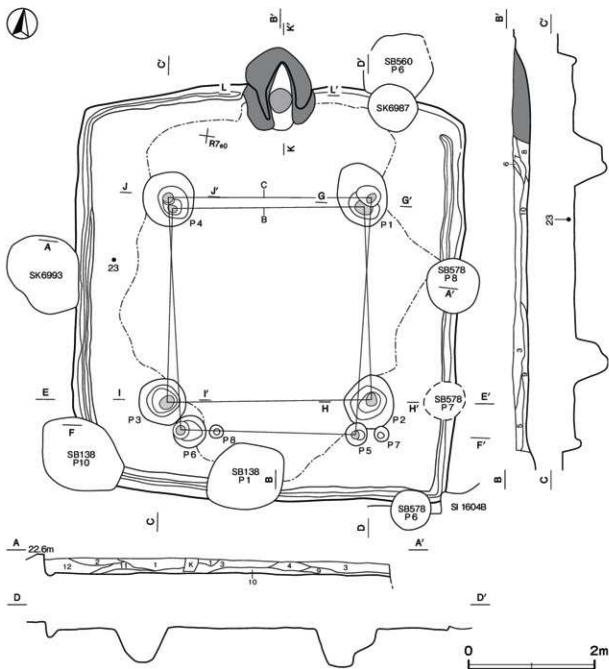
第 15 図 第 3083A 号竪穴建物跡実測図

所見 時期を決定できる土器は出土していないが、第3083B号竪穴建物が本跡の主柱穴の位置を変えずに建て替えていることから、本跡の廃絶と第3083B号竪穴建物への建て替えは連続して行われたと思われる。したがって、本跡の時期は第3083B号竪穴建物跡と同時期の7世紀前葉と考えられる。

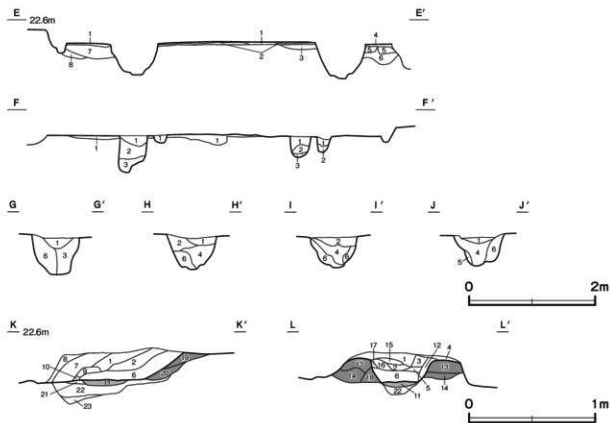
第3083B・3083C号竪穴建物跡（第16～18図 PL4・5）

ここでは、規模や形状を変えずに建て替えを行っている第3083B号竪穴建物跡と第3083C号竪穴建物跡を一緒に報告する。

位置 12区中央部のR7e0区、標高22mの台地中央部に位置している。



第16図 第3083B・3083C号竪穴建物跡実測図（1）



第17図 第3083B・3083C号竪穴建物跡実測図(2)

重複関係 第3083A号竪穴建物跡の四方を拡張して第3083B号竪穴建物が構築され、第3083B号竪穴建物の規模や形状を変えずに、第3083C号竪穴建物が建て替えられている。そのほか、第138・560・578号掘立柱建物、第6987・6993号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.58m、短軸6.10mの方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁は高さ16～22cmで、ほぼ直立している。

床 第3083B・3083C号竪穴建物跡は平坦な貼床で、中央部と竈周辺が踏み固められている。壁溝が北壁東側を除いて、壁下に巡っている。第3083B号竪穴建物跡の掘方は壁周辺では地山を16～22cmほど掘り込み、ローム粒子などが含まれる第5～8層を埋土している。貼床は、その上にロームブロックが多量に含まれる締まりの強い第2層などを突き固めて構築されいる。第3083C号竪穴建物の貼床は、第3083B号竪穴建物跡の床の上にロームブロックを多量に含み締まりの強い第1層を積み上げ構築している。

壁方・貼床土層解説

1 暗褐色	ロームブロック多量(締まり強い)	5 暗褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量(締まり強い)	6 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量
3 褐色	ロームブロック多量	7 暗褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、粘土粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量

竈 北壁の中央部に付設されており、他には竈の痕跡は確認されていないことから、第3083C号竪穴建物は建て替えに際して、竈の位置を変えなかったと考えられる。規模は焚口部から煙道部まで128cmで、燃焼部幅は32cmである。火床部は床面から22～28cm掘りくぼめ、第21～23層を埋土して構築されている。袖部は、その上に砂質粘土を主体とした第13・14層などを積み上げて構築されている。火床面は、第11層上面で、火熱

を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に45cm掘り込まれ、火床部から外傾している。

竈土層解説

1 灰褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量	13 におい褐色	粘土粒子 焼土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子微量	14 灰褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量	15 におい褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量	16 赤褐色	焼土ブロック中量、粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子微量	17 暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子微量
6 黒暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量	18 灰褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
7 灰褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	19 赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・粘土粒子微量
8 灰褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量	20 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量
9 赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	21 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
10 黒褐色	ローム粒子少量	22 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量
11 赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量	23 褐色	ロームブロック中量
12 暗赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子少量、ローム粒子・炭化		

ピット 8か所。P1～P4は、P1・P4では新田関係が確認され、P2・P3では柱抜き取り後埋土されていることや、深さは32～54cmで規模や配置から、第3083B号竈穴建物の主柱穴と考えられる。P1・P4～P6は第3083C号竈穴建物の貼床と考えられる第1層上で確認されていることや、深さ36～62cmで規模や配置から、第3083C号竈穴建物の主柱穴と考えられる。第3083C号竈穴建物の北側の主柱穴の位置はP1・P4を利用し、南側主柱穴はP2・P3から約50cm南へP5・P6を新たに構築している。P7・P8は深さ34cm・62cmで、南側の東西軸上に位置しており、第3083C号竈穴建物の補助柱穴と考えられる。P1・P4の第1・3～5層は第3083C号竈穴建物跡の主柱穴の抜き取り痕である。P2・P3の第1・2・4・6層は第3083B号竈穴建物跡主柱穴の抜き取り後の埋土である。P5～P8の第1～3層は柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 褐色	微量 ロームブロック多量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック中量
3 褐色	ロームブロック中量		
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子		

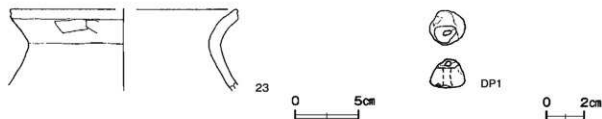
覆土 12層に分層できる。ロームブロックや焼土ブロックなどが含まれる層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	子微量	
2 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子微量
3 黒暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量	9 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
4 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
5 黒暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	11 黒暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
6 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量	12 暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
7 黒暗褐色	粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒		

遺物出土状況 第3083B号竈穴建物跡の貼床である第2層から、土師器片8点(坏2, 甕類6), 須恵器片2点(坏, 甕類)が出土しているが、細片で図示できない。第3083C号竈穴建物跡からは土師器片533点(坏57, 高坏1, 甕類475), 須恵器片24点(坏6, 高坏2, 蓋3, 甕類13), 土製品1点(土玉)が散乱した状態で出土している。23は西壁寄りの覆土下層から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 第3083B号竈穴建物の廃絶と第3083C号竈穴建物への建て替えは、規模や竈の位置を変えずに行っていることから、連続していたと思われる。したがって、時期は第3083B号竈穴建物跡と第3083C号竈穴建物跡を同時期のものと捉え、第3083C号竈穴建物跡出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第18図 第3083C号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3083C号竪穴建物跡出土遺物観察表（第18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
23	土師器	甕	17.8	(6.6)	-	長石・石英・雲母・炭化粒子	黄橙	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 体部外・内面横ナデ	覆土下層	3%

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP1	土玉	1.9	(1.5)	0.5	(3.6)	長石・石英	にぶい赤組	ナデ 一方からの穿孔 上・底面平坦	覆土中	PL45

第3087号竪穴建物跡（第19・20図 PL5・6）

位置 12区中央部のR7d4区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3086・3090C・3095号竪穴建物、第569号掘立柱建物、第6815・6816・6819・6820・6822・6823・6840号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸7.0m、短軸6.88mの方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁は高さ30～35cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、中央部と竈南側は踏み固められている。貼床はロームブロックなどを含む第10層を突き固めて構築されている。壁溝が南西部を除いて、壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで135cm、燃焼部の幅は42cmである。火床部は床面から13～18cm掘りくぼめ、ロームブロックを中量含む第24・25層を埋土して構築されている。袖部はその上に砂質粘土を主体とした第18～22層を積み上げて構築されている。火床面は、第23層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に50cm掘り込まれ、外傾している。

覆土層解説

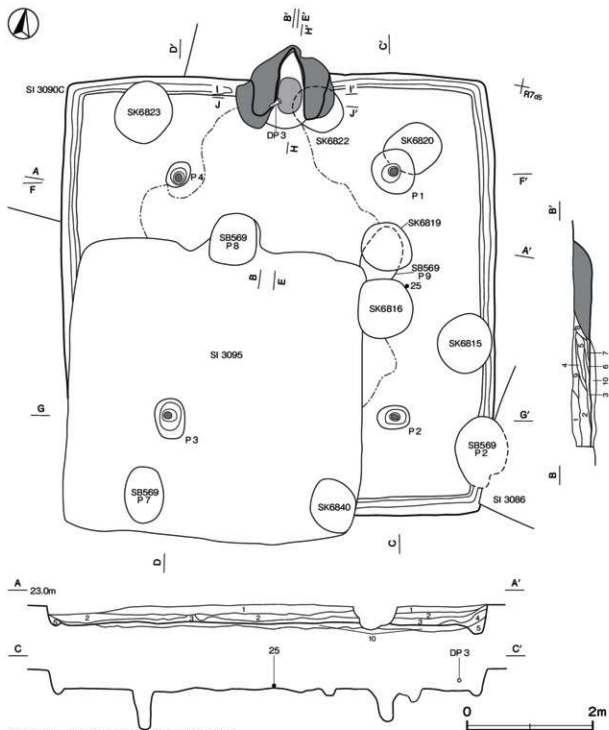
1	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量	13	にぶい赤褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化物微量	14	灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3	灰褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	15	暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量
4	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	16	極暗赤褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
5	灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量	17	暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
6	にぶい赤褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量	18	赤褐色	焼土ブロック多量、炭化物・粘土粒子少量、ローム粒子微量
7	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子少量	19	褐灰色	粘土粒子多量、焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化物微量
8	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量	20	灰褐色	粘土粒子多量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
9	暗褐色	焼土粒子・粘土粒子少量、炭化物微量	21	灰褐色	ロームブロック・粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量
10	灰褐色	粘土粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	22	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
11	暗赤褐色	焼土粒子・粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子少量	23	にぶい赤褐色	焼土ブロック・灰少量、炭化粒子・粘土粒子微量
12	褐色	ロームブロック・焼土粒子中量、炭化粒子微量	24	暗赤褐色	ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量
			25	褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量

- | | | | |
|---------|--------------------------|--------|--------------------------|
| 26 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 | 27 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
|---------|--------------------------|--------|--------------------------|

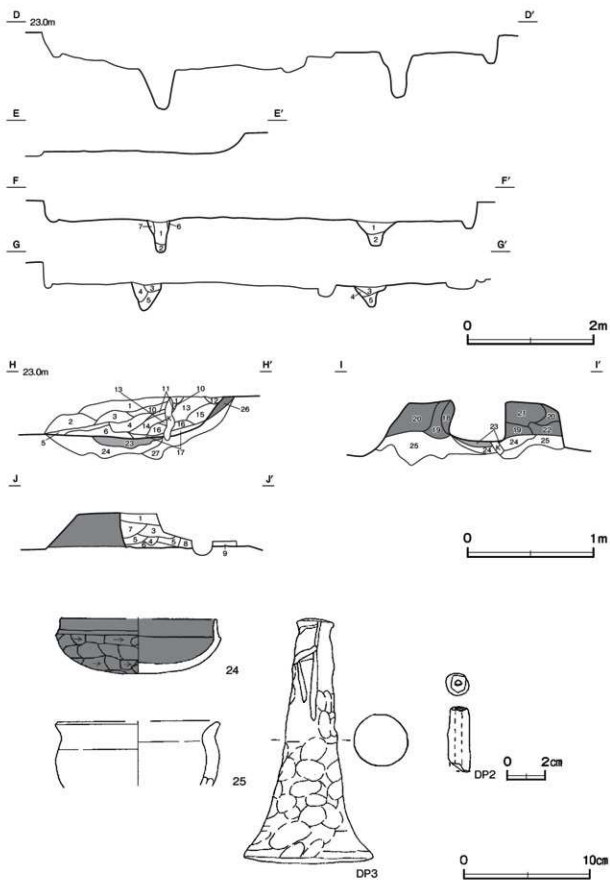
ビット 4か所。P1～P4は深さ35～52cmで、規模と配置から主柱穴である。P1～P3の第1～5層は柱抜き取り後の埋土である。P4の第1・2層は柱抜き取り痕である。

ビット土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |



第19図 第3087号堅穴建物跡実測図



第20图 第3087号竖穴建物跡・出土遺物実測図

覆土 9層に分層できる。ロームブロックなどが含まれた層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。第10層は貼床の構築土である。

土層解説

1	褐	色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	6	褐	色	ロームブロック・焼土ブロック少量
2	褐	色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7	にぶい	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
3	にぶい	褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	8	褐	色	ロームブロック少量、焼土ブロック少量
4	橙	色	ローム粒子・焼土粒子微量	9	にぶい	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
5	明	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	10	褐	色	ローム粒子中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 411点（坏107、甕類304）、須恵器片 15点（坏10、蓋1、甕類4）、土製品 2点（管玉、支脚）が散乱した状態で出土している。25は中央部からやや東寄りの床面から出土しており、遺棄あるいは投棄されたものと思われる。DP3は竈燃焼部から横位の状態での出土し、遺棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。

第3087号竪穴建物跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考	
24	土師器	坏	[122]	4.3	-	長石・石英	黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	体部外面横位のへう面	覆土中	50% PL29
25	土師器	鉢	[128]	(5.1)	-	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ナデ		床面	10%

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP2	管玉	3.4	1.2	0.3	(5.1)	長石・石英	にぶい赤褐色	ナデ 一方からの穿孔 一部欠損	覆土中	PL45

番号	器種	最小径	最大径	高さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP3	支脚	3.0	10.4	19.4	70.9	長石・石英・細礫	橙	ナデ 指頭押圧	竈覆土中層	100% PL45

第3090A号竪穴建物跡（第21図）

位置 12区中央部のR7c2区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 当初は1棟の竪穴建物跡として調査を進めたが、第3090B・3090C号竪穴建物へと2回の建て替えが行われていることが判明した。そのほか、第3088・3097号竪穴建物、第570掘立柱建物、第6826・6874・6885号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 竈や柱穴の位置から一辺4.40mほどの方形で、主軸方向はN-6°-Wと推定される。壁はすべて壊されており不明である。

床 第3090B号竪穴建物構築時の掘り込みにより削平されたと考えられる。

竈 第3090B号竪穴建物構築時に本跡竈の袖部や燃焼部は壊されており、第3090B号竪穴建物跡の床面で、竈の掘方が北壁の中央部に確認されている。燃焼部は確認面から15cmほど掘り込まれている。煙道部は壁外へ122cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

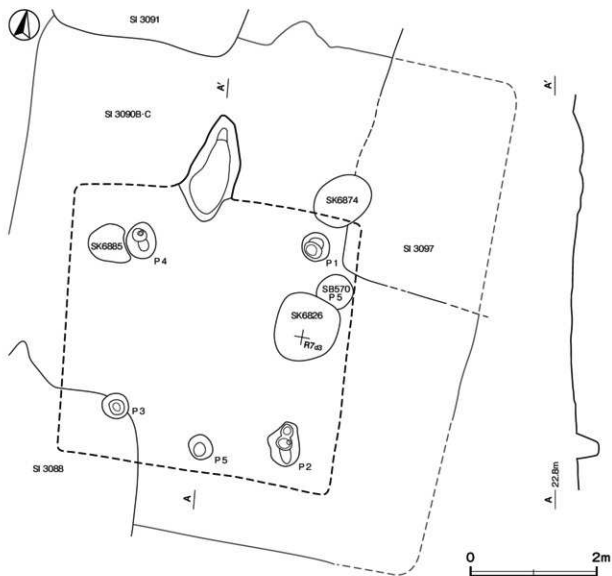
ピット 5か所。P1～P4は深さ45～56cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ39cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 第3090B号竪穴建物跡の床で確認されたため、覆土の状況は不明である。

遺物出土状況 竈掘方の覆土から土師器片6点（坏2、甕類4）、須恵器片1点（甕類）が出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期を決定できる遺物は出土していないが、第3090B号竪穴建物は本跡の柱穴を利用して建て替えを

行っていることから、本跡の廃絶と第3090B号竪穴建物への建て替えは連続していたと思われる。したがって、本跡の時期は第3090B号竪穴建物跡と同時期の6世紀後葉と考えられる。



第21図 第3090A号竪穴建物跡実測図

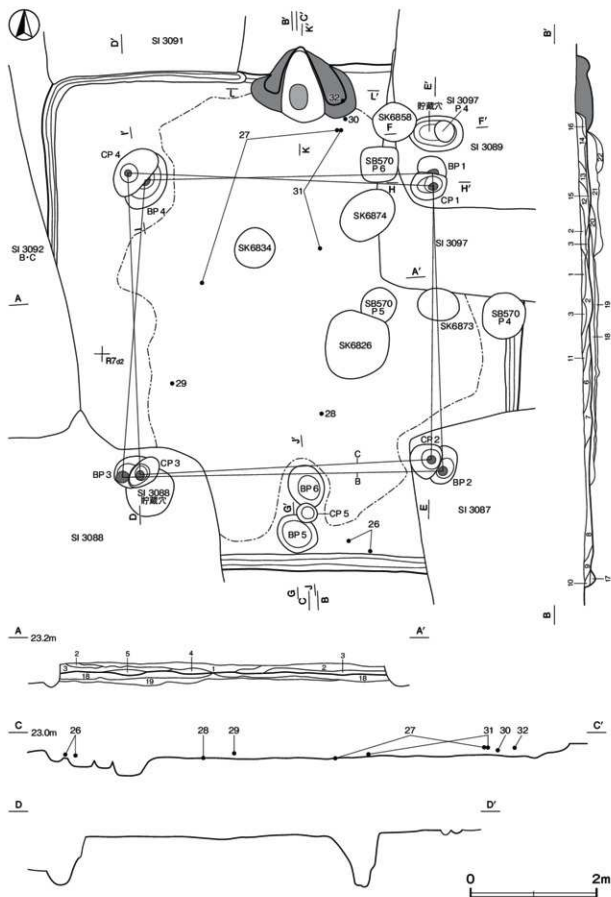
第3090B・3090C号竪穴建物跡（第22～24図 PL6）

ここでは、規模や形状を変えずに建て替えを行っている第3090B号竪穴建物跡と第3090C号竪穴建物跡を一緒に報告する。

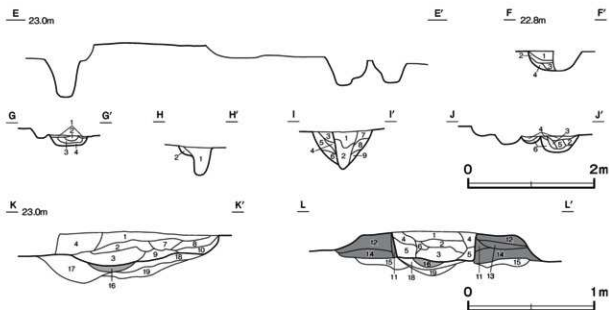
位置 12区中央部のR7c2区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3090A号竪穴建物跡の四方を拡張して第3090B号竪穴建物跡が構築され、第3090B号竪穴建物の規模や形状を変えずに、第3090C号竪穴建物が建て替えられている。そのほか、第3087・3088A・3089・3091・3092・3097号竪穴建物、第570号掘立柱建物、第6826・6834・6858・6873・6874号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸8.04m、短軸7.56mの方形で、主軸方向はN-6°-Wである。壁は高さ10～14cmで、ほぼ直立している。



第 22 图 第 3090B·3090C 号竖穴建物跡实测图 (1)



第23図 第3090B・3090C号竪穴建物跡実測図(2)

床 第3090B・3090C号竪穴建物跡の床はともにほぼ平坦な粘床で、中央部と竈周辺は踏み固められている。第3090C号竪穴建物跡の粘床は、ロームブロックを中量含み締まりが強い第18層を第3090B号竪穴建物跡の粘床はロームブロックを中量含み締まりが強い第19層を突き固めて構築されている。壁溝が重複箇所以外の壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで122cmで、燃焼部幅は68cmである。火床部は床面から13～17cm掘りくぼめ、第15～19層を埋土して構築されている。袖部は、埋土の上に粘土ブロック・ロームブロックが含まれる第11～14層を積み上げて構築されている。火床面は、第16層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に55cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

土層解説

1	にぶい赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量			ムブロック少量
2	暗赤褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量	13	灰褐色	粘土粒子多量、焼土ブロック・炭化物中量、ローム粒子少量
3	にぶい赤褐色	焼土粒子多量、炭化粒子少量	14	褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
4	にぶい赤褐色	炭化粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量	15	暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
5	灰褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	16	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量、粘土粒子少量
6	にぶい赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量	17	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化物少量
7	暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	18	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量
8	褐色	焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	19	褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量
9	にぶい褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量			
10	褐色	ロームアブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物微量			
11	灰褐色	粘土粒子多量、焼土ブロック中量、炭化物・ローム粒子少量			
12	灰褐色	粘土粒子多量、焼土ブロック・炭化物中量、ローム			

ピット 11か所。いずれのピットも重複関係があり、古い方のピット番号の前にBを、新しい方にはCを付け報告する。BP1～BP4は深さ40～75cmで、規模や配置から第3090B号竪穴建物跡の主柱穴と考えられる。BP5・BP6は深さ19cm・28cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。CP1～CP4は深さ46～82cmで、規模や配置から第3090C号竪穴建物跡の主柱穴と考えられる。CP5は深さ12cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットと考えられる。CP1・CP4の第1・2層は第3090C号竪穴建物跡の柱抜き取り痕である。

ピット土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	9 灰褐色	ロームブロック・焼土粒子少量
5 灰褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量		

貯蔵穴 北東コーナー部に付設されている。長径 90cm、短径 56cmの楕円形で、深さは 32cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量	3 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック少量	4 暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量

覆土 17層に分層できる。ロームブロックなどが含まれる層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。第 20～22層は、堀方の埋土で、第 18・19層は、それぞれ第 3090C・3090B号堅穴建物跡の貼床の構築土である。

土層解説

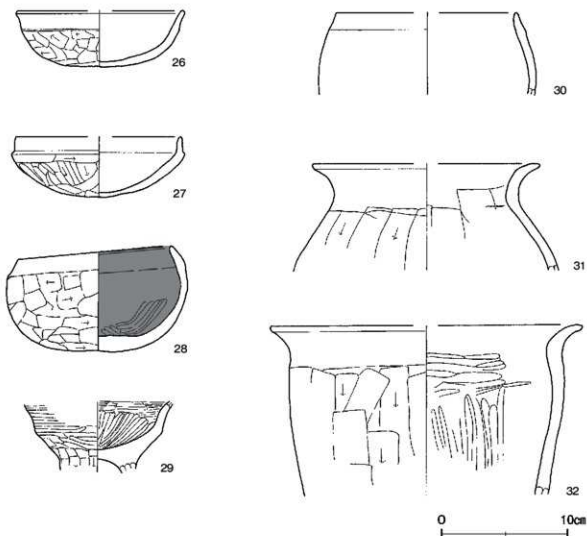
1 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	14 灰褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量、ロームブロック・炭化物少量
2 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	15 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	16 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量
4 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	17 暗褐色	ローム粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	18 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物少量、焼土ブロック微量（締まり強い）
6 暗褐色	焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量	19 褐色	ロームブロック中量、炭化物微量（締まり強い）
7 黒褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量	20 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量
8 暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	21 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子少量
9 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	22 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量、粘土ブロック少量
10 暗褐色	ロームブロック中量		
11 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量		
12 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量		
13 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・砂粒少量、炭化物微量		

遺物出土状況 第 3090B号堅穴建物跡の貼床である第 19層から土師器片 8点（坏 3、甕類 5）、須恵器片 1点（甕類）が出土しているが細片で図示できない。第 3090C号堅穴建物跡からは土師器片 337点（坏 91、高台付坏 1、高坏 2、鉢 1、甕類 240、瓶 2）、須恵器片 24点（坏 10、高台付坏 1、甕類 13）が出土している。28は中央部からやや南寄りの床面から出土しており、遺棄されたものと思われる。26は南壁際の覆土下層から、29は中央部からやや南西寄りの覆土下層から、それぞれ出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。30・32は竈袖部に貼り付けられたような状態で出土しており、袖部の補強として利用されたものと思われる。27・31は床面のもので離れた位置のものが接合していることから、割られてから投棄されたものと思われる。

所見 第 3090B号堅穴建物から第 3090C号堅穴建物への建て替えは、規模や竈の位置を変えていないことから、短時間に行われたと思われる。したがって、第 3090B号堅穴建物跡と第 3090C号堅穴建物跡の時期は、ほぼ同時期のものとしてことができ、第 3090C号堅穴建物跡出土土器から 6世紀後葉と考えられる。

第 3090C号堅穴建物跡出土遺物観察表（第 24 図）

番号	検別	図様	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考	
26	土師器	坏	[132]	4.5	-	長石・石英	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	体部外面横位のヘラ割り	覆土下層	50%
27	土師器	坏	[132]	4.8	-	長石・石英・細礫	灰黄緑	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	体部外面横位のヘラ割り	床面	40% PL29
28	土師器	坏	121	8.3	-	長石・石英・雲母	にぶい 赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ヘラ磨き	体部外面ヘラ割り 体部内面ヘラ磨き	床面	90% PL31
29	土師器	高坏	-	(5.6)	-	長石・石英	にぶい	普通	坏部外・内面ヘラ磨き	胴部外・内面ヘラ割り	覆土下層	30%
30	土師器	鉢	[144]	(6.5)	-	長石・石英	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ	体部外・内面ナデ	竈脇部 覆土下層	30%
31	土師器	甕	[180]	(8.5)	-	長石・石英	にぶい 黄緑	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ヘラ割り	体部外面横位のヘラ割り	床面	10%
32	土師器	瓶	[248]	(13.4)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面横位	体部外面横位のヘラ割り 体部内面横位	竈脇部 覆土下層	10%



第24図 第3090C号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3092号竪穴建物跡 (第25～32図 PL7・8)

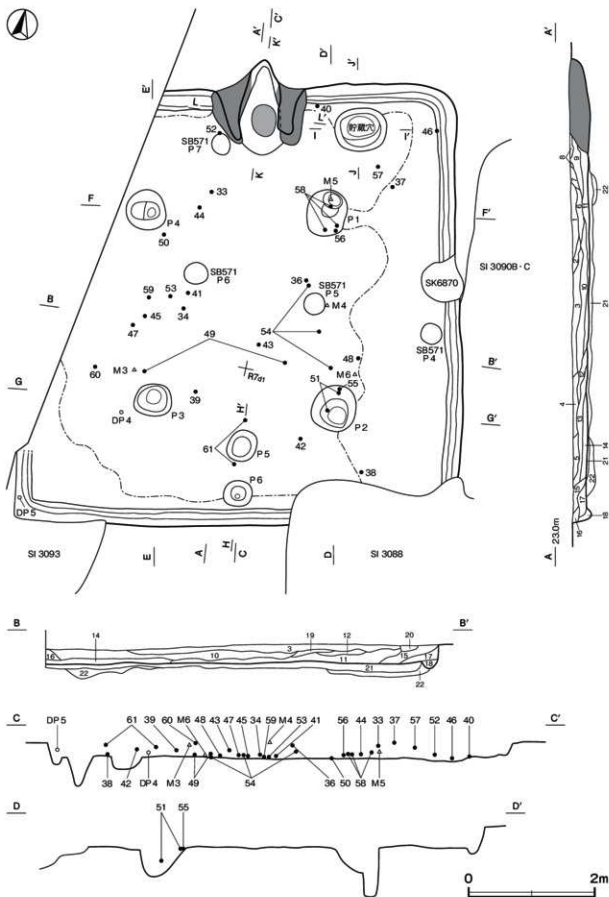
位置 12区中央部のR6c0区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3090C号竪穴建物跡を掘り込み、第3088A・3093号竪穴建物、第571号掘立柱建物、第6870号土坑に掘り込まれている。

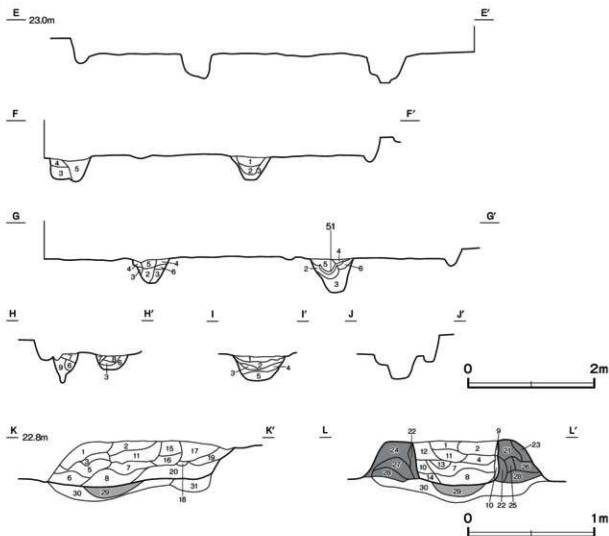
規模と形状 北西部が調査区域外へ延びているが、確認された壁や柱穴の状況から長軸7.04m、短軸6.94mの方形で、主軸方向はN-6°-Wと推測される。壁は高さ21～28cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、壁際以外は踏み固められている。壁際の掘方はロームブロックを中量含む第22層で埋土され、貼床はロームブロックを中量含む締まりの強い第21層を積み上げて構築されている。壁溝が壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで156cmで、燃焼部幅は62cmである。火床部は床面から14cm掘りくぼめ、ロームブロックを中量含む第29～31層を埋土して構築されている。袖部は、その上に粘土粒子を含む第21～28層を積み上げて構築されている。火床面は、第29層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に48cm掘り込まれ、火床部から外傾している。



第 25 图 第 3092 号竖穴建物跡实测图 (1)



第26図 第3092号竪穴建物跡実測図(2)

竊土層解説

1 褐色	焼土ブロック・粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	17 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量
2 暗褐色	焼土ブロック少量、粘土ブロック・炭化物微量	18 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・粘土粒子少量
3 褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量	19 極暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量
4 に近い黄褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量	20 極暗赤褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量
5 暗赤褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化物微量	21 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物・粘土粒子中量、ロームブロック少量
6 灰赤色	焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量	22 に近い褐色	焼土ブロック・粘土粒子中量、ロームブロック・炭化物少量
7 暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	23 に近い褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
8 に近い褐色	焼土ブロック中量、粘土粒子少量	24 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
9 暗褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	25 褐色	粘土粒子多量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
10 褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	26 に近い褐色	ロームブロック・粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量
11 暗褐色	焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量	27 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック少量
12 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量		
13 暗褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量		
14 暗赤褐色	ロームアブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量		
15 黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量		
16 暗褐色	ロームアブロック・焼土ブロック・炭化物少量、粘土粒子微量		

28 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量	30 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物微量
29 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、粘土ブロック	31 暗赤褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量

ピット 6か所。P1～P4は深さ39～76cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P5・P6は深さ30cm・49cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットと考えられる。P3・P4の第2・5層は柱抜き取り痕である。そのほかの層は柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量	6 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 褐色	ロームブロック中量	8 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
4 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量		

貯蔵穴 竈の東側に付設されている。長径82cm、短径66cmの楕円形で、深さは37cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量、粘土ブロック微量	4 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子中量、炭化物少量	5 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量		

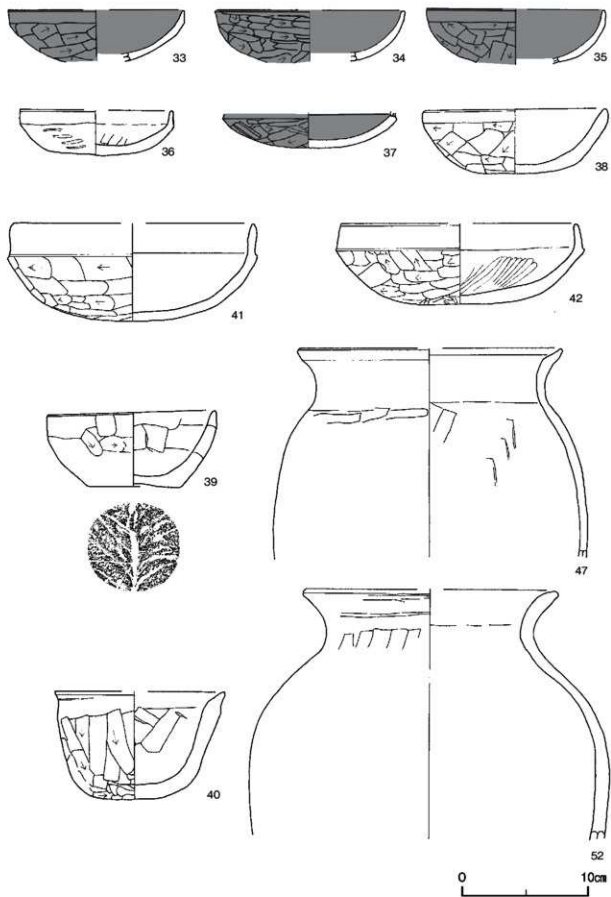
覆土 20層に分層できる。ロームブロックなどが含まれる層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。第22層は掘方の埋土で、第21層は貼床の構築土である。

土層解説

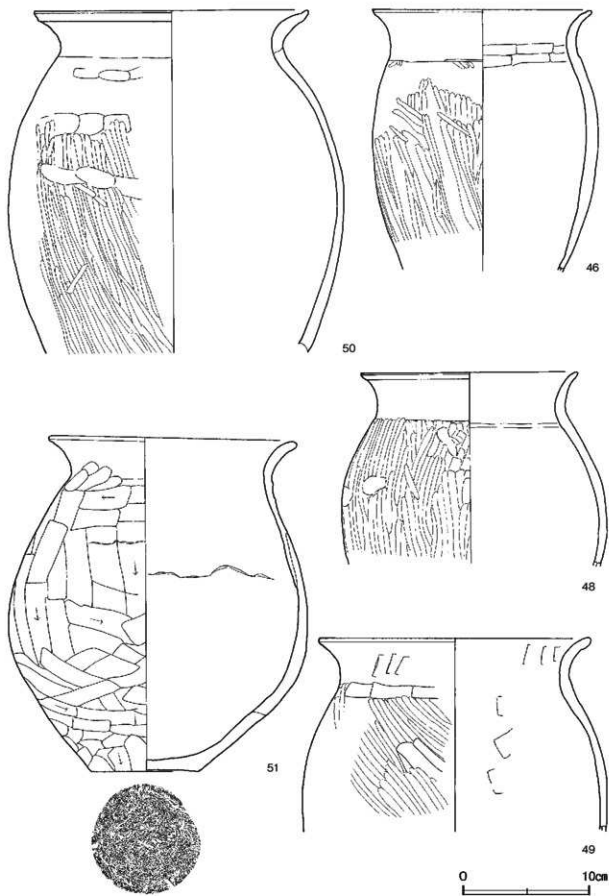
1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	11 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	12 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土ブロック・炭化物微量	13 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量
4 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量	14 暗褐色	ロームブロック少量
5 暗褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量	15 褐色	ロームブロック中量
6 暗褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化物微量	16 暗褐色	ロームブロック中量
7 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量	17 黒褐色	ロームブロック中量
8 褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量	18 褐色	ロームブロック中量、炭化物少量
9 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量	19 褐色	ロームブロック・炭化物微量
10 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	20 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
		21 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量(締まり強い)
		22 褐色	ロームブロック中量、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片1,051点(坏153,鉢6,甕類887,瓶5)、須恵器片16点(坏8,甕1,提瓶1,甕類6)、土製品4点(土玉2,支脚2)、金属製品4点(鉄)が散乱した状態で出土している。38は南東コーナー部奇りの45・53・59・M6は中央部の床面からそれぞれほぼ完形で出土していることから、遺棄されたものと思われる。40・41・46・48・50は破片で床面から出土していることから、遺棄されたかあるいは投棄されたものと思われる。49・54は離れた位置から出土したものが接合していることから、割られてから投棄されたものと思われる。43の甕は口縁部が欠損しているが体部は完全な形で、44の提瓶は完形で中央部の覆土中層からそれぞれ出土しており、本跡がある程度埋まってから置かれたものと思われる。その他の遺物は破片で覆土全体から偏りなく出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

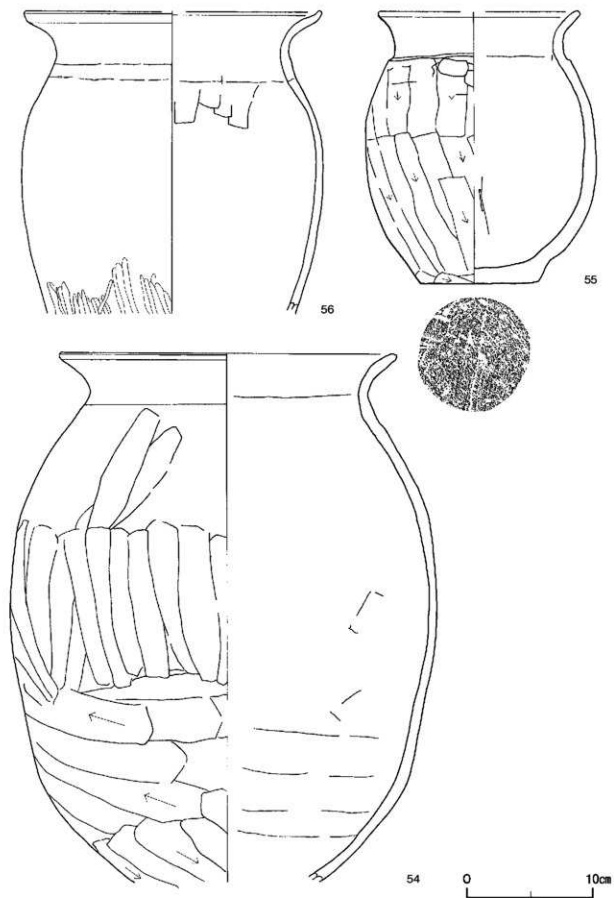
所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



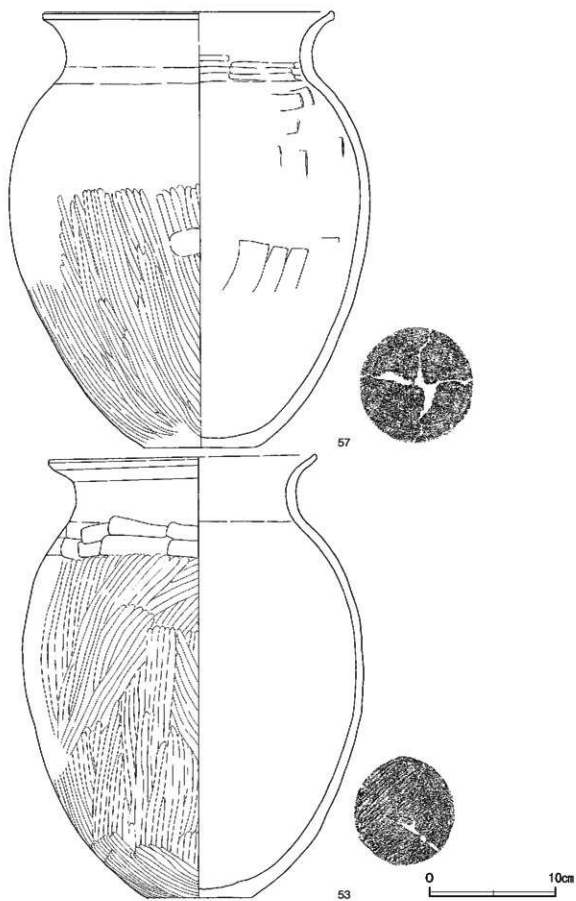
第 27 图 第 3092 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)



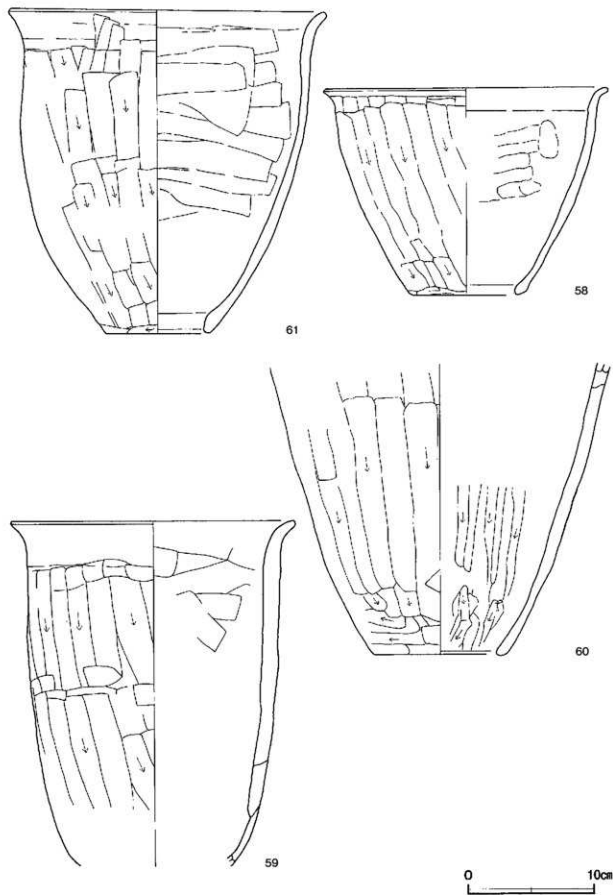
第28图 第3092号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)



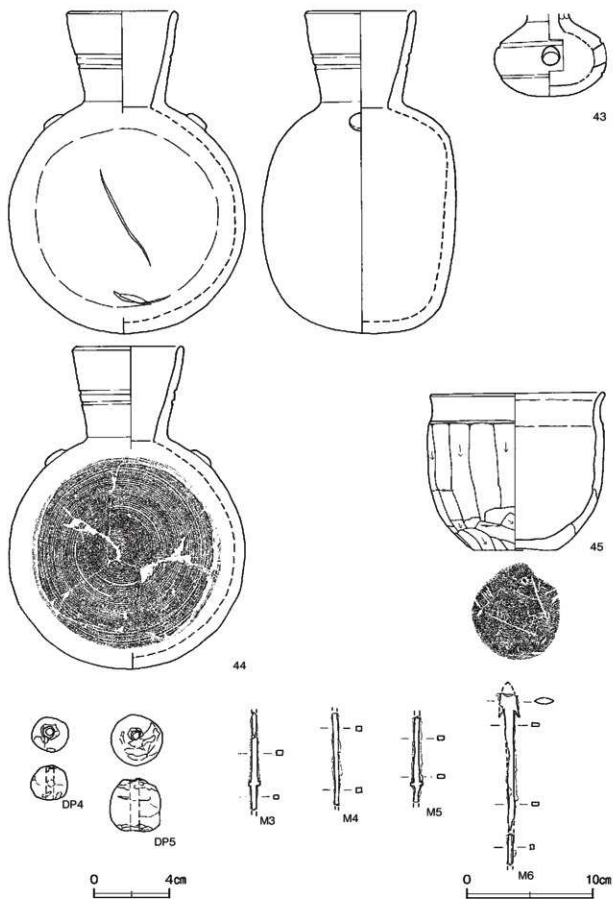
第 29 图 第 3092 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (3)



第30图 第3092号竖穴建物跡出土遺物実測図(4)



第31图 第3092号竖穴建物跡出土遺物実測図(5)



第 32 图 第 3092 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (6)

第 3092 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 27 ~ 32 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考		
33	土師器	坏	[140]	(41)	-	長石・石英	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面ヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土上層	20%
34	土師器	坏	[152]	(40)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土中層	30%
35	土師器	坏	[140]	(44)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面ヘラ削り	体部内面ナゲ	約竪穴覆土中	30%
36	土師器	坏	[120]	3.6	-	長石・石英・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ	体部外・内面ヘラナゲ	体部内面ナゲ	覆土上層	50%
37	土師器	坏	-	(28)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面ヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土上層	50%
38	土師器	坏	14.6	5.2	-	長石・石英	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面ヘラ削り	体部内面ナゲ	床面	90% PL31
39	土師器	坏	13.6	6.2	7.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面ヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土中層	90% PL31
40	土師器	坏	[13.6]	(8.4)	-	長石・石英・赤色粒子	褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	床面	60% PL31
41	土師器	坏	[19.2]	7.7	-	長石・石英	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	床面	40% PL31
42	土師器	坏	[18.6]	6.4	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面ヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土中層	50% PL31
43	埴器	皿	-	(6.5)	-	細雲	灰	普通	体部口クラナゲ	2条の沈線	中央部に横溝	覆土中層	70% PL30 湖西産。
44	埴器	提瓶	8.3	25.7	-	長石・細糠	黄灰	普通	口縁部外・内面口クラナゲ 中央部に2条の沈線	文様	管線は4本並ぶ	覆土中層	100% PL30 北関東産。
45	土師器	鉢	13.7	12.6	6.6	長石・石英	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	床面	85% PL32
46	土師器	甕	17.4	(20.8)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	床面	70% PL34
47	土師器	甕	[20.8]	(16.6)	-	長石・石英・雲母	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土中層	30%
48	土師器	甕	17.2	(15.1)	-	長石・石英	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	床面	50%
49	土師器	甕	21.3	(15.4)	-	長石・石英・細糠・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面ヘラナゲ 体部内面ナゲ	体部外面ヘラ削り	体部内面ナゲ	床面	30%
50	土師器	甕	21.7	(27.3)	-	長石・石英・細糠	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面ヘラ削り	体部内面ナゲ	床面	70% PL34
51	土師器	甕	19.0	26.9	8.6	長石・石英・細糠	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面ヘラ削り	体部内面ナゲ	P 2 覆土上層	80% PL34
52	土師器	甕	[20.2]	(19.8)	-	長石・石英・赤色粒子	褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面ヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土下層	20%
53	土師器	甕	21.2	35.3	8.4	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	床面	80% PL34
54	土師器	甕	26.3	(42.1)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外・内面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土下層	60% PL34
55	土師器	甕	[16.2]	21.7	9.0	長石・石英・赤色粒子	明黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	P 2 覆土上層	60% PL35
56	土師器	甕	[23.4]	(24.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土下層	20%
57	土師器	甕	[22.9]	34.6	9.0	長石・石英	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土中層	80% PL34
58	土師器	瓶	22.2	16.4	[8.1]	長石・石英	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土中層	70% PL33
59	土師器	瓶	[22.2]	(27.5)	-	長石・石英・赤色粒子	浅黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	床面	80%
60	土師器	瓶	-	(23.2)	10.2	長石・石英	浅黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土上層	50% PL33
61	土師器	瓶	24.9	25.9	8.0	長石・石英	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナゲ 体部内面ナゲ	体部外面横位のヘラ削り	体部内面ナゲ	覆土中層	90% PL33

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP4	土玉	18 ~ 20	1.8	0.4	6.4	長石・石英	褐色	ナゲ 一方向からの穿孔	覆土中層	PL45
DP5	土玉	27 ~ 28	2.8	0.5	21.5	長石・石英	褐色	ナゲ 一方向からの穿孔	覆土中層	PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 3	鏡	(7.7)	1.0	0.4	(5.9)	鉄	鎌身部欠損 頸部断面長方形 基部断面正方形	覆土上層	PL47
M 4	鏡	(7.3)	(0.4)	0.4	(7.5)	鉄	鎌身部・頸部欠損 基部断面正方形	覆土上層	PL47
M 5	鏡	(6.8)	0.5 ~ 0.9	0.3	(6.3)	鉄	鎌身部欠損 頸部断面長方形	覆土中層	PL47
M 6	鏡	[13.7]	1.8	0.3 ~ 0.5	(13.7)	鉄	鎌身部両丸造り 鎌身傾斜状 頸部傾斜 頸部断面長方形	床面	PL47

第 3099 号竪穴建物跡 (第 33 図 PL 8)

位置 12区中央部の R 7 e2 区、標高 22 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 3088A 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 北半部が第 3088A 号竪穴建物に掘り込まれているため、東西軸は 3.90 m で、南北軸は 2.34 m し

か確認できなかった。東・南・西壁の状況から方形で、主軸方向は $N-8^{\circ}-W$ と推定される。壁は高さ10～22cmで、外傾している。

床 平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁溝が壁下に巡っている。

ピット 3か所。P1・P2は深さ20cm・18cmで、南東コーナー部と南西コーナー部に位置することから、四隅に位置する支柱穴の可能性がある。P3は深さ12cmで、南壁寄りの中央部に位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|---------|--------|---------|
| 1 褐色 | ローム粒子微量 | 3 濃い褐色 | ローム粒子中量 |
| 2 明褐色 | ローム粒子中量 | | |

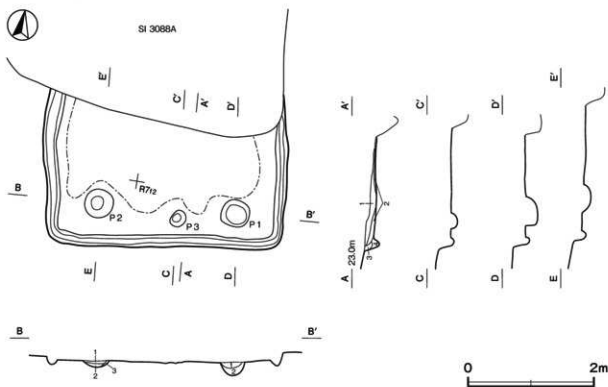
覆土 4層に分層できる。南側からの流入が確認できる自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|--------|----------------|-------|----------------|
| 1 褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 濃い褐色 | ロームブロック少量 | 4 褐色 | ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片12点(坏4、甕類8)、須恵器片3点(甕類)が、覆土中からまばらな状態で出土している。いずれも細片のため、図示できない。

所見 時期は、第3088A号竪穴建物に掘り込まれていることや出土土器から7世紀後葉と考えられる。



第33図 第3099号竪穴建物跡実測図

第3128号竪穴建物跡 (第34図)

位置 12区中央部のQ89区、標高21mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2970号竪穴建物、第588号掘立柱建物、第7165・7167号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北東部は第2970号竪穴建物に大きく掘り込まれ、南東コーナー部は削平されている。南北軸は4.44mで、東西軸は柱穴の位置から4.92mで、主軸方向 $N-23^{\circ}-W$ の長方形と推定される。壁は高さ15cmで、ほぼ直立している。

床 西部は平坦で、踏み固められている。壁溝が南壁西側と西壁の壁下に巡っている。

ピット 3か所。P1・P2は深さ38cm・64cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ30cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。覆土の第1～3層は柱抜き取り痕で、第4～6層は柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 暗褐色 | ロームブロック中量 |

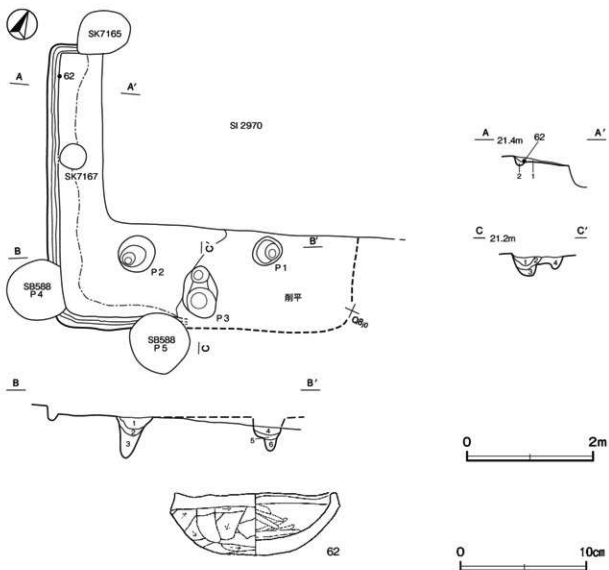
覆土 2層に分類できる。西側からの流入が認められる自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 2 黒褐色 | ロームブロック少量 |
|-------|------------------|-------|-----------|

遺物出土状況 土師器片5点(坏2、甕類3)がまばらな状態で出土している。62は北西コーナー部壁際の床面からはほぼ完形で出土し、遺棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



第34図 第3128号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 3128 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 34 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
62	土師器	坏	128	5.0	-	長石・石英・ 赤鉄粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面磨子で へう磨り 体部外面縦位・横位の へう磨り 体部内面へう磨き	床面	90% PL32

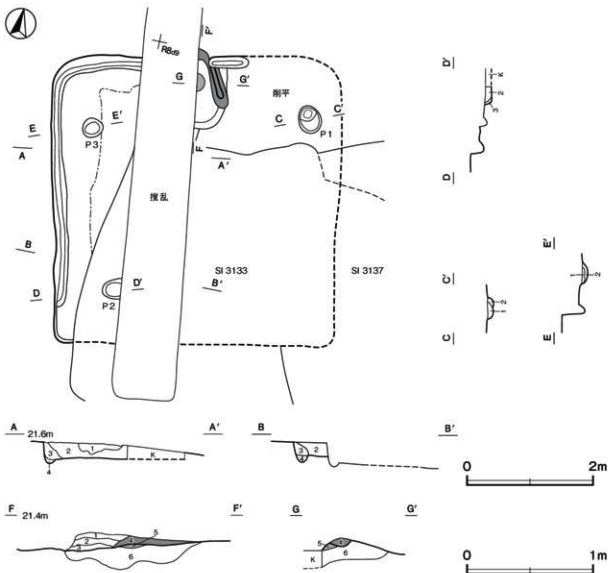
第 3131 号竪穴建物跡 (第 35 図)

位置 12 区中央部の R 8 d9 区、標高 21 m の台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 3133・3137 号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 北東コーナー部は削平され、南東部は第 3133・3137 号竪穴建物に大きく掘り込まれているが、北西コーナー部の屈曲の仕方や竈の位置、柱穴の位置から南北軸 4.54 m、東西軸 4.48 m、主軸方向 N - 13° - W の方形と推定される。壁は高さ 18 ~ 30 cm で、ほぼ直立している。

床 北西部はほぼ平坦で、隙隙を除いて踏み固められている。壁溝が竈西側から西壁の壁下に巡っている。



第 35 図 第 3131 号竪穴建物跡実測図

竈 北壁の中央部に付設されている。西側部分は攪乱により壊されている。規模は、焚口部から煙道部まで120cmである。火床部は床面から18cm掘りくぼめ、ロームブロックを多量に含む第6層を埋土して構築されている。袖部はその上に粘土粒子を中量含む第4層を積み上げて構築されている。火床面は第5層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に15cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	少量
2 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	4 灰褐色
3 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック	5 にふい褐色
		6 褐色

ピット 3か所。P1～P3は深さ10～12cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。覆土の第1～3層は、柱抜き取り後の堆積土である。

ピット土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	3 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 褐色	ロームブロック多量		

覆土 4層に層別できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	3 灰黄褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	4 にふい褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片35点(坏11, 甕類24), 須恵器片3点(坏2, 蓋1)が、まばらな状態で出土している。いずれも小片で図示できない。

所見 時期は、重複関係や出土土器から7世紀中葉と考えられる。

第3134号竪穴建物跡(第36・37図)

位置 12区中央部のR9c2区、標高20mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3140・3148・3149号竪穴建物、第590号掘立柱建物、第7180・7192・7211号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.74mで、東部は削平されているが、短軸は柱穴の位置から5.48mの方形と推定される。主軸方向はN-17°-Wである。壁は高さ12～25cmで、外傾している。

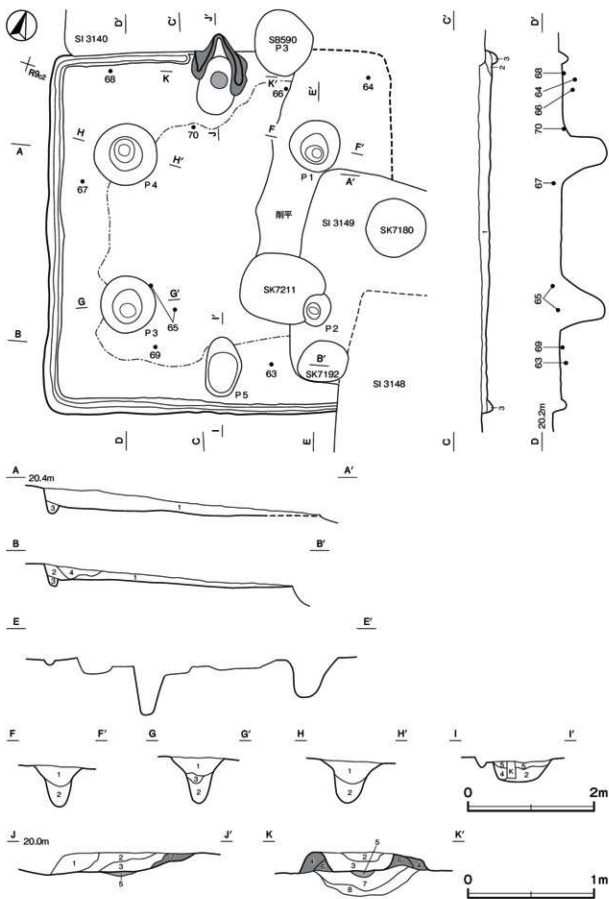
床 西部はほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁溝が竈西側から西壁・南壁の壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで132cmである。火床部は床面から20cm掘りくぼめ、ロームブロックを多量に含む第7・8層を埋土して構築されている。袖部はその上に粘土ブロックを中量含む第4・6層を積み上げて構築されている。火床面は第5層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に28cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1 褐色	粘土ブロック多量、ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量	5 にふい褐色	焼土ブロック多量、粘土ブロック中量、炭化物少量、ロームブロック微量
2 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	6 にふい褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック微量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック中量、炭化物少量	7 暗褐色	ロームブロック多量、焼土ブロック中量、炭化粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化物少量	8 にふい褐色	ロームブロック多量、焼土粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ64～76cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ35cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。覆土の第1～5層は、柱抜き取り後の埋土である。



第36图 第3134号竖穴建物跡実測図

ビット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 濃い黄褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物少量、焼土ブロック微量
3 黒褐色	ロームブロック微量		

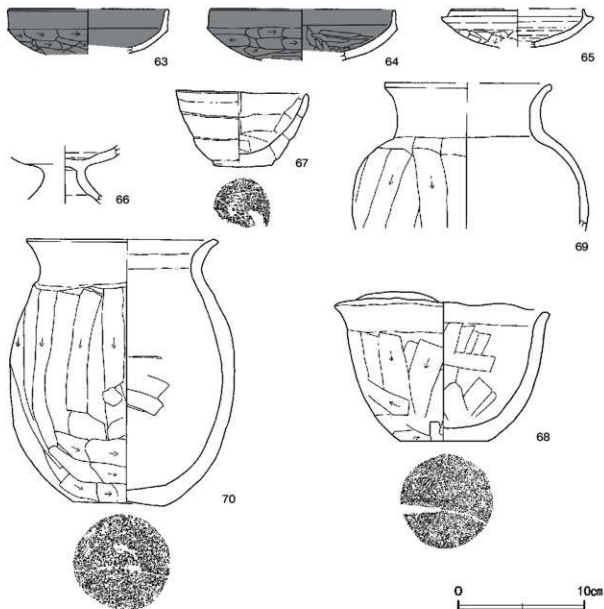
覆土 4層に分別できる。ロームブロックを中量含む黒褐色土が広く覆っていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	3 暗褐色	土、粘土ブロック微量
2 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少	4 黒褐色	ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片 224点（坏33、高台付坏5、鉢2、甕類184）、須恵器片 26点（坏6、蓋1、高坏1、甕類17）が、散乱した状態で出土している。68は北西コーナー部壁寄りの床面から、70は竈前面の床面からそれぞれほぼ完形で出土していることから、遺棄されたものと思われる。65は覆土下層と覆土上層から出土した破片が接合していることから、割られてから投棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から7世紀中葉と考えられる。



第37図 第3134号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 3134 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 37 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
63	土師器	坏	[126]	(3.5)	-	長石・石英・赤色粒子	灰褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 与 体部内面ヘラナデ	体部外面横位のヘラ削り	床面	20%
64	土師器	坏	[147]	(4.0)	-	長石・石英	灰褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 与 体部内面ヘラナデ	体部外面横位のヘラ削り	床面	20%
65	灰帯器	坏	[106]	(3.1)	-	長石・石英	灰黄	普通	体部外・内面クロコナデ	体部外面下位ヘラ削り	覆土上層 覆土下層	50% PL30 北間東壁
66	短頸器	高坏	-	(4.6)	-	長石・石英・黒色粒子	灰白	普通	坏部外面横ナデ	脚部外・内面クロコナデ	床面	50% 北間東壁
67	土師器	鉢	10.5	6.0	4.2	長石・石英・雲母 に多い	黄褐	普通	口縁部・体部外面横ナデ 底面木炭痕・輪組み痕	体部内面ヘラナデ	覆土上層	95% PL30
68	土師器	鉢	17.0	11.0	7.0	長石・石英・赤色 粒子・黒色粒子	普通	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ヘラナデ	口縁を研ぎ削って再利磨	床面	90% PL32
69	土師器	甕	[132]	(11.6)	-	長石・石英・細礫 黒色粒子	明黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 与 体部内面ナデ	体部外面横位のヘラ削り	床面	30%
70	土師器	甕	15.2	21.2	7.6	長石・石英・赤色 粒子・黒色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 与 体部内面ヘラナデ	体部外面横位のヘラ削り 底面ヘラ削り	床面	95% PL32

第 3146 号竪穴建物跡 (第 38 ~ 41 図 PL 9)

位置 12 区中央部の R 9a5 区、標高 18 m の台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 7260 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.92 m、短軸 3.80 m の方形で、主軸方向は N - 39° - W である。壁は高さ 24 ~ 48 cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際を除いて踏み固められている。壁溝が南コーナー部を除いて巡っている。

竈 北西壁の西コーナー寄りに付設されている。規模は焚き口部から煙道部まで 106 cm で、燃焼部の幅は 56 cm である。火床部は床面から 4 cm 掘りくぼめ、ロームブロック・粘土ブロックを含む第 9・10・16・22 層を埋土して構築されている。袖部は第 22 層の上に粘土ブロックを含む第 19 ~ 21 層を積み上げて構築されている。火床面は第 8 層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 10 cm 掘り込まれ、ほぼ直立している。

覆土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量	14 灰黄褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量
2 暗灰黄色	ロームブロック・粘土ブロック少量	15 黄褐色	粘土粒子少量、焼土ブロック中量
3 黄褐色	粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	16 灰褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
4 灰黄褐色	粘土ブロック中量、炭化粒子微量	17 近い黄褐色	焼土ブロック・粘土ブロック中量、ロームブロック少量
5 黒褐色	粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	18 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量
6 黄褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック微量	19 近い赤褐色	焼土ブロック・粘土ブロック多量、ロームブロック少量
7 帯ワリ層色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	20 近い黄褐色	粘土ブロック多量、焼土ブロック・炭化物微量
8 赤褐色	焼土ブロック多量、粘土ブロック少量	21 近い黄褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック少量
9 黒色	炭化粒子多量、ロームブロック・粘土ブロック少量	22 黒褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子微量
10 近い黄褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量		
11 灰黄褐色	焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック・粘土ブロック少量		
12 暗褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量		
13 近い黄褐色	焼土ブロック少量、粘土粒子微量		

ピット P1 は深さ 12 cm で、南壁寄りの中央部に位置することから、出入口施設に伴うピットの可能性がある。

覆土の第 1・2 層は柱抜き取り後の堆積土である。

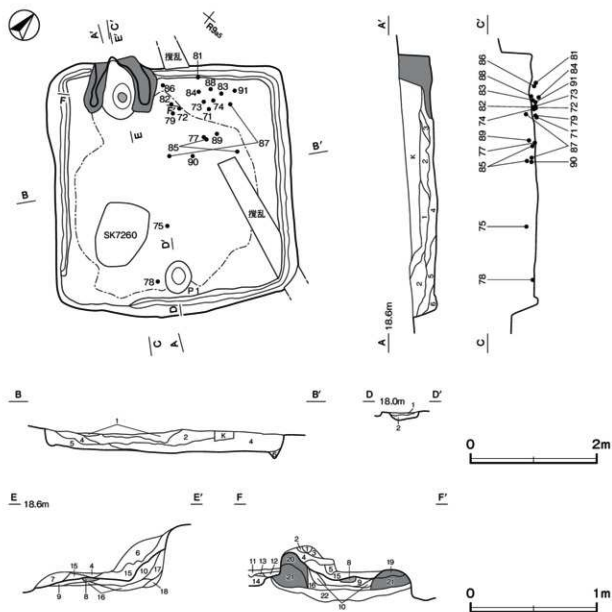
ピット土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	2 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
-------	-----------------------	-------	----------------

覆土 6 層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

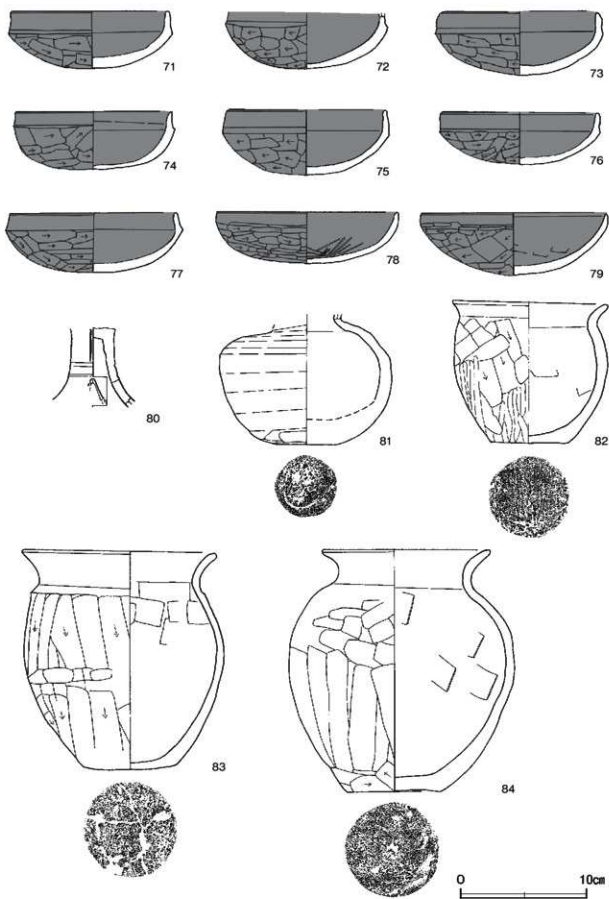
1 褐色	ロームブロック中量、炭化物少量、焼土粒子微量	4 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
2 灰黄褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量
3 近い黄褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量	6 黒褐色	ロームブロック少量



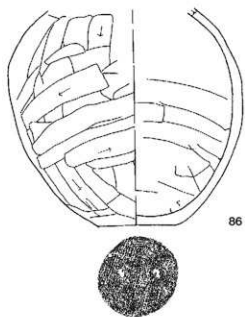
第38図 第3146号堅穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片161点(坏38, 高坏1, 小形甕1, 甕類120, 瓶1), 須恵器片2点(高坏, 平瓶)が出土している。71・72・74・77・79・82～84・88・91はほぼ完形で、竈右袖部から北コーナー部にかけての床面に置かれたような状態でそれぞれ出土しており、遺棄されたかあるいはの廃絶時に置かれたものと思われる。81の須恵器平瓶は口頸部は欠損しているが、北東壁際の床面から正位の状態でも出土しており、遺棄されたか置かれたものと思われる。

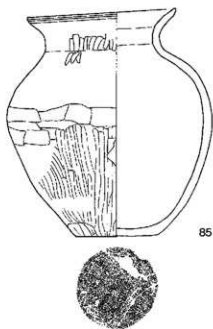
所見 完形近い土器がまとまって、北西壁際に置かれたような状態で確認されている。建物廃絶時に、何らかの祭祀行為が行われた可能性がある。時期は、出土土器から7世紀前葉と考えられる。



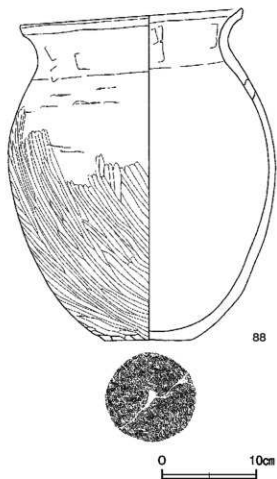
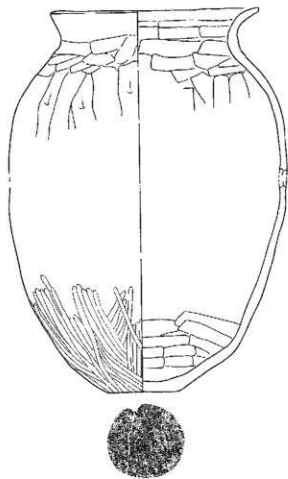
第39图 第3146号竖穴建物跡出土遺物実測図(1)



86



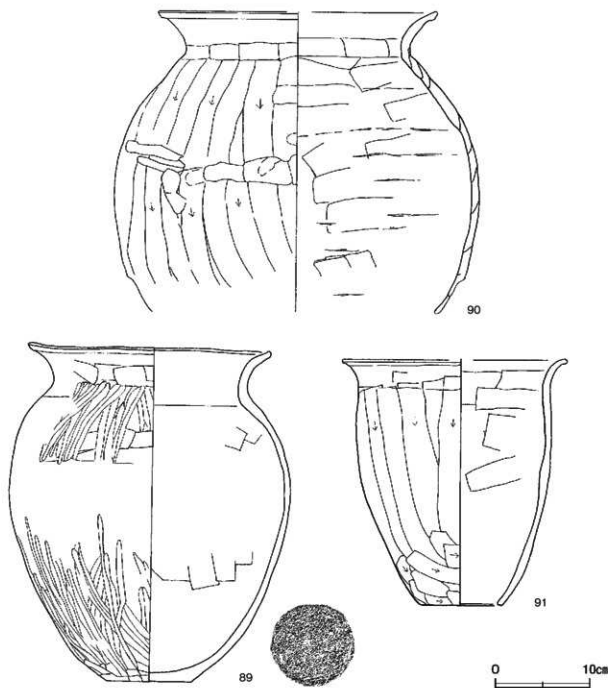
85



88

0 10cm

第40图 第3146号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)



第41図 第3146号堅穴建物跡出土遺物実測図(3)

第3146号堅穴建物跡出土遺物観察表(第39~41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考		
71	土師器	坏	125	4.6	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ 一部削がれ	体部外面横位のヘリ張り	床面	90% PL31	
72	土師器	坏	-	(4.5)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	体部外面横位のヘリ張り	床面	90% PL31	
73	土師器	坏	[124]	5.0	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	体部外面ヘリ張り	体部内面ナデ	床面	60%
74	土師器	坏	124	4.5	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	体部外面斜位のヘリ張り	床面	80% PL31	
75	土師器	坏	[124]	5.2	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	体部外面ヘリ張り	体部内面ナデ	覆土中層	50%
76	土師器	坏	[124]	4.0	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	体部外面横位のヘリ張り	覆土中	50%	
77	土師器	坏	131	4.8	-	長石・石英・雲母	柳灰	普通	口縁部外・内面横ナデ ヘリ張り 体部内面ナデ	体部外面横位・斜位のヘリ張り	床面	90% PL31	
78	土師器	坏	142	4.0	-	長石・石英・絹織	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ヘリ張り	体部外面横位のヘリ張り	床面	90% PL29	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
79	土師器	坏	146	49	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部外・内面焼ナデ 体部内面焼ナデ	体部外面横位のヘラ削り	床面	70% PL29
80	須恵器	高坏	-	(62)	-	長石・石英	灰	普通	脚部外面ロクロナデ 2条の沈線文 脚部上半部縦位の沈線文 下半部三角形の透かし		覆土中	10% 北側東壁
81	須恵器	平瓶	-	(104)	47	長石・石英	灰	普通	体部外・内面ロクロナデ 脚部外面下部焼ナデ 底面ヘラ削り		床面	70% PL30 北側東壁
82	土師器	小形甕	124	112	72	長石・石英・雲母・黒色粒子	明赤褐	普通	口縁部外・内面焼ナデ 体部外面上半部ヘラ削り 下部焼ナデ 底面ヘラ削り		床面	90% PL32
83	土師器	甕	(150)	175	74	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	口縁部外・内面焼ナデ 体部内面ヘラナデ		床面	70% PL35
84	土師器	甕	(130)	193	75	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面焼ナデ 体部内面ヘラナデ		床面	90% PL35
85	土師器	甕	154	242	84	長石・石英・細礫	にぶい橙	普通	口縁部外・内面焼ナデ ヘラナデ 体部外面下部焼ナデ 体部内面ナデ		覆土中層 覆土下層	70% PL35
86	土師器	甕	-	(230)	82	長石・石英・雲母・赤黒粒子	明赤褐	普通	体部外面縦位・横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ		床面	60%
87	土師器	甕	217	[40.7]	78	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部外・内面焼ナデ 体部外面縦位のヘラ削り 下部焼ナデ 底面ヘラ削り		覆土中層 覆土下層	70%
88	土師器	甕	234	351	92	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部外・内面焼ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ナデ		床面	80% PL35
89	土師器	甕	253	356	90	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外・内面焼ナデ 体部外面ヘラ削り 体部内面ヘラナデ 底面ヘラ削り		覆土下層	90% PL35
90	土師器	甕	[294]	(319)	-	長石・石英・細礫	黄橙	普通	口縁部外・内面焼ナデ 体部外面縦位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ 輪軸みぞ		覆土下層	30%
91	土師器	瓶	[238]	259	82	長石・石英・赤色粒子・細礫	明赤褐	普通	口縁部外・内面焼ナデ 体部外面縦位・斜位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ		床面	90% PL35

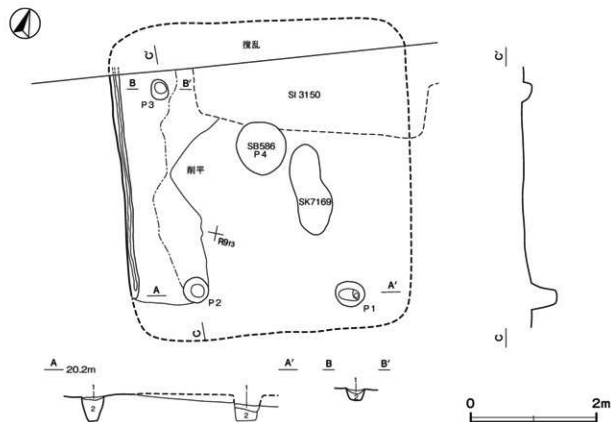
第3153号竪穴建物跡 (第42図)

位置 12区中央部のR9e3区、標高20mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3150号竪穴建物、第586号掘立柱建物、第7169号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部は攪乱により、東部は削平されているため、西壁の壁溝や柱穴の状況から、南北幅4.90m、東西幅は4.56mの方形で、主軸方向はN-19°-Wと推定される。壁は遺存していない。

床 西部はほぼ平坦で、壁溝際を除いて踏み固められている。壁溝が西側に巡っている。



第42図 第3153号竪穴建物跡実測図

ピット 3か所。P1～P3は深さ22～40cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P1～P3の第1・2層は、柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、糞土粒子・炭化粒子微量 2 濃い褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量

覆土 削平と攪乱により、覆土は存在していない。

遺物出土状況 土師器片3点(坏1, 甕類2)が、壁溝覆土やピット覆土から出土している。いずれも小片で図示できない。

所見 時期は、推定される主軸方向や出土土器から7世紀後葉と考えられる。

表2 古墳時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長軸×短軸(m)	(cm)				主柱穴	出入口	ピット	伊・亀				
1530	R 8 g 8	N-5°-E	[長方形]	[6.30]×[5.40]	34～40	平型	一部	3	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 灰物陶器, 金属製品	7世紀前期	SI1519・1528→ 本跡→SI3086, SI900
1740	R 7 a 4	N-4°-E	方形	5.78×5.60	20～44	1段 平型	全周	4	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 石器, 金属製品	7世紀後葉	本跡→SI3206, SK4841
2808	R 9 f 4	N-21°-W	[方形]	[5.60]×[5.22]	19	平型	一部	4	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	7世紀前期	本跡→SI3151, SI3586・587
2969	Q 8 h 9	N-13°-W	[方形]	2.76×(1.80)	10～12	1段 平型	一部	2	-	-	-	-	-	土師器	7世紀中葉	本跡→SI2570
2970	Q 8 i 9	N-21°-W	[方形・ 長方形]	[6.72]×[6.24]	35	1段 平型	一部	3	1	1	-	-	自然	土師器, 須恵器	7世紀中葉	SI2949・3138→ 本跡→SK7160・ 7161・7163・7165
303A	R 7 e 0	N-7°-W	[隅丸 長方形]	[5.42]×4.90	-	平型	[1段 全周]	4	-	-	北壁	-	-	土師器	7世紀前期	本跡→SI3083-C, SB138・578
303B	R 7 e 0	N-5°-W	方形	6.58×6.10	16～22	平型	全周	4	-	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	7世紀前期	SI3083 A → 本跡→SI3093C, SB138・560・578
303C	R 7 e 0	N-5°-W	方形	6.58×6.10	16～22	平型	全周	4	-	2	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 土製品	7世紀前期	SI3083 A・B → 本跡→SI3138・ 560・578
3087	R 7 d 4	N-10°-W	方形	7.00×6.88	30～35	平型	[全周]	4	-	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器, 土製品	6世紀後葉	本跡→SI3086・ 3090C・3095, SE359
308A	R 7 c 2	N-6°-W	[方形]	[4.40]×[4.40]	-	-	-	4	1	-	北壁	-	-	土師器, 須恵器	6世紀後葉	本跡→SI3088・ 3090B-C・3097, SE370
308B	R 7 c 2	N-6°-W	[方形]	8.04×[7.56]	10～14	1段 平型	[全周]	4	2	-	北壁	1	人為	土師器, 須恵器	6世紀後葉	本跡→本跡→ SI3090A・本跡→ SI3090C・3087・ 3091・3092B-C・3097, SE370
308C	R 7 c 2	N-6°-W	[方形]	8.04×[7.56]	10～14	1段 平型	[全周]	4	1	-	北壁	1	人為	土師器, 須恵器	6世紀後葉	SI3090A(B)→本跡 →3087・3089・ 3091・3092B-C・ 3097・SE370
3092	R 6 e 0	N-6°-W	方形	7.04×6.94	21～28	平型	[全周]	4	2	-	北壁	1	人為	土師器, 須恵器, 金属製品	7世紀前期	本跡→SI3088・ 3093・SE371, SE380
3099	R 7 e 2	N-8°-W	[方形]	3.90×(2.34)	10～22	平型	[全周]	2	1	-	-	-	自然	土師器, 須恵器	7世紀後葉	本跡→SI388A・ 3088B
3128	Q 8 i 9	N-23°-W	[長方形]	[4.92]×4.44	15	平型	一部	2	1	-	-	-	自然	土師器	7世紀前期	本跡→SI2970, SI3588
3131	R 8 d 9	N-13°-W	[方形]	4.54×[4.48]	18～30	1段 平型	一部	3	-	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	7世紀中葉	本跡→SI3133・ 3137
3134	R 9 e 2	N-17°-W	[方形]	5.74×[5.48]	12～25	1段 平型	[全周]	4	1	-	北壁	-	人為	土師器, 須恵器	7世紀中葉	本跡→SI3140・ 3148・3149, SE390
3146	R 9 a 5	N-39°-W	方形	3.92×3.80	24～48	1段 平型	[1段 全周]	-	1	-	北西 壁	-	人為	土師器, 須恵器	7世紀前期	本跡→SK7260
3153	R 9 a 3	N-19°-W	[方形]	[4.90]×[4.56]	-	1段 平型	一部	3	-	-	-	-	-	土師器	7世紀後葉	本跡→SI3150, SE386, SK7169

(2) 土坑

第 6869 号土坑 (第 43 図)

位置 12区北部の R 6 市区、標高 22 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 1603・3098 号堅穴建物、第 567 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 南部が第 567 号掘立柱建物に掘り込まれているため、短軸は 0.48 m で、長軸は 0.62 m しか確認できなかったが、長方形と推定でき、長軸方向は、 $N-85^{\circ}-W$ である。深さは 44 cm で、壁は外傾している。底面は皿状である。

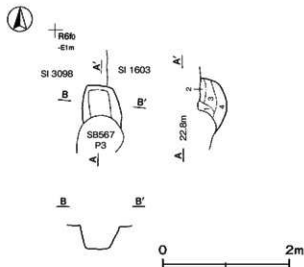
覆土 4 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック多量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック多量、炭化物微量
- 4 褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片 9 点 (坏 2、甕類 7) が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、第 1603・3098 号堅穴建物、第 567 号掘立柱建物に掘り込まれていることや、出土遺物から 7 世紀後葉と考えられる。性格は不明である。



第 43 図 第 6869 号土坑実測図

第 6874 号土坑 (第 44 図)

位置 12区北部の R 7 c2 区、標高 22 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 3090C 号堅穴建物跡を掘り込み、第 3097 号堅穴建物に掘り込まれている。

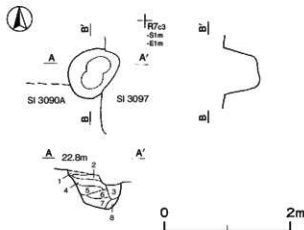
規模と形状 東部が第 3097 号堅穴建物に掘り込まれているが、長径 0.95 m、短径 0.75 m の楕円形で、長径方向は $N-53^{\circ}-E$ である。深さは 50 cm で、壁は外傾している。底面は皿状である。

覆土 8 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物微量
- 4 褐色 ロームブロック多量、炭化物微量
- 5 褐色 ロームブロック中量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 8 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片 17 点 (坏 1、甕類 16) が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。



第 44 図 第 6874 号土坑実測図

所見 時期は、第3090C号竪穴建物跡を掘り込み、第3097号竪穴建物に掘り込まれていることや、出土遺物から7世紀前葉と考えられる。性格は不明である。

第7220号土坑 (第45図)

位置 12区北部のR8c8区、標高21mほどの台地傾斜部に位置している。

重複関係 第7221号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部が第7221号土坑に掘り込まれているため、長径は0.94mで、短径は0.77mしか確認できなかった。楕円形で、長径方向はN-56°-Wである。深さは28cmで、壁はほぼ直立もしくは外傾している。底面は平坦である。

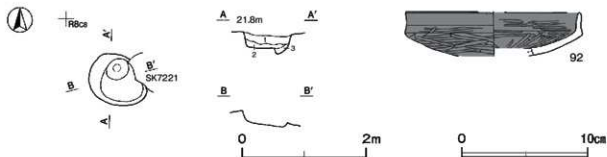
覆土 3層に分層できる。ロームブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
2 灰黄褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片11点(坏4、甕類7)のほか、混入した陶器片1点(甕類)が出土している。92は、覆土中から出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土遺物から7世紀中葉と考えられる。性格は不明である。



第45図 第7220号土坑・出土遺物実測図

第7220号土坑出土遺物観察表 (第45図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
92	土師器	坏	[140]	(35)	-	長石・石英・雲母	1.5iv~vi	普通	口縁部外・内面磨子ア、底部外面へラ削り流磨き、底部内面放射状の磨き	覆土中	30%

表3 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
6869	R 6 d0	N-85°-W	[長方形]	(0.62) × 0.48	44	皿状	外傾	人為	土師器	本跡→S11403・3098、SE567
6874	R 7 c2	N-53°-E	[楕円形]	(0.95) × (0.75)	50	皿状	外傾	人為	土師器	SE3003・11・C→本跡→S13097
7220	R 8 c8	N-56°-W	[楕円形]	0.96 × 0.77	28	平坦	ほぼ直立 外傾	人為	土師器	本跡→SK7221

2 奈良時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡 16 棟、掘立柱建物跡 15 棟、土坑 6 基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

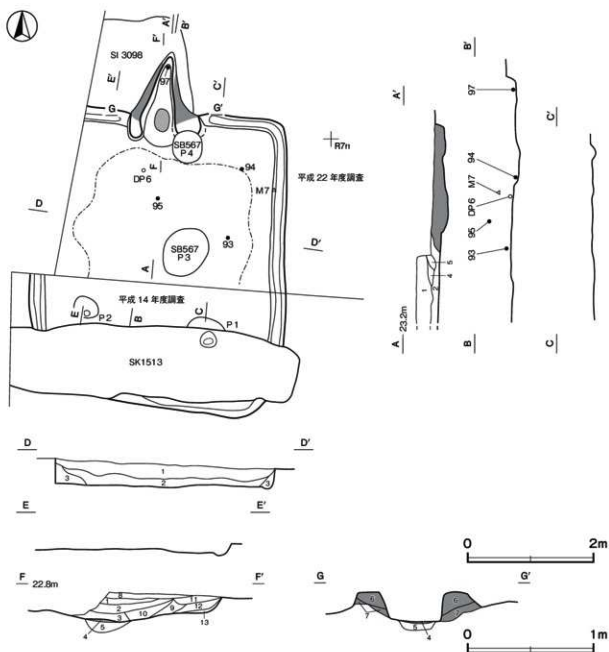
(1) 竪穴建物跡

第 1603 号竪穴建物跡 (第 46・47 図 PL10)

調査年度 平成 22 年度に調査した。南部は平成 14 年度に調査し、当財団調査報告『第 214 集』において報告している。柱穴の番号については、今回の報告分と合わせて、既調査分を新しい番号に更新した。

位置 12 区中央部の R 6 0 区、標高 23 m の台地中央部に位置している。

重複関係 第 3098 号竪穴建物跡を掘り込み、第 567 号掘立柱建物、第 1513 号土坑に掘り込まれている。



第 46 図 第 1603 号竪穴建物跡実測図

規模と形状 北西コーナー部は調査区域外で未調査であるが、壁の状況などから長軸4.7m、短軸4.0mの長方形で、主軸方向はN-3°-Eと推定される。壁は高さ6~28cmで、外傾している。

床 ほほ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで144cm、燃焼部の幅は46cmである。火床部は床面から14cm掘りくぼめ、ロームブロックを中量含む第5層を埋土して構築されている。第2・9・10・12層は、焼土ブロックを中量含む土層で、天井部の崩落土と考えられる。袖部は地山のローム層上にロームブロック・粘土ブロックなどが含まれた第6・7層を積み上げて構築されている。火床面は第4層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に90cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1 灰黄褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量	7 暗褐色	ク・炭化物少量 ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量
2 細暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物中量、粘土粒子少量、ロームブロック微量	8 暗褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
3 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量	9 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、粘土ブロック・炭化物少量
4 暗赤褐色	焼土ブロック多量、粘土粒子中量、ロームブロック・炭化物少量	10 赤褐色	焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック少量
5 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量	11 灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
6 灰褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック	12 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量
		13 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子微量

ピット 2か所。P1・P2については『第214集』を参照されたい。

覆土 5層に分層できる。西側から流入している第1・2層が広く床面を覆っていることから、自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量	5 褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量
3 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片243点(坏25, 甕類218), 須恵器片121点(坏33, 高台付坏4, 蓋1, 高坏1, 鉢1, 甕類81), 灰軸陶器片1点(長頸瓶), 土製品1点(勾玉), 金属製品2点(鐵, 不明製品)が、覆土中から散乱した状態で出土している。94・DP6は床面から出土していることから、遺棄されたか投棄されたものと考えられる。そのほかの遺物は小破片が多く、全城に散らばった状態で出土していることから、投棄されたもの、混入したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。

第1603号竈穴建物跡出土遺物観察表(第47図)

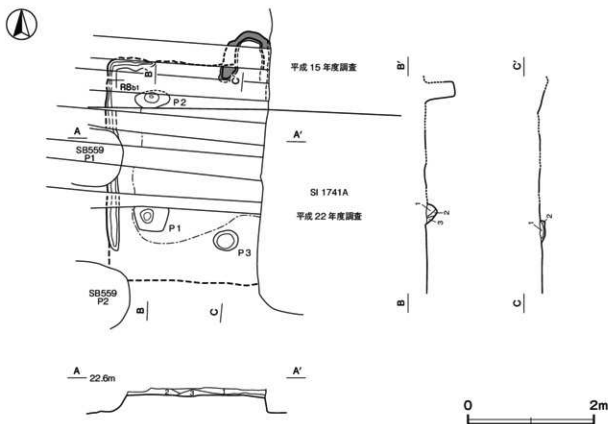
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
93	須恵器	坏	[138]	4.0	[6.0]	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰白	普通	体部下端手持ちへう張り 底部一方方向の張り	覆土中層	25%
94	須恵器	坏	[148]	4.2	[8.6]	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰白	普通	体部下端手持ちへう張り 底部一方方向の張り	床面	27% 新治遺
95	須恵器	鉢	[268]	(5.0)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰白	普通	口縁部外・内面ロクロナデ 体部外面縦位の平行印記 体部内面ロクロナデ	覆土上層	10% 新治遺
96	灰軸陶器	長頸瓶	-	(2.5)	-	緻密	灰白	普通	ロクロナデ 張り掛け	覆土中	5% 施設遺
97	土師器	甕	[204]	(16.6)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰白	普通	口縁部外・内面磨ナデ 体部外・内面縦位のナデ 折頸	覆土下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP6	勾玉	2.1	1.6	0.9	1.8	長石・赤色粒子	灰褐	へらによる成形 一方からの穿孔	床面	PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M7	鐵	(38)	(3.0)	(0.2)	(5.6)	鐵	短茎三角形 鎌身部平直 脇伏 基部断面長方形	覆土上層	PL47
M8	不明製品	(1.6)	(1.4)	(1.0)	(1.2)	銅	径1mmほどの針金を輪状に重ねたもの	覆土中	

遺物出土状況 土師器片 20 点 (坏 2, 変型 18), 須恵器片 6 点 (坏 4, 変型 2) が覆土中からまばらな状態で出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は, 第 1741A 号竪穴建物に掘り込まれていることや出土土器から 8 世紀後半と考えられる。



第 48 図 第 1742 号竪穴建物跡実測図

第 3077 号竪穴建物跡 (第 49 ~ 51 図 PL10)

位置 12 区中央部の R 8 c 6 区, 標高 21 m の台地中央部に位置している。

重複関係 第 6995 号土坑を掘り込み, 第 557・564 号掘立柱建物, 第 6997 号土坑に掘り込まれている。

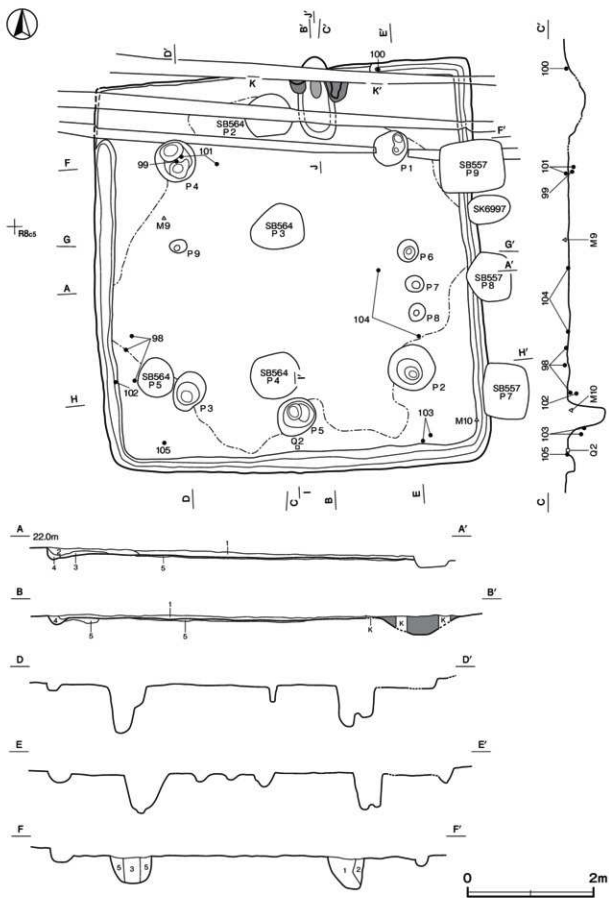
規模と形状 長軸 6.38m, 短軸 6.12m の方形で, 主軸方向は N-2°-W である。壁は高さ 4 ~ 18cm で, ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で, コーナー部を除いて, 踏み固められている。貼床はロームブロックを多量に含み, 締まりが強い第 5 層を積み上げて, 構築されている。壁溝が壁下に巡っている。

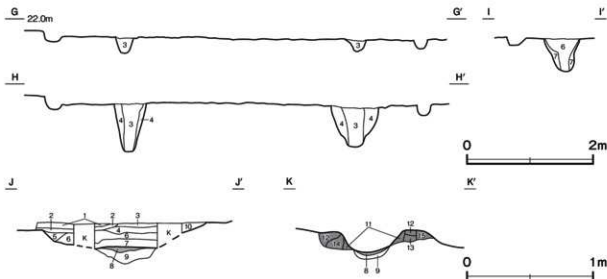
竈 北壁の中央からやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 132cm, 燃焼部幅は 50cm である。火床部は床面から 22cm 掘りくぼめ, ロームブロックを中量含む第 9 層を埋土して構築されている。袖部は地山にロームブロック・粘土ブロックなどを含む第 11 ~ 15 層を積み上げて構築されている。火床面は第 8 層上面で, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 24cm 掘り込まれ, 火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1 褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量	10 灰褐色	粘土ブロック中量
2 黒褐色	炭化粒子多量, ローム粒子微量	11 暗褐色	粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化粒子微量
3 暗褐色	粘土粒子少量, 炭化粒子微量	12 暗褐色	粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量
4 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量	13 褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量, 焼土粒子微量
5 暗赤褐色	炭化粒子少量, 焼土粒子微量	14 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量
6 暗赤褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子少量	15 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量
7 黒色	焼土粒子・炭化粒子微量		
8 暗赤褐色	焼土ブロック中量		
9 黒暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量		



第49图 第3077号竖穴建物跡实测图(1)



第50図 第3077号竪穴建物跡実測図(2)

ピット 9か所。P1～P4は深さ58～76cmで、規模と配置から主柱穴である。P5は深さ60cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットと考えられる。P6～P9は深さ12～26cmで、主柱穴の南北軸線上に位置していることから、補助柱穴と考えられる。P1の第1層、P2～P4・P6・P9の第3層、P5の第6層は柱抜き取り痕である。

ピット土層解説

1 褐色	ロームブロック中量・炭化粒子微量	5 極暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
2 褐色	ローム粒子中量	6 褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	7 褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
4 褐色	ロームブロック少量		

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを中量含む第1層が広範囲に床面を覆っていることから、埋め戻されている。第5層は貼床の構築土である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	4 暗褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック少量	5 褐色	ロームブロック多量(締まり強い)
3 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量		

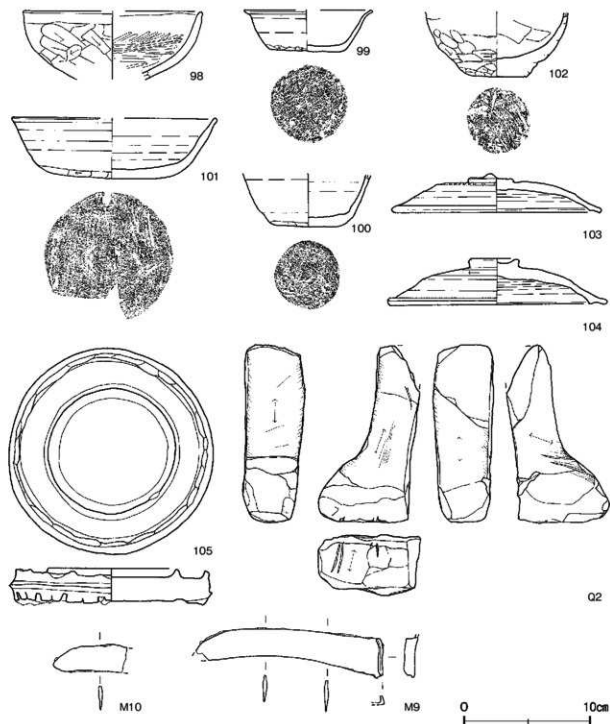
遺物出土状況 土師器片539点(坏99, 鉢1, 甕類439), 須恵器片143点(坏79, 高台付坏1, 蓋38, 円面硯1, 甕類24), 石器1点(砥石), 金属製品2点(鎌)が、床面を中心に散乱した状態で出土している。99・101はP4の覆土上層から出土し、柱抜き取り後、柱穴がある程度埋まってから、投棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。

第3077号竪穴建物跡出土遺物観察表(第51図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
99	土師器	坏	[142]	(5.3)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	褐色	普通	口縁部外・内面横+ア 体部内面へう磨き	覆土下層 床面	30%
98	須恵器	坏	[102]	3.4	6.0	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰青	普通	体部下端手持ちへう磨り 底面へう切り後、多方向の磨り	P4 覆土上層	80% PL39 新治産
100	須恵器	坏	-	(4.3)	5.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	オリーブ黒	普通	体部下端手持ちへう磨り 底面へう切り後、一方向の磨り	床面	50% 新治産
101	須恵器	坏	[161]	4.8	10.2	長石・石英・雲母	黒灰	普通	体部下端手持ちへう磨り 底面へう切り後、多方向の磨り	覆土下層 P4覆土上層	50% 新治産
102	土師器	鉢	-	(5.2)	4.7	長石・赤色粒子・黒色粒子	にぶい橙	普通	体部外面斜位・横位のへう磨り 体部内面へう磨き	掘方埋土中	50%
103	須恵器	蓋	16.2	3.1	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰白	普通	天井部回転へう磨り後、柄み貼付け	掘方埋土中	70% PL37 新治産
104	須恵器	甕	[174]	3.7	-	長石・石英・雲母	にぶい黒	普通	天井部回転へう磨り後、柄み貼付け	床面	60% PL37 新治産
105	須恵器	円面硯	16.2	(3.1)	-	長石・黒色粒子・銅礫	黄灰	普通	層部上段に隆起線磨り 通かし下ろし磨りに割入目 外葉磨って高さを調整 内葉隆起線磨り 横部使用痕	南西コーナー一部 床面	40% PL37 新治産

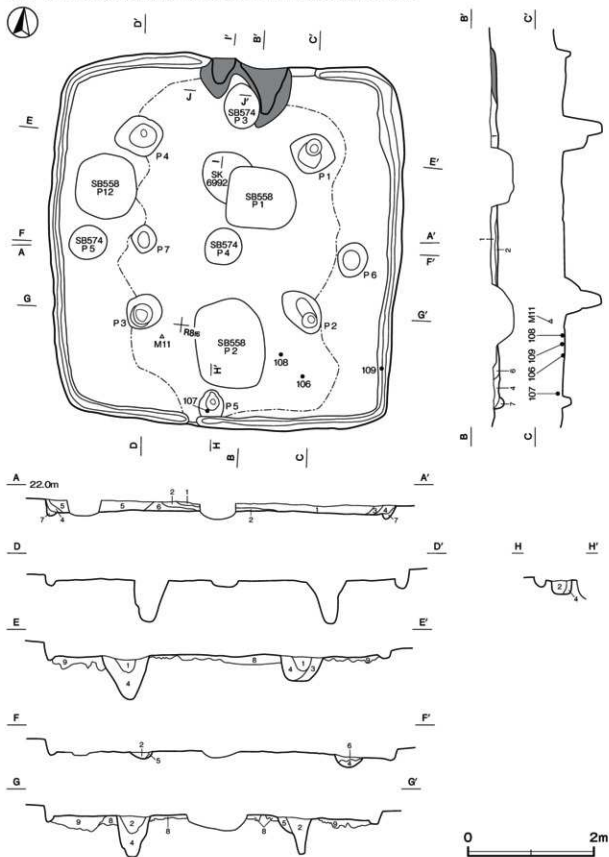
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	砥石	(14.0)	8.2	4.8	(47.36)	凝灰岩	砥面5面 側面に糸線状の研磨痕 一部欠損	床面	PL46
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M9	鎌	(15.2)	3.2	0.3	(44.9)	鉄	切先部欠損 刃部湾曲 基部折り返し	覆土下層	PL48
M10	鎌	(5.9)	(2.3)	0.2	(11.6)	鉄	刃部湾曲 基部欠損	掘方埋土中	PL48



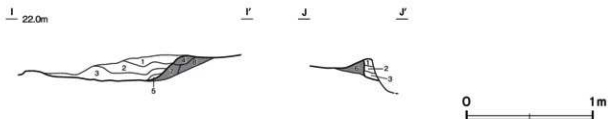
第51図 第3077号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 3078 号竪穴建物跡 (第 52 ~ 54 図 PL11)

位置 12 区中央部の R 8 e6 区, 標高 21 m の平坦な台地上に位置している。



第 52 図 第 3078 号竪穴建物跡実測図 (1)



第 53 図 第 3078 号竪穴建物跡実測図（2）

重複関係 第 558・574 号掘立柱建物、第 6992 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.94 m、短軸 5.62 m の方形で、主軸方向は N-2°-W である。壁は高さ 9～20cm で、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、出入口部と思われる部分から竈前面にかけての中央部は踏み固められている。貼床はロームブロックを中量含む第 8 層と、ロームブロックを中量含み締まりがやや強い第 9 層を埋め戻して構築されている。壁溝が壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 116cm である。燃焼部は第 574 号掘立柱建物の P3 に掘り込まれており、規模や状況は不明である。袖部は地山の上に粘土ブロックなどを含む第 6 層を積み上げて構築されている。煙道部は壁外に 6cm 掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1	暗褐色	粘土ブロック中量、炭化物少量	5	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
2	褐色	粘土ブロック・炭化粒子少量	6	灰褐色	粘土ブロック中量、炭化材少量
3	暗褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量	7	褐色	粘土ブロック・ローム粒子少量
4	灰褐色	粘土ブロック中量	8	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量

ピット 7か所。P1～P4は深さ 28～66cm で、規模や配置から主柱穴である。P5は深さ 25cm で、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ 18cm・12cm で、主柱穴の間に位置することから、補助柱穴と考えられる。P2・P5の第 2層は柱の抜き取り痕である。P1・P3・P4・P6・P7の第 1～6層は柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	4	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量
2	褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	5	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量
3	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	6	褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量

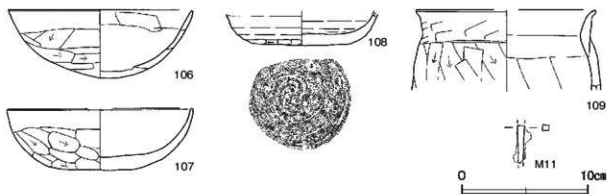
覆土 7層に分層できる。ロームブロックなどが含まれた層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。第 8・9層は貼床の構築土である。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	6	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
2	褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	7	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	8	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
4	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	9	褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量（締まりやや強い）
5	黒色	ロームブロック少量、炭化物微量			

遺物出土状況 土師器片 573 点（坏 103、甕類 470）、須恵器片 68 点（坏 43、高台付坏 1、蓋 14、甕類 10）、金属製品 1 点（釘）が、南部の床面を中心に散乱した状態で出土している。103・106・108 は南東コーナー部寄りの床面から破片で出土していることから、遺棄されたかあるいは投棄されたものと考えられる。107・M11 は覆土中層・覆土上層から出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 8 世紀前葉と考えられる。



第54図 第3078号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3078号竪穴建物跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
106	土師器	坏	14.6	5.4	-	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位・横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ	床面	70% PL38
107	土師器	坏	[14.8]	4.8	-	長石・石英・赤色粒子・黒色	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位のヘラ削り 体部内面ナデ 内面黒色処理	覆土中層	60% PL38
108	須恵器	坏	-	(2.8)	8.0	長石・石英・黄緑	にぶい黄緑	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後、回転ヘラ削り	床面	40% 新造直
109	土師器	羹	[14.2]	(6.4)	-	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 体部縦位ヘラ削り 体部内面ヘラナデ	床面	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M11	釘	(3.0)	(0.6)	(0.5)	(2.9)	鉄	断面長方形 一部欠損	覆土上層	

第3081号竪穴建物跡（第55・56図 PL11）

位置 12区中央部のR 8d1区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3082A号竪穴建物、第559・560・563号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.88m、短軸4.84mの方形で、主軸方向はN-7°-Eである。壁は高さ2~5cmで、緩やかに立ち上がっている。

床 平坦で、主柱穴の内側と竈周辺は踏み固められている。壁溝が壁下に巡っている。

竈 北壁の中央からやや北東コーナー部寄りに付設されている。火床部は第560号掘立柱建物跡のP10に掘り込まれており、規模や状況は不明である。袖部は地山の上に粘土粒子やロームブロックを含む第1~6層を積み上げて構築されている。煙道部は壁外に38cm掘り込まれ、緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

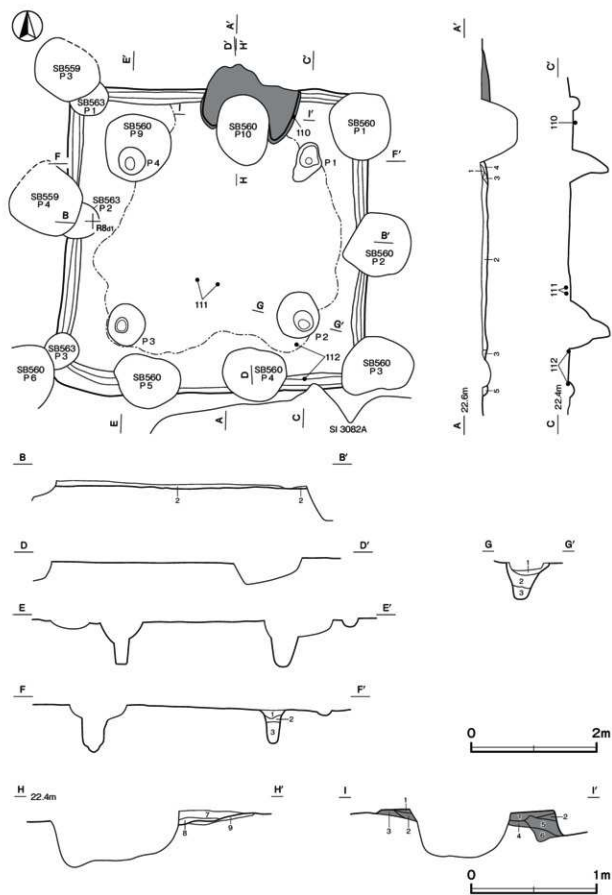
1	黒褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	6	褐色	炭化物微量
2	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量	7	灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
3	暗褐色	粘土粒子少量、ロームブロック微量	8	暗赤褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量
4	暗褐色	粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量	9	暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子微量
5	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量	9	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 4か所。P1~P4は深さ56~74cmで、規模や配置から主柱穴である。覆土の第1~3層は柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	3	暗褐色	ロームブロック少量
2	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量			

覆土 5層に分層できる。床面上をロームブロックを中量含む第2層が広く覆っており、埋め戻されている。



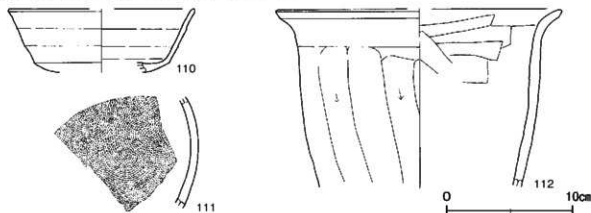
第 55 图 第 3081 号竖穴建物跡実测图

土層解説

- | | | | |
|---------|------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 に近い褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片 166 点 (坏 24, 高台付坏 2, 甕類 138, 瓶 2), 須恵器片 57 点 (坏 35, 高台付坏 1, 蓋 5, 甕類 14, 瓶 2), 灰軸陶器片 4 点 (碗 1, 長頸瓶 3), 土製品 1 点 (支脚) がまばらな状態で出土している。110 は竈袖部脇の床面から, 112 は南東コーナー部寄りの床面からそれぞれ破片で出土し, 遺棄されたかあるいは投棄されたものと思われる。111 は覆土下層から破片で出土しており, 埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀前葉と考えられる。



第 56 図 第 3081 号堅穴建物跡出土遺物実測図

第 3081 号堅穴建物跡出土遺物観察表 (第 56 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
110	須恵器	坏	[148]	(5.0)	-	長石・石英・雲母	に広い黄褐色	普通	体部外・内面ロコナデ	床面	30% 新治層
111	須恵器	甕	-	(8.7)	-	長石・石英	褐色	普通	体部外面同心円文の押さ	覆土下層	5% 新治層
112	土師器	瓶	[222]	(14.2)	-	長石・石英・雲母	に広い赤褐色	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 体部内面ヘラナデ 体部外面縦位のヘラ	床面	30%

第 3088A 号堅穴建物跡 (第 57～59 図)

位置 12 区中央部の R 7 e1 区, 標高 22 m の平坦な台地上に位置している。

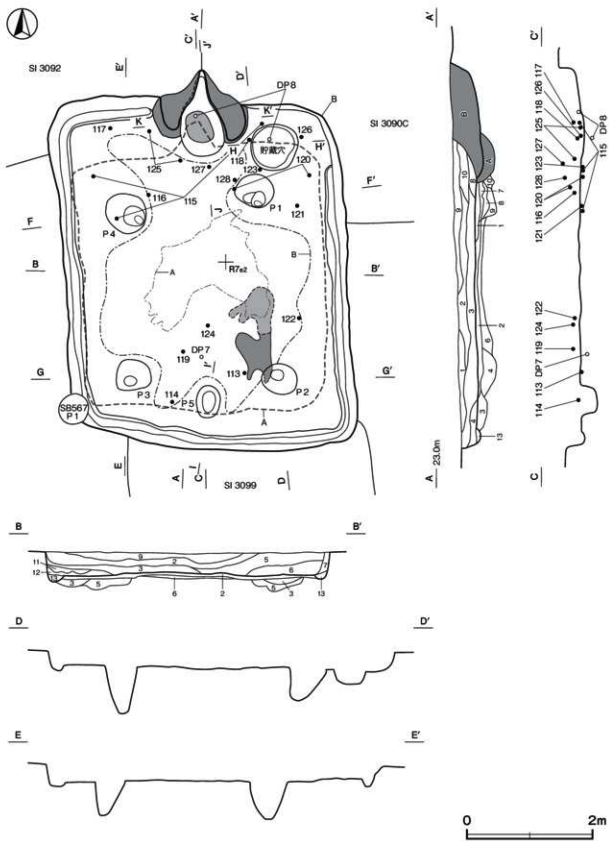
重複関係 当初は 1 棟の堅穴建物跡として調査を進めたが, 建て替えが行われていることが判明し, 古い堅穴建物跡を第 3088A 号堅穴建物跡, 新しい堅穴建物跡を第 3088B 号堅穴建物跡として報告する。そのほか, 第 3090C・3092・3099 号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 竈の位置や柱穴の配置から長軸 4.22 m, 短軸 3.86 m の方形で, 主軸方向は N-2°-W と推定される。壁は建て替えてすべて削平されており, 不明である。

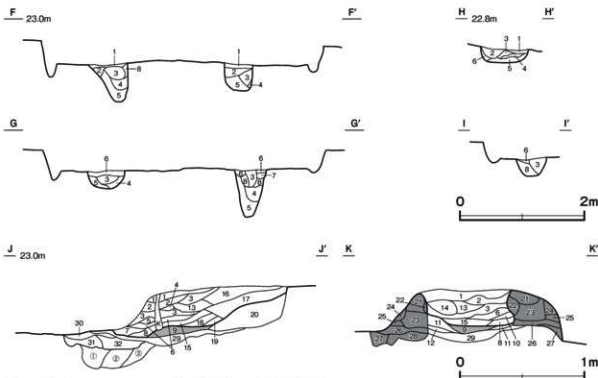
床 第 3088B 号堅穴建物跡の床下から確認されている。中央部は地山を削り出しにより造り出し, 四方は 14～22cm 掘り込んでいる。四方の掘方はロームブロックを含む暗褐色土の第 3～6 層で埋土され, 床が構築されている。床はほぼ平坦で, 中央部が踏み固められている。

貼床・掘方土層解説

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 1 黒褐色 | 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物中量, ロームブロック微量 (締まり強い) | 4 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量, 焼土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量 (締まり強い) | 5 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量, 焼土ブロック・炭化物微量 (締まり強い) |



第 57 图 第 3088A · 3088B 号竖穴建物跡实测图 (1)



第58図 第3088A・3088B号竪穴建物跡実測図(2)

- 7 暗褐色 焼土ブロック・炭化物中量, ロームブロック・ 9 黒褐色 ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化物少
 粘土ブロック少量
 8 灰褐色 粘土ブロック・炭化物中量, ロームブロック・ 10 暗褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・粘土ブロッ
 焼土ブロック少量 焼土ブロック少量

竪 建て替えの際、袖部や燃焼部は壊され、竪の掘方だけが確認されている。竪は北壁中央部に付設されて
 いる。火床部は床面から28～32cmほど掘りくぼめ、ロームブロックなどを含む①・②・③層を埋土して
 いる。第①層の上面は赤変硬化している。煙道部は壁外へ35cm掘り込まれている。

竪土層解説

- ① 黒暗赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化物少量 ③ 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化物中量,
 ② 暗褐色 焼土ブロック・炭化物中量, ロームブロック・ 粘土ブロック少量

ピット 5か所。P1～P4は深さ53～76cmで、規模と配置からの主柱穴と考えられる。P5は深さ28cmで、
 南壁際の竪に向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 第3088B号竪穴建物跡の床面精査で確認されたため、覆土の状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片3点(甕類), 須恵器片6点(坏4, 蓋1, 甕類1), 土製品1点(土玉)が掘方埋土
 中から出土している。DP7は、出入口ピットと考えられるP5近くの掘方埋土中から出土している。

所見 柱穴の位置を変えずに、本跡から第3088B号竪穴建物へ建て替えていると考えられることから、本跡
 の廃絶と第3088B号竪穴建物への建て替えは連続して行われたと思われる。このことから、本跡の時期は第
 3088B号竪穴建物跡と同時期の8世紀後葉と考えられる。

第3088A号竪穴建物跡出土遺物観察表(第59図)

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP7	土玉	20 22	1.9	0.3	6.5	長石・石英	にぶい赤褐色	ナデ 一方からの穿孔	掘方埋土	PL45

第3088B号竪穴建物跡（第57～60図 PL11・12）

位置 12区中央部のR7e1区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3088A・3090C・3092・3099号竪穴建物跡を掘り込み、第567号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 第3088A号竪穴建物跡の柱穴の位置を変えずに、北へ96cm、南へ58cm拡張している。長軸5.56m、短軸4.54mの隅丸長方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁は高さ22～38cmで、ほぼ直立している。

床 はほぼ平坦な貼床で、出入口部と思われる部分から竈前面にかけての中央部は踏み固められている。貼床は第3088A号竪穴建物跡の床の上にロームブロックを中量含む締りの強い第2層を重ね、構築している。壁溝が北壁東側部分を除いて、壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚き口部から煙道部まで145cmで、燃焼部の幅は64cmである。火床部は床面から15cm掘りくぼめ、ロームブロックを中量含む第29層を埋土して構築されている。左袖部は地山を削り出して基部を造り、右袖部は地山を掘り込み、その上に粘土ブロックやロームブロックを含む第21～28層を積み上げて構築されている。火床面は第9層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ48cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1	暗褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	18	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック少量
2	灰黄褐色	粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	19	にんべん色	粘土ブロック多量、焼土粒子微量
3	灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	20	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子中量、焼土粒子少量
4	にんべん色	焼土ブロック多量、炭化物少量、ロームブロック微量	21	灰褐色	粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
5	暗赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	22	褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
6	灰褐色	焼土ブロック・炭少量、ロームブロック微量	23	暗褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量
7	灰褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量	24	にんべん色	粘土ブロック中量、ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
8	灰褐色	灰多量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量	25	灰褐色	粘土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
9	赤褐色	焼土ブロック多量、灰中量、炭化粒子少量	26	灰褐色	粘土ブロック多量、ロームブロック少量、炭化粒子微量
10	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量	27	暗褐色	炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量
11	にんべん色	焼土ブロック多量、炭化粒子少量	28	暗赤褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
12	黒褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量	29	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
13	黒褐色	焼土ブロック・炭化物少量、粘土粒子微量	30	黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
14	灰褐色	粘土粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量	31	暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物微量
15	灰褐色	灰多量、焼土ブロック少量、炭化物微量	32	褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
16	暗褐色	粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量、ローム粒子微量			
17	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化物中量			

ピット 5か所。P1～P5の内、重複が確認できたのはP1だけであり、本跡の柱穴は第3088A号竪穴建物跡の柱穴の位置を変えずに、引き続き使用したと考えられる。したがって、P1～P4は規模や配置から主柱穴と考えられる。P5は南壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。ピットの覆土の第1層から第8層はすべて柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

1	灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量	4	褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
2	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量、粘土ブロック微量	5	褐色	ロームブロック中量
3	暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量	6	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
			7	褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
			8	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径82cm、短径72cmの楕円形で、深さ20cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直立している。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	4 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	5 に近い褐色	ロームブロック中量
3 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	6 黒褐色	ロームブロック・粘土粒子少量

覆土 13層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

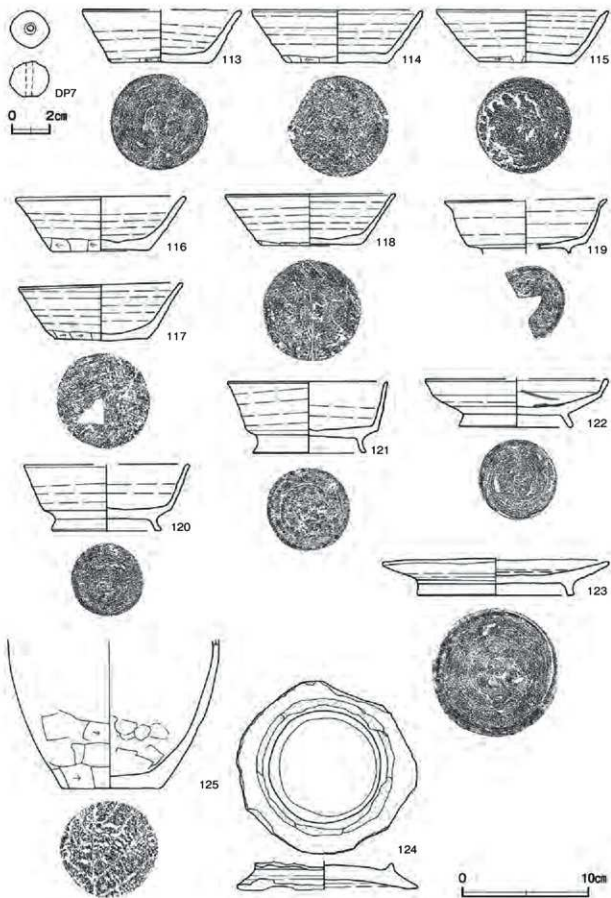
1 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	8 褐色	粘土ブロック・ロームブロック少量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	9 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量
3 褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	10 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 褐色	ロームブロック少量	11 褐色	ロームブロック中量
5 に近い褐色	ロームブロック少量	12 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック微量	13 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
7 褐色	ローム粒子中量		

遺物出土状況 土師器片 592点 (坏41, 鉢2, 甕類549), 須恵器片 378点 (坏228, 高台付坏8, 蓋18, 盤4, 甕類116, 飯4), 石器2点 (砥石, 紡錘車) が覆土全体から散乱した状態で出土している。118・121・123・126はほぼ完形で、貯蔵穴周辺の床面から出土しており、遺棄されたものと思われる。115は貯蔵穴脇の床面とP4の覆土上層から出土した破片が接合している。120は床面と覆土中層から出土した破片が接合している。DP8は貯蔵穴底面と甕の火床面から出土した破片が接合している。115・120・DP8は離れた位置から出土したものが接合していることから、割られてから投棄されたものと思われる。その他の遺物は床面や覆土中から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

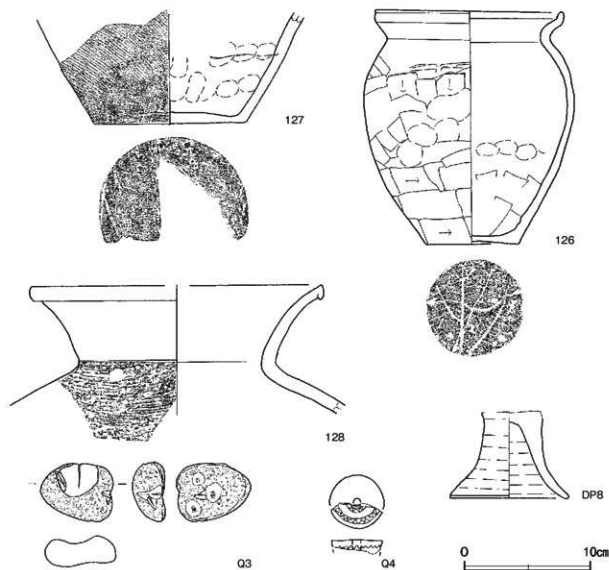
所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。

第3088B号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第59・60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	構成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
113	須恵器	坏	[125]	5.3	8.0	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後、回転ヘラ削り	床面	60% PL38 新治産
114	須恵器	坏	[134]	4.2	8.0	長石・石英・雲母・細礫	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後、二方向のヘラ削り	床面	60% 新治産
115	須恵器	坏	[142]	4.4	7.6	長石・石英・雲母	オリーブ灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後、一方向のヘラ削り	P4覆土上層	60% PL38 新治産
116	須恵器	坏	[136]	4.8	7.8	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後、二方向のヘラ削り	覆土下層	70% PL38 新治産
117	須恵器	坏	128	4.7	7.2	長石・石英・細礫	暗灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後、多方向のヘラ削り	覆土中層	80% PL38 黒之内産
118	須恵器	坏	132	4.1	7.7	長石・石英・雲母・細礫	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後、二方向のヘラ削り	床面	90% PL39 新治産
119	須恵器	高台付坏	[127]	(4.3)	-	長石・石英	暗灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後、高台貼付け	覆土中層	40% PL39 産地不明
120	須恵器	高台付坏	[129]	5.3	8.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	にぶい黄橙	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼付け	覆土中層	50% PL39 新治産
121	須恵器	高台付坏	128	5.8	8.8	長石・石英・細礫	灰	良好	底部回転ヘラ削り後、高台貼付け	床面	80% PL39 新治産
122	須恵器	盤	[142]	3.8	8.8	長石・石英・雲母・細礫	灰黄褐	普通	体部下端回転ヘラ削り 高台貼付け	覆土中層	80% PL39 新治産
123	須恵器	盤	17.9	3.0	12.2	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼付け 口縁破損後、磨って整として再利用	床面	80% PL39 新治産
124	須恵器	盤(縦に転用)	11.1	2.3	14.3	長石・石英・細礫	灰	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼付け 体部と高台の高さを削って調整し、縦として再利用	覆土中層	40% PL39 黒之内産
125	土師器	甕	-	(11.9)	7.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラ削り 底面水平ナデ	覆土下層	30%
126	土師器	甕	14.8	18.7	7.4	長石・石英・雲母・細礫	にぶい赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上半部横位のヘラ削り、指突削 体部外面下半部横位のヘラ削り 体部内面ヘラ削り 底面水平ナデ	床面	90%
127	須恵器	甕	-	(8.9)	-	長石・石英・細礫	灰	普通	体部外面斜位の平行削り 体部下端横位のヘラ削り 体部内面横削り 底部一方向の削り	覆土上層	100% 新治産
128	須恵器	甕	[230]	(10.3)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位の平行削り 体部内面横ナデ	覆土上層	10% 新治産
番号	器種	高さ	最小径	最大径	重量	胎土	色調	特徴	備考	出土位置	備考
DP8	支脚	7.0	4.7	9.2	197.5	長石・石英・雲母・細礫	にぶい橙	ロウロ水挽成形 高頸脚部と同一作り方で支脚として利用		覆土中層	PL65
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q3	砥石	4.7	6.0	2.6	15.9	軽石	上面・側面に条線状の研痕 底面に凹み3か所		覆土中層	PL66	
番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
Q4	紡錘車	[43]	(1.1)	(0.6)	(8.4)	粘板岩	上面・側面に縦割による縦溝文		覆土中層	PL66	



第 59 図 第 3088A・3088B 号竪穴建物跡出土遺物実測図



第60図 第3088B号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3095号竪穴建物跡 (第61～64図 PLI2・13)

位置 12区中央部のR7e4区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3087号竪穴建物跡を掘り込み、第569号掘立柱建物、第6816-6840号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.66m、短軸4.60mの隅丸方形で、主軸方向は $N-5^{\circ}-W$ である。壁は高さ14～30cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、出入口部と思われる部分から竈にかけての中央部は踏み固められている。四隅の掘方はロームブロックを含む第11～13層で埋め戻されている。貼床は掘方埋土の上にロームブロックを含む締まりの強い第10層を積み上げて構築されている。壁溝が壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されているが、煙道部を第569号掘立柱建物のP8に掘り込まれているため、規模は不明である。火床部は床面から23cm掘りくぼめ、ロームブロックを中量含む第25層を埋土して構築されている。袖部は地山のローム層を削り出して基部を造り、その上にロームブロックや粘土粒子を含む第15～23層を積み上げて構築されている。火床面は第24層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。

覆土層解説

1 黒 褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量	16 暗 褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗赤褐色	焼土ブロック多量、粘土ブロック少量、炭化物微量	17 灰 褐色	粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子微量
3 黒 褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、粘土粒子微量	18 にいり褐色	粘土粒子多量、焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
4 暗 褐色	焼土粒子中量、粘土粒子少量、炭化物微量	19 灰 褐色	粘土ブロック・焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化物少量
5 暗赤褐色	焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	20 灰 褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物中量、ロームブロック少量
6 黒 褐色	焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	21 褐 色	ロームブロック中量、粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
7 にいり褐色	焼土粒子・粘土粒子微量	22 暗 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量
8 灰 赤 色	焼土ブロック・粘土粒子中量、炭化粒子微量	23 暗 褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子少量、焼土ブロック微量
9 暗赤褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック少量、ローム粒子微量	24 暗赤褐色	焼土ブロック・灰中量、ロームブロック・炭化粒子少量
10 暗赤褐色	焼土粒子中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量	25 暗 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、炭化物微量
11 暗赤褐色	焼土粒子多量、ローム粒子・粘土粒子微量		
12 黒 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・粘土粒子微量		
13 黒 褐色	炭化粒子中量、焼土ブロック少量		
14 灰 褐色	焼土粒子中量、炭化粒子少量		
15 灰 褐色	粘土粒子多量、ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量		

ビット 11か所。P1～P4は深さ38～45cmで、規模や配置から主柱穴である。P5は深さ17cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うビットと考えられる。P6・P7は深さ19cm・21cm、P8・P9は深さ26cm・28cmでいずれも主軸と同じ向きに配置されていることから、補助柱穴と考えられる。P10・P11は深さ31cm・23cmで、性格は不明である。覆土の状況はP2・P8は柱抜き取り後の堆積土で、P1・P4・P6・P7・P9は柱抜き取り後の埋土である。

ビット土層解説

1 暗 褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	5 明 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 褐 色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	6 暗 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
4 暗 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	8 褐 色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

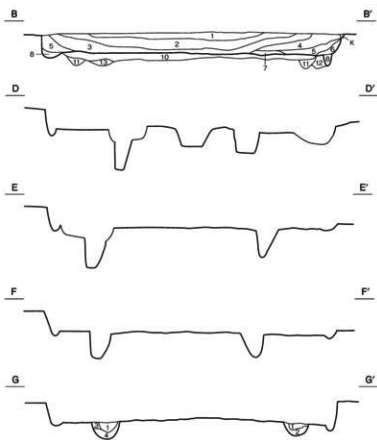
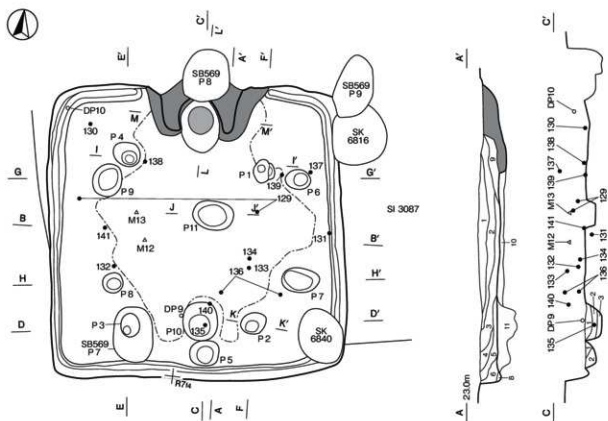
覆土 9層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が周囲から投げ込まれた状況を示していることから、埋め戻されている。第11～13層は掘方の埋土で、第10層は貼床の構築土である。

土層解説

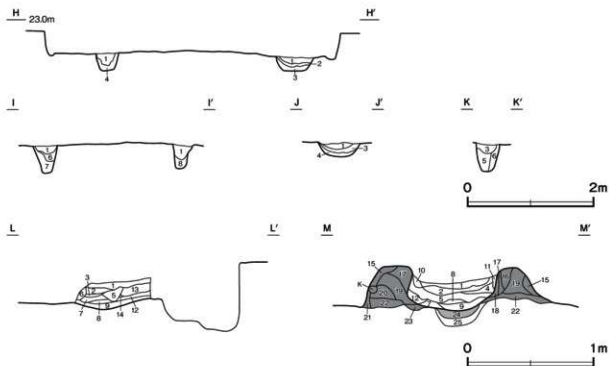
1 暗 褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 黒 褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
2 黒 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量	10 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量(締まり強い)
3 極暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	11 黒 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
4 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	12 褐 色	ロームブロック中量
5 黒 褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	13 暗 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
6 暗 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量		
7 暗 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量		
8 褐 色	ロームブロック中量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片1,007点(坏136,高台付坏1,皿1,甕類869),須恵器片277点(坏166,高台付坏9,蓋9,盤2,高坏1,短頸壺1,甕類89),土製品2点(土玉,羽口),金属製品2点(鉄)が覆土全体から散乱した状態で出土している。138・139・141は床面から破片で出土していることから、遺棄されたか投棄されたものと思われる。131は東壁際の掘方埋土中から出土している。135はP10の覆土中層から出土しており、P10が埋まる前に投棄されたものと思われる。129は覆土中層と覆土上層から出土した破片が接合しており、離れた位置から出土した破片が接合していることから、割られてから投棄されたものと思われる。その他の土器はすべて破片で、覆土全体にわたって出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第 61 图 第 3095 号竖穴建物跡实测图 (1)



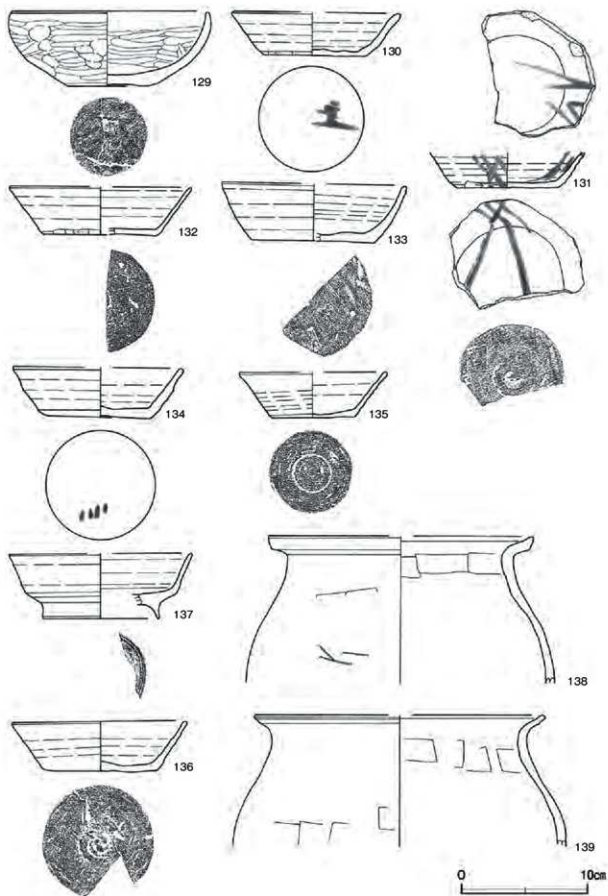
第 62 図 第 3095 号竪穴建物跡実測図 (2)

第 3095 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 63・64 図)

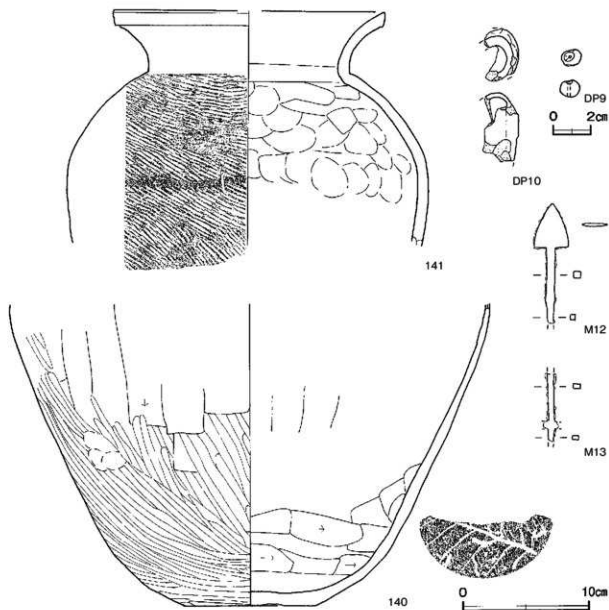
番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
129	土師器	坏	15.6	6.0	6.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面へら置き、削頭痕	覆土上層 覆土中層	80% PL38
130	灰土器	坏 [132]	3.5	8.2	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部下縁手持りへら削り 底部へら削り後、二方向のへら削り 底部削痕 [ニ] 態溝 [トキ]	覆土下層 新治遺	40% PL38	
131	灰土器	坏 - (28)	8.0	長石・石英・雲母	褐灰	普通	体部下縁手持りへら削り 底部へら削り後、一方向のへら削り 火傷	掘方裡土 新治遺	30% 新治遺		
132	灰土器	坏 [144]	4.9	[88]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下縁手持りへら削り 底部へら削り後、一方向のへら削り	覆土中層 新治遺	30% 新治遺	
133	灰土器	坏 [145]	4.6	9.6	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部へら削り後、一方向のへら削り	覆土上層 新治遺	30% 新治遺	
134	灰土器	坏 [126]	4.0	8.8	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下縁回転へら削り 底部へら削り後、回転へら削り	覆土中層	60% 足跡裏書 [口] 新治遺	
135	灰土器	坏 [115]	3.6	6.4	長石・石英・雲母・黒色粒子・細礫	灰白	普通	体部下縁回転へら削り 底部へら削り	P10 覆土中層 新治遺	70% PL38 新治遺	
136	灰土器	坏	13.6	4.1	9.0	長石・石英・雲母	灰白	普通	底部へら削り後、一方向のへら削り	覆土上層 新治遺	70% PL38 新治遺
137	灰土器	高台付坏	[144]	5.1	[90]	長石・石英・雲母	褐灰	普通	底部回転へら削り後、高台削りけ	覆土上層	20% 新治遺
138	土師器	甕	[210]	[11.7]	-	長石・石英・雲母・細礫	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面ヘラナデ 体部外面ヘラナデ	床面	20%
139	土師器	甕 [226]	[10.5]	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・細礫	にぶい	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部底位のヘラナデ	床面	5%	
140	土師器	甕 - (241)	[10.2]	長石・石英・雲母・細礫	明赤褐色	普通	体部下半部へら置き 体部内面ヘラナデ 横底位のへら削り 底面木製痕	掘方裡土 新治遺	70% 新治遺	10%	
141	灰土器	甕 [214]	[18.1]	-	長石・石英・雲母・細礫	灰	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面削痕の平行印 体部内面削頭痕	床面	30% 新治遺	

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP9	土玉	0.9 - 1.1	0.9	0.1	0.83	長石・石英	にぶい赤褐色	ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	PL45
DP10	穿孔口	1.27 - 4.2	(5.4)	(1.5)	(38.9)	長石・石英・雲母	灰黄	ナデ 筒形 先端部一部溶化	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M12	鐵	(9.5)	2.3	0.6	(19.8)	鉄	鎌身部三角形 両丸造り 直角隅 頭部台形隅 断面形方形 基部断面形方形 一部欠損	覆土上層	PL47
M13	鐵	(5.4)	(1.3)	(0.4)	(4.9)	鉄	頭部から基部にかけての部分 頭部鈍角 断面形長方形 基部断面形長方形	覆土上層	PL47



第 63 图 第 3095 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第64図 第3095号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第3097号竪穴建物跡 (第65・66図 PL13)

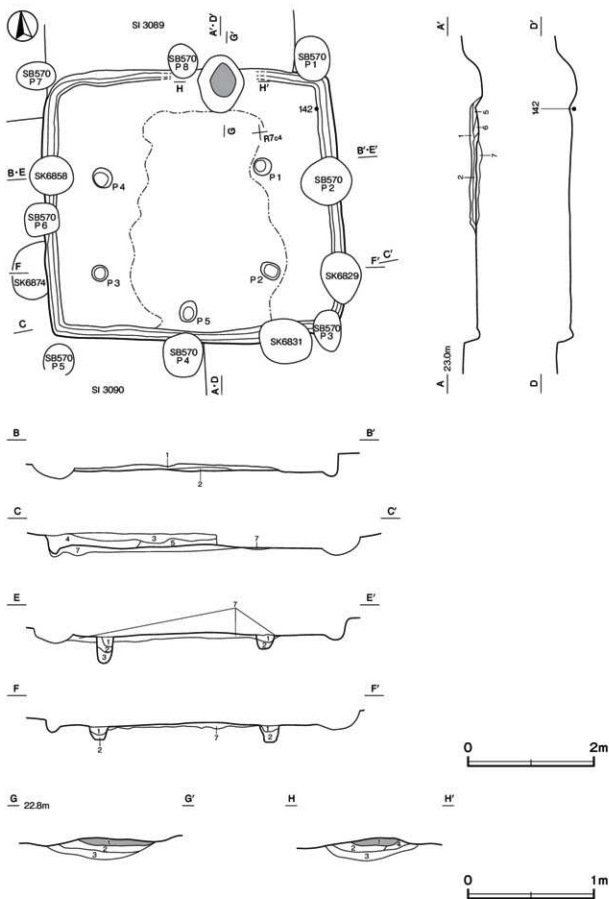
位置 12区中央部のR7c3区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3090号竪穴建物跡、第6874号土坑を掘り込み、第3089号竪穴建物、第570号掘立柱建物、第6829・6831・6858号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.74m、短軸4.28mの隅丸長方形で、主軸方向はN-5°-Eである。壁は高さ20~28cm、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、出入口部と思われる部分から竈にかけての中央部は踏み固められている。貼床は、ロームブロックを中量含む第7層を地山の上に積み重ね構築している。壁溝が壁下に巡っている。

竈 北壁のやや北東コーナー部寄りに付設されている。竈の上半部を第3089号竪穴建物に掘り込まれているため、火床部だけが確認されている。火床部は床面から18cm掘りくぼめ、ロームブロックなどが含まれる第2~4層を埋土して構築されている。火床面は第1層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁



第 65 图 第 3097 号竖穴建物跡実測图

外へ24cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

覆土層解説

- | | | |
|--------|-------------------------|-----------------------|
| 1 明赤褐色 | 焼土粒子多量、炭化粒子少量 | 夕微量 |
| 2 明褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック・炭化粒子少量 | 4 褐色 |
| 3 暗褐色 | 炭化粒子中量、ロームブロック少量、焼土ブロック | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 |

ピット 5か所。P1～P4は深さ15～43cmで、規模や配置から主柱穴である。P5は深さ15cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットと考えられる。P1～P4の覆土の状況は、すべて柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 | | |

覆土 6層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|----------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 におい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 6 灰黄褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 におい黄褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | (締まり強い) |

遺物出土状況 土師器片107点(坏11, 高台付坏1, 甕類95), 須恵器片33点(坏14, 甕類19)が、覆土中からまばらな状態で出土している。142は北東コーナー部の床下から確認されており、掘方埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第66図 第3097号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3097号竪穴建物跡出土遺物観察表(第66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	土調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
142	須恵器	坏	[138]	3.5	[84]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下ろ手持ちへら振り 裏面へら切り後、一方 方の振り	掘方埋土中	40% 被治窯

第3098号竪穴建物跡(第67図 PL13)

位置 12区中央部のR60区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第6869号土坑を掘り込み、第1603号竪穴建物、第567号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 西側の大部分と南側の一部が調査区域外へ延びているため、北壁は1.24m、東壁は4.48mしか確認できなかった。北壁や東壁の状況から方形で、主軸方向はN-1°-Eと推定される。壁は高さ6～28cmで、外傾している。

床 平坦で、あまり踏み固められていない。壁溝が東壁の中央部に確認されている。

ピット 5か所。P1・P2は深さ50cm・42cmで、規模や配置から主柱穴である。P3～P5は深さ30～55cmで、規模や主柱穴の近くに位置することから補助柱穴と考えられる。P3の覆土の第11・12層は柱抜き取り後の埋土である。

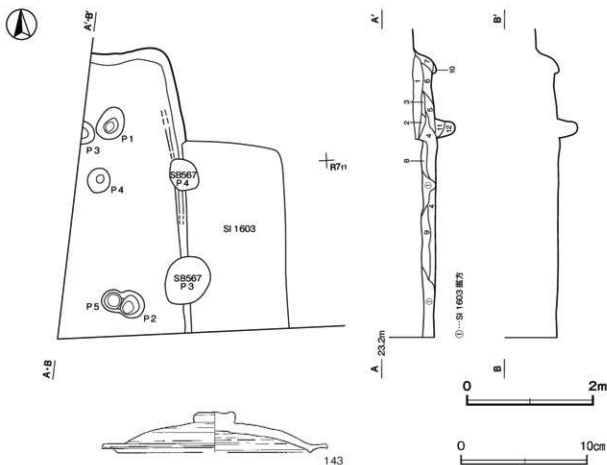
覆土 12層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	7 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量	9 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
4 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	10 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量	11 暗褐色	ロームブロック中量
6 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	12 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片66点(坏5, 甕類61), 須恵器片3点(坏2, 蓋1)が覆土中からまばらな状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から8世紀前葉と考えられる。



第 67 図 第 3098 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 3098 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 67 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
143	須恵器	蓋	[180]	3.3	-	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	天井部回転へつ削り後、積み貼付け	覆土中	40% 調査席

第3133号竪穴建物跡（第68・69図 PL14）

位置 12区中央部のR 8 d9区、標高21mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3131・3137号竪穴建物跡を掘り込み、第7228号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 確認された壁や柱穴の位置から、長軸5.64m、短軸4.60mの長方形で、主軸方向はN-4°-Eと推定される。壁は高さ12～28cmで、ほぼ直立している。

床 東部は削平されているが中央部から西部は平坦で、主柱穴の内側は踏み固められている。壁溝が壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで134cmで、燃焼部幅は74cmである。火床部は床面から20cm掘りくぼめ、ロームブロックや粘土ブロックなどを含む第4・7層を埋土して構築されている。袖部は埋土の上に、粘土ブロックを多量に含み締まりの強い第5層を積み上げて構築されている。火床面は第2層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ44cm掘り込まれ、火床部から穏やかに立ち上がっている。

覆土層解説

1 灰 褐色	ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量	5 にぶい黄褐色	粘土ブロック多量（締まり強い）
2 暗赤褐色	粘土ブロック・炭化物中量、ロームブロック・粘土ブロック少量	6 にぶい黄褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量	7 灰黄褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量、粘土粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・粘土ブロック少量、炭化物微量	8 黒褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量

ピット 8か所。P1～P4は深さ52～88cmで、南北の壁寄りに位置し、内傾して掘り込まれている。これらは規模から主柱穴であり、配置から上層構造が同時期の竪穴建物跡とは異なる可能性がある。P5は深さ42cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ26cmで、位置から補助柱穴と考えられる。P7・P8は深さ28cm・14cmで性格は不明である。P1～P5の第1・2・5層は柱抜き取り後の埋土である。P6・P8の第1～4層はピットの埋土である。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	4 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	5 黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
3 にぶい黄褐色	ロームブロック中量		

覆土 9層に分层できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。

土層解説

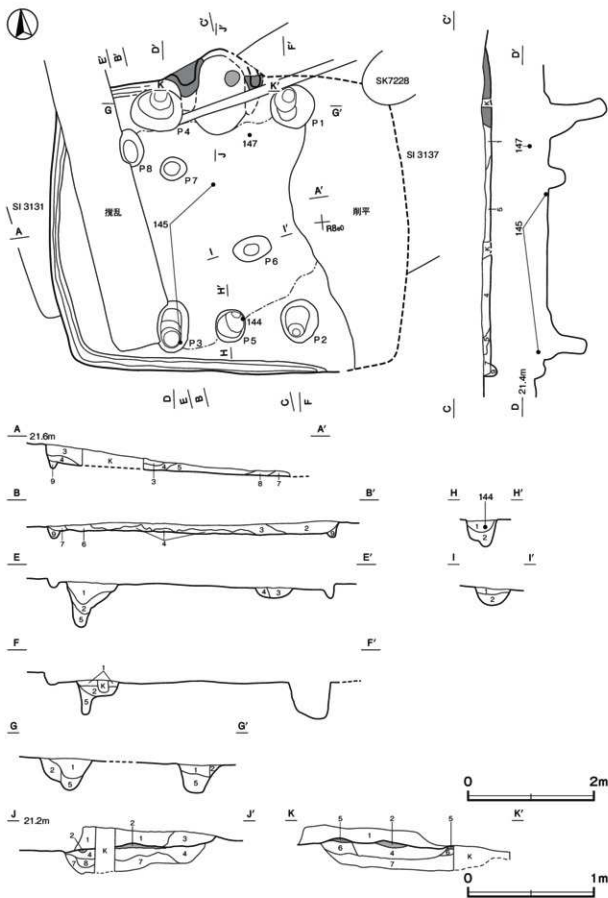
1 灰褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
2 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
3 灰黄褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量	7 灰黄褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
		8 褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	9 にぶい褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片123点(坏11, 蓋1, 皿1, 甕類110), 須恵器片58点(坏20, 高台付坏2, 蓋6, 鉢2, 甕類27, 甌1)が、覆土全体からまばらな状態で出土している。144はP5の覆土上層から出土しており、P5の埋土と一緒に投棄されたものと思われる。145は離れた位置のものが接合しており、割られてから投棄されたものと思われる。そのほかの土器は破片で覆土全体から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

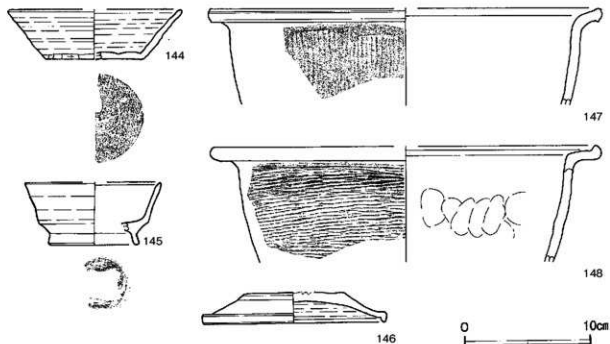
所見 時期は、出土土器から8世紀後半と考えられる。

第3133号竪穴建物跡出土遺物観察表（第69図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
144	須恵器	坏	[134]	4.0	[7.8]	長石・石英・雲母母母・黒色粒子	黄灰	普通	体部下端手持ヘラ削り 四方筒削り	P5 覆土上層	40% 新吉原	
145	須恵器	高台付坏	[102]	3.0	[6.6]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底面回転ヘラ削り後、高台貼付け	表層 覆土中層	40% PL29 新吉原	
146	須恵器	蓋	[14.3]	[2.5]	-	長石・石英・細礫・黒色粒子	灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土中	60% PL27 新吉原	
147	須恵器	鉢	[31.0]	[7.6]	-	長石・石英・雲母	灰	まりープ	体部外面縦位の平行叩き	体部内面横ナデ	覆土上層	10% 新吉原
148	須恵器	甌	[30.2]	[9.2]	-	長石・石英・黒色粒子	灰	普通	体部外面縦位の平行叩き	体部内面直頭	覆土中	10% 新吉原



第 68 图 第 3133 号竖穴建物跡実測図



第69図 第3133号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3136号竪穴建物跡 (第70・71図 PL14)

位置 12区中央部のR8c9区、標高21mの台地縁辺部に位置している。

規模形状 長軸4.94m、短軸4.80mの方形で、主軸方向はN-3°-Wである。壁は高さ4~34cmで、ほぼ直立している。

床 東部は削平されているが、中央部から西部はほぼ平坦で、主柱穴の内側は踏み固められている。壁溝が壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。燃焼部から煙道部にかけて攪乱を受けているため、袖部と火床部の一部だけが確認されている。火床部は床面から10cm掘りくぼめ、ロームブロックや粘土ブロックなどを含む第2層を埋土して構築されている。火床面は第1層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック、 2 灰黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量

ピット 5か所。P1~P4は深さ40~56cmで、規模や配置から主柱穴である。P5は深さ32cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P1~P3の第1・2層は柱の抜き取り痕である。P4・P5の第1~3層は柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量 3 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 に近い褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

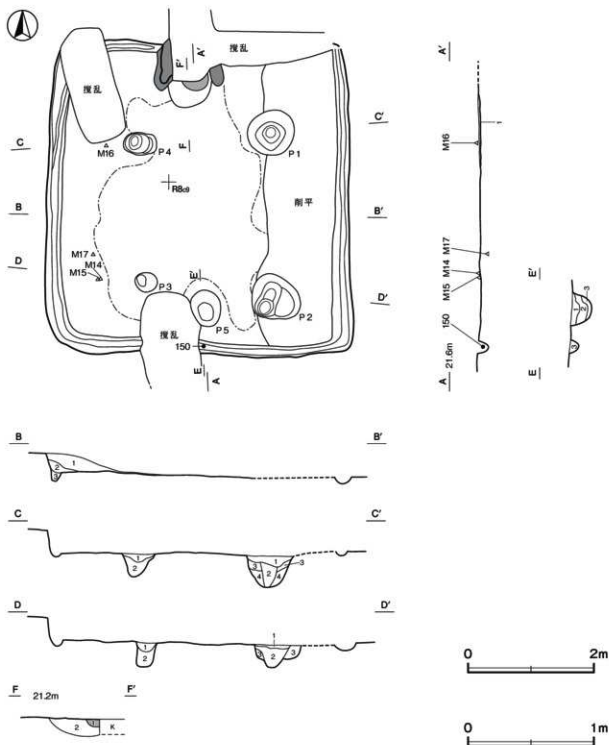
覆土 3層に分層できる。西側はロームブロックを中量含む第1層が覆っており、埋め戻されている。

土層解説

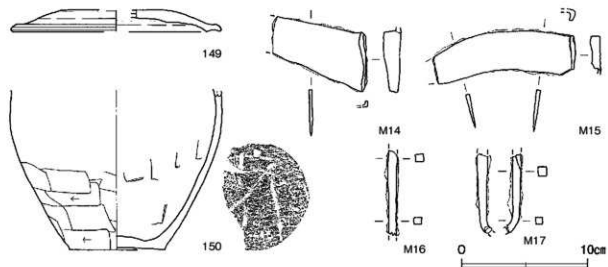
- 1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 3 に近い黄褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
2 灰黄褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 104 点 (坏7, 甕類 97), 須恵器片 45 点 (坏16, 高台付坏2, 蓋6, 盤1, 高坏1, 甕類 19), 金属製品 4 点 (鎌2, 釘2) が, 覆土中からまばらな状態で出土している。150 は南壁際の壁溝上から出土しており, 遺棄されたものと思われる。M 14 ~ M 16 は西壁寄りの床面から出土しており, 遺棄されたものか投棄されたものと思われる。M 17 は西壁寄りの床面下から出土し, 掘方の埋土に伴った遺物と思われる。

所見 時期は, 出土土器から 8 世紀前葉と考えられる。



第70図 第3136号竪穴建物跡実測図



第71図 第3136号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3136号竪穴建物跡出土遺物観察表(第71図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
149	須臾器	蓋	[168]	(18)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰白	普通	天母部回転ヘラ削り	覆土中	30% 新由遺
150	土師器	甕	-	(128)	7.6	長石・石英・雲母・細粒	に深い赤黒	普通	体部外面下位積位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ 底面本葉直	壁溝中	40%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M14	鎌	(72)	4.7	0.3	(512)	鉄	曲刃鎌 基部折り返し 切っ先部欠損	床面	PL48
M15	鎌	(11.3)	3.1	0.3	(489)	鉄	曲刃鎌 基部折り返し 切っ先部欠損	床面	PL48
M16	釘	(6.8)	(0.8)	(0.6)	(138)	鉄	脚部の破片 断面方形 頭部・先端部欠損	床面	PL47
M17	釘	(6.3)	(1.2)	$\frac{10.7}{0.8}$	(14.9)	鉄	脚部の破片 断面方形 先端部寄り屈曲	掘方埋土中	PL47

第3137号竪穴建物跡(第72図)

位置 12区中央部のR8d0区、標高20mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3131-3142号竪穴建物跡を掘り込み、第3133号竪穴建物、第7228-7645号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 後世の削平や攪乱により東部の遺存状態は良好ではないが、北側、西側、南側の一部に確認された壁溝の状況から南北軸4.48m、東西軸4.42mの方形で、主軸方向はN-8°-Wと推測される。

床 西部は平坦で、中央部は踏み固められている。壁溝が西部の壁下に確認されている。西壁は6cmで、ほぼ直立している。

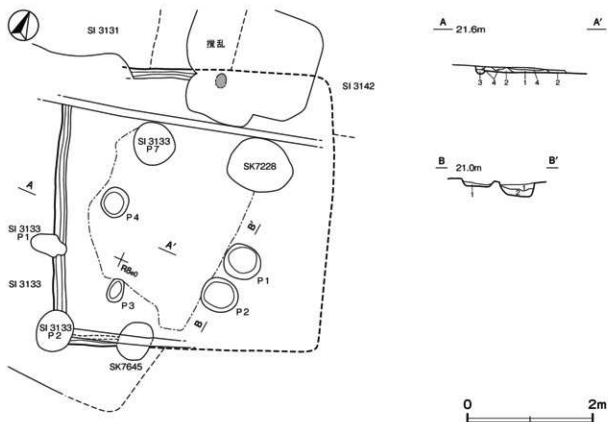
竈 北壁の中央から東寄りに、攪乱坑の底面で火床の一部が確認されている。構築状況については、壊されているため不明である。

ピット 4か所。P1~P4は深さ8~20cmで、形態や配置から柱穴とは考えにくく、性格は不明である。P1・P2の第1・2層は自然堆積の状況を示している。

ピット土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

覆土 3層に分層できる。第3133号竪穴建物跡の床面下で、本跡の覆土が確認できた。いずれの層にもロームブロックが含まれており、埋め戻されている。第4層はロームブロックを中量含む層で、第3133号竪穴建物跡の貼床の構築土である。



第72図 第3137号堅穴建物跡実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|---------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 濃い青褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片20点(坏1, 甕類19), 須恵器片3点(坏1, 蓋2)が覆土中からまばらな状態で出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は、第3142号堅穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から8世紀中葉と考えられる。

第3142号堅穴建物跡(第73図)

位置 12区中央部のR8c0区、標高20mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3137・3143号堅穴建物跡、第7223号土坑に掘り込まれている。

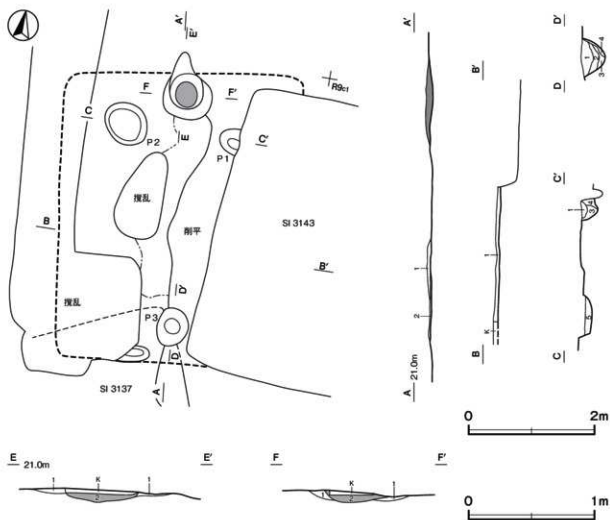
規模と形状 西部は後世の覆乱により、東部は第3143号堅穴建物や削平により掘り込まれており、遺存状態は良好ではないが竈やピット及び壁溝の確認状況から、南北軸4.60m、東西軸3.80mの長方形で、主軸方向はN-7°-Wと推測される。

床 覆乱や削平を受けていない中央部はほぼ平坦な貼床で、踏み固められている。厚さ4~8cmの貼床は、ロームブロックを中量含む締まり強い第1層を積んで構築している。壁溝が南壁の南西コーナー寄りに確認されている。

竈 北壁の中央部に付設されている。竈の上半部が壊されているため、火床部と煙道部だけが確認されている。火床部は床面から8cm掘りくぼめ、ロームブロックを含む第1・2層を埋土して構築されている。火床面は第2層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。

遺土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------|-------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 2 赤褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物少量 |
|-------|----------------------|-------|------------------------|



第73図 第3142号竪穴建物跡実測図

ピット 3か所。P1は深さ26cmで、規模や配置から柱穴と思われるが他のピットとの対応関係は不明である。P2は深さ18cmで、性格は不明である。P3は深さ36cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから出入口施設に伴うピットと考えられる。P1・P3の覆土の状況は柱の抜き取り後の堆積土である。

ピット土層解説

- | | | | |
|---------|------------------------|---------|--------------------|
| 1 濃い黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化物少量 | 3 濃い黄褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | 4 灰黄褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

覆土 確認面で覆土はほとんど存在せず、覆土の状況は不明である。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック微量(粘り強い) | 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
|-------|--------------------------|-------|------------------|

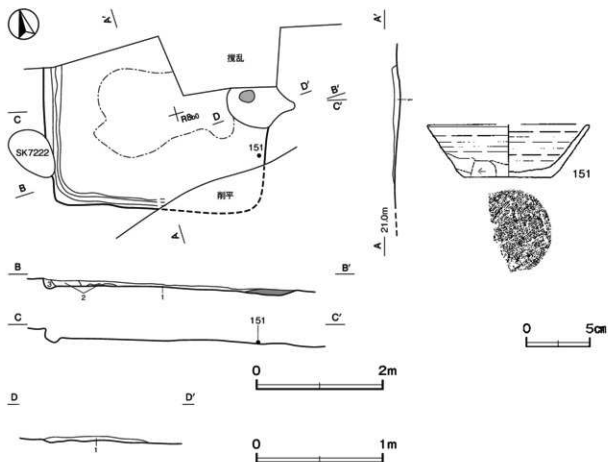
遺物出土状況 土師器片26点(坏4,高台付坏1,鉢1,甕類20),須恵器片6点(坏1,甕類5)が覆土中からまばらな状態で出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は、第3137号竪穴建物に掘り込まれていることや出土土器から8世紀前葉と考えられる。

第3145号竪穴建物跡(第74図)

位置 12区中央部のR8b9区、標高20mの台地端部に位置している。

重複関係 第7222号土坑に掘り込まれている。



第74図 第3145号竪穴建物跡・出土遺物実測図

規模と形状 北半部は攪乱され、南東コーナー部は削平されているため、東西軸は3.42 m、南北軸は2.18 mしか確認できなかった。遺存している壁の状況や竈の位置から方形で、主軸方向はN-106°-Eと推定される。壁は南西コーナー部で遺存しており、高さ8cmで、ほぼ直立している。

床 南半部は平坦で、中央部は踏み固められている。南西コーナー部に壁溝が巡っている。

竈 東壁部で確認されている。上半部は削平されており、袖部や火床部の構築状況などは不明である。規模は焚口部から煙道部まで110cmで、煙道部は壁外へ40cm掘り込まれている。

竈土層解説

1 暗褐色 焼土粒子中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを中量含む層が広く堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 灰黄褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片24点(坏2, 高台付坏1, 甕類21), 須恵器片29点(坏8, 蓋1, 甕類20)が、覆土全体からまばらな状態で出土している。151は床面から出土しており、遺棄されたかあるいは投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。

第3145号竪穴建物跡出土遺物観察表(第74図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
151	須恵器	坏	[128]	4.2	[79]	長石・石英・雲母・細礫	に濃い赤黒	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後、多 方向の削り	床面	20% 新治産

第3151号竪穴建物跡 (第75・76図 PL14)

位置 12区中央部のR9e5区、標高19mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2808号竪穴建物跡を掘り込み、第587号掘立柱建物に掘り込まれている。

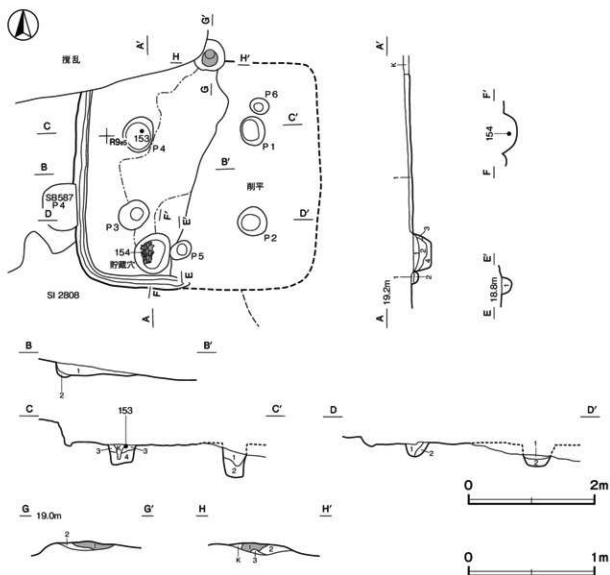
規模と形状 北壁西側と東半部を攪乱や削平により壊されているが、西壁と南壁の状況や柱穴の配置などから、南北軸3.62m、東西軸3.90mの方形で、主軸方向はN-1°-Eと推測される。西壁は高さ22cmで、ほぼ直立している。

床 西部は平坦で、中央部は踏み固められている。壁溝が西壁と南壁の西側で確認されている。

竈 攪乱と削平により竈の上半部は壊されており、袖部や煙道部の構築状況は不明であるが、北壁中央部に火床面が確認されている。火床部は床面から8cm掘りくぼめ、ロームブロックなどを含む第1～3層を埋土して構築されている。火床面は第1層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|----------------------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土ブロック多量、粘土ブロック中量、ローム | 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子微量 | | |



第75図 第3151号竪穴建物跡実測図

ピット 6か所。P1～P4は深さ18～40cmで、配置から主柱穴の可能性ある。P5は深さ22cmで、南壁寄りに位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ36cmで、P1の近くに位置することから補助柱穴と考えられる。P3の第1層は柱抜き取り痕で、それ以外は柱抜き取り後の埋土と思われる。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	4 暗褐色	ク少量、炭化物微量 ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量
2 灰黄褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量		
3 灰褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック		

貯蔵穴 南西コーナー部寄りに付設されている。長径64cm、短径56cmの楕円形で、深さは30cmである。底面は平坦で壁は外傾している。

貯蔵穴土層解説

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	3 濃い黄褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	4 灰黄褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量

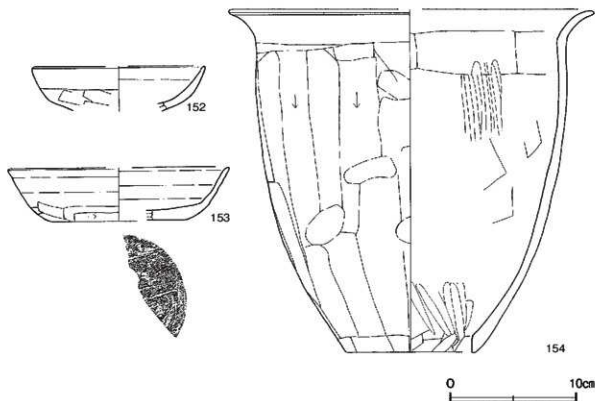
覆土 2層に分層できる。西側から黒褐色土が流入した状況を示しており、自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	2 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
-------	----------------------	------	------------------

遺物出土状況 土師器片102点(坏16、瓶1、甕類85)、須恵器片4点(坏)が、覆土中からまばらな状態で出土している。153はP4の覆土上層から出土しており、P4が埋まる前に投棄されたものと思われる。154は貯蔵穴内から出土しており、遺棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から8世紀中葉と考えられる。



第76図 第3151号竪穴建物跡出土遺物実測図

第 3151 号竖穴建物跡出土遺物観察表 (第 76 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
152	土師器	坏	[136]	(3.5)	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面ナデ	体部外面ヘラナデ 体部内面ナデ	覆土中	10%
153	須恵器	坏	[173]	4.2	-	長石・石英・ 雲母・磁礫	灰黄緑	普通	体部下端手付丸ヘラ削り 方面のヘラ削り	底面ヘラ切り後、二	F 4 覆土上層	30% 折出度
154	土師器	瓶	[28.6]	27.2	10.1	長石・石英・磁礫	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 折出度	体部外面縦位のヘラ削り 内面ヘラナデ、ヘラ磨き	貯蔵穴 覆土中層	90%

表 4 奈良時代竖穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高 (cm)	床面	礎石	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考
				長×短(m)	幅(m)				柱穴	土間	ピット	伊・量				
1603	R 610	N-3'-E	長方形	4.74 × 4.04	6-28	ほぼ 平坦	一部	2	-	-	北壁	-	自然	土師器、須恵器、 灰椎陶器、土製品、 金属製品	8世紀後半	SD3081 → 本跡 → SD567, SK1513 SD559
1742	R 88h	N-2'-E	[方形]	[3.52] × [2.56]	-	平坦	一部	2	1	-	北壁	-	人為	土師器、須恵器、 土製品	8世紀後半	本跡 → ST1742A, SE559
3077	R 8c6	N-2'-W	方形	6.38 × 6.12	4-18	ほぼ 平坦	全周	4	1	4	北壁	-	人為	土師器、須恵器、 石製、金属製品	8世紀前半	SD3099 → 本跡 → SD357 + 564, SD3092
3078	R 8e6	N-2'-W	方形	5.94 × 5.62	9-20	平坦	全周	4	1	2	北壁	-	人為	土師器、須恵器、 金属製品	8世紀前半	本跡 → SE558 + 574, SK6792
3081	R 8d1	N-7'-E	方形	4.88 × 4.84	2-5	ほぼ 平坦	全周	4	-	-	北壁	-	人為	土師器、須恵器、 灰椎陶器、土製品	8世紀前半	本跡 → SI3082A SD339 + 560 + 563 SD356C + 3092 + 3099 → 本跡 → SI3082B
3088A	R 7e1	N-2'-W	[方形]	[4.22] × [3.86]	-	ほぼ 平坦	-	4	1	-	北壁	-	-	土師器、須恵器、 土製品	8世紀後半	SD3088A + 3090C + 3092 + 3099 → 本跡 → SI3507
3088B	R 7e1	N-2'-W	隅丸 長方形	5.56 × 4.54	22-38	ほぼ 平坦	ほぼ 全周	4	1	-	北壁	1	人為	土師器、須恵器、 石製	8世紀後半	SD3088A + 3090C + 3092 + 3099 → 本跡 → SI3507
3095	R 7e4	N-5'-W	隅丸 方形	4.66 × 4.60	14-30	ほぼ 平坦	全周	4	1	6	北壁	-	人為	土師器、須恵器、 土製品、金属製品	8世紀中葉	SD3095 → 本跡 → SD360, SK6816 + 6840
3097	R 7c3	N-5'-E	隅丸 長方形	4.74 × 4.28	20-28	平坦	全周	4	1	-	北壁	-	人為	土師器、須恵器	8世紀中葉	SD3096, SK6874 → 本跡 → SI3089, SD370, SK6829 + 6831 + 6838
3098	R 610	N-1'-E	[方形]	(4.48) × (1.24)	6-28	平坦	一部	2	-	3	-	-	人為	土師器、須恵器	8世紀後半	SD3098 → 本跡 → SI1903, SI967
3133	R 8d9	N-4'-E	[長方形]	[5.64] × [4.60]	12-28	平坦	一部	4	1	3	北壁	-	人為	土師器、須恵器	8世紀後半	SD3131 + 3137 → 本跡 → SK7228
3136	R 8c9	N-3'-W	方形	4.94 × 4.80	4-34	ほぼ 平坦	[全周]	4	1	-	北壁	-	人為	土師器、須恵器、 金属製品	8世紀前半	SD3131 + 3142 → 本跡 → SI3131, SK7228 + 7645 本跡 → SI3137 3143, SK7223
3137	R 8d0	N-8'-W	[方形]	(4.48) × (4.42)	6	平坦	一部	-	-	4	北壁	-	人為	土師器、須恵器	8世紀中葉	SD3131 + 3142 → 本跡 → SI3131, SK7228 + 7645 本跡 → SI3137 3143, SK7223
3142	R 8c0	N-7'-W	[長方形]	(4.60) × (3.86)	-	ほぼ 平坦	一部	1	1	1	北壁	-	-	土師器、須恵器	8世紀前半	SD3131 + 3137 → 本跡 → SK7222
3145	R 8d9	N-106'-E	[方形]	[3.42] × [2.18]	8	平坦	一部	-	-	-	東壁	-	人為	土師器、須恵器	8世紀後半	本跡 → SK7222
3151	R 9e5	N-1'-E	[方形]	[3.90] × [3.62]	22	平坦	一部	4	1	1	北壁	1	自然	土師器、須恵器	8世紀中葉	SD2808 → 本跡 → SE087

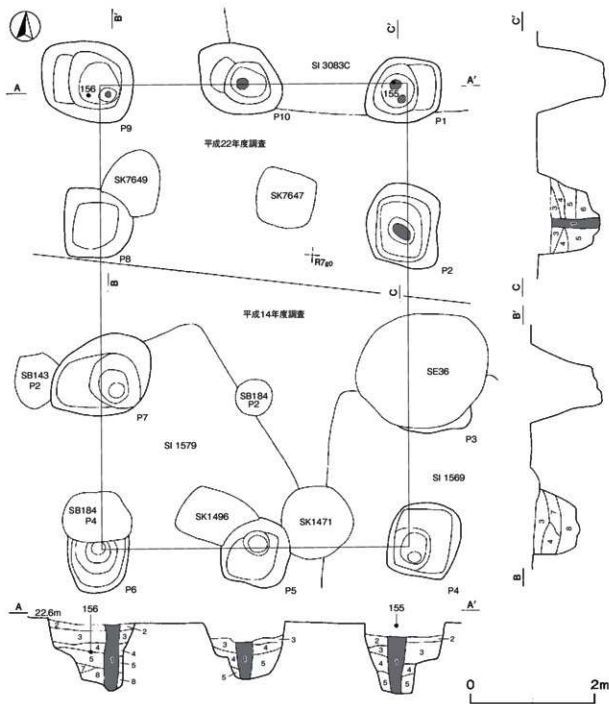
(2) 掘立柱建物跡

第138号掘立柱建物跡 (第77・78図)

調査年度 平成22年度に調査した。南部は平成14年度に調査し、当財団報告『第214集』において報告している。柱穴の番号については、今回報告分と合わせて、既調査分を新しい番号に更新した。

位置 12区中央部のR7g9区、標高22mの台地中央部に位置している。

重複関係 第1569・1579・3083C号竪穴建物跡、第143号掘立柱建物跡を掘り込み、第184号掘立柱建物、第36号井戸、第1471・1496・7647・7649号土坑に掘り込まれている。



第77図 第138号掘立柱建物跡実測図

規模と構造 桁行3間、梁行2間の個柱建物跡で、桁行方向がN-3°-Wの南北棟である。規模は、桁行7.4m、梁行4.8mで、面積は35.52㎡である。柱間寸法は桁行が北妻から2.4m（8尺）、2.5m（8尺）、2.5m（8尺）、北梁行が2.5m（8尺）、2.3m（8尺）で、柱筋はほぼ揃っている。

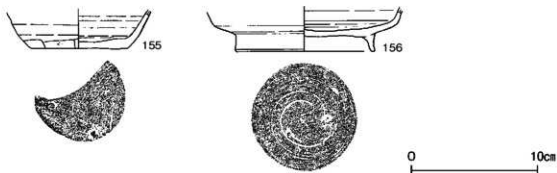
柱穴 10か所。P1・P2・P8～P10について記載する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸118～144cm、短軸104～130cmである。深さは70～112cmで、掘方の壁はP8以外、段を持ち立ち上がっている。平成14年度調査のP3～P7についてもすべて段を持ち立ち上がっていることから、建て替えられた可能性がある。P1・P2・P9・P10の第1層は柱痕跡、第2～8層は埋土、P8の第3・4・7層は埋土である。P1・P2・P9・P10の底面で、柱のあたりを確認した。P3～P7については、『第214集』を参照されたい。

土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、粘土粒子微量（締め強い） | 6 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片62点（坏6、甕類56）、須恵器片35点（坏19、高台付坏1、蓋7、甕類8）が、P1・P2・P9・P10の埋土中から出土している。155はP1の埋土上層から、156はP9の埋土中層からそれぞれ破片で出土しており、埋土に混入したものか、あるいは投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、第1579号竪穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から8世紀後葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中心部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。



第78図 第138号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第138号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第78図）

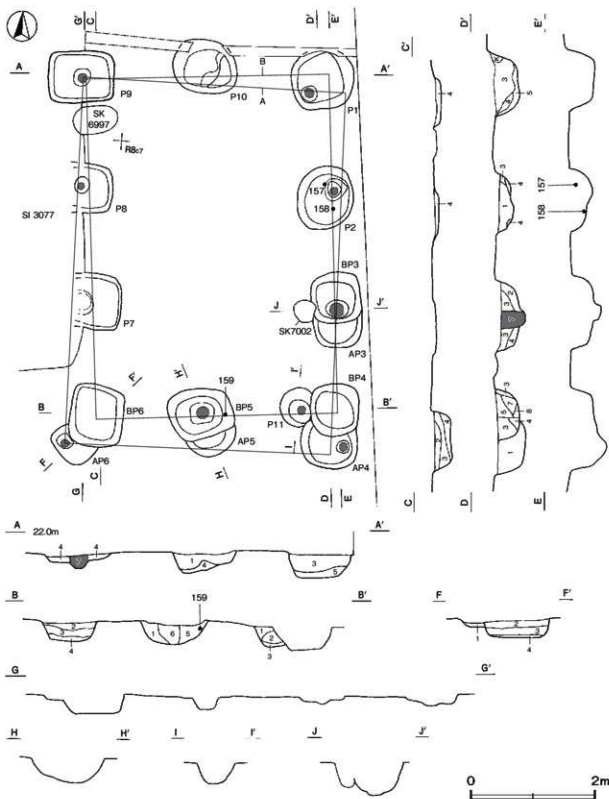
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
155	須恵器	坏	-	(3.2)	7.4	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちへう張り 底部多方向のへう張り	P1 埋土上層	30% 器片産
156	須恵器	高台付坏	-	(3.6)	11.0	長石・石英・雲母	褐色	普通	体部下端回転へう張り 底部回転へう張り後、高台貼付け	P9 埋土中層	60% 器片産

第557A号掘立柱建物跡（第79図 PL23）

位置 12区中央部のR8c7区、標高21mの台地中央部に位置している。

重複関係 当初は1棟の掘立柱建物跡として調査を進めたが、第557B号掘立柱建物へ建て替えが行われていると判断した。そのほか第3077号竪穴建物跡を掘り込み、第6997・7002号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-1°-Wの南北棟である。規模は、桁行5.7m、梁行4.2mで、面積は23.94㎡である。柱間寸法は桁行が北妻から1.7m（6尺）、2.1m（7尺）、1.9m（6尺）、北梁行が2.1m（7尺）の等間で、柱筋はほぼ揃っている。



第79図 第557A・557B号掘立柱建物跡実測図

柱穴 10か所。P3～P6で、重複が確認され、古く考えられる柱穴の前にはAを、新しく考えられる柱穴の前にはBを付け記載する。P1・P2・P7～P10では重複は確認されず、建て替え後も同じ柱穴を使用したと考えられる。平面形は隅丸方形または楕円形で、規模は長軸80～108cm、短軸66～84cmである。深さは14～56cmで、掘方の壁は外傾している。AP3～AP6の第1・3・4層は埋土である。AP4・AP6の底面で柱のあたりを確認した。

土層解説 (各柱穴共通)

1 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量
2 褐色	ロームブロック中量	6 暗褐色	ローム粒子・粘土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	8 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片5点(坏2、甕類3)、須恵器片4点(坏2、蓋1、甕類1)が、AP3～AP6の埋土中から出土している。いずれも、小片で図示できない。

所見 本跡から第557B号掘立柱建物への建て替えは、P1・P2・P7～P10を引き続き使用していることなどから、連続していたと考えられる。時期は、第3077号堅穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から8世紀後半と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の西部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から穀物類などを納める屋と考えられる。

第557B号掘立柱建物跡 (第79・80図 PL23)

位置 12区中央部のR8c7区、標高21mの台地中央部に位置している。

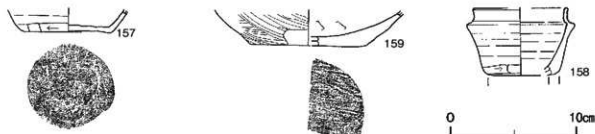
重複関係 第3077号堅穴建物跡、第557A号掘立柱建物跡を掘り込み、第6997・7002号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 第557A号掘立柱建物を建て替えた桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-6°-Wの南北棟である。規模は桁行5.5m、梁行3.9m、面積は21.45㎡で、わずかに縮小している。柱間寸法は桁行が北妻から1.9m(6尺)、1.9m(6尺)、1.7m(6尺)、北梁行が2.0m(7尺)、1.9m(6尺)で柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 11か所。平面形は隅丸方形または楕円形で、規模は長軸58～108cm、短軸52～100cmである。深さは28～56cmで、掘方の壁はほぼ直立または外傾している。P11はBP4に接して位置し、深さ34cmで、底面に柱のあたりがあるが、性格は不明である。BP3・P9の第7層は柱直跡、第2～4層は埋土で、BP4・BP5の第6～8層は柱抜き取り痕で、第1・3・5層は埋土である。そのほかの柱穴の第1～5層は、埋土である。P1・P2・BP3・BP5・P8・P9の底面で柱のあたりを確認した。

遺物出土状況 土師器片42点(坏4、甕類38)、須恵器片20点(坏5、蓋3、盤1、短頸壺1、甕類10)が、P1・P2、BP3～BP6・P8～P10の埋土中から出土している。158はP2の底面から、157はP2の159はP5の埋土上層からそれぞれ出土し、遺棄されたかあるいは混入したものと考えられる。

所見 第557A号掘立柱建物の廃絶と本跡への建て替えは、P1・P2、P7～P10を引き続き使用していることなどから、連続していたと考えられる。時期は、第3077号堅穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から8世紀後半と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の東部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。



第80図 第557B号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第557B号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第80図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
157	須恵器	杯	-	(1.8)	7.0	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちヘウ割り 底部一方向の割り	P 2 埋土上層	10% 新治産
158	須恵器	短胴壺	(7.2)	(5.4)	(5.4)	長石・石英・雲母	灰	良好	体部下端手持ちヘウ割り 底部高台割離	P 2 底面	20% 新治産
159	土師器	甕	-	(29)	(9.0)	長石・石英・雲母	黒褐色	普通	体部下端外面ヘウ割き 底部ヘウ割り	P 5 埋土上層	10%

第558号掘立柱建物跡(第81・82図 PL23)

位置 12区中央部のR 8 5区、標高21mの台地中央部に位置している。

重複関係 第3078号堅穴建物跡、第6991・6992・6994号土坑を掘り込み、第574号掘立柱建物、第6989・6990号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-0°の南北棟である。規模は、桁行4.6m、梁行4.6mで、面積は21.62㎡である。柱間寸法は桁行が2.3m(8尺)の等間、梁行が2.3m(8尺)の等間で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所。平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、規模は長軸96~146cm、短軸82~110cmである。深さは46~56cmで、掘方の壁はほぼ直立または外傾している。P1・P2・P4~P8の第1層は柱痕跡、第2~5層は埋土である。P3の第6・7層は柱抜き取り痕で、第2~5層は柱抜き取り後の覆土である。P1~P8の底面で、柱のあたりを確認した。

土層解説(各柱穴共通)

1	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	6	暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量
3	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量			

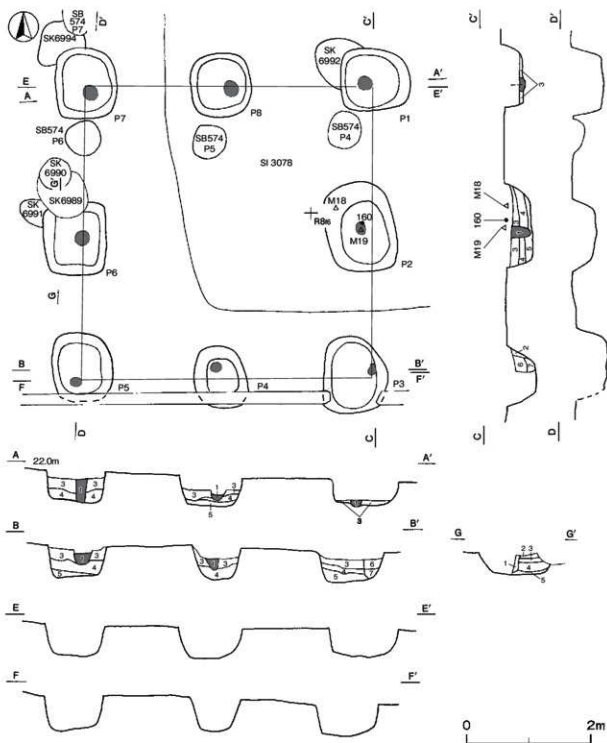
遺物出土状況 土師器片89点(坏20、甕類69)、須恵器片24点(坏13、蓋7、平瓶₁、甕類3)、金属製品3点(鎌1、釘2)が、P1~P8の埋土及び覆土中から出土している。160は完存率がやや高く、M18・M19とともにP2の埋土上層からそれぞれ出土しており、意識的に置かれた可能性がある。

所見 時期は、第3078号堅穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から8世紀中葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中央部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。

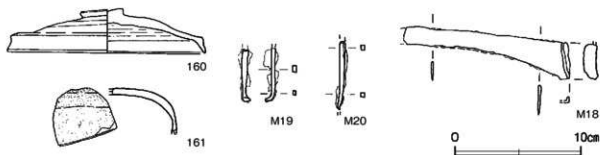
第558号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第82図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
160	須恵器	甕	15.6	3.6	-	長石・石英・雲母・細砂	焼灰	良好	天井部割れヘウ割り後、組み貼付け	P 2 埋土上層	70% PL27 新治産
161	須恵器	平瓶	-	(4.8)	-	細密	黄灰	良好	ロクロ未挽き成形 自然釉	P 5 埋土中	10% 新治産

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M18	鎌	(13.2)	2.9	0.2	(28.4)	鉄	先端部欠損 刃部わずかに彎曲 基部柄り返し	埋土層 P 2	PL48
M19	釘	(4.2)	(0.6)	(0.4)	(4.4)	鉄	頭部欠損 先端部尖頭、屈曲 脚部断面長方形	埋土層 P 2	
M20	釘	(5.4)	(0.5)	0.3 - 0.4	(4.0)	鉄	先端部・頭部欠損 脚部断面方形	埋土層 P 8	埋土中



第 81 図 第 558 号掘立柱建物跡実測図



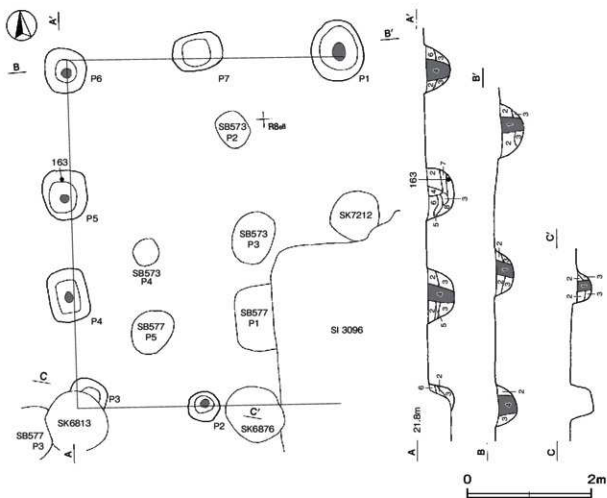
第82図 第558号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第562号掘立柱建物跡 (第83・84図 PL23・24)

位置 12区中央部のR8e7区、標高21mの台地中央部に位置している。

重複関係 第3096号竪穴建物、第573・577号掘立柱建物、第6813・6876・7212号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 東平の柱穴が第3096号竪穴建物に掘り込まれていることや削平により確認されていないが、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡と想定される。西平の状況から、桁行方向がN-2°-Wの南北棟である。規模は、桁行5.5m、梁行4.3mで、面積は23.65㎡である。柱間寸法は桁行が北妻から2.2m(7尺)、1.6m(5尺)、1.7m(6尺)、北梁行が2.1m(7尺)、2.2m(7尺)で、柱筋はほぼ揃っている。



第83図 第562号掘立柱建物跡実測図

柱穴 7か所。平面形は楕円形または隅丸方形で、規模は長径50～98cm、短径48～84cmである。深さは28～44cmで、掘方の壁は外傾している。P1・P2・P4・P6・P7の第1・4層は柱痕跡、第2・3・5・6層は埋土である。P3・P5の第2～7層は柱抜き取り後の覆土である。P1・P2・P4～P6の底面で、柱のあたりを確認した。

土層解説 (各柱穴共通)

1	褐色	ローム粒子中量、粘土粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
2	褐色	ローム粒子中量	6	黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
3	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	7	褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
4	暗褐色	ロームブロック少量			

遺物出土状況 土師器片45点(坏16, 甕類28, 瓶1), 須恵器片27点(坏8, 高台付坏1, 蓋4, 甕類13, 瓶1)が、P1～P7の埋土及び覆土中から出土している。163はP5の覆土下層から破片で出土しており、覆土に混入したものと思われる。

所見 時期は、第3096号竪穴建物に掘り込まれていることや出土土器から8世紀中葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中央部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。



第84図 第562号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第562号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第84図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
162	土師器	坏	[18.6]	(4.2)	-	長石・石英・雲母	に濃い黄褐色	普通	口縁部外面横すずり、内面へり磨き、体部外面横位のへり磨り、内面横すずり	P1 埋土中	10%
163	須恵器	高台付坏	-	(3.2)	[9.5]	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端回転へり磨り、底部回転へり磨り後、高台軸付け	P5 覆土下層	10% 表遺産
164	須恵器	甕	-	(7.8)	-	長石・石英・雲母	灰白	良好	体部外面横位の平行叩き	P4 埋土中	10% 表遺産

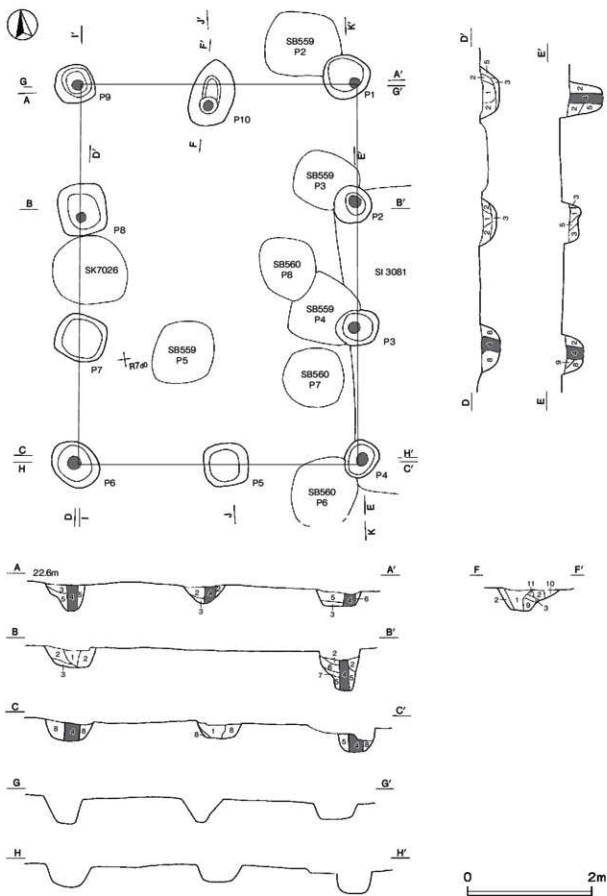
第563号掘立柱建物跡(第85・86図 PL24)

位置 12区中央部のR7c0区、標高22mの台地中央部に位置している。

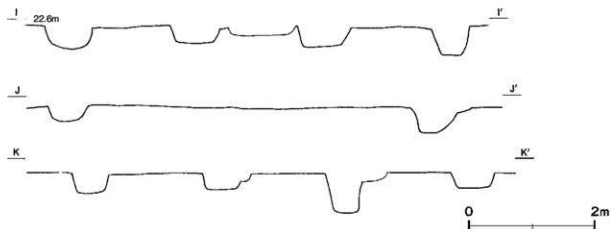
重複関係 第3081号竪穴建物跡を掘り込み、第559・560号掘立柱建物、第7026号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の個性建物跡で、桁行方向がN-6°-Eの南北棟である。規模は、桁行6.0m、梁行4.4mで、面積は26.40㎡である。柱間寸法は桁行が北妻から1.9m(6尺)、2.0m(7尺)、2.1m(7尺)、梁行が2.2m(7尺)の等間で、柱筋は揃っている。

柱穴 10か所。平面形は楕円形または円形で、規模は長径62～110cm、短径48～76cmである。深さは26～58cmで、掘方の壁はほぼ直立または外傾している。P1・P2・P4・P6・P9・P10の第4層は柱痕跡、第2・3・5～9層は埋土である。P3・P5・P7・P8・P10の第1層は柱抜き取り痕で、第2・3・5・8～11層は柱抜き取り後の覆土である。P1～P4・P6・P8～P10の底面で、柱のあたりを確認した。柱のあたりや柱痕跡から、柱は直径16～28cmと推定できる。



第 85 图 第 563 号掘立柱建物迹实测图 (1)



第86図 第563号掘立柱建物跡実測図(2)

土層解説 (各柱穴共通)

1 褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	7 褐色	ロームブロック少量
2 褐色	ローム粒子中量	8 褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子微量	9 暗褐色	ロームブロック少量, 粘土粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量	10 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
5 極暗褐色	ロームブロック中量	11 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
6 褐色	ロームブロック・炭化物微量		

遺物出土状況 土師器片28点(坏11, 甕類17), 須恵器片7点(坏2, 蓋1, 甕類4)が, P1~P10の埋土及び覆土中からまばらに出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は, 第3081号竪穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から8世紀中葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中央部に位置し, これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は, 規模や形状から屋と考えられる。

第564号掘立柱建物跡 (第87図 PL25)

位置 12区中央部のR8b5区, 標高21mの台地中央部に位置している。

重複関係 第3077号竪穴建物跡, 第6980号土坑を掘り込み, 第6995号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間, 梁行2間の個性建物跡で, 桁行方向がN-6°-Wの南北棟である。規模は, 桁行6.0m, 梁行3.8mで, 面積は2280㎡である。柱間寸法は桁行が北妻から2.1m(7尺), 1.8m(6尺), 2.1m(7尺), 梁行が1.9m(6尺)の等間で, 柱筋は揃っている。

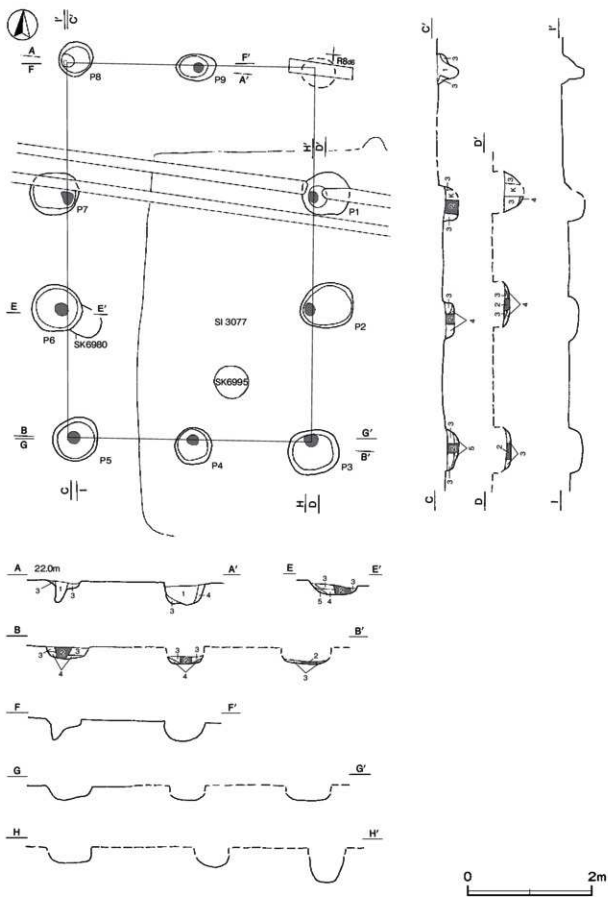
柱穴 9か所。平面形は円形で, 規模は径52~92cmである。深さは12~46cmで, 掘方の壁は外傾している。P2~P7の第2層は柱痕跡で, 第3~5層は埋土である。P8・P9の第1層は柱抜き取り痕で, 第3・4層は柱抜き取り後の覆土である。P1~P7・P9の底面で, 柱のあたりを確認した。

土層解説 (各柱穴共通)

1 暗褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量	4 褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	5 褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片9点(坏1, 甕類8), 須恵器片4点(坏3, 蓋1)が, P1・P4~P6・P9の埋土及び覆土中からまばらに出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は, 第3077号竪穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から8世紀後葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中央部に位置し, これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は, 規模や形状から屋と考えられる。



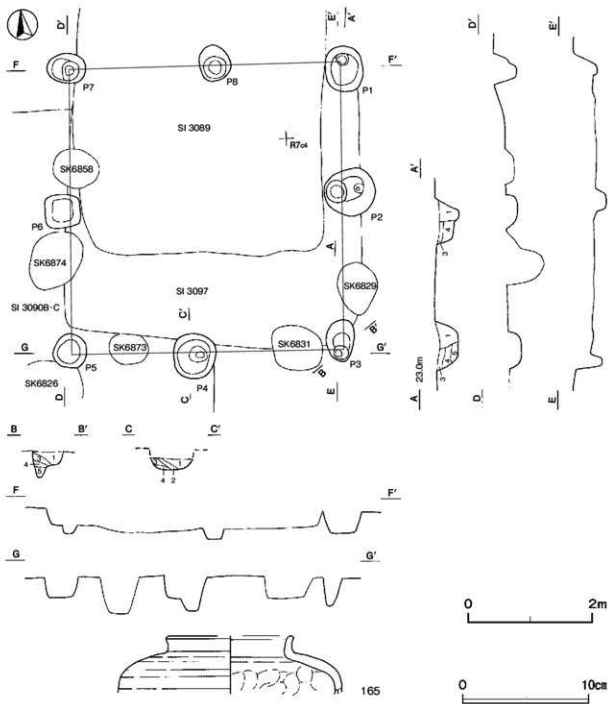
第 87 图 第 564 号掘立柱建物迹实测图

第570号掘立柱建物跡（第88図）

位置 12区中央部のR7c3区、標高22mの台地中央部に位置している。

重複関係 第3090C・3097号堅穴建物跡を掘り込み、第3089号堅穴建物、第6826・6829・6831・6858・6873・6874号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-4°-Eの南北棟である。規模は、桁行4.5m、梁行4.3mで、面積は19.35㎡である。柱間寸法は桁行が北妻から2.1m（7尺）、2.4m（8尺）、北梁行が2.0m（7尺）、2.3m（8尺）で、柱筋は揃っている。



第88図 第570号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

柱穴 8か所。平面形は楕円形または円形で、規模は長径56～82cm、短径46～56cmである。深さは24～56cmで、掘方の壁はほぼ直立または外傾している。P1～P4の第1層は柱抜き取り痕で、第2～5層は埋土である。

土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|------------------|------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | 5 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片12点（坏2、甕類10）、須恵器片5点（坏2、短頸壺1、甕類2）が、P1～P4の埋土中からまばらに出土している。165はP2の埋土中から出土しており、混入したものと思われる。

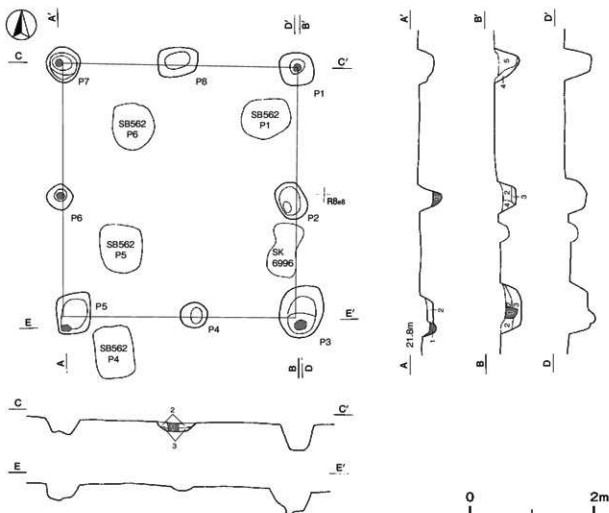
所見 時期は、第3097号竪穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から8世紀後半と考えられる。本跡は掘立柱建物が集まって配置されている地区の西部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。

第570号竪穴建物跡出土遺物観察表（第88図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
165	須恵器	短頸壺	[97]	(46)	-	灰白・白灰・黒色粒子	灰白	普通	体部外・内面ロコナデ	P2埋土中	10% 新白磁

第573号掘立柱建物跡（第89図 PL23）

位置 12区中央部のR 8d7区、標高21mの台地中央部に位置している。



第89図 第573号掘立柱建物跡実測図

重複関係 第562号掘立柱建物跡を掘り込み、第6996号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行2間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-1°-Wの南北棟である。規模は、桁行40m、梁行38mで、面積は15.20㎡である。柱間寸法は桁行が2.0m（7尺）の等間、北梁行が1.9m（6尺）の等間で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 8か所。平面形は隅丸長方形または隅丸方形で、規模は長軸55～88cm、短軸40～72cmである。深さは17～44cmで、掘方の壁はほぼ直立または外傾している。P3・P5・P6・P8の第1層は柱痕跡で、第2・3層は埋土である。P1の第5層は柱抜き取り痕である。P2の第2～4層は柱抜き取り後の覆土である。P1・P3・P5～P7の底面で柱のあたりを確認した。

土層解説（各柱穴共通）

1 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	4 褐色	ロームブロック少量
2 暗褐色	ローム粒子・炭化粒子少量	5 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片8点（坏1、甕類7）、須恵器片5点（坏3、蓋1、甕類1）が、P1～P3、P5・P7・P8の埋土及び覆土中からまばらに出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は、第562号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや出土土器から8世紀後葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中央部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。

第574号掘立柱建物跡（第90図）

位置 12区中央部のR8d5区、標高21mの台地中央部に位置している。

重複関係 第3078号竪穴建物跡、第558号掘立柱建物跡、第6992・6994号土坑を掘り込んでいる。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-0°の南北棟である。規模は、桁行6.0m、梁行4.0mで、面積は24.00㎡である。柱間寸法は桁行が北妻から2.0m（7尺）、1.7m（6尺）、2.3m（8尺）、梁行が2.0m（7尺）の等間で、柱筋はほぼ揃っている。

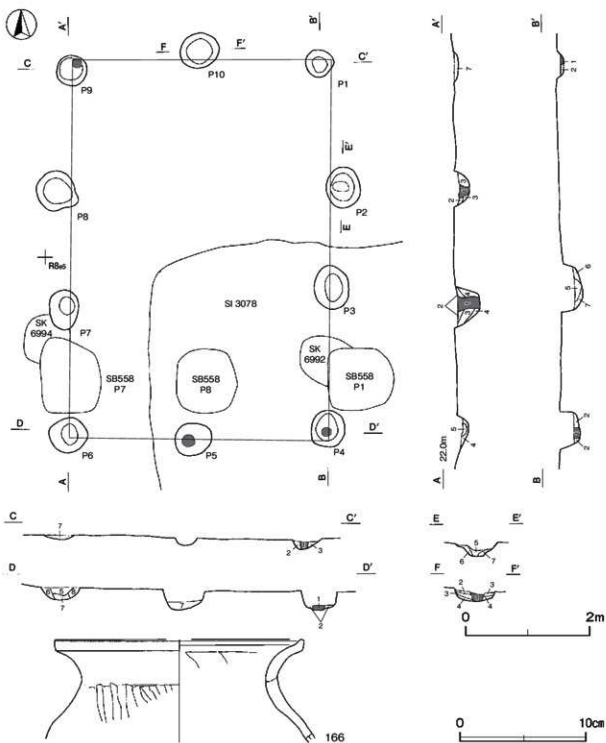
柱穴 10か所。平面形は楕円形または円形で、規模は長径52～70cm、短径44～56cmである。深さは10～38cmで、掘方の壁は外傾している。P1・P4・P7・P8・P10の第1層は柱痕跡、第2～4層は埋土である。P2・P3・P6の第5層は柱抜き取り痕で、第4・6～8層は柱抜き取り後の覆土である。P5・P9の第7層は柱抜き取り後の覆土である。P4・P5・P9の底面で柱のあたりを確認した。

土層解説（各柱穴共通）

1 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
2 極暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	7 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子微量	8 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量
4 極暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量		
5 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片5点（坏1、蓋1、甕類3）、須恵器片6点（坏1、甕類5）が、P3・P7・P8の埋土及び覆土中からまばらに出土している。166はP8の埋土中から出土しており、掘方に伴うものと思われる。

所見 時期は、第3078号竪穴建物跡、第558号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや出土土器から8世紀後葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中央部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。



第90図 第574号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第574号竪穴建物跡出土遺物観察表（第90図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
166	土師器	甕	〔19.4〕	〔8.2〕	-	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラ	P 8 埋土中	10%

第579号掘立柱建物跡（第91図）

調査報告 平成22年度に調査した。南部は平成14年度に調査し、当財団報告『第214集』において報告している。柱穴の番号については、今回報告分と合わせて、既調査分を新しい番号に更新した。

位置 12区中央部のR7g8区、標高22mの台地中央部に位置している。

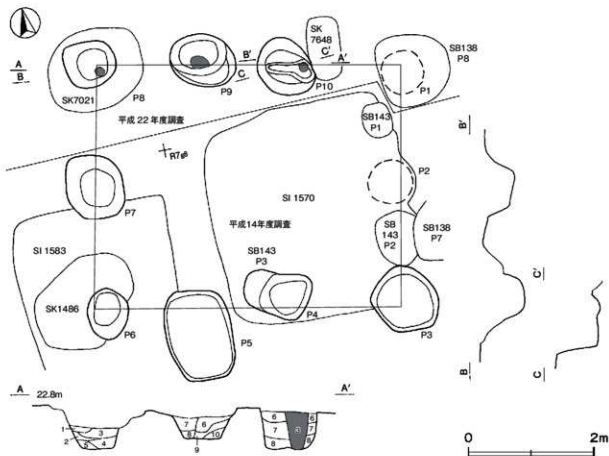
重複関係 第1570・1583号竪穴建物、第138号掘立柱建物、第7021・7648号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-99°-Eの東西棟である。規模は、桁行4.8m、梁行3.8mで、面積は18.24㎡である。柱間寸法は桁行が1.6m（5尺）の等間、梁行が1.9m（6尺）の等間で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 10か所。P1・P8～P10について記載する。平面形は楕円形で、規模は長径82～94cm、短径70～80cmである。深さは50～68cmで、掘方の壁は外傾している。P8の第1～5層は柱抜き取り後の埋土である。P9の第6～9層は柱抜き取り痕で、第7・8・10層は埋土である。P10の第3層は柱痕跡で、第6～8層は埋土である。P1は第138号掘立柱建物跡P8と重複していたため、形状などは捉えられなかった。P8～P10の底面で、柱のあたりを確認した。P3～P7については、『第214集』を参照されたい。

土層解説（各柱穴共通）

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 8 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 10 褐色 | ロームブロック少量 |



第91図 第579号掘立柱建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片3点(坏1, 甕類2), 須恵器片2点(坏, 甕類)が, P8・P9の埋土中からまばらに出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は, 第138号掘立柱建物に掘り込まれていることや出土土器から8世紀中葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中央部に位置し, これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は, 規模や形状から屋と考えられる。

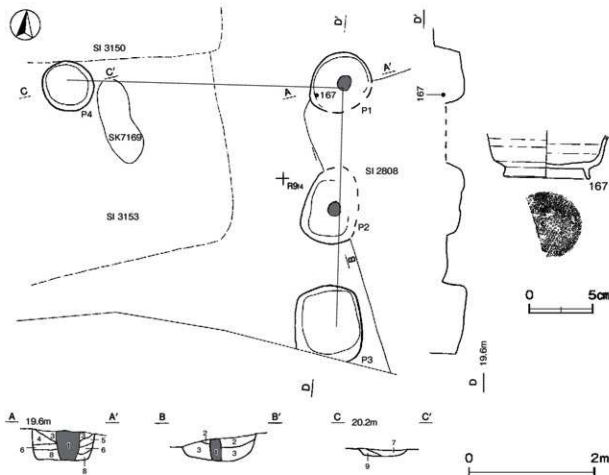
第586号掘立柱建物跡(第92図)

位置 12区中央部のR9区, 標高19mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第2808・3153号竪穴建物跡, 第587号掘立柱建物跡を掘り込み, 第3150号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と構造 南部が調査区域外へ延びており, 西平は柱穴を確認できなかったところもあるが, 桁行2間以上, 梁行2間の側柱建物跡で, 桁行方向がN-0°の南北棟と推定できる。確認できた規模は, 桁行3.9m, 梁行4.4mである。柱間寸法は桁行が北妻から2.0m(7尺), 1.9m(6尺), 遺構の重複により中間の柱穴は確認されていないが, 北梁行が2.2m(7尺)の等間と推定される。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 4か所。平面形は楕円形または円形で, 規模は長径92~125cm, 短径80~108cmである。深さは22~46cmで, 掘方の壁はほぼ直立または外傾している。P1・P2の第1層は柱痕跡で, 第2~6・8層は埋土である。P4の第7層は柱抜き取り後の覆土である。P1・P2の底面で, 柱のあたりを確認した。



第92図 第586号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

土層解説 (各柱穴共通)

1	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量	5	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	6	黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	7	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	8	にぶい黄褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
			9	にぶい黄褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片 11 点 (甕類)、須恵器片 5 点 (坏 1、高台付坏 1、蓋 1、甕類 2) が、P1～P3 の埋土中からまばらに出土している。167 は P1 の埋土上層から出土している。

所見 時期は、第 587 号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや出土土器から 8 世紀後葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の東端部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。

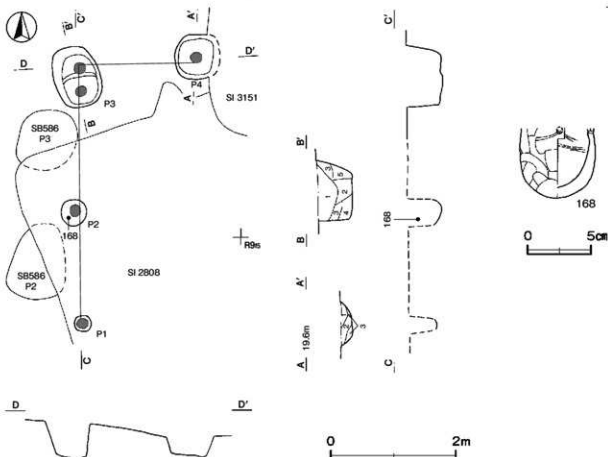
第 586 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 92 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
167	須恵器	高台付坏	-	(3.5)	[6.6]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部回転ヘラ削り後、色付貼付け	P1	30% 新調査

第 587 号掘立柱建物跡 (第 93 図)

位置 12 区中央部の R9e4 区、標高 19 m の台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 2808 号竪穴建物跡を掘り込み、第 586 号掘立柱建物に掘り込まれている。



第 93 図 第 587 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

規模と構造 南部が調査区域外へ延びており、東部は遺構の重複により柱穴を確認できなかったが、桁行2間以上、梁行1間以上の側柱建物跡で、桁行方向がN-1°-Wの南北棟と推定できる。確認できた規模は、桁行4.2m、梁行1.9mである。柱間寸法は桁行が北妻から2.4m(8尺)、1.8m(6尺)、北梁行が1.9m(6尺)である。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 4か所。P1・P2は第2808号竪穴建物跡の床面で確認された。そのため、柱穴の規模等についてはP3・P4について記載する。平面形は隅丸長方形または隅丸方形で、規模は長軸72～100cm、短軸68～82cmである。深さは54～58cmで、掘方の壁はほぼ直立している。P3の第1・2層は柱抜き取り痕で、第3～5層は埋土である。P4の第1～3層は柱抜き取り後の覆土である。P1～P4の底面で、柱のあたりを確認した。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|--------|-------------------------|--------|--------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 黒暗褐色 | ロームブロック少量、粘土ブロック微量 |
| | | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片3点(ミニチュア土器1、甕類2)、須恵器片1点(坏)が、P2・P3の埋土中からまばらに出土している。168のミニチュア土器はP2の埋土中層から出土しており、意識的に埋土に混入させた可能性がある。

所見 時期は、第2808号竪穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から8世紀中葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の東端部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。

第587号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第93図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
168	土師器	ミニチュア	-	(5.5)	-	長石・石英	浅黄橙	普通	体部外・内面へう成形 体部上位に焼成面の 穿孔	P2 埋土中層	50%

第589号掘立柱建物跡 (第94図)

位置 12区中央部のR9a2区、標高20mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3132・3140号竪穴建物、第590号掘立柱建物、第7168号土坑に掘り込まれている。第7178・7238号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 北部や南部は遺構の重複により、東部は攪乱されているため、確認できたのは西平の桁行3間、南梁の1間である。桁行方向がN-8°-Wの南北棟と推定され、確認された規模は、桁行5.6m、梁行1.8mである。柱間寸法は桁行が北妻から1.8m(6尺)、1.8m(6尺)、2.0m(7尺)で、梁行は1.8m(6尺)である。柱筋はほぼ揃っている。

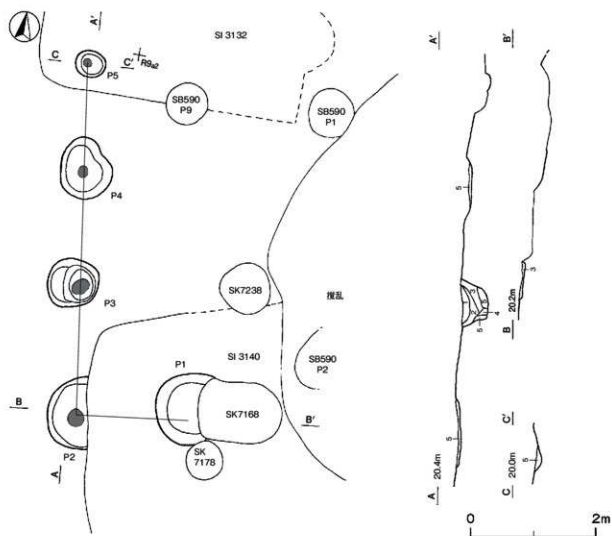
柱穴 5か所。平面形は楕円形または円形で、規模は長径52～116cm、短径44～80cmである。深さは5～44cmで、掘方の壁は外傾している。第1～6層は柱抜き取り後の埋土である。P2～P5の底面で、柱のあたりを確認した。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|--------|------------------------------|------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量、粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒暗褐色 | ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片2点(甕類)が、P3の埋土中からまばらに出土している。細片で図示できない。

所見 時期は、第590号掘立柱建物に掘り込まれていることや出土土器から8世紀中葉以降と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の東端部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。



第94図 第589号掘立柱建物跡実測図

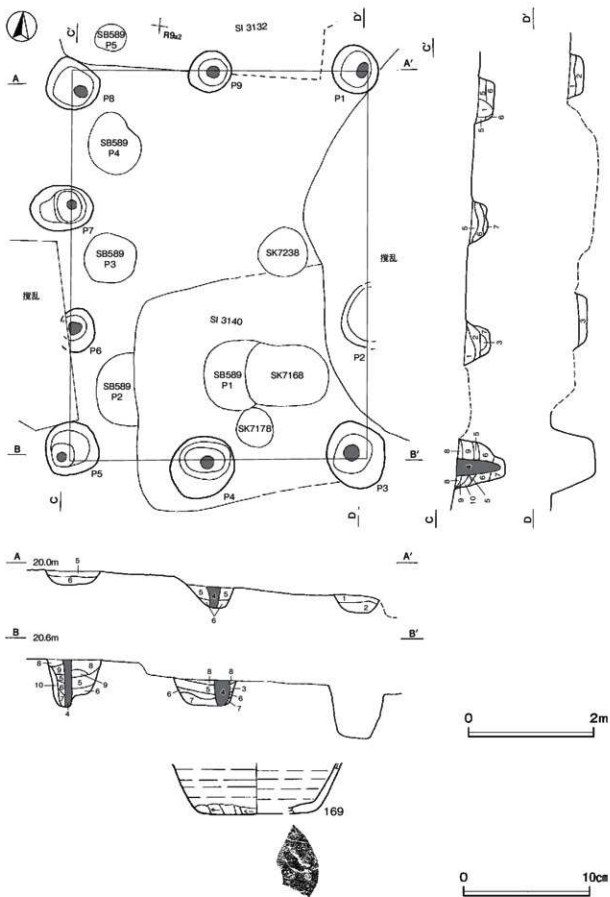
第590号掘立柱建物跡 (第95図)

位置 12区中央部のR9b2区、標高20mの台地縁辺部に位置している。

重複関係 第3134号竪穴建物跡、第589号掘立柱建物跡を掘り込み、第3132・3140号竪穴建物に掘り込まれている。第7168・7178・7238号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 東部は攪乱され、柱穴を確認できないところもあるが、桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-5°-Wの南北棟である。規模は、桁行6.1m、梁行4.7mで、面積は28.67㎡である。柱間寸法は桁行が北妻から2.1m(7尺)、1.9m(6尺)、2.1m(7尺)で、梁行は2.1m(7尺)、2.6m(9尺)である。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 9か所。平面形は楕円形または円形で、規模は長径72~108cm、短径66~92cmである。深さは24~75cmで、掘方の壁は外傾している。P4・P5・P9の第4層は柱痕跡で、第3・5~10層は埋土である。P6・P8の第1~3層は柱抜き取り痕で、第5~7層は覆土である。P1・P2・P7の第1~3・5~7層は柱抜き取り後の覆土である。P1・P3~P9の底面で柱のあたりを確認した。



第 95 图 第 590 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

土層解説 (各柱穴共通)

1 暗褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	7 濃い黄褐色	ロームブロック多量
2 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック中量	9 暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量	10 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量		
6 灰黄褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片 39 点 (坏 6、甕類 33)、須恵器片 11 点 (坏 4、高台付坏 1、甕類 6) が、P 4～P 9 の埋土及び覆土中からまばらに出土している。169 は P 5 の埋土中から出土している。

所見 時期は、第 589 号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや出土土器から 8 世紀後葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の東端部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。

第 590 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第 95 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
169	須恵器	坏	-	(40)	[94]	長石・石英・雲母	褐色	普通	体部下端手持ちヘリ張り 一方肉のヘリ張り	P 5 埋土中	10% 新出葉

表 5 奈良時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数		面積 (m ²)	柱間寸法		柱 穴			主な出土遺物	時期	備考	
			桁×梁間	桁×梁間		間隔(m)	使用(m)	構造	形状	深さ(cm)				
138	R 7d9	N-3'-W	3×2	7.4×4.8	35.52	2.4-2.5	2.3-2.5	側柱	10	隅丸方形	70-112	土師器、須恵器	8世紀後葉	SI1569・1579・3083・SD143・438 → SI184・SE26
557A	R 8c7	N-1'-W	3×2	5.7×4.2	23.94	1.7-2.1	2.1	側柱	10	隅丸方形 楕円形	14-56	土師器、須恵器	8世紀後葉	SI3077→本跡 → SI3271
557B	R 8c7	N-6'-W	3×2	5.5×3.9	21.45	1.7-1.9	1.9-2.0	側柱	11	隅丸方形 楕円形	28-56	土師器、須恵器	8世紀後葉	SI3077→本跡
558	R 8f5	N-0'	2×2	4.6×4.6	21.62	2.3	2.3	側柱	8	隅丸方形 隅丸長方形	46-56	土師器、須恵器 金属製品	8世紀中葉	→ SI3574
562	R 8c7	N-2'-W	3×2	5.5×4.3	23.65	1.6-2.2	2.1-2.2	側柱	7	楕円形 隅丸方形	28-44	土師器、須恵器	8世紀中葉	本跡→SI3006 SE373・577
563	R 7d0	N-6'-E	3×2	6.0×4.4	26.40	1.9-2.1	2.2	側柱	10	楕円形 円形	36-58	土師器、須恵器	8世紀中葉	SI3081→本跡 → SI330・560
564	R 8f5	N-6'-W	3×2	6.0×3.8	22.80	1.8-2.1	1.9	側柱	9	円形	12-46	土師器、須恵器	8世紀後葉	SI3077→本跡 → SI6995
570	R 7c3	N-4'-E	2×2	4.5×4.3	19.35	2.1-2.4	2.0-2.3	側柱	8	楕円形 隅丸方形	21-56	土師器、須恵器	8世紀後葉	SI3060C・3097→本跡 → SI3059
573	R 8d7	N-1'-W	2×2	4.0×3.8	15.20	2.0	1.9	側柱	8	隅丸長方形 隅丸方形	17-44	土師器、須恵器	8世紀後葉	SI3562→本跡 → SI6996
574	R 8d5	N-0'	3×2	6.0×4.0	24.00	1.7-2.3	2.0	側柱	10	楕円形 円形	10-38	土師器、須恵器	8世紀後葉	SI3078 本跡→SI1570・1583・SI138
579	R 7d8	N-99'-E	3×2	4.8×3.8	18.24	1.6	1.9	側柱	9	楕円形	50-68	土師器、須恵器	8世紀中葉	本跡→SI1570・SI2908・SI3153 SI3567→本跡 → SI3150
586	R 9f3	N-0'	2×2	(3.9)×4.4	-	1.9-2.0	2.2	側柱	4	楕円形 円形	22-46	土師器、須恵器	8世紀後葉	SI2908→本跡 → SI586
587	R 9e4	N-1'-W	2×1	(4.2)×(1.9)	-	1.8-2.4	1.9	側柱	4	隅丸長方形 隅丸方形	51-58	土師器、須恵器	8世紀中葉	本跡→SI3132・3140・SI590
589	R 9a2	N-8'-W	3×1	(5.6)×(1.8)	-	1.8-2.0	1.8	側柱	5	楕円形 円形	5-44	土師器	8世紀中葉	本跡→SI3132・3140・SI590
590	R 9b2	N-5'-W	3×2	6.1×4.7	28.67	1.9-2.1	2.1-2.6	側柱	9	楕円形 円形	21-75	土師器、須恵器	8世紀後葉	SI3134 SI3289→本跡 → SI3140

(3) 土坑

第 6830 号土坑 (第 96 図)

位置 12区北部の R 7 c4 区、標高 23 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径 0.72 m の円形である。深さは 20 cm で、壁は外傾している。底面は平坦である。

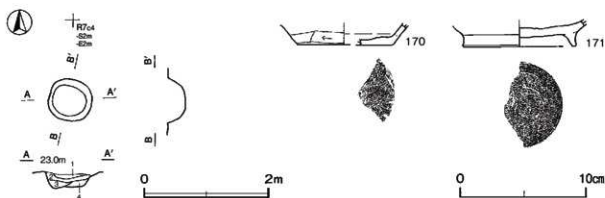
覆土 4 層に分層できる。レンズ状に堆積していることから、自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------|------|---------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 | 3 褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量 | 4 褐色 | ローム粒子少量 |

遺物出土状況 土師器片 7 点(甕類)、須恵器片 4 点(坏 3、高台付坏 1) が出土している。170・171 は、それぞれ覆土中から出土していることから、埋没の過程で投棄されたものあるいは流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土遺物から 8 世紀後葉以前と考えられる。性格は不明である。



第 96 図 第 6830 号土坑・出土遺物実測図

第 6830 号土坑出土遺物観察表 (第 96 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
170	須恵器	坏	-	(1.8)	(7.6)	長石・石英・雲母	灰黄褐	良好	体部下端手持ちへう割り 二方向へのう割り	覆土中	5% 新治産
171	須恵器	高台付坏	-	(2.2)	(9.0)	長石・石英・雲母	黄灰	良好	底部回転へう切り後、高台貼付け	覆土中	20% 新治産

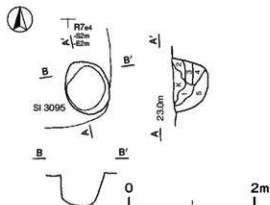
第 6840 号土坑 (第 97 図 PL28)

位置 12区北部の R 7 e4 区、標高 23 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 3087・3085 号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 0.95 m、短径 0.71 m の楕円形で、長径方向は、N - 26° - W である。深さは 35 cm で、壁は外傾している。底面は平坦である。

覆土 5 層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから、埋め戻されている。



第 97 図 第 6840 号土坑実測図

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片13点(坏3、甕類10)、須恵器片3点(坏、蓋、甕類)が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

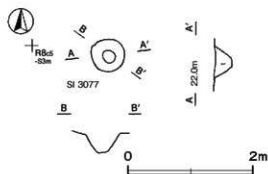
所見 時期は、第3087・3095号竪穴建物跡を掘り込んでいることや、出土遺物から8世紀後葉と考えられる。性格は不明である。

第6995号土坑(第98図)

位置 12区北部のR8c5区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3077号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 上面を第3077号竪穴建物に掘り込まれているため、径0.52mしか確認できなかったが、円形と推定できる。深さは24cmで、壁は外傾している。底面は平坦である。



第98図 第6995号土坑実測図

覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片2点(坏)が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、第3077号竪穴建物に掘り込まれていることや、出土遺物から8世紀前葉と考えられる。性格は不明である。

第7021号土坑(第99図)

位置 12区北部のR7f7区、標高23mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第579号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.55m、短径1.29mの楕円形で、長径方向は、N-79°-Eである。深さは38cmで、壁は外傾している。底面は平坦である。

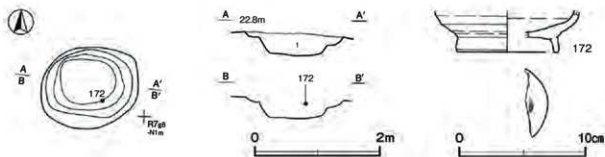
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 須恵器片3点(高台付坏1、甕類2)が出土している。172は、破片で覆土中層から出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、第143・579号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや、出土遺物から8世紀後葉と考えられる。性格は不明である。



第99図 第7021号土坑・出土遺物実測図

第7021号土坑出土遺物観察表（第99図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
172	須恵部	高台付杯	-	(3.5)	(8.0)	長石・石英・雲母	灰黄褐色	普通	底部回転へつ切り残。高台貼付。底部に墨書「172」	覆土中層	10% 顕微鏡

第7214号土坑（第100図）

位置 12区北部のR 8d8区、標高22mほどの台地傾斜部に位置している。

規模と形状 径0.59mの円形である。深さは40cmで、壁はほぼ直立もしくは外傾している。底面は凹凸である。

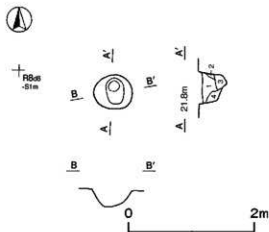
覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 2 灰黄褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片1点（坏）、須恵器片1点（坏）が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、出土遺物から8世紀中葉と考えられる。性格は不明である。



第100図 第7214号土坑実測図

第7242号土坑（第101図）

位置 12区北部のR 9b3区、標高19mほどの台地傾斜部に位置している。

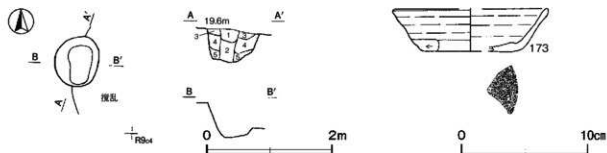
規模と形状 東部が攪乱されているため、長径は0.82mで、短径は0.67mしか確認できなかったが、楕円形と推定でき、長径方向は、N-19°-Eである。深さは56cmで、壁は外傾もしくは直立している。底面は凹凸である。

覆土 5層に分層できる。第3～5層は埋土、第1～2層は柱抜き取り後の堆積土である。

土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片9点(甕類), 須恵器片9点(坏4, 甕類4, 瓶1)が出土している。173は, 破片で埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。



第101図 第7242号土坑・出土遺物実測図

所見 時期は, 出土遺物から8世紀後葉と考えられる。性格は, 周囲に関連する遺構は確認できなかったが, 覆土の堆積状況から柱穴の可能性はある。

第7242号土坑出土遺物観察表(第101図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
173	須恵器	坏	[124]	3.4	[7.4]	長石・石英・雲母	緑灰	良好	底部下縁手持ちヘラ削り 底面回転ヘラ削り タテ	覆土中	10% 西石室

表6 奈良時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	縦横		底面	積面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
6830	R 7 c4	N - 0°	円形	0.72 × 0.72	20	平坦	外積	自然	土師器, 須恵器	
6840	R 7 e4	N - 26° - W	楕円形	0.95 × 0.71	35	平坦	外積	人為	土師器, 須恵器	SI3067・3095→ 本跡
6995	R 8 c5	N - 0°	[円形]	(0.52) × (0.52)	24	平坦	外積	人為	土師器	本跡→SI3077
7021	R 7 f7	N - 79° - E	楕円形	1.55 × 1.29	38	平坦	外積	人為	須恵器	SB143・579→本 跡
7214	R 8 d8	N - 0°	円形	0.99 × 0.99	40	凹凸	外積 直立	人為	土師器, 須恵器	
7242	R 9 b3	N - 19° - E	楕円形	0.82 × (0.67)	56	凹凸	外積 直立	人為	土師器, 須恵器	

3 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡 35 棟、掘立柱建物跡 13 棟、土坑 12 基、井戸跡 2 基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第 1527 号竪穴建物跡 (第 102・103 図)

調査年度 平成 23 年度に調査した。南部は平成 14 年度に調査し、当財団報告『第 214 集』において報告している。柱穴の番号については、今回報告分と合わせて、既調査分を新しい番号に更新した。

位置 12 区中央部の R 8 9 区、標高 20 m の台地縁辺部に位置している。

重複関係 第 1528 号竪穴建物跡、第 7193 号土坑を掘り込み、第 3141 号竪穴建物、第 7210 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 5.14 m、短軸 5.10 m の方で、主軸方向は N-1°-W である。西壁は高さ 25cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、竪前面と主柱穴の内側が踏み固められている。壁溝が南東コーナー部を除いて、壁下に巡っている。

竪 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 148cm、燃焼部の幅は 42cm である。火床部は床面から 22cm 掘りくぼめ、ロームブロックを中量含む第 5・10 層を埋土して構築されている。袖部は地山上にロームブロック・粘土ブロックなどを含む第 7～9 層を積み上げて構築されている。火床面は第 6 層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 38cm 掘り込まれ、火床部から外傾している。

竪土層解説

1 にいり褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量	6 赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子微量
2 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化物少量、ロームブロック・粘土ブロック微量	7 暗赤褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化物微量
3 灰褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、粘土ブロック微量	8 にいり褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブロック微量
4 にいり褐色	焼土ブロック・粘土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量	9 にいり褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
5 黒褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量	10 黒褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

ビット 7 か所。P 1・P 4 は深さ 58cm・62cm で、規模と配置から主柱穴である。P 2・P 3、P 5～P 7 については『第 214 集』を参照されたい。P 1・P 4 の第 1～5 層は柱抜き取り後の埋土である。

ビット土層解説

1 にいり褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	4 にいり褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量
3 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量		

貯蔵穴 北東コーナー部に位置している。長径 92cm、短径 80cm の楕円形で、深さは 22cm である。底面は平坦で、壁は外傾している。

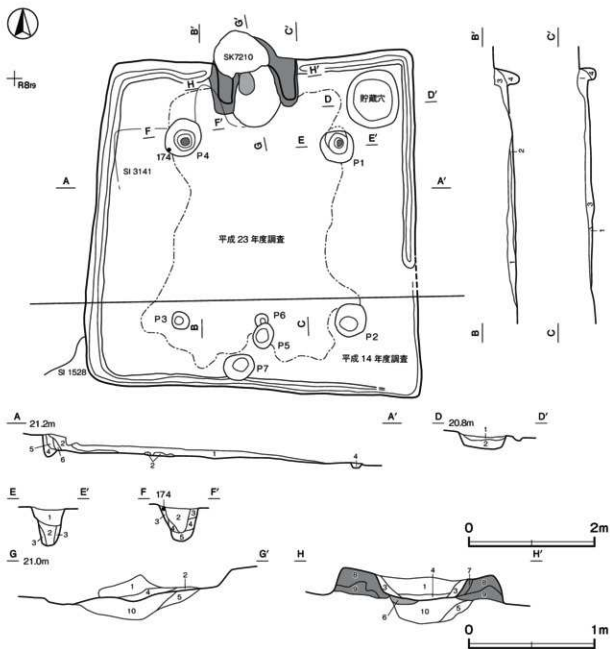
貯蔵穴土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量	2 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
-------	---------------------------	------	-----------------------

覆土 6 層に分層できる。ロームブロックを中量含む第 1 層が広範囲に床面を覆っていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量	4 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	5 にいり褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック・炭化粒子少量



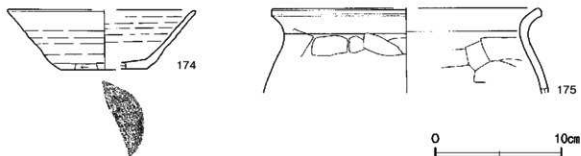
第102図 第1527号堅穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片87点(坏10, 高台付坏1, 高台付皿1, 甕類75), 須恵器片9点(坏6, 甕類3)が, 覆土中からまばらな状態で出土している。174はP4の覆土最上層から出土しており, P4が埋め戻されてから投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第1527号堅穴建物跡出土遺物観察表(第103図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
174	須恵器	坏	[146]	(48)	[68]	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰黄緑	普通	体部下端手持ちへつ回り 底部一方向の傾り	P4 覆土上層	30% 新調査
175	土師器	甕	[214]	(67)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外・内面横位のナテ	甕 覆土中	10%



第103図 第1627号竪穴建物跡出土遺物実測図

第1604A号竪穴建物跡 (第104・105図)

調査年度 平成22年度に調査した。南部は平成14年度に調査し、当財団調査報告『第214集』において報告している。

位置 12区中央部のR8fl区、標高22mの台地中央部に位置している。

重複関係 当初は1棟の竪穴建物跡として調査を進めたが、第1604B号竪穴建物へ建て替えが行われたことが判明した。そのほか、第3082C号竪穴建物・第578号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 壁の状況などから長軸3.94m、短軸3.85mの隅丸方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁は高さ15~28cmで、ほぼ直立している。

床 やや凹凸がある貼床で、出入口部から竪穴前面にかけての中央部が踏み固められている。壁溝が北東コーナー部を除いた壁下に巡っている。貼床は、西部は地山の上にロームブロックを含み締まりの強い第8・9層を埋め戻し、東部は掘方にやや締まりの強い第10・11層を埋土し構築されている。

竪 上半部は第1604B号竪穴建物構築時に壊されており、下半部だけが確認されている。北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで120cm、燃焼部の幅は66cmである。火床部は床面から24cm掘りくぼめ、ロームブロックと粘土ブロックを含む第1層を埋土して構築されている。袖部は地山を掘り残し、基部を造り出している。火床面は第2層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に62cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がり、煙道際ではほぼ直立している。

電土層解説

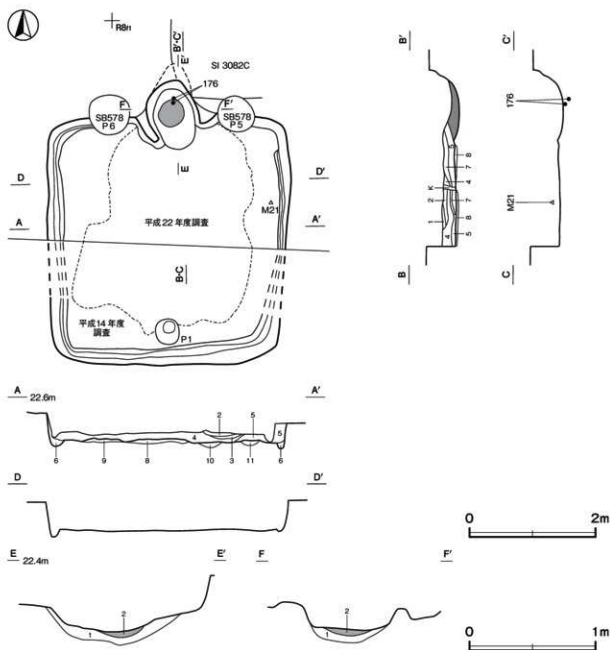
- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 2 赤褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化物微量 |
|-------|------------------------------|-------|-------------------------------|

ビット P1については『第214集』を参照されたい。

覆土 第1604B号竪穴建物の掘方で覆土は取り払われており、本跡の床面と第1604B号竪穴建物の床下の第2~5層、第7層は第1604B号竪穴建物の床の構築土と考えられる。本跡床下の第6層は壁溝の覆土で、第8~11層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------|---------|--------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量 | 8 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量(締まり強い) |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、粘土粒子微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量(締まり強い) |
| 3 にぶい褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量、粘土粒子微量 | 10 極暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量(締まりやや強い) |
| 4 にぶい褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量 | 11 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量(締まりやや強い) |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子微量 | | |
| 6 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |
| 7 にぶい褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |



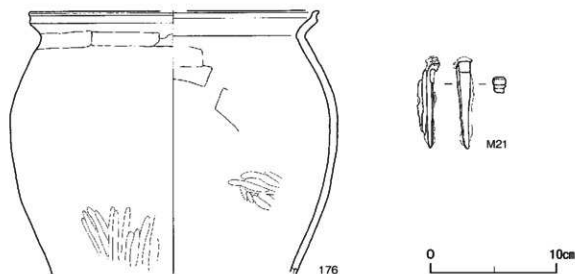
第104図 第1604A号壱穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片5点(甕類)、金属製品1点(釘)が、掘方や竪掘方からまばらな状態で出土している。176は火床面下の竪の掘方の埋土中から出土しており、混入したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。

第1604A号壱穴建物跡出土遺物観察表(第105図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
176	土師器	甕	[228]	(21.0)	-	灰石・石灰・炭屑・胡粉	にぶい肌	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部上半部外・内面横底のナデ 体部下半部外面へラ磨き	竪掘方埋土中	30%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
M21	釘	(7.2)	(1.2)	(1.3)	(24.5)	鉄	角釘 断面四角形 鍛造の一部剥離		竪掘方埋土中		



第105図 第1604A号竪穴建物跡出土遺物実測図

第1604B号竪穴建物跡 (第106・107図)

位置 12区中央部のR8日区、標高22mの台地中央部に位置している。

重複関係 第1604A号竪穴建物跡を埋め戻してから、主軸方向や竈の位置を変えずに、南北幅は16cm拡張し、東西幅は20cm縮小している。そのほか、第3082C・3083C号竪穴建物、第578号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.10m、短軸3.65mの隅丸長方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁は高さ16~24cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦な貼床で、出入口部から竈前面にかけて踏み固められている。貼床はロームブロックを含む締まりの強い第6・7層を積み上げ、構築されている。壁溝が壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで124cm、燃焼部の幅は98cmである。火床部は床面から18cm掘りくぼめ、ロームブロックを含む第6・8・12層を埋土して構築されている。袖部は地山にロームブロック・粘土ブロックなどを含む第9~11層を積み上げて構築されている。火床部の中央部にはQ6の雲母片岩が立てられ、その上には数枚の土器片が重なった状態で確認された。雲母片岩は赤変していることから支脚として再利用されたものと考えられる。土器片は支脚の上に載せる臺などの高さ調節のためのもと考えられる。火床面は第7層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に72cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がり、煙道際ではほぼ直立している。

遺土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 灰褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック少量
2 暗褐色	粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量
3 灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量	11 にぶい褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	12 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
5 灰褐色	粘土ブロック・焼土粒子少量、ローム粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量
6 灰褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・粘土粒子少量	14 灰褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量
7 暗赤褐色	焼土ブロック中量、灰少量、粘土粒子微量	15 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子微量
8 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量		

ピット P1については「第214集」を参照されたい。

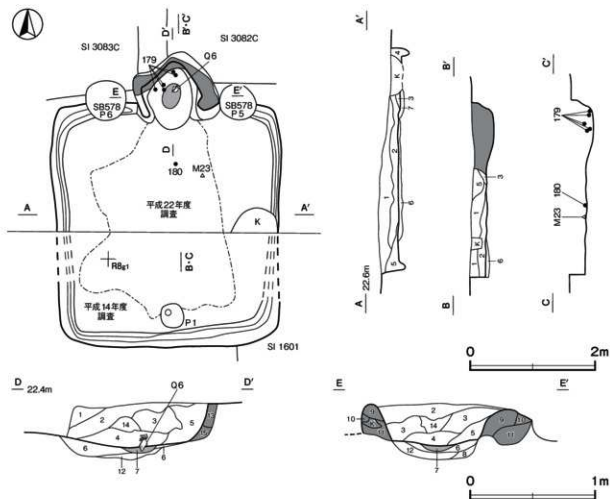
覆土 5層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。第6・7層は貼床の構築土である。

土層解説

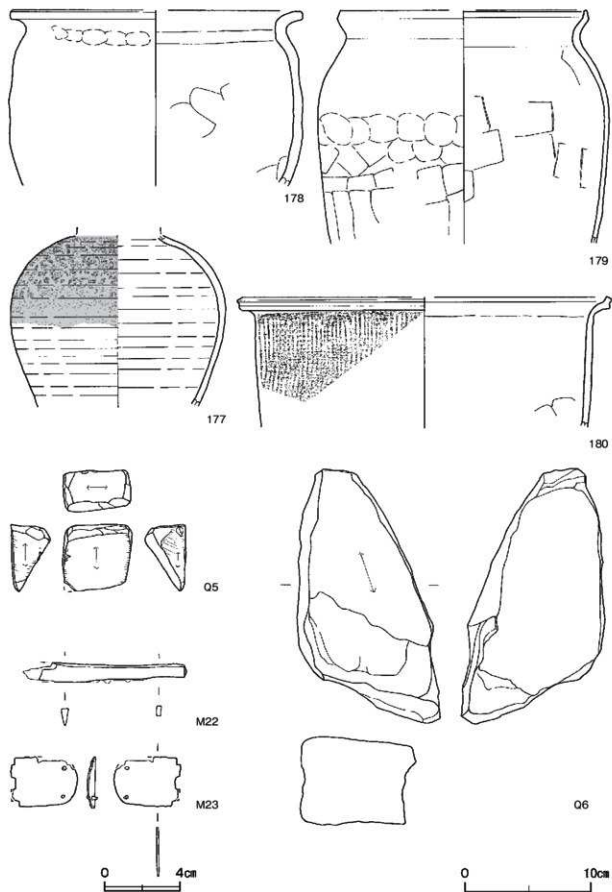
- | | | | |
|-------|-----------------------|---------|----------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 5 にぶい褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量
(締まり強い) |
| 3 暗褐色 | 粘土粒子中量、ロームブロック・焼土粒子少量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量 (締まり強い) |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック・粘土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片 237 点 (坏 56, 高台付坏 8, 皿 2, 甕類 171), 須恵器片 69 点 (坏 22, 蓋 2, 皿 1, 鉢 2, 高坏 1, 甕類 40, 甗 1), 石器 2 点 (砥石), 金属製品 2 点 (刀子, 鉸具) が、覆土中から散乱した状態で出土している。M 23 は床面から出土しており、遺棄されたものと思われる。179 は竈の覆土下層から出土し、破片が接合していることから、割った土器片を天井部や袖部の補強に使用したと思われる。そのほかの多くの土器は破片で、覆土全体から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 竈の位置や主軸方向は第 1604A 号竈穴建物跡と変わっていないことから、第 1604A 号竈穴建物から本跡への建て替えは、さほど間を置かずに行われたと考えられるが、出土土器には若干の時間差がある。時期は、出土土器から 9 世紀中葉と考えられる。



第 106 図 第 1604B 号竈穴建物跡実測図



第107图 第1604B号竖穴建物跡出土遺物実測図

第 1604B 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 107 図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
177	灰釉陶器	長頸瓶	-	(13.7)	-	緻密	灰	良好 ロタロナデ 肩部施軸	覆土中	10% 第 2 層
178	土師器	甕	[230]	(14.0)	-	長石・石英・ 黒色粒子・細礫	にぶい橙	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ナデ 胎面直 体部内面横位のヘラナデ	覆土中	10%
179	土師器	甕	[198]	(18.7)	-	長石・石英・ 雲母・細礫	明赤陶	口縁部外・内面横ナデ 体部外面直横 縦位 のヘラナデ 体部内面横位のヘラナデ	覆土下層	20%
180	灰釉器	瓶	[290]	(10.4)	-	長石・石英・雲母	灰	口縁部外・内面横ナデ 体部外面直位の平 行等き 体部内面ヘラナデ 胎面直	床面	5% 第 1 層

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 5	砥石	(5.3)	5.5	3.3	(99.2)	凝灰岩	砥面 4 面 他は破断面	覆土中	PL46
Q 6	砥石	(20.4)	(11.4)	(7.0)	(227.4)	雲母片岩	砥面 1 面 火熱を受け赤変 支脚として再利用	大塚部 埋土中	PL45

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M 22	刀子	(8.7)	(1.1)	0.2-0.4	(8.3)	鉄	先端部欠損 刃部断面三角形 茎部断面長方形	覆土中	PL47
M 23	鉋具	(2.6)	3.1	(0.4)	(3.9)	銅	鉋具の基部 2 孔 1 孔に鉋 止め具欠損	床面	PL48

第 1741A・1741B 号竪穴建物跡 (第 108 図 PL15)

ここでは、規模や竈の位置を変えずに建て替えている第 1741A 号竪穴建物跡と第 1741B 号竪穴建物跡を一
緒に記載する。

調査年度 平成 22 年度に調査した。北部は平成 15 年度に調査し、当時調査報告『第 236 集』において報告
している。柱穴の番号については、今回報告分と合わせて、既調査分を新しい番号に更新した。

位置 12 区中央部の R 8 b2 区、標高 22 m の台地中央部に位置している。

重複関係 当初は 1 棟の竪穴建物跡として調査を進めたが、第 1741B・1741C 号竪穴建物跡へと 2 回の建て替
えが行われたことが判明した。そのほか、第 1742 号竪穴建物跡を掘り込み、第 3060 号竪穴建物に掘り込まれ
ている。

規模と形状 長軸 6.36 m、短軸 5.52 m の長方形で、主軸方向は N-2°-E である。西壁は高さ 18cm で、外
傾している。

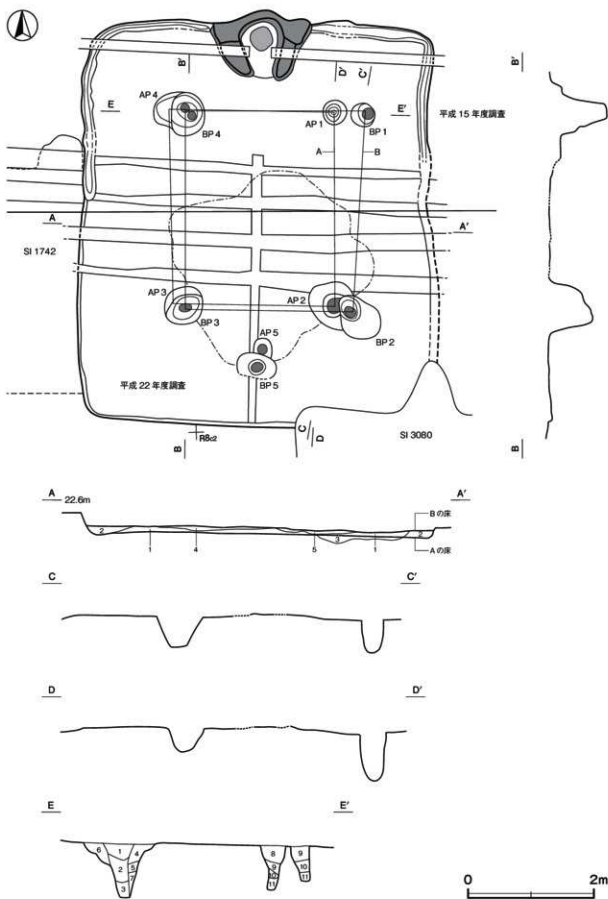
床 第 1741A 号竪穴建物跡の床はほぼ平坦で、中央部から西部は地山を削り出し、東部は掘方にロームブロ
ックを中量含み締まりがやや強い第 3 層を埋土して構築されている。第 1741B 号竪穴建物跡はほぼ平坦な貼
床で、中央部が踏み固められている。貼床は、中央部がロームブロックを中量含み締まりが強い第 1 層とそ
の上にロームブロックや粘土ブロックを含む第 4・5 層を埋め戻し、西壁際・東壁際はロームブロックを中量含
み締まりがやや強い第 2 層を埋め戻し構築されている。

貼床・掘方土層解説

1 黒褐色	ロームブロック中量・炭化粒子微量 (締まり強い)	4 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・ 炭化粒子微量 (締まり強い)
2 暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック微量 (締まりやや強い)	5 褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・焼土粒子 少量 (締まり強い)
3 極暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 (締まりやや強い)		

竈 北壁の中央部に付設されている以外に確認されず、第 1741A 号竪穴建物跡の竈を位置を変えず、使用し
たと考えられる。竈の規模・構造などは『第 236 集』を参照されたい。

ピット 10 か所。重複関係などから、古く考えられるピットは番号の前に A を、新しく考えられるピットは
番号の前に B を付け報告する。A P 1～A P 4 は深さ 42～74cm で、規模や配置から第 1741A 号竪穴建物跡
の支柱穴と考えられる。B P 1～B P 4 は深さ 50～78cm で、規模や配置から第 1741B 号竪穴建物跡の支柱穴



第 108 図 第 1741A・1741B 号堅穴建物跡実測図

と考えられる。AP5・BP5は深さ30cm・34cmで、南壁寄りの竈と向かい合う位置にあることから、それぞれ出入口施設に伴うピットと考えられる。AP1の第8～11層、BP1の第9～11層、BP4の第1～3層は柱抜き取り後の埋土である。AP2・AP5・BP1～BP5の底面から、柱のあたりを確認した。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
2 黒暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	8 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
3 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	9 にぶい褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・
4 にぶい褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量
5 褐色	ロームブロック・粘土粒子少量	11 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量		

覆土 第1741C号竪穴建物跡の床面精査で確認されたため、覆土の状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片8点(坏2、高台付坏2、甕類4)、須恵器片4点(坏2、甕類2)が、貼床構築土やピットの覆土などからまばらな状態で出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 本跡から規模や竈の位置を変えずに2回の建て替えが行われていることから、それらは連続して行われ、第1741C号建物跡の廃絶時期と本跡廃絶の時間差はさほどなかったと考えられることや第1742号竪穴建物跡を掘り込み、第3080号竪穴建物に掘り込まれていることから、時期は、9世紀中葉と考えられる。

第1741C号竪穴建物跡 (第109・110図 PL15)

位置 12区中央部のR8b2区、標高22mの台地中央部に位置している。

重複関係 第1741B・1742号竪穴建物跡を掘り込み、第3080号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 第1741B号竪穴建物の規模や竈の位置を変えずに、主柱穴の位置などを替え、建て替えを行っているものである。規模・主軸方向・壁の状況は、第1741B号竪穴建物跡と同じである。

床 平坦な貼床で、中央部から西部にかけては第1741B号竪穴建物跡の床を使用し、東部はロームブロックを中量含み、締まりが強い第2・3層を積み上げて構築されている。壁際を除いて、踏み固められている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模や構造などは「第236集」を参照されたい。

ピット 13か所。「第236集」の報告では、北部に10か所のピットが確認されている。それらのピットは1か所を除いて重複はなく、建て替えについては述べられていないので、建て替えの最終段階である本跡に伴うものと考えられる。P1～P4は深さ50～74cmで、規模や配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ40cmで、南寄りの竈と向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は竈の両軸の脇に位置していることから、竈に伴うピットと考えられる。そのほかのピットの状況については、「第236集」を参照されたい。P2・P3の第1・2層は柱の抜き取り痕である。P2・P3の底面には柱のあたりが確認されている。P8～P13については、「第236集」を参照されたい。

ピット土層解説

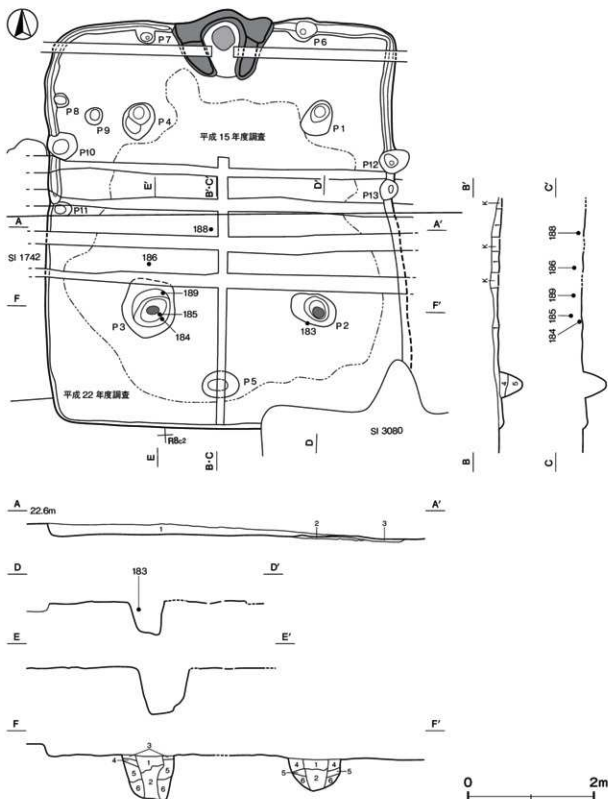
1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック中量、粘土粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 単一層である。ロームブロックを中量含む層が全体を覆っていることから、埋め戻されている。第2・3層は貼床の構築土である。

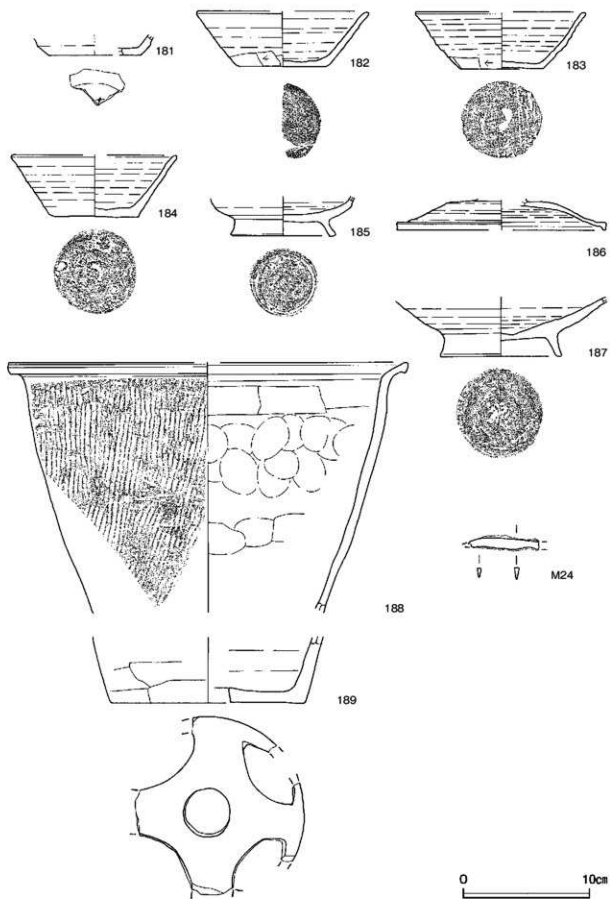
土層解説

1 黒暗褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	3 暗褐色	微量(締まり強い) ロームブロック中量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量(締まり強い)
2 褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子		

遺物出土状況 土師器片 265点 (坏11, 高台付坏2, 盤2, 甕類250), 須恵器片 409点 (坏194, 高台付坏13, 蓋35, 盤2, 高坏2, 甕類159, 瓶3, 鉢1), 金属製品1点 (刀子) が, 覆土中から散乱した状態で出土している。183はP2の覆土上層から出土しており, ビットが埋まる前に投棄されたものと思われる。184・185・189は本跡の覆土下層や覆土上層から出土していることから, P3が埋まりきった後, 埋土と一緒に投棄されたものと思われる。



第109図 第1741C号竪穴建物跡実測図



第 110 图 第 1741C 号竖穴建物跡出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第1741C号竪穴建物跡出土遺物観察表(第110図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
181	須恵器	杯	-	(1.6)	[7.2]	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰白	普通	底部回転ヘラ削り 底部に黒書「□」	覆土中	10% 新治産
182	須恵器	杯	[13.6]	4.4	[6.8]	長石・石英・雲母	オリーブ黒	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後、一方方向のヘラ削り	覆土中	40% 新治産
183	須恵器	杯	[13.4]	4.6	6.5	長石・石英・雲母・細礫	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後、一方方向のヘラ削り	P 2 覆土上層	40% PL40 新治産
184	須恵器	杯	[12.8]	5.0	6.8	長石・石英・細礫	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 底部ヘラ切り	覆土下層	50% PL40 三和産
185	須恵器	高台付杯	-	(3.2)	7.8	長石・石英・雲母・細礫	灰黄黒	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼付け	覆土上層	40% 新治産
186	須恵器	蓋	[16.5]	(2.5)	-	長石・石英・黒色粒子・細礫	黄灰	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土上層	30% 新治産
187	須恵器	盤	-	(4.8)	9.4	長石・石英・雲母	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り後、高台貼付け	覆土中	40% 新治産
188	須恵器	鉢	[31.4]	[19.9]	-	長石・石英・細礫	灰	普通	口縁部外・内面ロクロナデ、体部外面縁位の部入、体部内面ロクロナデナデ 平で丸底	覆土中層	20% 新治産
189	須恵器	瓶	-	(5.2)	[15.4]	長石・石英・雲母・細礫	黄灰	普通	体部外面下位ヘラ削り 体部内面下位ヘラナデ 底部ヘラ切りによる穿孔	覆土上層	2% 新治産

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M24	刀子	(5.6)	(1.0)	03-04	06.0	鉄	刃部先端部・基部欠損 刃部断面三角形 片削。	覆土中	PL47

第3079A・3079B号竪穴建物跡(第111・112図 PL16)

ここでは、規模や竈の位置を変えずに建て替えを行っている第3079A号竪穴建物跡と第3079B号竪穴建物跡と一緒に記載する。

位置 12区中央部のR8c3区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3079C・第3080号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 竈の痕跡状況や柱穴の位置から、長軸6.44m、短軸6.04mの隅丸方形で、主軸方向はN-2°-Wと推定される。東壁は高さ4cmで、ほぼ直立している。

床 第3079A号竪穴建物跡の床は平坦で、中央部は地山を削り出し、東部は深さ40cmほどの掘方をロームブロックを中量含むやや締まりの強い第5層を埋土して構築されている。第3079B号竪穴建物跡の床は平坦な貼床で、第3079A号竪穴建物跡の床の上にロームブロックを中量含む締まりがやや強い第2層を貼り、構築されている。出入口部と思われる部分から竈前面にかけての中央部は踏み固められている。

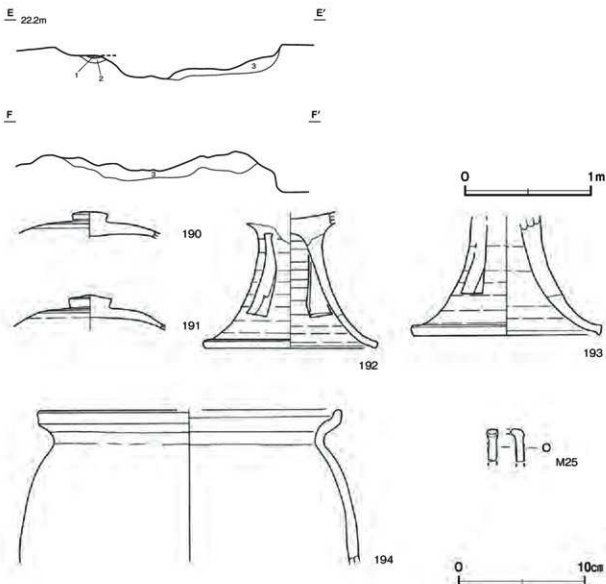
貼床・掘方土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量(締まりや強い) |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

竈 第3079C号竪穴建物跡の竈の下から、地山を削り出した第3079A号竪穴建物跡の竈の左袖部の一部や火床部の一部が確認されている。竈は北壁の中央部に付設され、規模は焚口部から煙道部まで162cmである。火床部は床面から20cm掘りくぼめ、ロームブロックを含む第2・3層を埋土して構築されていたと考えられるが、北半部は第3079C号竪穴建物跡の竈の掘方で壊されている。左袖部は地山を削り出し、基部としている。火床面は第1層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に24cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 赤褐色 | 焼土ブロック多量、炭化粒子少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量、粘土ブロック・炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、粘土ブロック・炭化物微量 | | |



第112図 第3079A・3079B号竪穴建物跡・出土遺物実測図

ピット 11か所。主柱穴と思われるピットは3段階の重複関係が確認でき、ピット番号の前に古い順にA・Bを付け報告する。AP1～AP4は深さ46～72cmで、規模や配置から第3079A号竪穴建物跡の主柱穴と考えられる。BP1～BP4は深さ40～84cmで、規模や配置から第3079B号竪穴建物跡の主柱穴と考えられる。A・BP5は深さ32cmで、南壁際の竈と向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。A・BP6・A・BP7は深さ37cm・32cmで、竈の両袖の脇に位置していることから、竈に伴うピットと考えられる。AP1～AP4とBP1～BP4の底面から、柱のあたりを確認した。第3079A号竪穴建物跡から第3079B号竪穴建物跡への建て替えは主柱穴だけを行い、出入口ピットと竈に伴うピットは位置を変えないで継続して使用したと考えられる。

覆土 第3079A号竪穴建物跡と第3079B号竪穴建物跡は、第3079C号竪穴建物跡の床面精査で確認されたため、覆土の状況は不明である。

遺物出土状況 第3079A号竪穴建物跡の貼床構築土から土師器片20点(坏4, 甕類16), 須惠器片18点(坏4, 蓋3, 高盤3, 甕類8), 金属製品1点(不明製品)が出土している。190・194は破片で, 竈東側の貼床構築土から出土していることから, 床の構築前にこれらの土器片を意識的に混入させた可能性がある。

所見 時期は, 出土土器から8世紀末葉から9世紀前葉と考えられる。

第3079A・3079B号竪穴建物跡出土遺物観察表(第112図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
190	須惠器	蓋	-	(21)	-	長石・石英・雲母・細礫	黄灰	普通	天井部割取ヘラ削り後, 納み部貼付け	貼床 焼土中	30% 新治産
191	須惠器	蓋	-	(28)	-	長石・石英・雲母・細礫	灰黄靑	普通	天井部割取ヘラ削り後, 納み部貼付け	貼床 構築土中	30% 新治産
192	須惠器	高盤	-	(109)	[136]	長石・雲母	黄灰	良好	脚部外・内面口ロナデ 透かし孔	貼床 構築土中	30% PL43 堀之内産
193	須惠器	高盤	-	(95)	[146]	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰	普通	脚部外・内面口ロナデ 透かし孔	貼床 構築土中	30% 新治産
194	土師器	甕	[240]	[120]	-	長石・石英・雲母	靑	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ	貼床 構築土中	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M25	不明製品	(2.6)	(0.9)	(1.2)	(5.8)	銅	先端部肥厚 断面円形	床面	

第3079C号竪穴建物跡(第113～116図 PL15・16)

位置 12区中央部のR8c3区, 標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3079A・3079B号竪穴建物跡を掘り込み, 第3080号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 第3079B号竪穴建物の主軸方向は変えずに, 東壁を20cmほど狭め, 北へ55cm, 南へ95cmほど拡張している。規模は長軸7.34m, 短軸6.12mの隅丸長方形で, 主軸方向はN-2°-Wである。壁は高さ4cmで, ほほ直立している。

床 平坦な貼床で, 出入口部と思われる部分から竈前面にかけての中央部が踏み固められている。貼床は第3079B号竪穴建物跡の貼床の上にロームブロックを含む締まりの強い第1層を厚さ2～8cm積み重ね, 構築されている。壁溝が西壁や南壁西部, 東壁の中央部の壁下に巡っている。

貼床土層解説

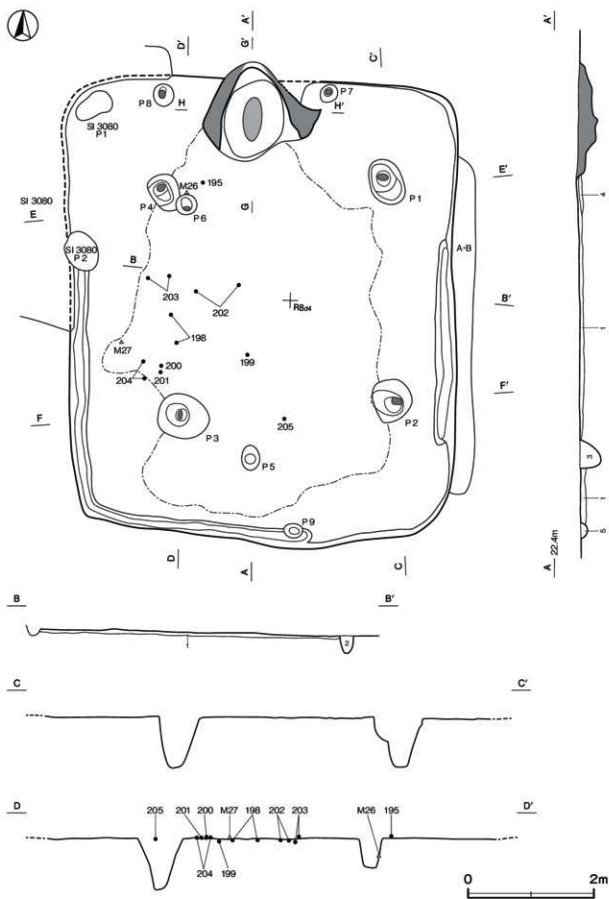
- | | | | |
|-------|-----------------------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
(締まり強い) | 3 黒褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 2 土色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| | | 5 暗褐色 | ロームブロック中量 |

竈 北壁の中央部に付設され, 火床部は第3079B号竪穴建物の火床部から北へ30cmほど移動している。規模は焚口部から煙道部まで140cmで, 燃焼部の幅は110cmである。火床部は第3079B号竪穴建物の竈の掘方埋土上に構築されている。袖部は第3079B号竪穴建物の竈袖部の基土上に粘土ブロックなどを含む第2・4層を積み上げて構築されている。火床面は第5層上面で, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に28cm掘り込まれ, 火床部から外積している。

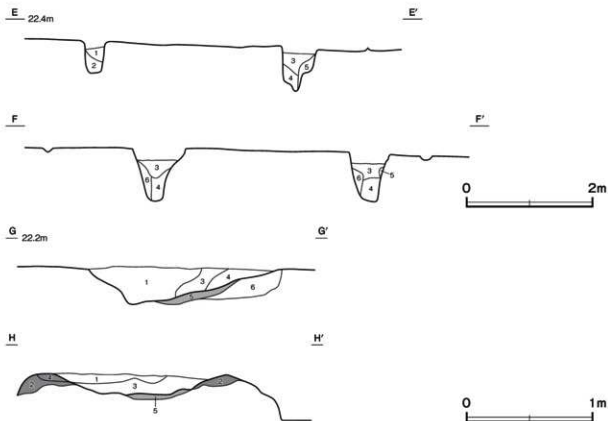
竈土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------------------|-------|-------------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック
少量, 炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | 炭化粒子中量, ロームブロック・焼土ブロック・
粘土ブロック少量 |
| 2 褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック・焼土粒子・
炭化粒子少量 | 5 赤褐色 | 焼土ブロック多量, 炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子少量 | 6 褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

ピット 9か所。P1～P4は深さ40～78cmで, 規模や配置から主柱穴である。P5は深さ30cmで, 南壁際の竈と向かい合う位置にあることから, 出入口施設に伴うピットと考えられる。P7・P8は深さ30cm・31cmで, 竈の両脇に位置していることから, 竈に伴うピットと考えられる。P9は南壁に沿った壁溝で確認されている。



第 113 图 第 3079C 号竖穴建物跡実测图 (1)



第114図 第3079C号竪穴建物跡実測図(2)

深さは19cmで、性格は不明である。P1～P4・P6～P8の底面から柱のあたりを確認した。第3079B号竪穴建物から本跡への建て替えは主柱穴の位置をほとんど変えていないが、北と南へ拡張したため、出入口施設のピットと竈に伴うピットは移動している。P1～P3の第3・4層とP4の第1・2層は柱抜き取り後の埋土である。

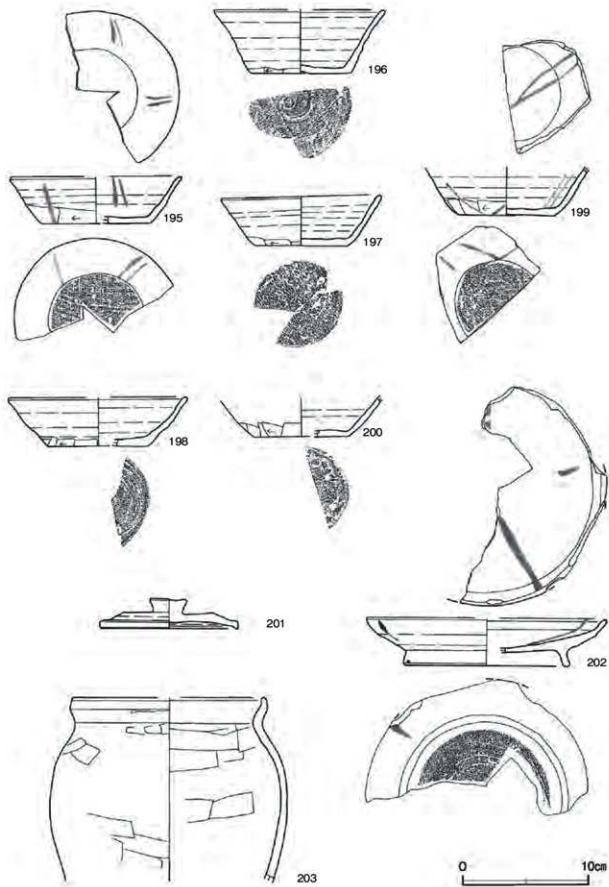
ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 暗褐色	焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	5 暗褐色	ロームブロック中量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量	6 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量

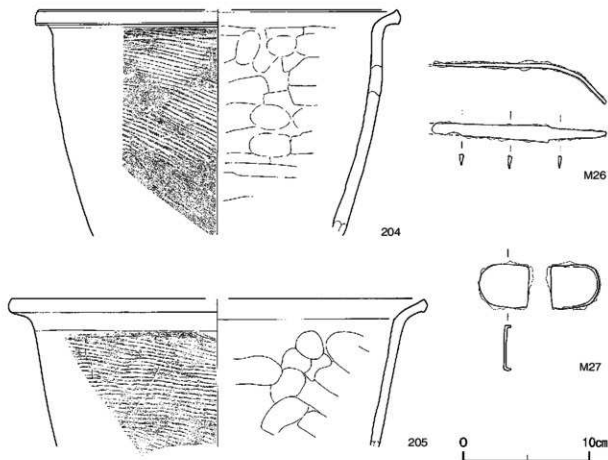
覆土 確認面は締まりの強い黒褐色であり、床面と考えられる。したがって、覆土は壁際でわずかに存在しただけであり、覆土の全体の状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片519点(坏28, 高台付坏1, 高台付皿1, 甕類488, 瓶1), 須恵器片329点(坏157, 蓋68, 盤3, 高盤3, 長頸瓶1, 甕類94, 瓶3), 金属製品2点(刀子, 鈍尾。)が床面を中心に散乱した状態で出土している。195・198～205・M27は破片で、すべて床面から出土していることから、遺棄されたか投棄されたものと思われる。M26は基部を屈曲させ、P6の壁に刺さった状態で出土しており、柱を立てる前に意図的になされた行為と思われる。

所見 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第115图 第3079C号竖穴建物跡出土遺物実測图(1)



第116図 第3079C号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第3079C号竪穴建物跡出土遺物観察表(第115・116図)

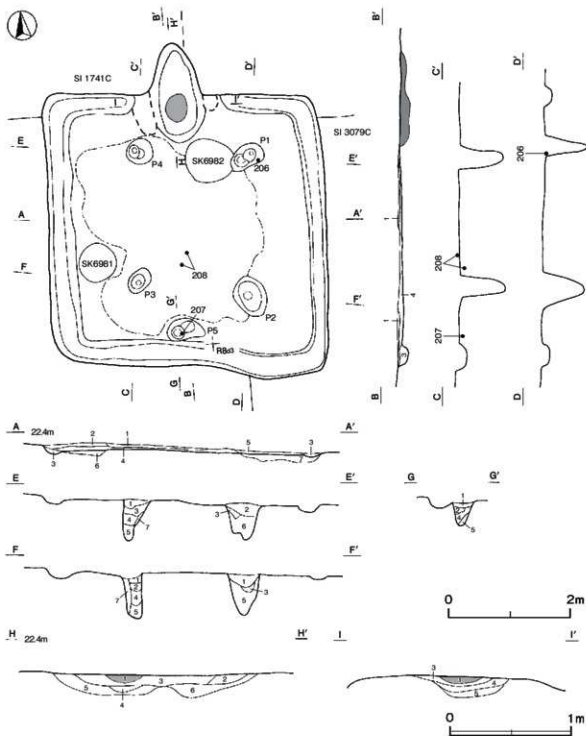
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
195	須恵器	坏	[136]	3.8	[8.7]	長石	黄灰	普通	体部下端手持ちへう割り 底部へう切り後、 一方向のへう割り 外・内面火焼	床面	40% PL40 三和層。
196	須恵器	坏	[134]	5.1	[8.2]	長石・石英・細礫	灰白	普通	体部下端手持ちへう割り 底部へう切り後、 一方向のへう割り	覆土中	50% 三和層。
197	須恵器	坏	12.5	4.1	7.3	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちへう割り 底部へう切り後、 一方向のへう割り	覆土中	40% 三和層。
198	須恵器	坏	[140]	3.9	[8.0]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端手持ちへう割り 底部へう切り後、 両端へう割り	床面	20% 新治層
199	須恵器	坏	-	(3.9)	[7.6]	長石・石英・ 雲母・細礫	黄灰	普通	体部下端手持ちへう割り 底部へう切り後、 二方向のへう割り 外・内面火焼	床面	30% 新治層
200	須恵器	坏	-	(3.2)	[7.5]	長石・石英・雲母・ 黒色粒子・細礫	黄灰	普通	体部下端手持ちへう割り 底部へう切り後、 一方向のへう割り	床面	30% 新治層
201	須恵器	壺	[108]	2.4	-	長石・石英・ 雲母・細礫	灰	普通	天井部斜転へう割り後、構み部貼付け	床面	50% PL43 新治層
202	須恵器	盤	[19.0]	3.8	13.0	長石・石英	灰黄	良好	底部斜転へう割り後、高台貼付け 外・内面火 焼	床面	40% 三和層。
203	土師器	甕	[15.2]	(14.8)	-	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面横位の へうナデ	床面	20%
204	須恵器	瓶	[28.6]	(18.0)	-	長石・石英・雲母	褐灰	良好	口縁部外・内面口クロナデ 体部外面斜位の 平行叩き 体部内面控強痕 横位のへうナデ	床面	5% 新治層
205	須恵器	板	[32.8]	(11.7)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	口縁部外・内面口クロナデ 体部外面横位の 平行叩き 体部内面控強痕 横位のへうナデ	床面	5% 新治層

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M26	刀子	(13.9)	1.5	0.3	(18.5)	鉄	先端部欠損 基部屈曲 刃部断面三角形 両端 基部断面四角形	16号層	PL47
M27	鈍尾*	3.9	4.4	0.5	17.6	鉄	厚さ1.5mmで、外周を折り曲げている	床面	

第 3080 号竪穴建物跡 (第 117・118 図 PL15・16)

位置 12 区中央部の R 8 c2 区, 標高 22 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 1741C・3079C 号竪穴建物跡を掘り込み, 第 6981・6982 号土坑に掘り込まれている。



第 117 図 第 3080 号竪穴建物跡実測図

規模と形状 長軸 4.62 m、短軸 4.50 m の方形で、主軸方向は N-2°-E である。壁は高さ 2～8 cm で、ほぼ直立している。

床 は平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、中央部は地山の上に、東部と西部は掘方を第 6・7 層で埋土した上に、ロームブロックを含み締まりが強い第 5 層を埋め戻して構築されている。壁溝が壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。上半部は削平され、掘方と基部が遺存している。焚口部から煙道部まで 148 cm で、燃焼部の幅は 70 cm と推定できる。袖の基部は地山を削り出している。火床部は床面から 18 cm 掘りくぼめ、ロームブロック・粘土ブロックを含む第 3～6 層を埋土して構築されている。火床面は第 1 層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に 86 cm 掘り込れ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗 褐 色	焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量	炭化粒子微量
2 暗 褐 色	ロームブロック・粘土粒子・炭化粒子少量	ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
3 暗 褐 色	ロームブロック・粘土粒子・炭化粒子少量	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
4 暗 褐 色	ロームブロック・粘土粒子・炭化粒子少量	ロームブロック少量、焼土粒子微量

ピット 5 か所。P1～P4 は深さ 60～78 cm で、規模や配置から主柱穴である。P5 は深さ 40 cm で、南壁際の竈と向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P3 の第 1・2・4・5 層、P4 の第 1・3～5 層は柱の抜き取り痕である。それ以外の層は、いずれも柱抜き取り後の埋土である。

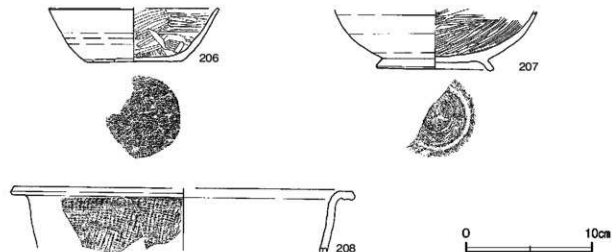
ピット土層解説

1 暗 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗 褐 色	ロームブロック中量、粘土粒子微量
2 暗 褐 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	6 暗 褐 色	ロームブロック・炭化物少量（締まり強い）
3 暗 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	7 褐 色	ロームブロック中量（締まり強い）
4 にぶい褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量		

覆土 2 層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積しており、埋め戻されている。第 4～7 層は貼床の構築土である。

土層解説

1 暗 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 黒 褐 色	ロームブロック中量、炭化粒子微量（締まり強い）
2 暗 褐 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	6 にぶい褐色	ロームブロック中量、炭化物少量（締まりやや強い）
3 暗 褐 色	ロームブロック中量、炭化物微量	7 にぶい褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗 褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量（締まり強い）		



第 118 図 第 3080 号竪穴建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片 278 点 (坏 63, 高台付坏 2, 高台付碗 1, 甕類 211, 瓶 1), 須恵器片 218 点 (坏 95, 高台付坏 7, 蓋 13, 盤 1, 甕類 101, 瓶 1) が, 床面を中心に散乱した状態で出土している。206 は P 1 の確認面から出土しており, P 1 が埋まった後に遺棄されたか, 投棄されたものと思われる。207 は P 5 の覆土上層から出土しており, P 5 の埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 時期は第 1741C 号竪穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から, 9 世紀後葉と考えられる。

第 3080 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 118 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
206	土師器	坏	[134]	4.3	[7.8]	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	底部へた切り後, 一方のへた削り へた削き後, 黒色焼成	内部内面 P 1 確認面	40%
207	土師器	高台付碗	-	(4.8)	[9.0]	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい 黄褐色	普通	底部回転へた削り後, 高台削り 削き後, 黒色焼成	内部内面へ P 5 覆土上層	40%
208	須恵器	鉢	[26.8]	(5.0)	-	長石・石英・ 雲母・黒色粒子	灰	普通	口縁部外・内面横ナデ 埋み 内部内面ナデ	体部外面縦位の平行 床面	10%

第 3082A 号竪穴建物跡 (第 119・120 図)

位置 12 区中央部の R Se1 区, 標高 22 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 当初は 1 棟の竪穴建物跡として調査を進めたが, 第 3082B・3082C 号竪穴建物へ 2 回の建て替えが行われていたと判断した。そのほか, 第 578 号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 竈の痕跡, 壁溝やピットの状況から, 長軸 4.96 m, 短軸 4.38 m の隅丸長方形で, 主軸方向は N-1°-E と推定される。壁はすべて削平されており不明である。

床 地山を削り, 平坦に整えられている。壁際を除いて, 踏み固められている。壁溝が西側と東側に確認されている。

竈 建て替えにより袖部や燃焼部は壊され, 煙道部の一部と掘方だけの確認であることから, 規模や構造は不明である。掘方は推定される北壁の中央部に確認されている。規模は長径 108 cm, 短径 86 cm の楕円形で, 掘り込みの深さは 44 cm である。

竈掘方土層解説

1	褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量	4	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
2	褐色	ロームブロック・灰少量, 焼土粒子微量	5	褐色	ロームブロック中量, 粘土ブロック少量
3	暗褐色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量			

ピット 4 か所。P 1～P 4 は深さ 46～60 cm で, 規模や配置から主柱穴である。P 1～P 4 の底面で, 柱のあたりを確認した。P 2～P 4 の第 1～8 層は, いずれも柱抜き取り後の埋土である。

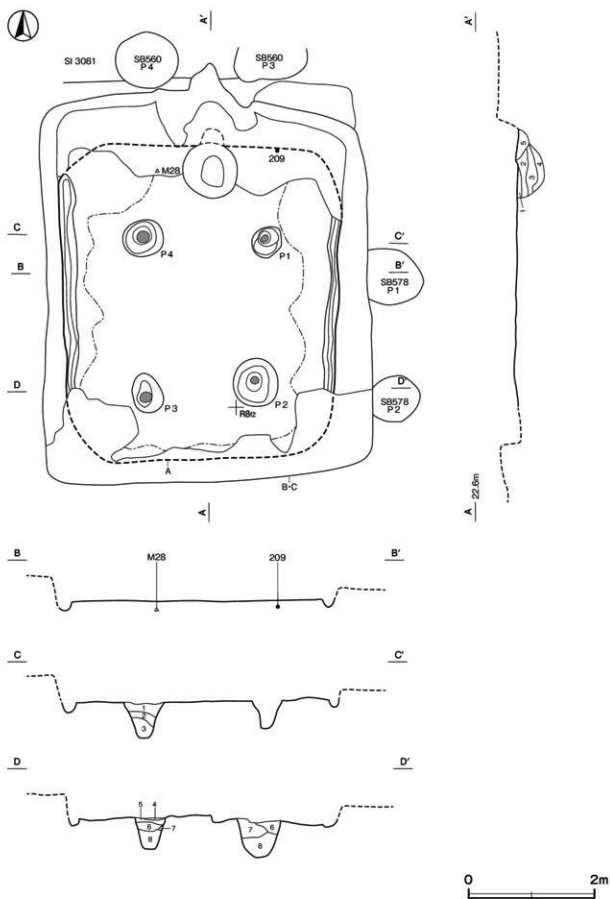
ピット土層解説

1	褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量	5	褐色	ロームブロック多量
2	暗褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子微量	6	褐色	ロームブロック多量, 焼土粒子微量
3	黒褐色	ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	7	黒褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量
4	黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量	8	暗褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量

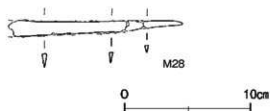
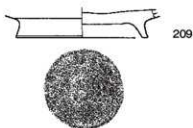
覆土 第 3082C 号竪穴建物跡の床面精査で確認されたため, 覆土の状況は不明である。

遺物出土状況 土師器片 10 点 (坏 3, 甕類 7), 須恵器片 6 点 (坏 2, 高台付坏 1, 甕類 3), 金属製品 1 点 (刀子) が, 建物の掘方埋土や竈の掘方埋土からまばらに出土している。209 と M 28 は竈脇の掘方埋土中から出土しており, 意図的に埋められたものと思われる。

所見 時期は, 第 578 号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや出土土器から 9 世紀前葉と考えられる。



第 119 图 第 3082A 号竖穴建物跡实测图



第120図 第3082A号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3082A号竪穴建物跡出土遺物観察表(第120図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
209	須恵器	高台付坪	~	(2.3)	10.3	灰石・石英・雲母・黒色粒子	灰	普通	底部回転へう攪り後、高台架付け	掘方埋土中	30% 調査済

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M28	刀子	(1.18)	(1.3)	(0.4)	(122)	鉄	先端部欠損 刃部断面三角形 基部断面四角形	掘方埋土中	PL47

第3082B・3082C号竪穴建物跡(第121~124図 PL16・17)

ここでは、規模や形状を変えずに建て替えを行っている第3082B号竪穴建物跡と第3083C号竪穴建物跡を一緒に記載する。

位置 12区中央部のR 8el区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3082A号竪穴建物跡の主軸方向を変えずに、北へ85cm、南へ35cm、東へ50cm、西へ30cmほど拡張している。そのほか、第3081号竪穴建物跡、第560・578号掘立柱建物跡を掘り込み、第1604A号竪穴建物に掘り込まれている。

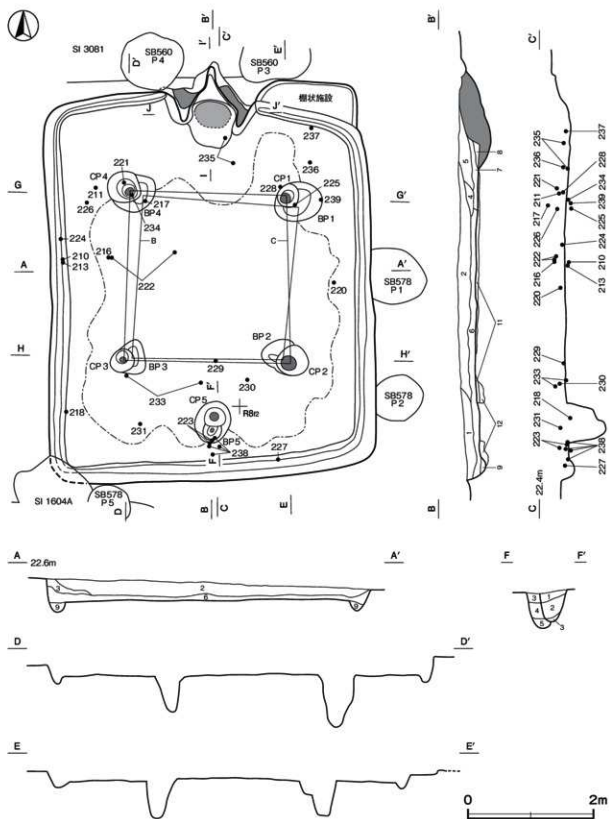
規模と形状 長軸6.22m、短軸5.14mの隅丸長方形で、主軸方向はN-1°-Eである。壁は高さ25~32cmで、ほぼ直立している。竈の東側に棚状施設が付設されている。長さ1.54m、中央部の幅46cmの不整形で、床面と棚の比高は20cmである。

床 ほぼ平坦な貼床で、壁際を除いて踏み固められている。貼床の北部や周辺部は、深さ16~40cmほど掘方をロームブロックなどを含む第12~18層を埋土して整地し、その上にロームブロックを含み締まりの強い第10・11層を積み上げて構築されている。中央部は第3082A号竪穴建物跡の床の上に第11層だけを積み上げ床としていることから、第3082C号竪穴建物でも第3082B号竪穴建物跡の床を使用し続けたと考えられる。

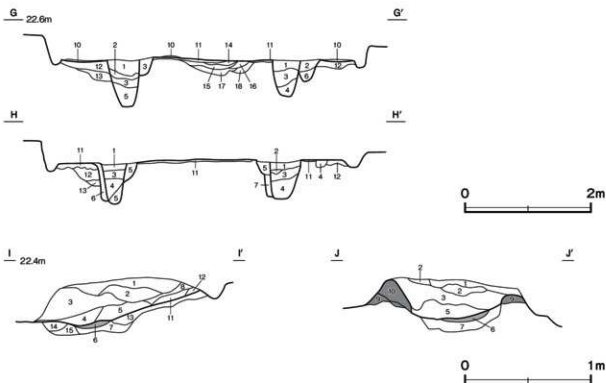
竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで154cm、燃焼部の幅は76cmである。火床部は床面から25cm掘りくぼめ、ロームブロック・粘土ブロックを含む第6・7・13・14・15層を埋土して構築されている。袖部は地山を削り出した基部上にロームブロック・粘土ブロックなどを含む第9・10層を積み上げて構築されている。火床面は第6層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ42cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量	6 暗赤褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
3 黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量	7 にぶい褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
4 灰褐色	灰中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量	8 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量



第 121 图 第 3082B·3082C 号竖穴建物跡实测图 (1)



第122図 第3082B・3082C号竪穴建物跡実測図(2)

- | | | | |
|---------|---------------------------------------|---------|-------------------------------|
| 9 ぶい褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量(締まり強い) | 12 暗褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 10 ぶい褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量(締まり強い) | 13 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 11 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 14 灰褐色 | 灰中量、ロームブロック微量 |
| | | 15 ぶい褐色 | 焼土ブロック・粘土粒子・灰少量、ロームブロック・炭化物微量 |

ビット 10か所。すべてのビットで新旧関係が確認でき、古い時期のビットは番号の前にBを、新しい時期のビットは番号の前にCを付け報告する。BP1～BP4は深さ18～54cmで、規模や配置から主柱穴である。BP5は深さ56cmで、南壁際の竈と向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うビットと考えられる。CP1～CP4は深さ56～80cmで、規模や配置から主柱穴である。CP5は深さ50cmで、南壁際の竈と向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うビットと考えられる。BP5、CP1～CP5の底面では柱のあたりを確認した。BP1～BP5の第2～7層、CP1～CP5の第1～5層はすべて、柱抜き取り後の埋土である。

ビット土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

覆土 9層に分層できる。ロームブロックなどが含まれる層が不規則に堆積していることから埋め戻されている。第10～18層は貼床の構築土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------------|-------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 2 黒暗褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量 |
| 3 黒暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 8 暗褐色 | 焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 4 黒暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子・粘土粒子微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量 | 10 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量(締まり強い) |

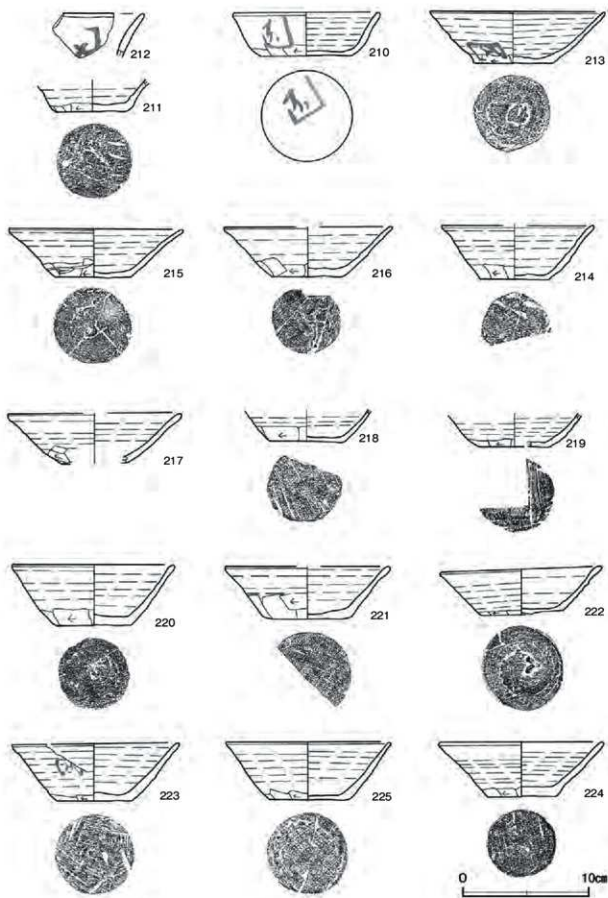
11	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量 (締まり強い)	15	褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
12	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量	16	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、粘土粒子微量
13	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	17	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
14	黒褐色	灰少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	18	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 659 点 (坏 74、高台付坏 10、蓋 11、甕類 564)、須恵器片 856 点 (坏 282、高台付坏 21、蓋 26、壺 14、甕類 503、甌 10) が、床面から覆土全体に散乱した状態で出土している。210・213 は墨書されたほぼ彩色の坏で、西壁の中央部の壁溝底面から出土しており、遺棄されたものと考えられる。225・234・239 は柱穴の埋土の上層からそれぞれ出土しており、柱を抜き取った後、意図的に投棄されたものと思われる。そのほかの多くの土器は破片で覆土全体から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

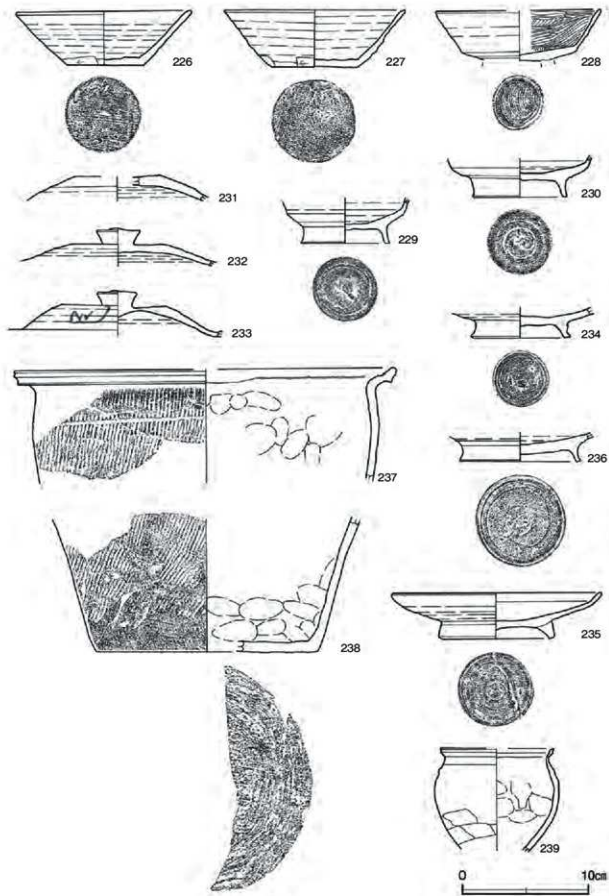
所見 本跡は第 3082A 号竪穴建物跡を四方に拡張したものである。主軸を変えていないことや、第 3082A 号竪穴建物跡の床面を利用していることなどから、本跡への建て替えは第 3082A 号竪穴建物廃絶から連続していたと考えられる。時期は、出土土器から 9 世紀中葉と考えられる。

第 3082C 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 123・124 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
210	須恵器	坏	11.6	3.5	7.2	長石・石英・黒色粒子	橙	普通	体部下端手持りへり開り 底部一方方向へり開り 体部外面・底部に墨書 [記]	壁溝底面	80% PL41
211	須恵器	坏	-	(26)	5.8	長石・石英・黒色粒子	にぶい黄	普通	体部下端手持りへり開り 底部一方方向へり開り	覆土中層	40%
212	須恵器	坏	-	(3.5)	-	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	底部ロゴナダ 体部外面に墨書 [記]	覆土中層	5% 新治遺
213	須恵器	坏	13.8	4.2	6.2	長石・石英・雲母・細砂	青黒	普通	体部下端手持りへり開り 底部一方方向へり開り 体部外面に墨書 [記]	壁溝底面	80% PL41
214	須恵器	坏	[120]	4.8	[56]	長石・石英・雲母	暗灰	普通	体部下端手持りへり開り 底部へり開り後、一方方向へり開り	覆土中層	37% 新治遺
215	須恵器	坏	13.8	4.0	6.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下端手持りへり開り 底部へり開り後、一方方向へり開り	覆土中層	40% 新治遺
216	須恵器	坏	[132]	4.0	5.6	長石・石英・雲母	暗灰	普通	体部下端手持りへり開り 底部へり開り後、二方向へり開り	覆土上層	37% 新治遺
217	須恵器	坏	[138]	5.0	[54]	長石・石英	暗灰	普通	体部下端手持りへり開り	覆土上層	30% 新治遺
218	須恵器	坏	-	(2.7)	6.0	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰白	普通	体部下端手持りへり開り 底部へり開り後、一方方向へり開り	床面	37% 新治遺
219	須恵器	坏	-	(2.7)	[58]	長石・石英・雲母	暗灰	普通	体部下端手持りへり開り 底部へり開り後、一方方向へり開り	覆土中層	37% 新治遺
220	須恵器	坏	[128]	4.8	5.8	長石・石英・雲母・細砂	黄灰	普通	体部下端手持りへり開り 底部へり開り後、一方方向へり開り	覆土下層	60% 新治遺
221	須恵器	坏	[129]	4.2	[70]	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰	普通	体部下端手持りへり開り 底部へり開り後、一方方向へり開り	覆土上層	60% PL40 堀之内遺
222	須恵器	坏	12.5	3.8	6.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	黄灰	普通	体部下端手持りへり開り 底部へり開り後、一方方向へり開り	覆土上層	70% PL40 新治遺
223	須恵器	坏	[132]	4.7	6.2	長石・石英・雲母・細砂	灰	普通	体部下端手持りへり開り 底部多方向へり開り 体部外面に墨書 [記]	覆土下層	70% PL40 新治遺
224	須恵器	坏	12.7	4.4	5.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰	普通	体部下端手持りへり開り 底部へり開り後、一方方向へり開り	覆土下層	70% PL40 新治遺
225	須恵器	坏	[129]	4.6	6.4	長石・石英・雲母・細砂	灰	普通	体部下端手持りへり開り 底部へり開り後、一方方向へり開り	CP1 覆土上層	70% PL40 新治遺
226	須恵器	坏	13.6	4.8	6.2	長石・石英・雲母・細砂	灰	普通	体部下端手持りへり開り 底部へり開り後、二方向へり開り	覆土中層	70% PL40 新治遺
227	須恵器	坏	14.2	4.6	6.7	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰白	普通	体部下端手持りへり開り 底部へり開り後、二方向へり開り	壁溝覆土中層	80% PL40 新治遺
228	土師器	高台付坏	[130]	(4.1)	-	長石・石英・細砂	明赤黄	普通	体部下端回転へり開り 底部糸切り後、高台筋付け	覆土下層	60%
229	須恵器	高台付坏	-	(3.6)	7.0	長石・石英・細砂	黄灰	普通	底部回転へり開り後、高台筋付け	床面	40% 新治遺
230	須恵器	高台付坏	-	(3.3)	7.4	長石・石英・細砂	黄灰	普通	底部回転へり開り後、高台筋付け	覆土下層	37% 新治遺
231	須恵器	蓋	-	(2.1)	-	長石・石英・雲母・細砂	黄灰	普通	天井部回転へり開り	覆土中層	50% 新治遺
232	須恵器	蓋	-	(3.0)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	天井部回転へり開り	覆土中層	27% 新治遺
233	須恵器	蓋	-	(3.6)	-	長石・石英・雲母	灰白	普通	天井部回転へり開り 天井部外面に墨書 [記]	覆土中層	60% 新治遺
234	須恵器	壺	-	(2.5)	7.0	長石・石英・雲母	にぶい黄	普通	底部回転へり開り後、高台筋付け	CP P 4 覆土上層	30% 新治遺
235	須恵器	壺	16.5	3.7	[92]	長石・石英・雲母・細砂	にぶい橙	普通	体部下端回転へり開り 底部回転へり開り後、高台筋付け	床面	60% PL43 新治遺
236	須恵器	壺	-	(2.4)	9.4	長石・石英	暗灰	普通	底部回転へり開り後、高台筋付け	覆土下層	47% 新治遺
237	須恵器	鉢	[298]	(9.0)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	暗灰	普通	口縁部外・内面磨ナダ 体部外面縦位の平行埋土 体部内面指面	床面	10% 新治遺
238	須恵器	鉢	-	(10.2)	[176]	長石・石英・雲母	灰	普通	体部外面斜位の平行埋土 体部外面下層縦位のへり開り 体部内面当て具痕	床面	10% 新治遺
239	土師器	小形甕	[90]	(8.3)	-	長石・石英・雲母	明黄	普通	口縁部外・内面磨ナダ 体部外面斜位のへり開り 体部内面当て具痕	B P 1 覆土上層	30%



第 123 图 第 3082C 号竖穴建物跡出土遺物実測图 (1)



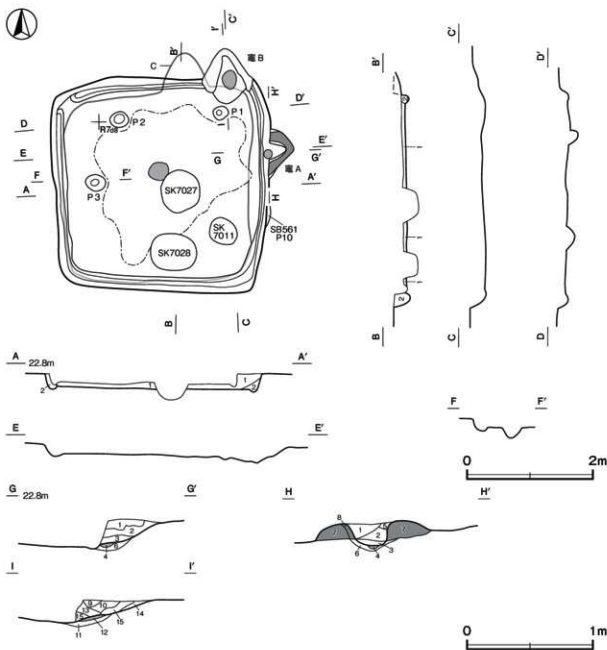
第 124 图 第 3082C 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (2)

第 3084A・3084B 号竪穴建物跡 (第 125 図 PL17)

位置 12 区中央部の R 7 d 8 区, 標高 22 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 当初は 1 棟の竪穴建物跡として調査を進めたが, 第 3084B・3084C 号竪穴建物へと 2 回の建て替えを行っていたと判断した。第 3084A 号竪穴建物跡から第 3084B 号竪穴建物への建て替えは, 規模は変えないで, 竈の位置を東壁から北東コーナー部へと変えたものである。そのほか, 第 561・575 号据立柱建物跡, 第 7019 号土坑を掘り込み, 第 3084C 号竪穴建物, 第 7011・7027・7028 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第 3084A 号竪穴建物跡と第 3084B 号竪穴建物跡の規模は同じで, 長軸 3.42 m, 短軸 3.38 m の隅丸方形である。主軸方向は第 3084A 号竪穴建物跡が $N-82^{\circ}-E$ で, 第 3084B 号竪穴建物跡が $N-1^{\circ}-E$ である。壁は高さ 18cm で, ほほ直立している。壁溝が北西コーナー部を除いて, 壁下に巡っている。



第 125 図 第 3084A・3084B 号竪穴建物跡実測図

床 地山を削り、平坦に整えられている。壁際を除いて、中央部が踏み固められている。壁溝が壁下に巡っている。床面の中央部に径30cmほどの焼土範囲を確認したが、性格は不明である。

竈 第3084A号竈穴建物跡の竈は、東壁の中央からやや北寄りに付設されている。建て替えにより袖部や火床部の西半分は壊され、袖部と火床部の東半分だけが遺存している。燃焼部幅は28cmで、火床部は地山から16cm掘りくぼめ、ロームブロック・粘土粒子を含む第6層を埋土して構築されている。袖部は地山を整え、その上にロームブロック・粘土ブロックを中量含む第7・8層を積み上げて構築されている。火床面は第4層上面で、火熱を受け赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は壁外に40cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。第3084B号竈穴建物跡の竈は北東コーナー部に付設されている。燃焼部幅は46cmで火床部は床面から16cm掘りくぼめ、ロームブロック・粘土粒子を含む第11層を埋土して構築されている。火床面は第12層上面で、火熱を受け赤変硬化している。煙道部は壁外に50cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

電土層解説

1	にぶい褐色	焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量	8	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子微量
2	焼灰色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ロームブロック微量	9	暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量
3	暗褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量	10	黒褐色	ロームブロック中量、粘土粒子少量、焼土ブロック微量
4	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量	11	暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量
5	暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物・粘土粒子少量	12	暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック微量
6	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	13	にぶい褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土粒子微量
7	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量	14	暗褐色	炭化粒子・粘土粒子微量
			15	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、粘土粒子微量

ピット 3か所。P1・P2は深さ15cm・13cmで、配置から主柱穴と考えられる。南側にも2か所の主柱穴が考えられるが、ピットは確認されなかった。P3は深さ17cmで、西壁寄りの竈と向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 上部を第3084C号竈穴建物への建て替えで大きく削られ、2層だけが確認されている。ロームブロックを含む暗褐色土が全体を覆っており、埋め戻されている。

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	2	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
---	-----	-----------------------	---	-----	------------------

遺物出土状況 土師器片19点(坏5、高台付椀2、甕類12)、須恵器片8点(坏3、甕類5)が、まばらな状態で出土している。いずれも小片で図示できない。

所見 時期は、第3084C号竈穴建物に掘り込まれていることや出土土器から10世紀中葉と考えられる。

第3084C号竈穴建物跡(第126・127図 PL17)

位置 12区中央部のR7d8区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3084B号竈穴建物跡から本跡への建て替えは、第3084B号竈穴建物跡を埋め戻し、主軸方向はほとんど変えないで、四方を一回り小さくして構築されている。そのほか、第7011・7027・7028号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.04m、短軸2.96mの隅丸方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁は高さ14cmで、ほぼ直立している。

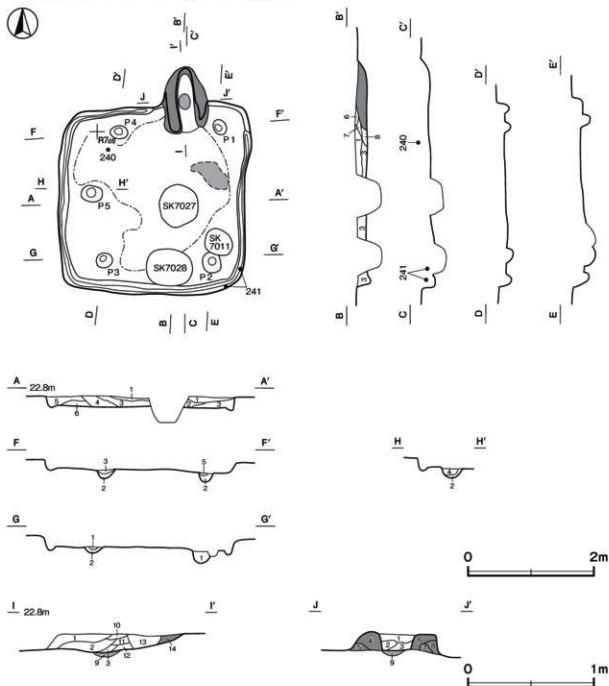
床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が北東コーナー部を除いて、壁下に巡っている。床面の中央から西寄りに、長径70cm、短径35cmの範囲で焼土を確認した。性格は不明である。

竈 北壁の中央からやや東寄りに付設されている。規模は焚口部から煙道部まで106cm、燃焼部の幅は30cmである。火床部は地山を6cm掘りくぼめて構築されている。袖部は地山を削り出し、その上に粘土ブロックなどを含む第4～8層を積み上げて構築されている。第12層は焼土ブロックを中量含む層で、天井部の崩落土と

考えられる。火床面は第9層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ46cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|--------------------------------|-----------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | 焼土粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量 | 9 赤褐色 | 焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 10 褐色 | 焼土ブロック多量、ロームブロック・粘土粒子少量 |
| 3 にぶい褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量、粘土粒子微量 | 11 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化物微量 | 12 にぶい暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、粘土粒子微量 |
| 5 褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量 | 13 灰褐色 | ロームブロック少量、粘土粒子微量 |
| 6 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 14 暗褐色 | 粘土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | | |
| 8 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量、 | | |



第126図 第3084C号竈穴建物跡実測図

ピット 5か所。P1～P4は深さ12～20cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ16cmで、西壁寄りの中央に位置していることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P1からP5の第1～5層は、柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量、
焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | | |

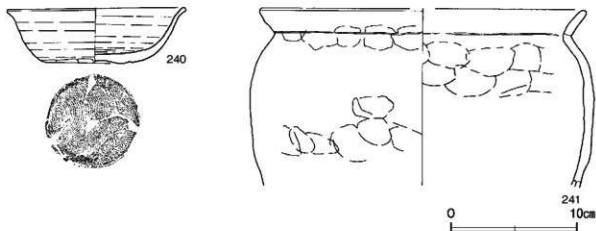
覆土 8層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒暗褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 4 にぶい褐色 | ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量 | 8 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片169点（坏46、高台付坏5、高台付碗3、小皿5、甕類110）、須恵器片75点（坏30、蓋2、甕類42、瓶1）が、覆土全体からまばらな状態で出土している。240はほぼ完形で覆土上層から出土していることから、本跡がある程度埋まってから遺棄されたかあるいは投棄されたものと思われる。そのほかの土器片は破片であり、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から10世紀中葉と考えられる。



第127図 第3084C号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3084C号竪穴建物跡出土遺物観察表（第127図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	使用	手法の特徴ほか	出土位置	備考
240	土師器	坏	14.0	4.5	7.4	長石・石英・ にぶい黄澄	灰褐色	普通	体部下端手持ちへつ張り 底部回転糸切り	覆土上層	90% PL41
241	土師器	甕	[25.4]	[14.6]	-	長石・石英・ 雲母・黒色粒子	灰褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面ヘラナデ 指原痕	覆土下層	10%

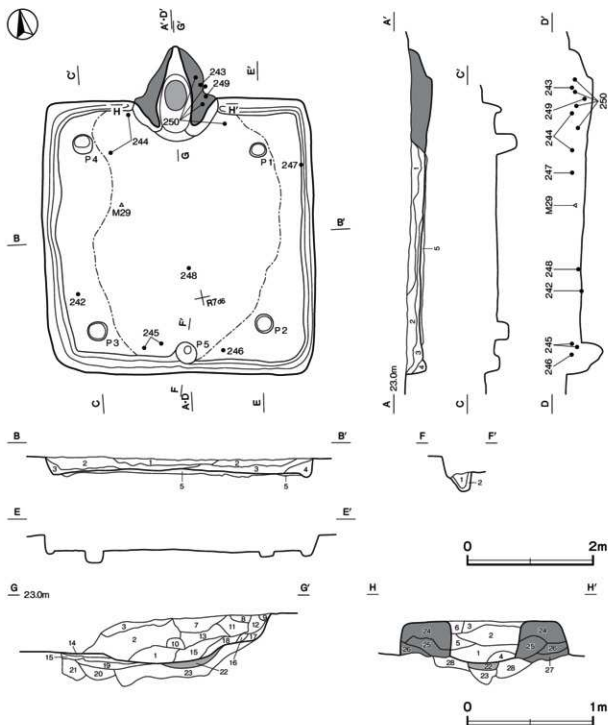
第3085号竪穴建物跡（第128・129図 PL17）

位置 12区中央部のR7c5区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 長軸4.36m、短軸4.32mの方形で、主軸方向はN-9°-Eである。壁は高さ20～25cmで、ほぼ直立している。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。階溝が全壁下に巡っている。貼床は成形された地山の上にロームブロックを中量含み締まりの強い第5層を積み上げ構築されている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで144cmで、燃焼部の幅は50cmである。火床部は地山を25cm掘りくぼめて、ロームブロックを含む第23・28層を埋土して構築されている。袖部は地山を削り出し、その上に粘土ブロックなどを含む第24～27層を積み上げて構築されている。右袖部の底面に小形甕が倒位に置かれた状態で確認されている。右袖部の構築材の中からは須恵器甕の破片も数点出土しており、袖部の補強に用いられたものと思われる。第1・10・11層は焼土ブロックを中量含む暗赤褐色土、明赤褐色土であり、天井部の崩落土である。火床面は第22層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ46cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。



第128図 第3085号竈穴建物跡実測図

覆土層解説

1 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量	18 灰褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子微量
2 褐	炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック少量	19 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
3 にぶい褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	20 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
4 黒褐色	炭化粒子中量、粘土粒子微量	21 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土粒子微量
5 灰褐色	粘土ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子微量	22 暗赤褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量、焼土粒子微量
6 暗褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量	23 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
7 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量	24 灰褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
8 灰褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、焼土粒子微量	25 灰褐色	焼土ブロック多量、焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
9 灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	26 にぶい褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
10 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量	27 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量
11 明赤褐色	焼土ブロック中量、粘土ブロック少量	28 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量
12 褐色	ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量		
13 灰黄褐色	焼土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量		
14 灰褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量		
15 黒褐色	粘土ブロック少量、ローム粒子微量		
16 灰褐色	炭化粒子少量、粘土粒子微量		
17 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量		

ピット 5か所。P1～P4は深さ14～32cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ34cmで、南壁際の竈と向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P5の第1・2層は柱の抜き取り痕である。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	2 黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
-------	------------------	-------	-----------------

覆土 4層に分層できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

第5層は貼床の構築土である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・炭化物中量	4 にぶい褐色	ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量(綿まり強い)
3 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 土師器片184点(坏32,高台付坏2,甕類150),須恵器片251点(坏95,高台付坏6,蓋4,鉢1,短頸壺1,甕類142,瓶2),金属製品1点(刀子)が、床面から覆土全体に散乱した状態で出土している。

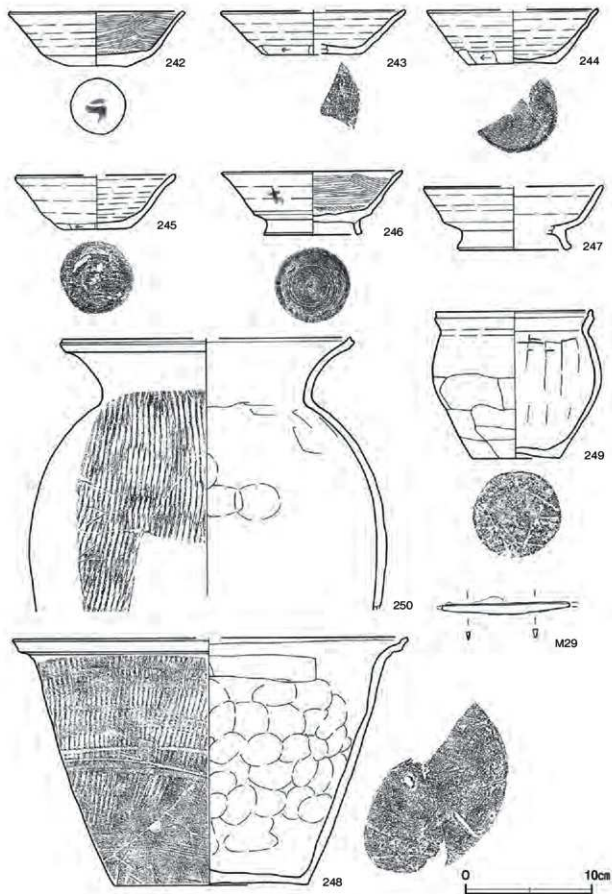
242はほぼ完形で、床面から出土しており、遺棄されたものと思われる。そのほかの遺物は破片で、覆土全体から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第3085号竈穴建物跡出土遺物観察表(第129図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
242	土師器	坏	137	4.3	4.6	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	底部回転へつくり 体部内面へつくり 黒色処理 底面に「壺書」ラ 裏台貼付け部を磨って坏として再利用	床面	90% PL41
243	須恵器	坏	[156]	3.5	[7.6]	長石・石英・雲母	灰黄褐色	普通	体部下端手持ちへつくり 底部へつくり後、二方向のへつくり	覆土中層	29% 新治窯
244	須恵器	坏	[134]	4.3	[7.2]	長石・石英・雲母	灰黄褐色	普通	体部下端手持ちへつくり 底部へつくり後、一方向のへつくり	覆土上層	29% 新治窯
245	須恵器	坏	[124]	4.2	5.4	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰	普通	体部下端手持ちへつくり 底部へつくり後、二方向のへつくり	覆土中層	87% PL41 新治窯
246	土師器	高台付坏	[142]	5.1	7.8	長石・石英	にぶい褐色	普通	体部下端回転へつくり 底部回転へつくり後、高台貼付け 体部内面へつくり 黒色処理 体部外面に「壺書」ラ	覆土中層	70% PL41
247	須恵器	高台付坏	[142]	5.1	[8.5]	長石・石英・雲母・黒色粒子	暗灰青	普通	体部下端回転へつくり 底部回転へつくり後、高台貼付け	覆土中層	10% 新治窯
248	須恵器	鉢	[312]	19.7	[15.6]	長石・石英・雲母	暗灰青	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面部位の平行引き 体部外面下縁へつくり 体部内面当り	床面	50% PL44 新治窯
249	土師器	小形甕	12.4	11.7	6.9	長石・石英・粗織	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部内面部位のへつくり 体部内面部位のへつくり	甕口底面	90% PL43
250	須恵器	甕	[228]	(21.8)	-	長石・石英・雲母・黒色粒子	褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面部位の平行引き 横位のツクリ 体部内面当り	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M29	刀子	(10.2)	0.9	0.2-0.3	(7.9)	鉄	先端部欠損 刃部断面三角形 片側 各部断面四角形	覆土中層	PL47



第 129 图 第 3085 号竖穴建物跡出土遺物実測図

第 3086 号竪穴建物跡 (第 130・131 図 PL18)

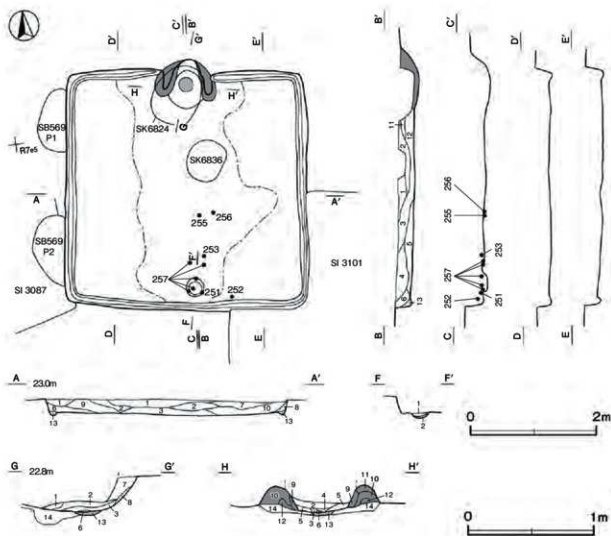
位置 12区中央部の R7e5 区、標高 22 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 3087 号竪穴建物跡、第 569 号掘立柱建物跡を掘り込み、第 6824・6836 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.86 m、短軸 3.84 m の方形で、主軸方向は N-4°-E である。壁は高さ 18~28cm で、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が壁下に巡っている。

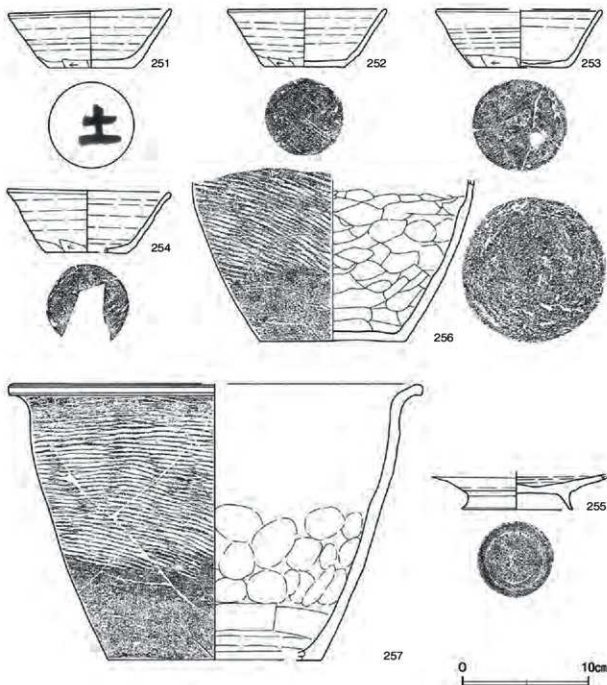
竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで 80cm で、燃焼部幅は 44cm である。火床部は地山を 8cm 掘りくぼめて、ロームブロックなどを含む第 13 層を埋土して構築されている。袖部は地山を掘り込み、ロームブロックや粘土ブロックなどを含む第 14 層を埋土し、その上に粘土ブロックなどを含む第 9~12 層を積み上げて構築されている。第 2・5 層は焼土ブロックを中量含む暗赤褐色土であり、天井部の崩落土である。火床面は第 13 層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ 22cm 掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。



第 130 図 第 3086 号竪穴建物跡実測図

甕土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------|---------|--------------------------------|
| 1 白黄褐色 | 粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | 炭化物中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土ブロック・炭化物中量、ロームブロック・粘土ブロック少量 | 9 暗褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 3 灰褐色 | 焼土ブロック・炭化物・灰少量、ローム粒子微量 | 10 灰褐色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 11 灰褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック・灰中量、ロームブロック・炭化物少量 | 12 暗褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 6 灰褐色 | 灰中量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 | 13 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物・灰少量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子少量、炭化物微量 | 14 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物・粘土粒子少量 |



第131図 第3086号竪穴建物跡出土遺物実測図

ビット P1は深さ14cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うビットと考えられる。P1の第1・2層は柱抜き取り後の埋土である。

ビット土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 2 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

覆土 13層に分類できる。ロームブロックなどを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 8 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
 2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子・粘土粒子微量 9 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量
 3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 10 にぶい褐色 ロームブロック中量
 4 暗褐色 ロームブロック、焼土粒子少量 11 にぶい褐色 ロームブロック・炭化粒子少量、粘土粒子微量
 5 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 12 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
 6 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 13 褐色 ロームブロック中量、粘土粒子微量
 7 暗褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片110点(坏30, 甕類80), 須恵器片66点(坏29, 高台付坏3, 蓋4, 盤1, 甕類28, 瓶1)がまばらな状態で出土している。251・253はほぼ完形で、床面から出土しており、遺棄されたものと考えられる。そのほかの土器は破片で床面や覆土中から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀前半と考えられる。

第3086号竪穴建物跡出土遺物観察表(第131図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
251	須恵器	坏	130	4.7	6.7	長石・石英・雲母・細礫	灰黄	普通	体部下端手持ちへう割り 底面一方向のへう割り 底面に墨書「土」文字正位	床面	100% PL41 新治産
252	須恵器	坏	124	4.7	6.2	長石・石英・雲母・細礫	灰黄褐	普通	体部下端手持ちへう割り 底面へう切り後、一方向のへう割り	覆土中層	80% PL41 新治産
253	須恵器	坏	130	4.7	7.5	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰黄褐	普通	体部下端手持ちへう割り 底面へう切り後、一方向のへう割り	床面	70% PL41 新治産
254	須恵器	坏	128	5.1	6.6	長石・石英・細礫	褐色	普通	体部下端手持ちへう割り 底面へう切り後、一方向のへう割り	覆土中	70% 新治産
255	須恵器	盤	-	2.7	8.6	長石・石英・雲母	灰	普通	体部下端回転へう割り 底部回転へう割り後、高台貼付け	床面	50% 新治産
256	須恵器	甕	-	(12.9)	11.5	長石・石英・黒色粒子・細礫	灰	普通	体部外面斜位の平行叩き、体部下位へう割り 体部内面直線、体部下位へうナデ	床面	30% 新治産
257	須恵器	瓶	[32.0]	22.0	17.0	長石・石英	黄灰	普通	体部外面直線の平行叩き、体部下位へう割り 体部内面直線、体部下位へうナデ	床面	64% PL44 新治産

第3089号竪穴建物跡(第132・133図 PL19)

位置 12区中央部のR7b3区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3090・3097号竪穴建物跡、第570号掘立柱建物跡を掘り込み、第6858号土壇に掘り込まれている。

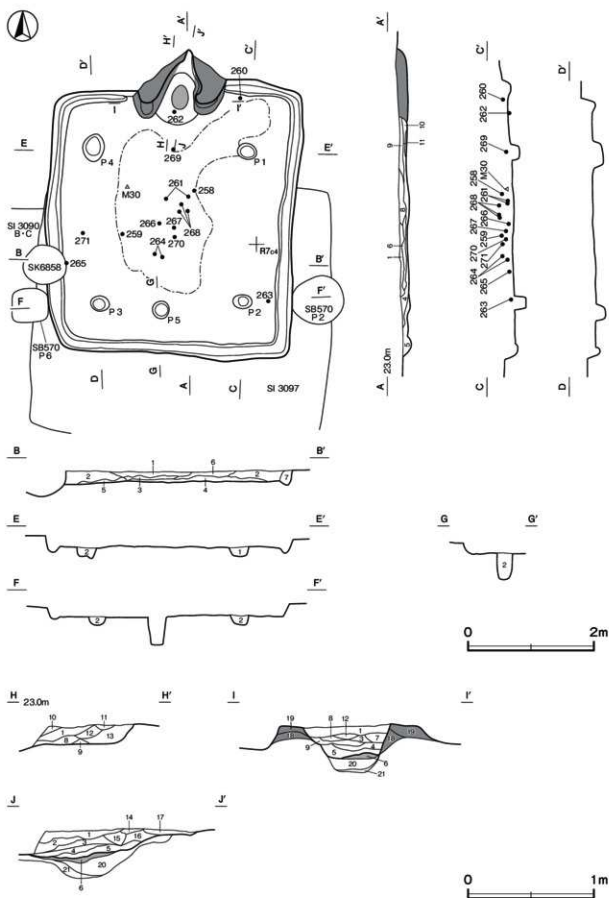
規模と形状 長軸4.46m、短軸3.94mの隅丸方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁は高さ12~18cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで132cmで、燃焼部幅は68cmである。火床部は地山を25cm掘りくぼめて、ロームブロック・粘土ブロックなどを含む第20・21層を埋土して構築されている。袖部は地山を掘り残して基部を造り、その上にロームブロックや粘土ブロックなどを含む第18・19層を積み上げて構築されている。第3・7・8層は焼土ブロックを中量含む暗赤褐色土であり、天井部の崩落土である。火床面は第6層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ46cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

覆土土層解説

- 1 灰褐色 焼土粒子・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 4 褐色 ロームブロック・粘土粒子少量
 2 にぶい褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 5 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量、粘土粒子微量
 3 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 6 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量



第 132 图 第 3089 号竖穴建物跡实测图

7	赤暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	15	褐 灰 色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
8	赤暗赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・粘土粒子少量、炭化粒子微量	16	灰 褐 色	ロームブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
9	暗 褐 色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量	17	にぶい褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
10	にぶい褐色	ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量	18	灰 褐 色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
11	灰 黄 褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	19	にぶい褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量、炭化粒子微量
12	褐 灰 色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	20	暗 褐 色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量
13	暗 褐 色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	21	褐 色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
14	暗 灰 褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量			

ピット 5か所。P1～P4は深さ15～18cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ44cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P1～P5の第1・2層は柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

1	暗 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	2	褐 色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
---	-------	------------------	---	-----	------------------

覆土 11層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1	暗 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子少量	7	褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量
2	暗 褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量	8	黒 褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
3	暗 褐 色	ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量	9	暗 褐色	ロームブロック・粘土粒子少量
4	黒 褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	10	褐 色	ロームブロック中量、粘土粒子少量
5	暗 褐 色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	11	灰 黄褐色	ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量、炭化粒子微量
6	にぶい褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量			

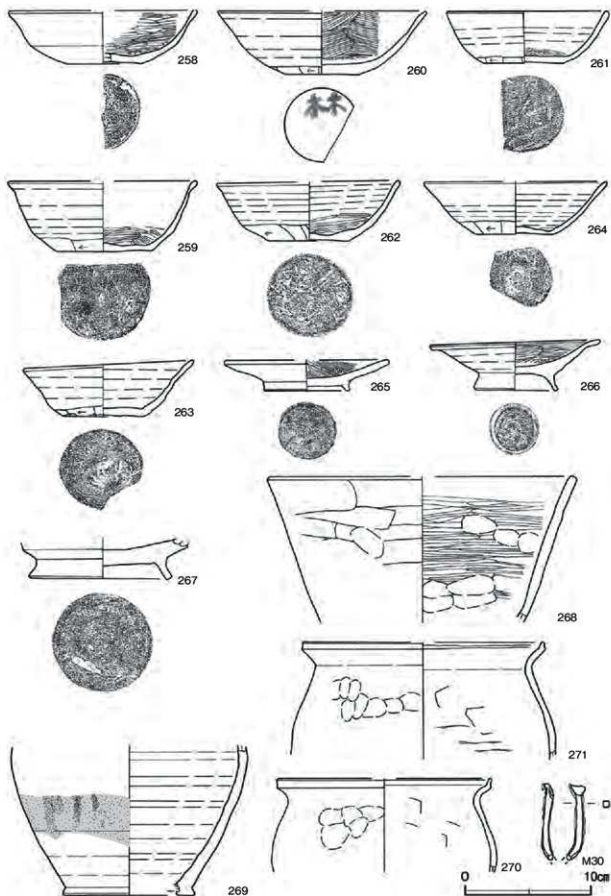
遺物出土状況 土師器片 519点（坏119、高台付坏4、皿4、高台付皿2、高坏2、鉢2、甕類386）、須恵器片 233点（坏123、高台付坏9、蓋8、盤2、高盤1、長頸壺1、甕類87、瓶2）、金属製品1点（釘）が覆土全体から散乱した状態で出土している。262はほぼ完形で、竈の底面から出土しており、遺棄されたものと考えられる。そのほかの土器は覆土全体から破片で出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後半と考えられる。

第3089号竈穴建物跡出土遺物観察表（第133図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
258	土師器	坏	[146]	4.3	5.9	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面コロナテ 体部内面へう磨き後、黒色処理 底部回転へう磨き	覆土上層	20%
259	土師器	坏	[148]	5.7	[7.6]	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端手持ちへう磨き 体部内面へう磨き後、黒色処理 底面一方方向のへう磨き	覆土上層	30%
260	土師器	坏	[164]	5.1	6.0	長石・石英	にぶい褐色	普通	体部下端手持ちへう磨き 体部内面へう磨き後、黒色処理 底面回転へう磨き	覆土中層	60%
261	土師器	坏	12.6	4.1	6.4	長石・石英	にぶい褐色	普通	体部下端手持ちへう磨き 体部内面へう磨き後、黒色処理 底面一方方向のへう磨き	覆土上層	60% PL.42
262	土師器	坏	[146]	4.8	6.8	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	体部下端手持ちへう磨き 体部内面へう磨き後、黒色処理 底面一方方向のへう磨き	竈底面	80% PL.42
263	須恵器	坏	13.2	4.9	6.6	長石・石英・雲母	橙	普通	体部下端手持ちへう磨き 底部へう磨き後、黒色処理 底面一方方向のへう磨き	覆土下層	70% PL.42 新治産
264	須恵器	坏	[144]	5.2	6.0	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	体部内面へう磨き後、黒色処理 底部回転へう磨き後、高台付付け 体部内面へう磨き後、黒色処理 底面一方方向のへう磨き	覆土中層	70% 新治産
265	土師器	高台付皿	[127]	2.4	6.7	長石・石英	にぶい褐色	普通	体部内面へう磨き後、黒色処理 底部回転へう磨き後、高台付付け 体部内面へう磨き後、黒色処理 底面一方方向のへう磨き	覆土下層	30%
266	土師器	高台付皿	13.4	5.0	6.4	長石・石英	にぶい褐色	普通	体部内面へう磨き後、黒色処理 底面一方方向のへう磨き 高台付付け	覆土中層	60% PL.42
267	須恵器	皿	-	(3.2)	[15.6]	長石・石英・雲母	灰	普通	底面回転へう磨き後、高台付付け 内面に焼成	覆土中層	40% 新治産
268	土師器	鉢	[24.0]	(12.6)	-	長石・石英	浅黄褐色	普通	体部外面磨き後のヘラナテ 体部内面へう磨き	覆土上層	10%
269	須恵器	長頸瓶	-	(12.1)	[10.4]	長石・石英	褐灰色	普通	体部外面下位回転へう磨き後、体部内面コロナテ 自然釉産	覆土中層	20% PL.43 瓶の内面
270	土師器	甕	[16.8]	(7.4)	-	長石・石英・細礫	明赤褐色	普通	体部外面ナテ 指頭産 体部内面ヘラナテ	覆土中層	10%
271	土師器	甕	[19.0]	(9.3)	-	長石・石英・細礫	灰褐色	普通	体部外面ナテ 指頭産 体部内面ヘラナテ	覆土中層	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M30	釘	(6.1)	(1.4)	(0.6)	(12.3)	鉄	先端部欠損 頭部肥厚 先端部深曲 断面四角形	覆土中層	



第 133 图 第 3089 号竖穴建物跡出土遺物実測図

第3091号竪穴建物跡 (第134・135図 PL19)

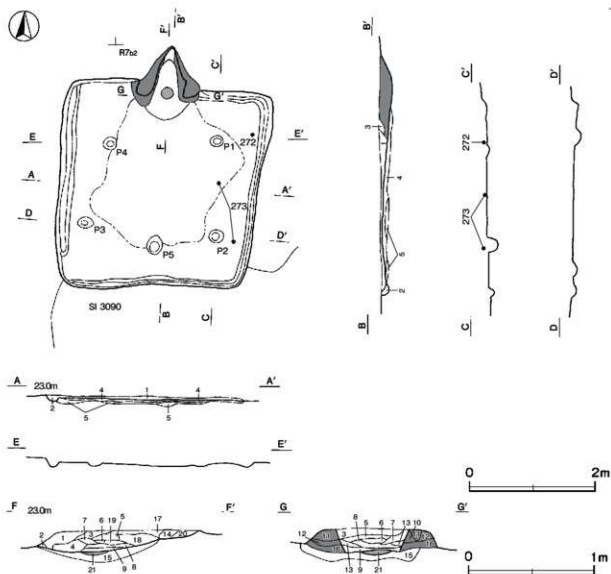
位置 12区中央部のR7b2区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3090号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸328m、短軸320mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。壁は高さ3~11cmで、外傾している。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床はロームブロックを含む締まりの強い第4・5層を積み上げ構築されている。壁溝が北壁西側を除いて、壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで120cmで、燃燒部幅は46cmである。火床部は地山を14cm掘りくぼめて、ロームブロックを中量含む第15層を埋土して構築されている。袖部は地山や第15層の埋土の上にロームブロックや粘土ブロックなどを含む第10~12・16層を積み上げて構築されている。第6・19層は焼土ブロックを中量含む暗赤褐色土であり、天井部の崩落土である。火床面は第21層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ56cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。



第134図 第3091号竪穴建物跡実測図

甍土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量	12 灰褐色	粘土ブロック中量・ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 灰褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	13 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	14 灰褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土粒子微量
4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量	15 暗褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
5 灰褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック・粘土粒子少量
6 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量	17 灰褐色	ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量	18 灰褐色	粘土粒子中量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
8 褐色	粘土粒子中量、ローム粒子少量	19 暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量
9 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	20 赤褐色	焼土粒子中量、ローム粒子・粘土粒子少量
10 暗赤褐色	焼土粒子中量、ロームブロック・粘土ブロック少量	21 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子少量
11 濃い赤褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量		

ピット 5か所。P1～P4は深さ6～12cmで、配置から支柱穴である。P5は深さ18cmで、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

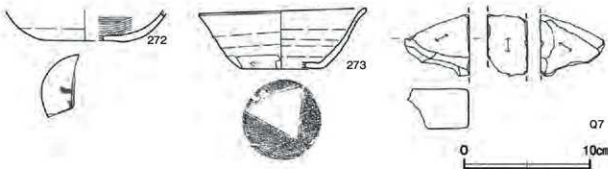
覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含む層が広く堆積していることから、埋め戻されている。第4・5層は貼床の構築土である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	4 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量（締まり強い）
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	5 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量（締まり強い）
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量		

遺物出土状況 土師器片131点（坏14、高台付坏4、皿1、高坏1、鉢1、甕類110）、須惠器片31点（坏21、高台付坏1、甕類9）、石器1点（砥石）がまばらな状態で出土している。273は床面から出土したものと覆土下層から出土したものが接合しており、割られてから投棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第135図 第3091号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3091号竪穴建物跡出土遺物観察表（第135図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
272	土師器	坏	-	(2.6)	(6.5)	長石・石英	に濃い黄褐色	普通	体部内面へう巻き後、黒色処理 底部赤切り		覆土下層	10%
273	須惠器	坏	13.6	4.9	6.2	長石・石英・雲母	灰白	普通	体部下端手持ちへう削り 底部へう切り後、一方向の削り		床面 覆土下層	70% PL42 新出
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考		
Q7	砥石	(49)	(5.1)	(3.1)	(809)	凝灰岩	紙面3面	他は鏡面	覆土中	PL46		

第 3093 号竪穴建物跡 (第 136 図 PL20)

位置 12 区中央部の R 6 d0 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 第 3092 号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西半部が調査区域外へ延びているため、南北軸 3.40 m で、東西軸は 1.46 m だけ確認した。方形で、主軸方向は N - 13° - W と推測される。壁は高さ 4 ~ 20 cm で、外傾している。

床 ほほ平坦で、踏み固められてはいない。

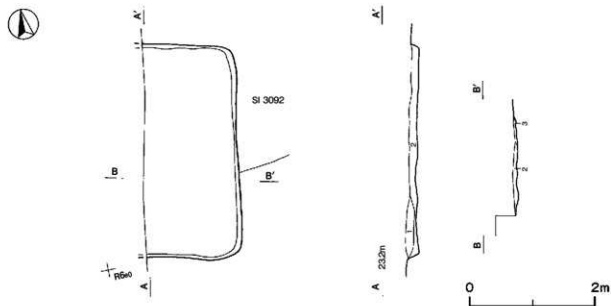
覆土 3 層に分層できる。ロームブロックを含む層が広く堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土器碎片 11 点 (坏 1, 甕類 10) が覆土中からまばらな状態で出土している。土器は小片のため、図示できない。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉と考えられる。



第 136 図 第 3093 号竪穴建物跡実測図

第 3094 A 号竪穴建物跡 (第 137 図)

位置 12 区中央部の R 7 d7 区、標高 23 m の平坦な台地上に位置している。

重複関係 当初は 1 棟の竪穴建物跡として調査を進めたが、建て替えが行われていることが判明し、古い竪穴建物跡を第 3094 A 号建物跡、新しい竪穴建物跡を第 3094 B 号竪穴建物跡として報告する。そのほか、第 6881 ~ 6883 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸 3.96 m、短軸 2.84 m の隅丸長方形で、主軸方向は N - 8° - E である。壁は削平されており、確認されていない。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周している。

竈 北壁の中央部から東寄りに付設されている。竈の上半部は削平されており、火床部や軸部の構築状況などは不明である。規模は焚口部から煙道部まで 108 cm で、煙道部は壁外へ 65 cm 掘り込まれている。

電土層解説

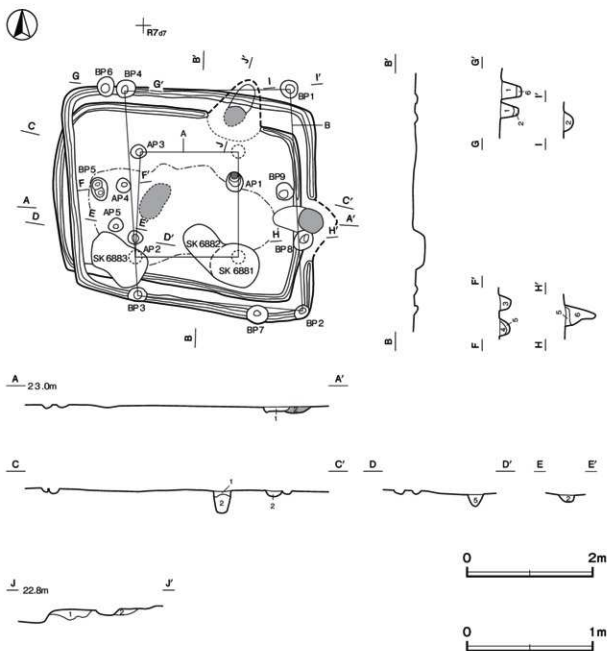
- 1 赤褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量 2 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所。配置などから古く考えられるピットにはAを新しいと考えられるピットにはBをピット番号の前に付け報告する。支柱穴はA P 3とA P 1の北に予想されるもので北側の列を、第6881号土坑と第6883号土坑の場所に南側の列を考える。A P 1は深さ36cmで、位置から補助柱穴と考えられる。A P 2～A P 5は深さ14～26cmで、補助柱穴と考えられる。A P 1・A P 2・A P 4・A P 5の第1～3・5層は柱抜き取り後の埋土である。A P 1では柱のあたりを確認した。

ピット土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量 5 に近い褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 6 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

覆土 遺構確認面において床が検出されたため、確認されなかった。



第137図 第3094A・3094B号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片4点(甕類)、須恵器片2点(坏、甕類)が、壁溝覆土や竈掘方から確認されているだけである。いずれも小片で図示できない。

所見 時期は、第3094B号竈穴建物跡に掘り込まれていることや出土土器から10世紀前葉と考えられる。

第3094B号竈穴建物跡(第137・138図 PL20)

位置 12区中央部のR7d7区、標高23mの平坦な台地上に位置している。

重複関係 第3094A号竈穴建物跡を掘り込み、第6881～6883号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 第3094A号竈穴建物跡の床を利用し、南北幅を0.64m拡張したものである。竈は北に位置するものから東のものへと変えている。長軸3.98m、短軸3.48mの隅丸長方形で、主軸方向はN-94°-Eである。壁は確認されていない。

床 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。壁溝が全周している。中央から西寄り、長径62cm、短径34cmほどの焼土範囲を確認した。性格は不明である。

竈 東壁の中央部からやや南寄りに付設されている。竈の上半部は削平されており、袖部や火床部の構築状況などは不明である。規模は焚口部から煙道部まで106cmで、煙道部は壁外へ40cm掘り込まれている。

竈土層解説

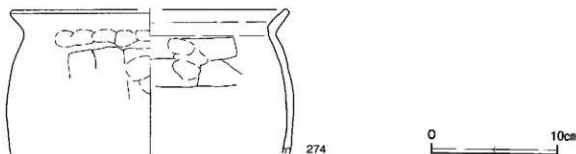
- 1 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量 2 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量

ピット 9か所。BP1～BP4は深さ18～32cmで、BP1は壁近くに、BP2～BP4は壁に接して位置し、4本柱として四角形を成すことから支柱穴と考えられる。BP5は深さ20cmで、西壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入口施設に伴うピットと考えられる。BP6・BP7は深さ30cm・25cmで、壁に接して位置しており、補助柱穴と考えられる。BP8・BP9は竈の近くに位置するピットで、性格は不明である。BP1・BP4～BP6・BP8・BP9の第1・2・4～6層は、柱抜き取り後の埋土である。

覆土 確認面において床が検出されたため、確認されなかった。

遺物出土状況 土師器片15点(坏5、甕類10)、須恵器片8点(坏2、甕類6)がまばらな状態で出土している。

所見 第3094A号竈穴建物跡の床を利用して建て替えられていることから、第3094A号竈穴建物跡から本跡への建て替えは連続して行われたと考えられる。時期は、出土土器から10世紀前葉と考えられる。



第138図 第3094B号竈穴建物跡出土遺物実測図

第3094B号竈穴建物跡出土遺物観察表(第138図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
274	土師器	甕	[21.8]	(11.5)	-	長石・石英・細礫	にふい 赤黒	普通	口縁部外・内面横子ナ 周リ 体部外面縦位のへう 指面痕	覆土中	10%

第 3096 号竪穴建物跡 (第 139 ~ 141 図)

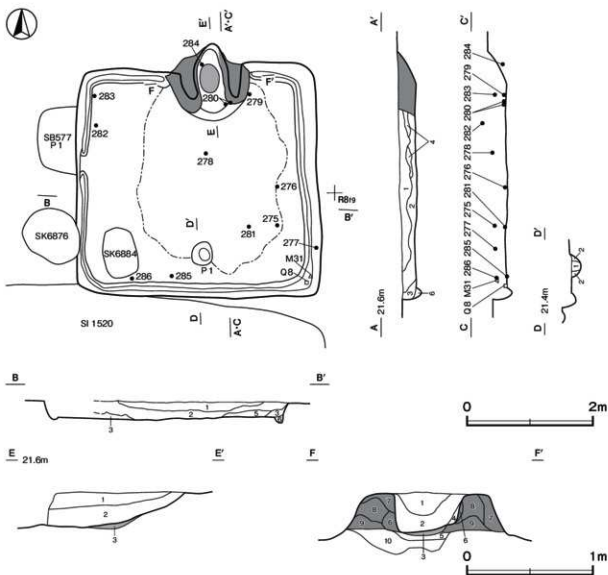
位置 12区中央部のR 8e8区、標高21mの台地端部に位置している。

重複関係 第1520号竪穴建物跡、第577号掘立柱建物跡を掘り込み、第6876-6884号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.86m、短軸3.74mの隅丸方形で、主軸方向はN-2°-Eである。壁は高さ14~30cmで、ほぼ直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が西壁の中央部を除いて、壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで124cmで、燃焼部幅は54cmである。火床部は地山を18cm掘りくぼめて、ロームブロックを含む第5・10層を埋土して構築されている。右袖部は地山を掘り残して基部を造り、両袖部はロームブロックや粘土ブロックなどを含む第6~9層を積み上げて構築されている。第2層は焼土ブロックを中量含む暗赤褐色土であり、天井部の崩落土である。火床面は第3層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ36cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。



第 139 図 第 3096 号竪穴建物跡実測図

覆土層解説

1 暗黄褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量	7 にぶい褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物少量	8 にぶい黄褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
3 赤褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック・炭化物少量	9 にぶい黄褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化物微量
4 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量	10 褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量、粘土粒子微量
5 灰褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量		
6 にぶい褐色	ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量		

ピット P1 は深さ 22cm で、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P1 の第 1 層は柱痕跡である。

ピット土層解説

1 暗褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック少量	2 暗黄褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
-------	--------------------	--------	------------------

覆土 6 層に分層できる。ロームブロックを含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	5 にぶい黄褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	6 褐色	ロームブロック中量
3 灰黄褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量		
4 灰褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子		

遺物出土状況 土師器片 113 点 (坏 13、高台付碗 2、小形甕 2、甕類 96)、須恵器片 153 点 (坏 55、高台付坏 3、蓋 8、盤 2、高盤 1、甕類 82、飯 2)、石器 1 点 (砥石)、金属製品 1 点 (刀子) が覆土全体から散乱した状態で出土している。279 はほぼ完形で床面から出土していることから、遺棄されたものと思われる。そのほかの遺物は破片で覆土全体から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

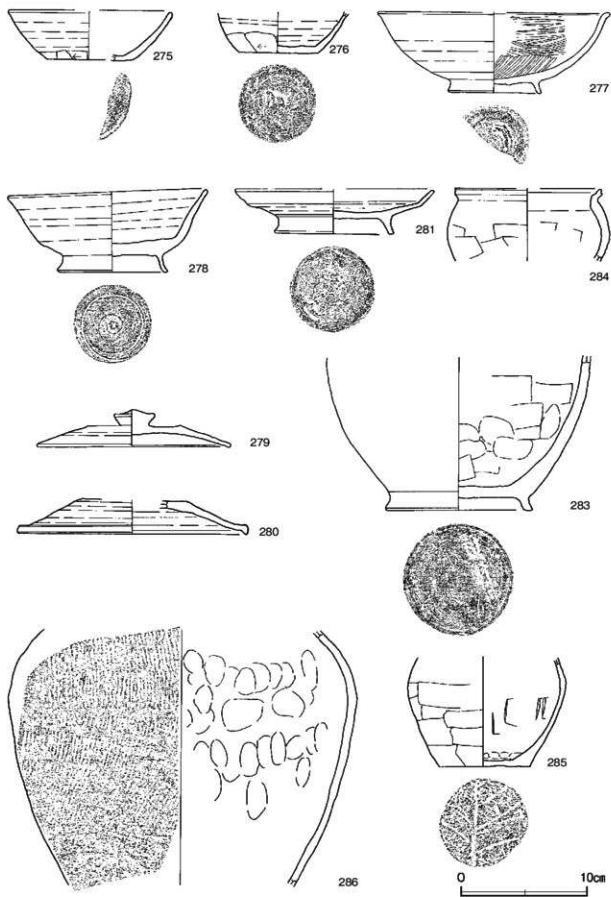
所見 時期は、出土土器から 9 世紀前葉と考えられる。

第 3096 号竈穴建物跡出土遺物観察表 (第 140・141 図)

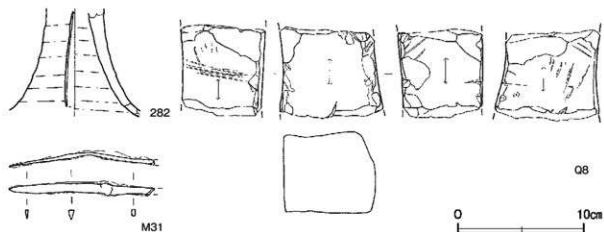
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
275	須恵器	坏	[126]	3.8	[6.8]	長石・石英・雲母	暗灰	普通	体部下端手持ちへう割り 底面一方向の割り	覆土中層	47% 新治産
276	須恵器	坏	-	[3.2]	6.2	長石・石英・細輝	褐灰	普通	体部下端手持ちへう割り へう切り洗、回転へう割り	床面	60% 新治産
277	土師器	高台付碗	[18.4]	6.4	[7.1]	長石・石英・赤色粒子	淡橙	普通	体部内面へう割り 高台貼付け	覆土中層	40%
278	須恵器	高台付坏	15.6	6.6	8.2	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	回転へう割り後、高台貼付け	覆土上層	80% 新治産
279	須恵器	蓋	[15.4]	3.4	-	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	大母部回転へう割り後、積み貼付け	床面	80% 新治産
280	須恵器	蓋	18.0	(2.7)	-	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	大母部回転へう割り	覆土下層	70% 新治産
281	須恵器	盤	[15.6]	3.5	9.2	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転へう割り後、高台貼付け	床面	50% 新治産
282	須恵器	高盤	-	(8.6)	-	長石・石英	灰	普通	脚部外・内面ロクロナテ 透かし孔	覆土上層	10% 新治産
283	須恵器	長皿壺	-	(12.3)	11.3	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端回転へう割り 体部内面へうナテ、折取 底部回転へう割り後、高台貼付け	覆土中層	30% PL43
284	土師器	小形甕	[11.4]	(5.7)	-	長石・石英・細輝	橙	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外・内面縦位のへうナテ	竈底面	20%
285	土師器	小形甕	-	(8.2)	7.2	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	体部外面縦位のへう割り 内面へうナテ 底部水垂痕	床面	70%
286	須恵器	甕	-	(20.4)	-	長石・石英・雲母	灰黄	普通	体部外面縦位の平行印き 体部内面折曲痕	覆土中層	10% 新治産

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q8	砥石	(7.3)	(8.3)	6.8	(52.3)	凝灰岩	紙面 4 面 他は破断面 条線状の研磨痕	床面	PL46

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M31	刀子	(11.7)	(1.2)	0.2~0.3	(9.7)	鉄	対称断面三角形 片刃。基部断面四角形 屈曲	覆土中層	PL47



第 140 图 第 3096 号竖穴建物跡出土遺物実測図 (1)



第141図 第3096号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第3111号竪穴建物跡(第142・143図)

位置 12区中央部のR8f2区、標高22mの平坦な台地上に位置している。

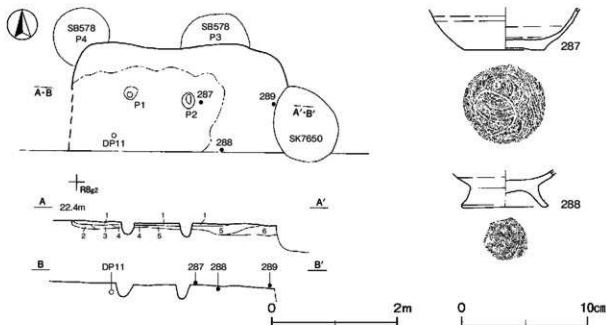
重複関係 第578号掘立柱建物跡を掘り込み、第7650号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南半部が調査区域外へ延びているため、東西軸は3.40mで、南北軸は1.66mだけ確認できた。床面の状況から方形で、北壁に竈が確認されていないことから、主軸方向はN-88°-Eと推定される。壁は確認できなかった。

床 は平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は掘方の埋土であるロームブロックなどを含む第2~6層の上に、ロームブロックを中量含み締まりの強い第1層を積み上げて構築されている。

掘方土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|--------|-------------------------|
| 1 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量
(締まり強い) | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 3 灰褐色 | ロームブロック・粘土粒子少量、焼土粒子微量 | 6 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |



第142図 第3111号竪穴建物跡・出土遺物実測図



第 143 図 第 3111 号竪穴建物跡出土遺物実測図

ピット 2か所。P1・P2は深さ24cm・22cmで、性格は不明である。

覆土 遺構確認において床面が検出されたため、確認されなかった。

遺物出土状況 土師器片110点(坏36, 高台付椀4, 高台付鉢1, 甕類68, 瓶1), 須恵器片9点(坏1, 甕類7, 瓶1), 土製品1点(土玉)が床面や掘方埋土中から散乱した状態で出土している。これらの土器はすべて破片で、床面や掘方の埋土中から出土していることから、投棄されたものかあるいは埋土に意識的に混入させたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から10世紀中葉と考えられる。

第 3111 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 142・143 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
287	土師器	坏	-	(3.4)	6.2	長石・石英・細礫	橙	普通	体部ロクロナデ 底面余切り 底面に刻書「〇」	床面	30%
288	土師器	高台付椀	-	(3.0)	[6.5]	長石・石英	橙	普通	体部内面へう磨き残, 黒色処理 底面余切り残, 高台部付け	掘方埋土中	20%
289	土師器	高台付鉢	-	(7.1)	[15.3]	長石・石英	浅黄橙	普通	脚部外・内面ロクロナデ	床面	30% PL43

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP11	土玉	21	19	07	8.4	長石・石英・赤色 粘土	橙	一方向からの穿孔 底面・側面面取り	掘方埋土中	PL45

第 3132 号竪穴建物跡 (第 144・145 図)

位置 12区中央部のQ9j2区, 標高20mの台地端部に位置している。

重複関係 第3144号竪穴建物跡, 第590号掘立柱建物跡, 第7201号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 西半部の壁の状況や竈の位置から, 長軸4.25m, 短軸3.24mの隅丸長方形で主軸方向はN-91°-Eと推定される。西壁は高さ16cmで, ほぼ直立している。

床 北東部は削平されているが, ほぼ平坦な貼床で, 中央部が踏み固められている。貼床はロームブロックを中量含む締まりの強い第4層で構築されている。壁溝が西部の壁下に巡っている。

竈 推定される東壁の中央からやや南寄りに付設されている。上半部は削平されているが, 掘方から規模は焚口部から煙道部まで78cmで, 燃焼部幅は40cmと推定される。火床部は地山を20cm掘りくぼめて, 構築されている。左袖部は地山を掘り残して基部を造り, ロームブロックや粘土ブロックなどを含む第3層を積み上げて構築されている。火床面は第2層上面で, 火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ36cm掘り込まれている。

電土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 3 にふい褐色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量
2 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ローム粒子・炭化粒子少量

貯蔵穴 中央から南西寄りに位置している。長軸 68cm、短軸 52cmの隅丸長方形で、深さは 28cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

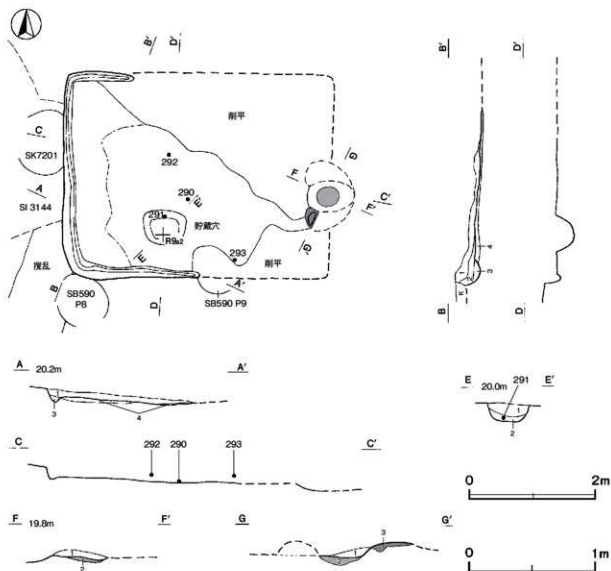
覆土 3層に分類できる。ロームブロックを含む層が広く堆積していることから、埋め戻されている。第4層は貼床の構築土である。

土層解説

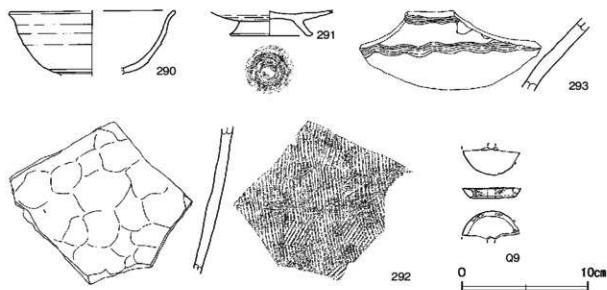
- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化物微量 4 灰黄褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
 2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 (線まり強い)
 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 133 点 (坏 36、高台付碗 9、甕類 88)、須恵器片 41 点 (坏 11、高台付坏 1、蓋 1、盤 1、甕類 27)、石器 1 点 (紡錘車) が覆土全体からまばらな状態で出土している。290 は床面から出土していることから、遺棄されたか投棄されたものと思われる。そのほかの遺物は破片で覆土全体から出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉と考えられる。



第 144 図 第 3132 号竪穴建物跡実測図



第145図 第3132号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3132号竪穴建物跡出土遺物観察表(第145図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
290	土器部	鉢	[13.2]	(5.1)	-	長石・石英	橙	普通	体部下端回転ヘリ削り 体部内面ヘリ磨き	床面	30%
291	土器部	高台付甕	-	(20)	[60]	長石・石英・雲母・細礫	橙	普通	体部内面ヘリ磨き 底部ヘリ切り後、高台削り	貯蔵穴底面	30%
292	須恵器	甕	-	(12.0)	-	長石・石英	灰	良好	体部外面縦位の平行叩き 体部内面指頭痕	覆土層	10% 新山原
293	須恵器	甕	-	(5.8)	-	長石・石英・細礫	灰黄	良好	縦筋波状文 自然軸	覆土層	10% 産地不明

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	鉄鉢	(4.6)	0.9	(0.6)	(11)	粘板岩	円盤台形 底面・側面研磨 一方向からの穿孔	覆土中	PL6

第3138号竪穴建物跡(第146・147図 PL22)

位置 12区中央部のQ8j0区、標高20mの台地端部に位置している。

重複関係 第3139号竪穴建物跡、第588号掘立柱建物跡を掘り込み、第3144号竪穴建物、第7194・7196・7197・7199・7203・7205～7207・7229号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 壁の状況や竈の位置から、長軸4.80m、短軸4.34mの隅丸長方形と推定され、主軸方向はN-3°-Wである。西壁は高さ28cmで、外傾している。

床 東半部は削平されているが、平坦で、壁際以外は踏み固められている。壁溝が西半部の壁下に巡っている。

竈 北壁の中央部に付設されている。右袖部は削平されているが、竈口方から規模は焚口部から煙道部まで107cmで、燃焼部幅は60cmと推定される。火床部は地山を12cm掘りくぼめて、ロームブロック・粘土ブロックを含む第6・7層を埋土して構築されている。左袖部は地山を掘り残して基部を造っている。第3層は焼土ブロックを中量含んでおり、天井部の崩落土と考えられる。火床面は第5層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ56cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

覆土層解説

1 灰褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量	5 明赤褐色	焼土ブロック多量、炭化物少量
2 灰黄褐色	ロームブロック中量、炭化粒子少量	6 に近い黄褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 に近い赤褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化物少量	7 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子微量
4 に近い褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量		

ピット P1 は深さ 18cm で、南壁際の竈に向かい合う位置にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P1 の第 1・2 層は柱抜き取り後の埋土である。

ピット土層解説

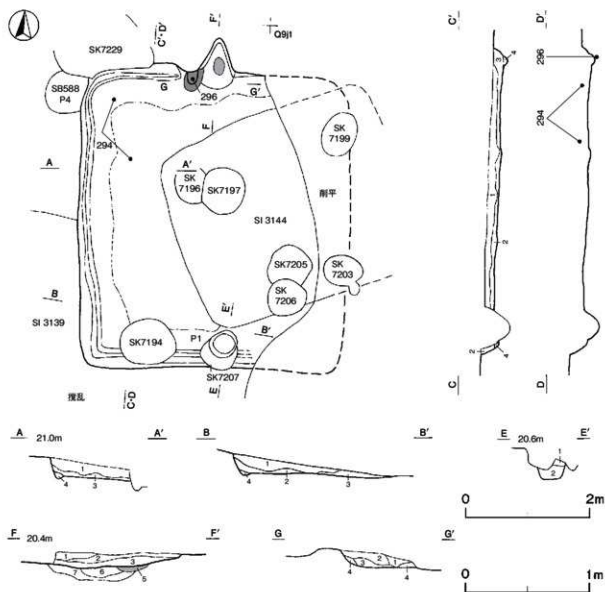
- 1 灰黄褐色 ロームブロック中量、焼土粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

覆土 4 層に分類できる。ロームブロックを中量含む層が広く堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

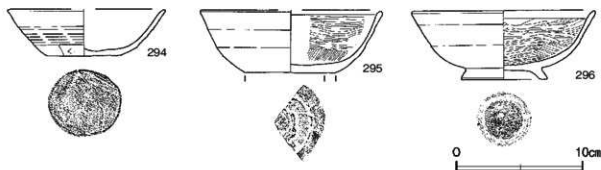
- 1 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 3 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化物少量
2 黒褐色 ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子少量 4 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 76 点 (坏 23, 高台付碗 3, 甕類 50), 須恵器片 21 点 (坏 12, 甕類 9), 鉄滓 4 点が、覆土全体からまばらな状態で出土している。296 はほぼ完形で、竈場方底面から出土していることから、何らかの意味があり、埋められたと考えられる。そのほかの遺物は破片で覆土全体から出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。



第 146 図 第 3138 号竪穴建物跡実測図

所見 時期は、出土土器から10世紀前葉と考えられる。



第147図 第3138号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3138号竪穴建物跡出土遺物観察表(第147図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
294	土師器	杯	[12.6]	3.8	5.8	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	体部下端手持ちへら削り へら削り後、一方四のへら削り	覆土中層	30%
295	土師器	高台付碗	[14.4]	(5.0)	(7.2)	長石・石英・細礫	橙	普通	体部内面へら削き後、黒色処理 底面回転へら削り後、高台削り付け 高台処理	覆土中	20%
296	土師器	高台付碗	14.5	3.5	6.7	長石・石英・雲母・細礫	に高い橙	普通	体部内面へら削き後、黒色処理 削り後、高台削り付け	覆土下 底部	80% PL.42

第3139号竪穴建物跡(第148・149図 PL20・22)

位置 12区中央部のR8a0区、標高21mの台地端部に位置している。

重複関係 第3145号竪穴建物跡を掘り込み、第3138号竪穴建物に掘り込まれている。

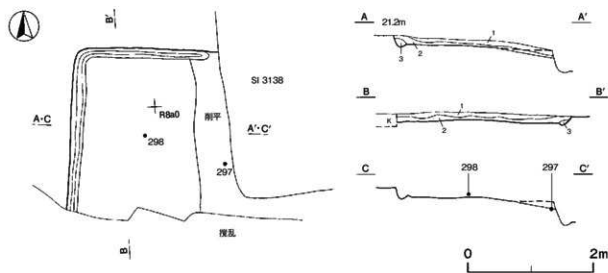
規模と形状 南部は攪乱され、東部は削平されているため、北西部の東西軸2.02m、南北軸2.74mだけが確認されている。壁の状況から、主軸方向はN-7°-Eと推定される。西壁は高さ18cmで、外傾している。

床 北西部はほぼ平坦であるが、あまり踏み固められてはいない。整清が壁下に巡っている。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含む層が広く堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

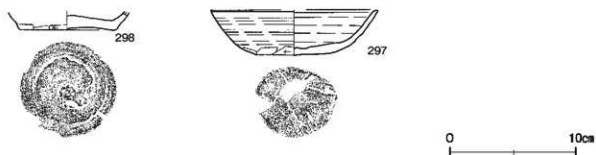
- | | |
|--------------------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色
ロームブロック中量、炭化粒子少量、
焼土粒子微量 | 2 緑褐色
ロームブロック中量、炭化粒子少量 |
| | 3 灰黄褐色
ロームブロック中量 |



第148図 第3139号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片 56 点 (坏 6、甕類 49、瓶 1)、須恵器片 10 点 (坏 5、甕類 5) が、覆土全体からまばらな状態で出土している。297 は削平された斜面部から出土しており、本跡から流れ込んだものと考えられる。そのほかの土器は破片で覆土全体から出土しており、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 9 世紀後葉と考えられる。



第 149 図 第 3139 号竪穴建物跡出土遺物実測図

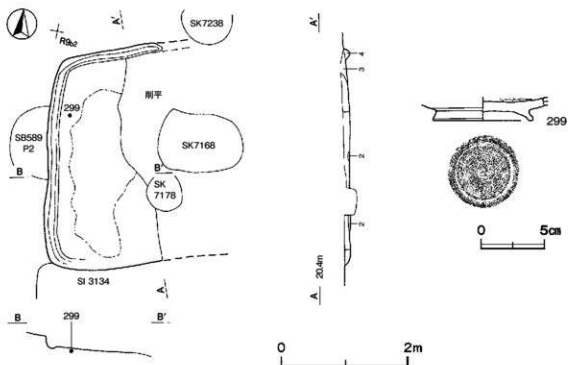
第 3139 号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第 149 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
297	土師器	坏	[13.1]	3.6	[6.0]	長石・石英・赤色粘土	橙	普通	体部下端手持ちへう割り 底部へう切り後、一方のへう割り	削平部 底面	70%
298	須恵器	坏	-	(1.6)	[7.6]	長石・石英・雲母	暗灰	普通	体部下端手持ちへう割り 底部へう切り後、削平部へう割り	覆土下層	20% 削平部

第 3140 号竪穴建物跡 (第 150 図 PL21)

位置 12 区中央部の R 9 b2 区、標高 20 m の台地端部に位置している。

重複関係 第 3134 号竪穴建物跡、第 589・590 号掘立柱建物跡を掘り込み、第 7168・7178・7238 号土坑に掘り込まれている。



第 150 図 第 3140 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

規模と形状 東部を大きく削平されているため、南北軸は3.50mで、東西軸は1.35mだけ確認された。壁の状況から隅丸方形で、主軸方向はN-83°-Eと推定される。西壁は高さ12cmで、ほぼ直立している。

床 西壁寄りにはほぼ平坦で、壁際以外は踏み固められている。壁溝が西部の壁下に巡っている。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを中量含む層が広く堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------------|--------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量 | 3 灰黄褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化粒子 | 4 褐灰色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片85点(坏11, 高台付坏1, 高台付皿1, 甕類72), 須恵器片10点(坏1, 高台付坏1, 蓋1, 甕類7)が、覆土全体からまばらな状態で出土している。299は西壁寄りの掘方埋土中から出土しており、埋土に混入したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。

第3140号竪穴建物跡出土遺物観察表(第150図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
299	土師器	高台付碗	-	(1.9)	8.0	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	底部内面へう雷ぎ後、底部回転へう雷り後、高台貼付け	掘方埋土中	20%

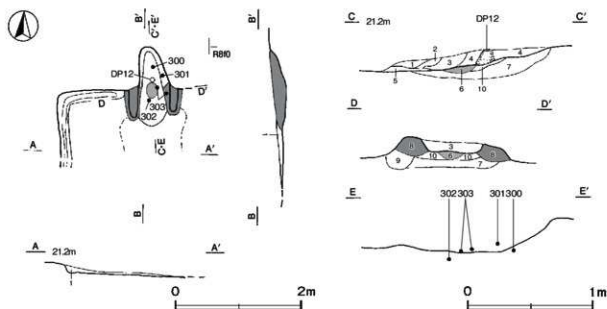
第3141号竪穴建物跡(第151・152図 PL21)

位置 12区中央部のR89区、標高、21mの台地端部に位置している。

重複関係 第1527号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 第1527号竪穴建物跡の床面精査で、竈と北西コーナー部が確認されている。確認されたのは、東西軸は2.04m、南北軸は1.22mで、壁溝の状況や竈の位置から方形で、主軸方向はN-6°-Wと推定される。壁は北西コーナー部でわずかに遺存しているだけである。

床 北西コーナー部から竈全面にかけては平坦で、竈前面は踏み固められている。壁溝が北西コーナー部で確認されている。



第151図 第3141号竪穴建物跡実測図

竈 北壁に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで128cmで、燃焼部幅は45cmである。火床部は地山を14cm掘りくぼめて、ロームブロック・粘土ブロックを含む第7・10層を埋土して構築されている。袖部は埋土の上に、ロームブロックや粘土ブロックを中量含む第8層を積み上げて構築されている。火床面は第6層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。火床面の奥には支脚が立て掛けられた状態で確認されている。煙道部は壁外へ62cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

埋土層解説

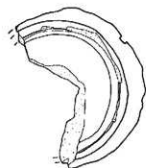
- | | | | |
|--------|--------------------------------|--------|--------------------------------------|
| 1 暗褐色 | 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 7 暗褐色 | 少量
ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量 | 9 黒褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 4 灰褐色 | 焼土ブロック中量、ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量 | 10 灰褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | 炭化粒子多量、焼土ブロック少量 | | |
| 6 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子中量、炭化粒子 | | |



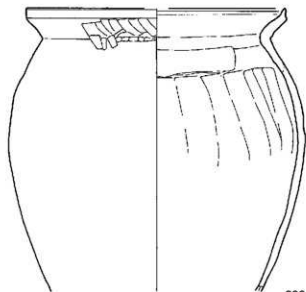
300



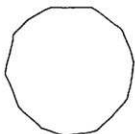
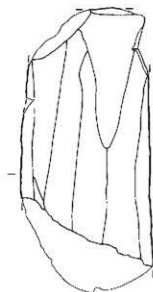
301



302



303



DP12



第152図 第3141号堅穴建物跡出土遺物実測図

覆土 単一層である。ロームブロックを含む層が広く堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、粘土ブロック・炭化粒子
微量

遺物出土状況 土師器片 143点(坏11, 蓋1, 甕類131), 須恵器片 62点(坏35, 高台付坏5, 蓋1, 長頸瓶1, 甕類20), 土製品1点(支脚)が、覆土全体からまばらな状態で出土している。300はほぼ完形で竈掘方の埋土中から出土していることから、意図的に埋められた可能性がある。303は袖部の中から出土していることや大きな破片であることから袖部の補強として使用されたものと考えられる。そのほかの遺物は破片で覆土全体から出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと思われる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。

第3141号竈穴建物跡出土遺物観察表(第152図)

番号	種類	器種	口径	器高	口径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
300	須恵器	坏	[12.8]	4.8	6.4	長石・石英・炭灰	灰	普通	体部下端を持ちへう割り 底部へう切り後、一方のみの割り	竈掘方埋土中	70% PL42 新治産
301	須恵器	高台付坏	12.9	5.6	7.7	長石・石英・炭灰・細礫	灰	普通	底部回転へう割り後、高台貼付け	竈	60%
302	須恵器	長頸瓶	-	(26)	[12.4]	長石・石英・炭灰・細礫	灰黄褐色	普通	体部下位回転へう割り 底部回転へう割り後、高台貼付け 底部細礫混入 焼成用	竈掘方埋土中	10% 新治産
303	土師器	甕	[30.4]	(22.5)	-	長石・石英・炭灰	にぶい赤褐色	普通	口縁部外面斜位のへう割らず 体部外面縦位のへう割らず 体部内面縦位のへう割らず	竈底面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
DP12	支脚	22.7	10.4	10.1	(1834.7)	長石・石英・赤色粒子	橙	へうによる面取り	竈底面	

第3143号竈穴建物跡(第153・154図 PL21・22)

位置 12区中央部のR9c1区、標高20mの台地端部に位置している。

重複関係 第3142号竈穴建物跡、第7223号土坑を掘り込み、第7232号土坑に掘り込まれている。

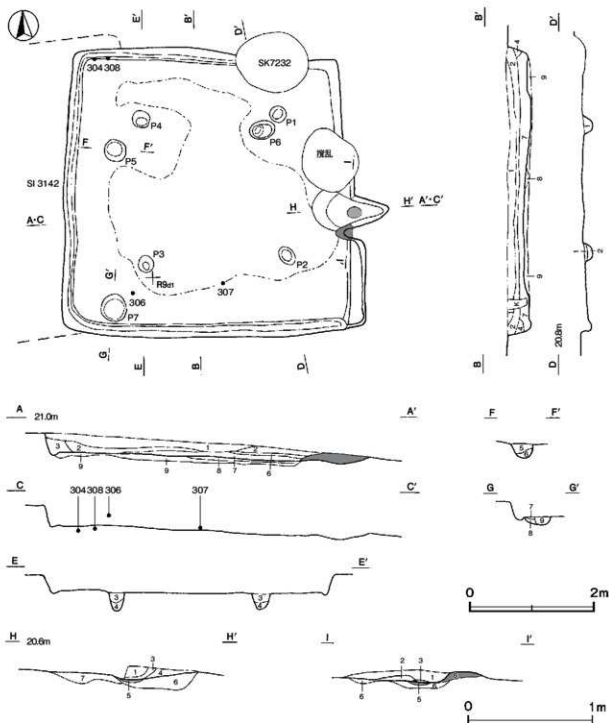
規模と形状 長軸4.62m、短軸4.58mの方形で、主軸方向はN-92°-Eである。壁は高さ14~28cmで、外傾している。竈の南東側に棚状施設が付設されている。長さ138cm、中央部の幅24cmの不整形方形で、床面から棚の底面までの高さは12cmである。

床 ほぼ平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。壁溝が壁下に巡っている。貼床は地山を成形した後、ロームブロックを多量に含み締まりのやや強い第9層を積み上げ、中央部はさらにロームブロックを多量に含む締まりの強い第8層を積み上げ、構築されている。

竈 東壁の中央部やや南寄りに付設されている。左袖部は削平されているが、竈掘方から規模は焚口部から煙道部まで124cmで、燃焼部幅は50cmと推定される。火床部は地山を8cm掘りくはめて、ロームブロック・粘土ブロックを含む第6層を埋土して構築されている。右袖部は地山を掘り残して基部を造り、ロームブロック・粘土ブロックを中量含む第8層を積み上げ構築されている。第3層は焼土ブロックを中量含んでおり、天井部の崩落土と考えられる。火床面は第5層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ56cm掘り込まれ、火床部から緩やかに立ち上がっている。

覆土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子
微量 5 にぶい褐色 粘土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量、
粘土粒子微量 6 褐色 ロームブロック多量、ロームブロック少量
- 3 赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量、粘土ブ
ロック少量、炭化粒子微量 7 暗褐色 ロームブロック・炭化物中量、粘土ブロック少量
- 4 にぶい褐色 ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量、 8 にぶい褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブ
ロック少量



第153図 第3142号竪穴建物跡実測図

ピット 7か所。P1～P4は深さ16～36cmで、規模や配置から主柱穴である。P5は深さ22cmで、西壁寄りの竈に向かい合う位置にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ15cmで、P1に近い位置にあることから、補助柱穴と考えられる。P7は深さ12cmで、南西コーナー部に位置しているが、性格は不明である。P2～P6の第1～6層は、柱抜き取り後の埋土である。P7の第7～9層はピットの埋土である。

ピット土層解説

1 には黄褐色	ロームブロック中量、粘土ブロック・炭化物少量	4 灰黄褐色	ロームブロック中量、炭化物微量
2 褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化物微量	5 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
3 には黄褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック微量	6 暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子微量

- 7 暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、炭化粒子微量
8 におい褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
9 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

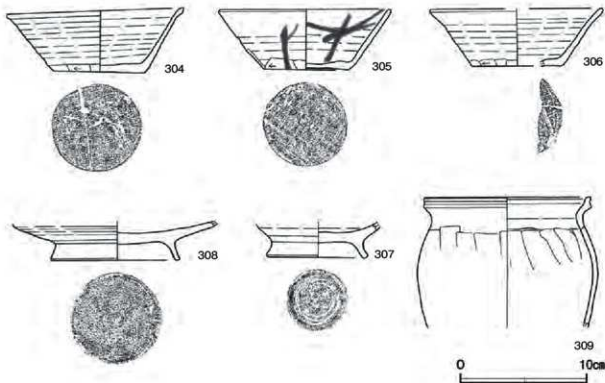
覆土 7層に分層できる。ロームブロックや炭化物を含む層が不規則に堆積していることから、埋め戻されている。第8・9層は貼床の構築土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量
3 灰褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量
4 におい褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
5 灰黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化物少量、焼土ブロック微量
6 におい褐色 ロームブロック・炭化物中量、粘土ブロック少量
7 におい褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量
8 におい褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量（締まり強い）
9 褐色 ロームブロック多量、焼土ブロック少量、炭化粒子微量（締まりやや強い）

遺物出土状況 土師器片 177 点（坏60、高台付坏7、椀1、甕類109）、須恵器片 146 点（坏49、高台付坏3、蓋9、盤3、甕類80、瓶2）、灰釉陶器 1 点（長頸瓶）が、覆土全体から散乱した状態で出土している。304・308 は北西コーナー部の床面からそれぞれ出土していることから、遺棄されたものと考えられる。そのほかの土器は破片で覆土全体から出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から9世紀中葉と考えられる。



第154図 第3143号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3143号竪穴建物跡出土遺物観察表（第154図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
304	須恵器	坏	[142]	5.3	7.4	長石・石英・雲母・細礫	灰黄	普通	体部下端手持ちへら割り 底部へら割り後 一方のへら割り	北西コーナー部・床面	80% PL42 新治産
305	須恵器	坏	13.5	4.9	6.8	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰白	普通	体部下端手持ちへら割り 底部へら割り後 一方のへら割り 外・内面火焼	覆土中	70% PL42 新治産
306	須恵器	坏	[146]	4.6	[7.2]	長石・石英・雲母・細礫	灰黄褐	普通	体部下端手持ちへら割り 底部へら割り後 一方のへら割り	覆土中層	40% 新治産
307	土師器	高台付坏	-	(29)	[7.8]	長石・石英	におい橙	普通	底部回転へら割り後 高台貼付け	覆土下層	40%
308	須恵器	盤	-	(31)	[10.0]	長石・石英・雲母・細礫	灰黄	普通	底部回転へら割り後 高台貼付け	北西コーナー部・床面	70% 新治産
309	土師器	甕	13.0	(10.3)	-	長石・石英・雲母	におい赤褐	普通	口縁部外・内面横すず 体部外・内面縦位のへらナデ	覆土中	30%

第3144号竪穴建物跡 (第155・156図 PL22)

位置 12区中央部のQ9区、標高20mの台地端部に位置している。

重複関係 第3138号竪穴建物跡を掘り込み、第3132号竪穴建物、第7199・7200・7203・7204・7208号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 西半部の壁の状況や竈の位置から、長軸3.68m、短軸3.10mの隅丸長方形で、主軸方向はN-75°-Eと推定される。西壁は高さ25cmで、ほぼ直立している。

床 東部は削平されているが、西部は平坦で、中央から南部は踏み固められている。壁溝が西半部の壁下に巡っている。

竈 推定される東壁の中央部に付設されている。竈の上半部は削平され、火床部の一部と竈据方の一部が確認されているだけである。軸部や火床部の構築状況などは不明である。

ピット 2か所。P1・P2は深さ36cm・34cmで、規模は柱穴と考えられるが対応する柱がなく、性格は不明である。P1・P2の第1～3層はピットの埋土である。

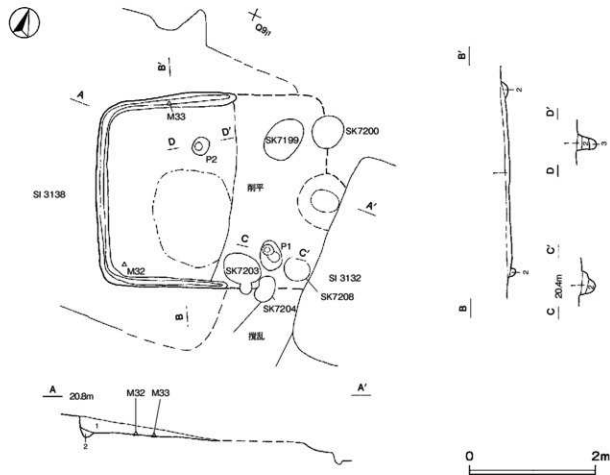
ピット土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | | |

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを中量含む層が広く堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

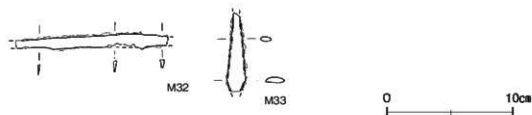
- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 2 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 |
|-------|-----------------------|-------|------------------|



第155図 第3144号竪穴建物跡実測図

遺物出土状況 土師器片42点(坏6, 高台付坏1, 甕類35), 須恵器片17点(坏5, 高台付坏1, 甕類11), 金属製品2点(刀子, 鐵)が, 覆土全体からまばらな状態で出土している。M32・M33は壁際の床面から出土しており, 遺棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から9世紀後葉と考えられる。



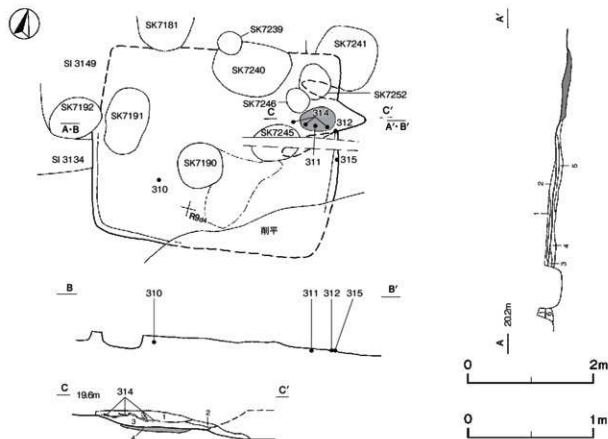
第156図 第3144号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3144号竪穴建物跡出土遺物観察表(第156図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M32	刀子	(126)	1.5	0.2~0.3	(15.2)	鉄	先端部・基部欠損 刃部断面三角形 両側 基部断面四角形	床面	PL47
M33	鐵	(62)	1.6	0.5	(10.4)	鉄	長三角形 鐵身断面片丸造り ナツ穴	床面	PL47

第3148号竪穴建物跡(第157・158図)

位置 12区中央部のR9c3区, 標高19mの台地端部に位置している。



第157図 第3148号竪穴建物跡実測図

重複関係 第3134・3149号竪穴建物跡、第7181・7241号土坑を掘り込み、第7190～7192・7239・7240・7245・7246・7252号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 北部や南東部を削平されているが、遺存している東壁・南西コーナー部・竈の状況などから長軸3.92m、短軸3.20mの隅丸長方形で、主軸方向はN-82°-Eと推定される。南西コーナー部の壁は高さ5cmで、ほぼ直立している。

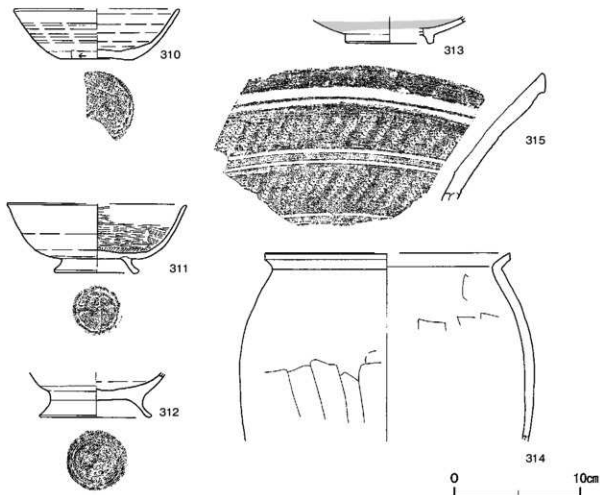
床 中央部はほぼ平坦な貼床で、南東部は踏み固められている。中央部から東部はロームブロックを中量含む締まりが強い第5層で埋土し、西部はロームブロックを中量含む締まりがやや強い第4層を埋土してから、その上にロームブロックを多量に含む締まりが強い第3層を積み上げ、貼床を構築している。

竈 東壁の中央からやや北寄りに付設されている。竈の上半部は削平されている。竈の掘方から規模は、焚口部から煙道部まで122cmである。火床部は床面から8cm掘りくぼめ、構築されている。第1・2層は焼土ブロックが含まれ、土器片がほぼ同じ高さで出土していることから、天井部の崩落土と考えられる。火床面は第4層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ44cm掘り込まれている。

竈土層解説

1 暗褐色 粘土ブロック中量、ロームブロック・焼土ブロック 3 灰褐色 ロームブロック・焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子少量
2 灰黄褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量 4 暗赤褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック・粘土ブロック少量

覆土 2層に分層できる。ロームブロックを含む層が広く堆積していることから、埋め戻されている。第4・5層は掘方の埋土で、第3層は貼床の構築土である。



第158図 第3148号竪穴建物跡出土遺物実測図

覆土・掘方土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 | 4 灰褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物少量（締まりやや強い） |
| 2 暗褐色 | 炭化物中量、ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子少量 | 5 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子少量（締まり強い） |
| 3 明褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子微量（締まり強い） | | |

遺物出土状況 土師器片 198 点（坏 44、高台付碗 2、高台付坏 4、甕類 147、瓶 1）、須恵器片 20 点（坏 3、高台付坏 1、蓋 2、甕類 14）、灰釉陶器 1 点（高台付皿）が、覆土全体から散乱した状態で出土している。314 は甕の破片で、敷かれたような状態で火床面の土層から出土していることから、補強に用いられたものが天井部と一緒に崩落したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から 10 世紀前葉と考えられる。

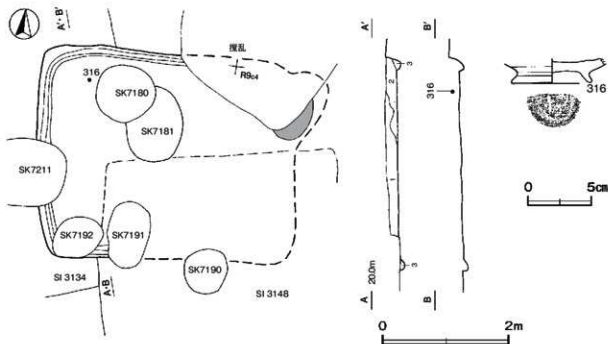
第 3148 号竪穴建物跡出土遺物観察表（第 158 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
310	土師器	坏	[13.1]	3.0	[5.8]	長石・石英	にぶい橙	普通	体部下端手持ちへラ削り 底部へラ切り後、一方削りの削り	掘方埋土中	30%
311	土師器	高台付碗	[14.2]	5.5	[6.6]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部内面へラ磨き 底部回転へラ削り後、高台削り付け	甕底面	40%
312	土師器	高台付碗	-	(3.4)	[8.6]	長石・石英・雲母	明黄褐色	普通	底部回転へラ削り後、高台削り付け	甕底面	20%
313	灰釉陶器	高台付皿	-	(1.6)	[6.7]	長石・石英・赤色粒子	灰白	普通	体部外・内面硝毛塗りで施す 底部へラ切り後、高台削り付け	埋土中	10% 狭投蓋
314	土師器	甕	[19.3]	(15.0)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面機ナデ 体部外・内面へラナデ	甕覆土上層	20%
315	須恵器	甕	-	(10.1)	-	長石・石英・赤色粒子	灰白	普通	口縁に沿って隆起線と沈線文周回 通底する側面割交支	火床面	10% 産地不明

第 3149 号竪穴建物跡（第 159 図）

位置 12 区中央部の R 9 c3 区、標高 19 m の台地端部に位置している。

重複関係 第 3134 号竪穴建物跡、第 7180・7181 号土坑を掘り込み、第 3148 号竪穴建物、第 7190～7192・7211 号土坑に掘り込まれている。



第 159 図 第 3149 号竪穴建物跡・出土遺物実測図

規模と形状 南東部を第3148号竪穴建物に掘り込まれ、北東部は攪乱を受けているが、遺存している壁の状況や竈の位置などから長軸4.12m、短軸3.24mの隅丸長方形で、主軸方向はN-88°-Eと推定される。西壁は高さ18cmで、ほぼ直立している。

床 西部は平坦であるが、あまり踏み固められてはいない。壁溝が北壁西部から西壁下に巡っている。

竈 焼土の位置から、北東コーナー部に付設されていたと考えられるが、攪乱や削平により、規模や竈の構築状況などは不明である。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックを含む層が広く堆積していることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物少量、焼土粒子微量 3 褐色 ロームブロック少量、炭化物微量
2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化物微量

遺物出土状況 土師器片11点(坏3、高台付碗1、高台付坏1、皿2、甕類4)、須恵器片3点(甕類)が、覆土全体からまばらに出土している。316は覆土中層から出土し、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。
所見 時期は、第3148号竪穴建物に掘り込まれていることや出土土器から9世紀後葉と考えられる。

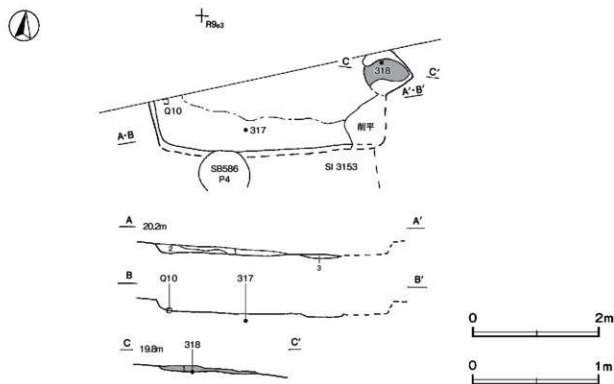
第3149号竪穴建物跡出土遺物観察表(第159図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
316	土師器	高台付碗	-	(1.9)	[5.8]	長石・石英・雲母・赤色粘土	黄褐色	普通	回転ヘラ削り後、高台貼り付け	覆土中層	30%

第3150号竪穴建物跡(第160・161図)

位置 12区中央部のR9e3区、標高19mの台地端部に位置している。

重複関係 第3153号竪穴建物跡を掘り込み、第586号掘立柱建物に掘り込まれている。



第160図 第3150号竪穴建物跡実測図

規模と形状 北部の大半を攪乱されているため、確認できた南北軸は135mで、東西軸は壁の状況や竈の位置から378mの方形で、主軸方向はN-75°-Eと推定される。西壁は高さ14cmで、外傾している。

床 中央部は平坦で、踏み固められている。東部は掘方をロームブロックを中量含む第3層で埋土し、床を構築している。

竈 東壁の中央部に付設されていると考えられるが、攪乱のため、規模や構築などは不明である。

電土層解説

- 1 濃い赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量

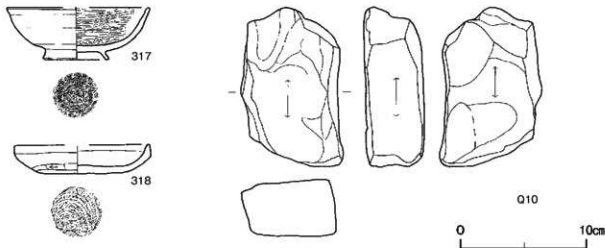
覆土 2層に分層できる。西側からの流入が確認できる自然堆積である。第3層は掘方の埋土である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 3 明褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
2 灰黄褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 土師器片30点(坏6、高台付碗1、高台付坏2、皿1、甕類20)、須恵器片2点(甕類)が、覆土全体からまばらに出土している。317は掘方埋土中から出土しており、意識的に埋土に混入されたものと考えられる。318は竈底面から、Q10は床面からそれぞれ出土し、遺棄されたかあるいは投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から10世紀中葉と考えられる。



第161図 第3150号竪穴建物跡出土遺物実測図

第3150号竪穴建物跡出土遺物観察表(第161図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
317	土師器	高台付碗	[11.3]	4.1	5.0	長石・石英	橙	普通	体部内面へつ磨き後、黒色処理 底面回転へつ磨り後、高台部磨り上げ	掘方埋土中	60% PL43
318	土師器	小皿	[10.8]	2.3	3.6	長石・石英・雲母・黒色粒子	橙	普通	体部下部・底面周縁手持ちへつ磨り 底面表裏切り	竈底面	60% PL43

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	砥石	(127)	(8.1)	(4.5)	(7637)	凝灰岩	紙面3面 他は破断面	床面	PL46

表7 平安時代堅穴建物跡一覽表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		壁高	床面	構造	内部施設			階土	主な出土遺物	時期	備考	
				長軸×短軸(m)	(cm)				柱穴	基壇	ヒコ					石室
152P	R 819	N-1'-W	方形	5.14 × 5.10	25	平相	111P 全周	4	1	2	北壁	1	人瓦	土師器、須恵器	9世紀前半	SI128、SK7103 → 本跡 → SI241、SK7220
160A	R 811	N-1'-W	隅丸方形	3.94 × 3.85	15~28	平相	111P 全周	-	1	-	北壁	-	土師器、金属製品	9世紀前半	本跡 → SI1604B、 308C、SI578	
160B	R 811	N-1'-W	隅丸 長方形	4.10 × 3.65	16~24	平相	111P 全周	-	1	-	北壁	-	人瓦 土師器、須恵器 土器、金属製品	9世紀前半	SI1604A → 本跡 → 308C、308C、 SI578	
174A	R 882	N-2'-E	長方形	6.36 × 5.52	18	平相	111P 一部	4	1	-	北壁	-	土師器、須恵器	9世紀中葉	SI1742 → 本跡 → SI741、C-3080	
174B	R 882	N-2'-E	長方形	6.36 × 5.52	18	平相	111P 一部	4	1	-	北壁	-	土師器、須恵器	9世紀中葉	SI1741A、1742 → 本跡 → SI1741C-3080	
170C	R 882	N-2'-E	長方形	6.36 × 5.52	18	平相	111P 一部	4	1	8	北壁	-	土師器、須恵器 金属製品	9世紀中葉	SI1741A、B、1742 → 本跡 → SI3080	
307A	R 8C3	N-2'-W	隅丸方形	6.44 × 6.04	4	平相	-	4	1	2	北壁	-	土師器、須恵器 金属製品	8世紀末 - 9世紀前半	本跡 → SI3079C-3080	
307B	R 8C3	N-2'-W	隅丸方形	6.44 × 6.02	4	平相	-	4	1	2	北壁	-	土師器、須恵器 金属製品	8世紀末 - 9世紀前半	本跡 → SI3079C-3080	
307C	R 8C3	N-2'-W	隅丸 長方形	7.34 × 6.12	4	平相	-	4	1	4	北壁	-	土師器、須恵器	9世紀前半	SK3079A、B → 本跡 → SI3080	
308B	R 8C2	N-2'-E	方形	4.62 × 4.50	2~8	平相	111P 全周	4	1	-	北壁	-	土師器、須恵器	9世紀後半	SI1747C、3079C → 本跡 → SK6981、6982	
308A	R 8e1	N-1'-E	隅丸 長方形	4.96 × 4.38	-	平相	111P 全周	4	-	-	北壁	-	土師器、 金属製品	9世紀後半	SI3578 → 本跡 → SK7011	
308D	R 8e1	N-1'-E	隅丸 長方形	6.22 × 5.14	25~32	平相	111P 全周	4	1	-	北壁	-	人瓦	土師器、須恵器	9世紀中葉	SK3081、3082A、 SI560、578 → 本跡 → SI1604A
308C	R 8e1	N-1'-E	隅丸 長方形	6.22 × 5.14	25~32	平相	111P 全周	4	1	-	北壁	-	人瓦	土師器、須恵器	9世紀中葉	SK3081、SI560、578 → 本跡 → SK3082B、C
308A	R 7e8	N-82'-E	隅丸方形	3.42 × 3.38	18	平相	全周	2	1	-	東壁	-	人瓦	土師器、須恵器	10世紀中葉	SI561、575 → 本跡 → SK3084B、C、K7011、 7027、7028
308D	R 7e8	N-1'-E	隅丸方形	3.42 × 3.38	18	平相	全周	2	1	-	北東 コーナー	-	人瓦	土師器、須恵器	10世紀中葉	SK3084A、SI561、575 → 本跡 → SK3084C、 SK7011、7027、7028 → SK3081、SI561、 575 → 本跡 → SK7011、 7027、7028
308C	R 7e8	N-2'-E	隅丸方形	3.04 × 2.96	14	平相	111P 全周	4	1	-	北壁	-	人瓦	土師器、須恵器	10世紀中葉	SK7011、7027、7028 → SK3081、SI561、 575 → 本跡 → SK7011、 7027、7028
308E	R 7e5	N-9'-E	方形	4.36 × 4.32	20~25	平相	全周	4	1	-	北壁	-	人瓦	土師器、 金属製品	9世紀中葉	SK3087、SI569 → 本跡 → SE101、SK6924、 6930
3086	R 7e5	N-4'-E	方形	3.86 × 3.84	18~28	平相	111P 全周	4	1	-	北壁	-	人瓦	土師器、須恵器	9世紀前半	SK3090、3097、SI570 → 本跡 → SI6085
3089	R 7b3	N-1'-W	隅丸方形	4.46 × 3.94	12~18	平相	全周	4	1	-	北壁	-	人瓦	土師器、須恵器 金属製品	9世紀後半	SK3090 → 本跡 → SK7650
3091	R 7b2	N-2'-W	方形	3.28 × 3.20	3~11	平相	111P 全周	4	1	-	北壁	-	人瓦	土師器、 須恵器	9世紀後半	SK3090 → 本跡
3090	R 6d0	N-13'-W	[方形]	3.49 × 1.46	4~20	平相	-	-	-	-	-	-	人瓦	土師器	9世紀後半	SK3092 → 本跡
309A	R 7e7	N-8'-E	隅丸方形	3.96 × 2.84	-	平相	全周	1	-	4	北壁	-	土師器、須恵器	10世紀前半	本跡 → SI3091U → SK6881、6883	
309D	R 7e7	N-94'-E	隅丸方形	3.98 × 3.48	-	平相	全周	4	1	4	東壁	-	土師器、須恵器	10世紀前半	SK3094A → 本跡 → SK6881 - 6883	
3096	R 8e8	N-2'-E	隅丸方形	3.86 × 3.74	14~30	平相	111P 全周	-	1	-	北壁	-	人瓦	土師器、須恵器 金属製品	9世紀後半	SI1520、SI570 → 本跡 → SK6976、6984
3111	R 812	N-88'-E	[方形]	[3.60] × [1.66]	-	平相	-	-	-	2	-	-	土師器、 須恵器	10世紀中葉	SI3578 → 本跡 → SK7650	
3122	Q 9e2	N-91'-E	[隅丸 長方形]	[4.25] × [3.24]	16	平相	-	-	-	-	東壁	-	人瓦	土師器、 須恵器	10世紀後半	SI3141、SI590、 SK7201 → 本跡 → SK7191
3128	Q 8e0	N-3'-W	[隅丸 長方形]	4.80 × [4.34]	28	平相	一部	1	-	-	北壁	-	人瓦	土師器、須恵器	10世紀前半	SK3139 → SI598 → 本跡 → SK3144
3139	R 8e0	N-7'-E	[方形、 長方形]	[2.74] × [2.02]	18	平相	一部	-	-	-	-	-	人瓦	土師器、須恵器	9世紀後半	SK3145 → 本跡 → SK3138
3140	R 9e2	N-83'-E	[隅丸方 形、長方形]	3.50 × [1.35]	12	平相	一部	-	-	-	-	-	人瓦	土師器、須恵器	9世紀後半	SK3141、SI589、 SI590 → 本跡 → SK7168、 7178、7238
3141	R 819	N-6'-W	[方形、 長方形]	[2.04] × [1.22]	4	平相	一部	-	-	-	北壁	-	人瓦	土師器、須恵器 金属製品	9世紀中葉	SI1520 → 本跡
3143	R 9e1	N-92'-E	方形	4.62 × 4.58	14~28	平相	111P 全周	4	1	2	東壁	-	人瓦	土師器、須恵器 金属製品	9世紀中葉	SK3142、SK7223 → 本跡 → SK7222
3144	Q 9e1	N-75'-E	[隅丸 長方形]	[3.68] × [3.19]	25	平相	一部	-	-	2	東壁	-	人瓦	土師器、須恵器 金属製品	9世紀後半	SK3138 → 本跡 → SK3132
3148	R 9e3	N-82'-E	[隅丸 長方形]	3.92 × [3.00]	5	平相	-	-	-	-	東壁	-	人瓦	土師器、須恵器 金属製品	10世紀前半	SK3131、3139 SK7181 → 本跡 → SK7190 → 7192
3149	R 9e3	N-88'-E	[隅丸 長方形]	[4.12] × [3.24]	18	平相	一部	-	-	-	東壁 コーナー	-	人瓦	土師器、須恵器	9世紀後半	SK3134、SK7180、 7181 → 本跡 → SK3148
3150	R 9e3	N-75'-E	[方形]	[3.76] × [1.35]	14	平相	-	-	-	-	東壁	-	自然 土師器、 須恵器 土器	10世紀中葉	SK3153 → 本跡 → SI586	

(2) 掘立柱建物跡

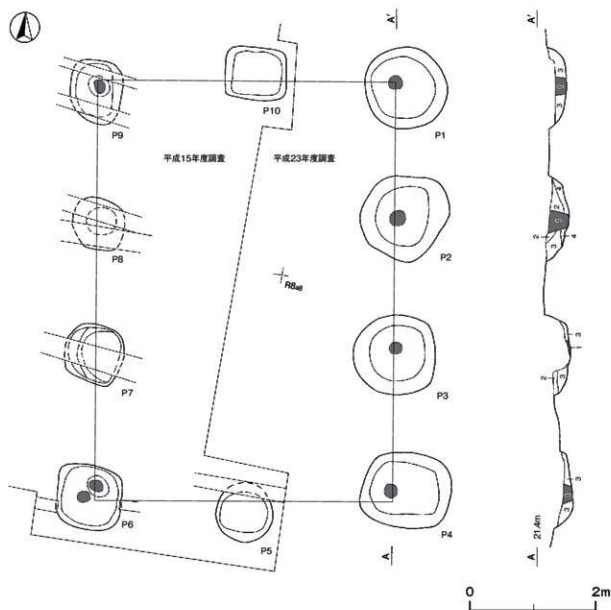
第 201 号掘立柱建物跡 (第 162 図)

調査年度 平成 23 年度に調査した。西部は平成 15 年度に調査し、当財団報告『第 236 集』において報告している。柱穴の番号については、今回報告分と合わせて、既調査分を新しい番号に更新した。

位置 12 区中央部の R 8a7 区、標高 21 m の台地中央部に位置している。

規模と構造 桁行 3 間、梁行 2 間の掘立柱建物跡で、桁行方向が $N-6^{\circ}-W$ の南北棟である。規模は、桁行 6.6 m、梁行 4.8 m で、面積は 31.68 m^2 である。柱間寸法は桁行が北妻から 2.2 m (7 尺)、2.1 m (7 尺)、2.3 m (8 尺)、梁行が 2.4 m (8 尺) の等間で、柱筋は揃っている。

柱穴 10 か所。P 1～P 4 について記載する。平面形は円形または隅丸方形で、規模は径 120～134 cm である。深さは 34～50 cm で、掘方の壁は外傾している。第 1 層は柱痕跡、第 2～4 層は埋土である。P 1～P 4 の底面で、柱のあたりを確認した。P 5～P 10 については、『第 236 集』を参照されたい。



第 162 図 第 201 号掘立柱建物跡実測図

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|-------------------|----------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 灰黄褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック多量 |

遺物出土状況 土師器片4点(坏1, 甕類3), 須惠器片6点(坏1, 蓋1, 甕類4)が、P1～P4の埋土中から出土している。いずれも小片で図示できない。

所見 時期は、『第236集』掲載の出土土器から9世紀前葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の東部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。

第559A・559B号掘立柱建物跡 (第163図 PL25・26)

当初は1棟の掘立柱建物跡として調査を進めたが、建て替えが行われていると判断し、古い方の建物をA、新しい建物をBとする。第559B号掘立柱建物への建て替えは、第559A号掘立柱建物の掘方を引き続き使用しており、ここでは、第559A号掘立柱建物跡と第559B号掘立柱建物跡を一緒に記載する。

位置 12区中央部のR7c0区、標高22mの台地中央部に位置している。

重複関係 第1742・3081号竪穴建物跡、第563号掘立柱建物跡を掘り込み、第560号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と構造 第559A号掘立柱建物跡は桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-0°の南北棟である。規模は、桁行7.0m、梁行5.4mで、面積は3780m²である。柱間寸法は桁行が北妻から28m(9尺)、18m(6尺)、24m(8尺)、梁行が25m(8尺)、29m(10尺)で、柱筋は揃っている。第559B号掘立柱建物跡は桁行3間、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-0°の南北棟である。規模は、桁行6.5m、梁行4.9mで、面積は3185m²である。柱間寸法は桁行が北妻から23m(8尺)、20m(7尺)、22m(7尺)、梁行が24m(8尺)、25m(8尺)で、柱筋は揃っている。第559A号掘立柱建物からの建て替えで、桁行・梁行ともに0.5m縮小されている。

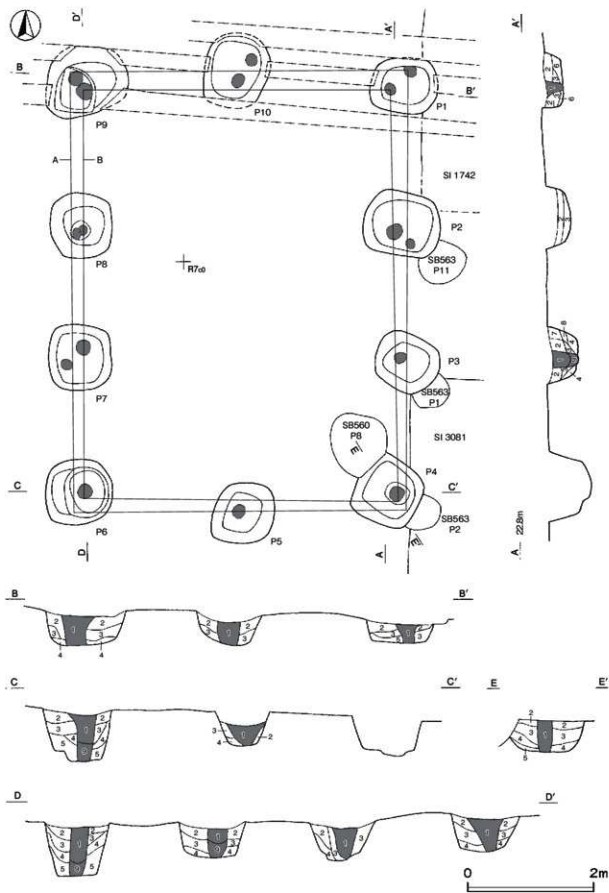
柱穴 10か所。建て替えで、柱はすべて取り替えており、土層状況は第559B号掘立柱建物跡の状況を示すと考えられる。平面形は隅丸方形で、規模は長軸108～138cm、短軸88～106cmである。深さは36～85cmで、掘方の壁はほぼ直立している。P3・P4・P6・P7・P10の第1・9層は柱痕跡、第2～8層は埋土である。P1・P5・P8・P9の第1層は柱抜き取り痕で、第2～5層は覆土である。P2の第2・3層は柱抜き取り後の覆土である。P1～P10の底面で柱のあたりを確認し、その内P1・P2・P7～P10では新旧2か所の柱のあたりを確認した。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | 炭化粒子少量, ロームブロック微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 8 明褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 4 褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 5 明褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 土師器片55点(坏6, 高台付坏1, 甕類48), 須惠器片29点(坏12, 蓋4, 甕類13)が、P1～P10の埋土及び覆土中からまばらに出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 第559A号掘立柱建物から第559B号掘立柱建物への建て替えは、柱穴の位置を変えずに行っていることから、建て替えは連続していたと考えられる。時期は、第1742号竪穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から9世紀前葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中央部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。



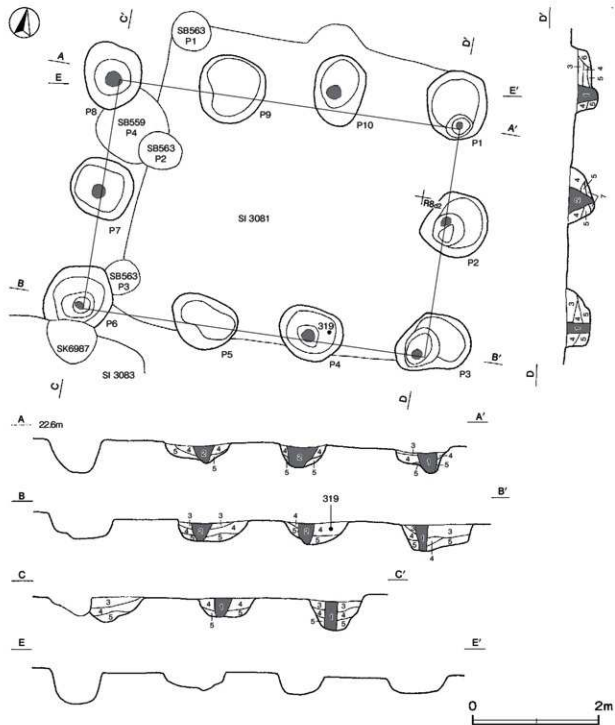
第 163 图 第 559A · 559B 号掘立柱建物跡実測図

第 560 号掘立柱建物跡 (第 164・165 図 PL25・26)

位置 12 区中央部の R 8d1 区、標高 22 m の台地中央部に位置している。

重複関係 第 3081・3083 号竪穴建物跡、第 559A・B・563 号掘立柱建物跡を掘り込み、第 6987 号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行 3 間、梁行 2 間の側柱建物跡で、桁行方向が $N-90^{\circ}-E$ の東西棟である。規模は、桁行 5.5 m、梁行 3.7 m で、面積は 20.35 m^2 である。柱間寸法は桁行が西妻から 2.0 m (7 尺)、1.8 m (6 尺)、1.7 m (6 尺)、梁行が 1.6 m (5 尺)、2.1 m (7 尺) で、柱筋はほぼ揃っている。



第 164 図 第 560 号掘立柱建物跡実測図

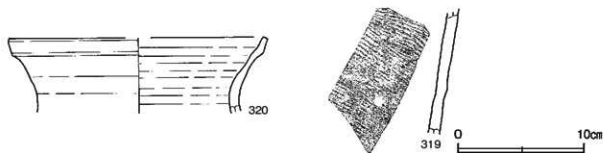
柱穴 10か所。平面形は隅丸方形または楕円形で、規模は長軸100～112cm、短軸88～96cmである。深さは28～48cmで、掘方の壁は外傾している。P1・P3・P7・P8の第1層は柱痕跡で、第3～6層は埋土である。P2・P4・P5・P9・P10の第2層は柱抜き取り痕で、第3～5・7層は覆土である。P6の第3～5層は、柱抜き取り後の覆土である。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 7 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片57点(坏2、甕類54、甗1)、須恵器片19点(坏8、蓋2、甕類8、鉢1)が、P1～P10の埋土や覆土中からまばらに出土している。319はP4の覆土上層から出土していることから混入したものと考えられる。

所見 時期は、第559号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや出土土器から9世紀中葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中央部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。



第165図 第560号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第560号跡出土遺物観察表 (第165図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
319	須恵器	甕	-	(101)	-	長石・石英・雲母	黄灰	良好	体部外面斜位の平行叩き	P4 埋土上層	5% 新古窯
320	須恵器	甕	[206]	(6.1)	-	長石・石英	灰	良好	口縁部外・内面ロクロナデ	P5 覆土中	10% 産地不明

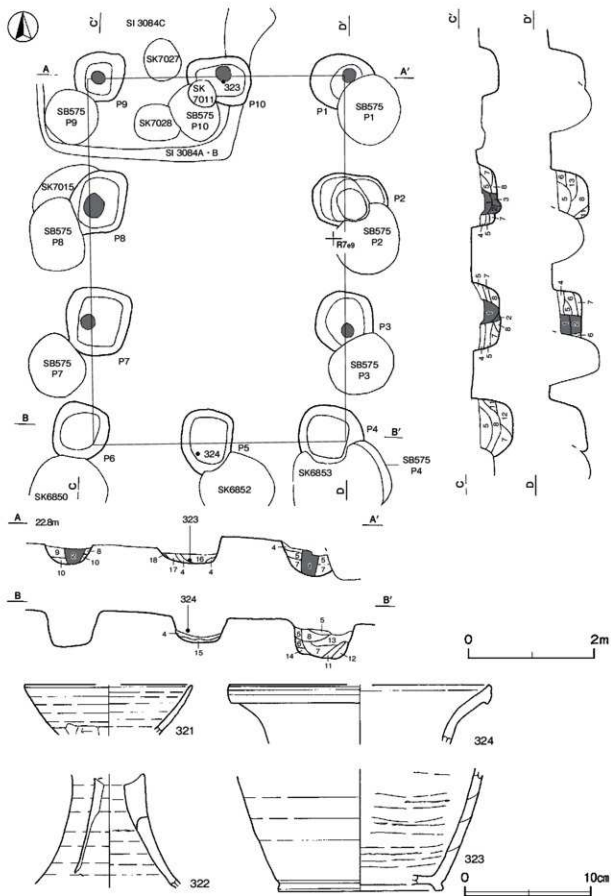
第561号掘立柱建物跡 (第166図 PL26)

位置 12区中央部のR7e8区、標高22mの台地中央部に位置している。

重複関係 第7015号土坑を掘り込み、第3084A号堅穴建物、第575号掘立柱建物、第6850・6852・6853・7011号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-2°-Wの南北棟である。規模は、桁行5.8m、梁行4.2mで、面積は24.36㎡である。柱間寸法は桁行が北妻から2.0m(7尺)、2.0m(7尺)、1.8m(6尺)で、梁行は2.1m(7尺)の等間である。柱筋は揃っている。

柱穴 10か所。平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、規模は長軸78～105cm、短軸76～90cmである。深さは32～70cmで、掘方の壁は外傾している。P1・P3・P7～P9の第1～3層は柱痕跡で、第4～10層は埋土である。P4の第5～8・11～14層は柱抜き取り痕である。P2・P5・P6・P10の第4～8・11～13・15～18層は柱抜き取り後の覆土である。P1・P3・P7～P10の底面で柱のあたりを確認した。



第 166 图 第 561 号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

土層解説 (各柱穴共通)

1	黒褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	11	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	12	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック少量	13	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック微量	14	暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量
5	暗褐色	ロームブロック少量 (締まり強い)	15	黒褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
6	暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	16	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
7	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	17	黒褐色	焼土ブロック・粘土ブロック・炭化物少量
8	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	18	黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
9	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量			
10	褐色	ロームブロック中量			

遺物出土状況 土師器片 47 点 (坏 7, 甕類 40), 須恵器 56 点 (坏 19, 高台付坏 5, 蓋 15, 長頸瓶 1, 甕類 14, 壺 1, 瓶 1) が, P 1 ~ P 10 の埋土及び覆土中からまばらに出土している。323 は P 10 の覆土下層から, 324 は P 5 の覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 第 3084A 号竪穴建物や第 575 号掘立柱建物に掘り込まれていることや出土土器から 9 世紀前葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中央部に位置し, これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は, 規模や形状から屋と考えられる。

第 561 号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第 166 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
321	須恵器	坏	[133]	(4.0)	-	長石・石英・雲母	黄灰	良好	体部下端手持ちヘラ削り	P 3 埋土中	27% 新治産
322	須恵器	高脚	-	(9.0)	-	長石・石英・雲母	黄灰	普通	脚部外・内面ロクロナデ 透かし孔	P 7 埋土中	19% 新治産
323	須恵器	短頸瓶	-	(9.8)	[128]	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り 体部外・内面ロクロナデ	P 10 覆土下層	18% 新治産
324	須恵器	甕	[206]	(4.7)	-	長石・石英・雲母	灰	普通	口縁部外・内面ロクロナデ	P 5 覆土中層	5% 新治産

第 567 号掘立柱建物跡 (第 167 図)

位置 12 区中央部の R 7e1 区, 標高 22 m の台地中央部に位置している。

重複関係 第 1603・3088B 号竪穴建物跡を掘り込み, 第 6845 号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 南部が調査区域外に延びているため, 桁行は 2 間, 梁行は 2 間しか, 確認できなかった。桁行方向が N - 6° - E の南北棟と推定できる。柱間寸法は桁行が北妻から 21 m (7 尺), 18 m (6 尺), 梁行が 18 m (6 尺) の等間で, 柱筋はほぼ揃っている。

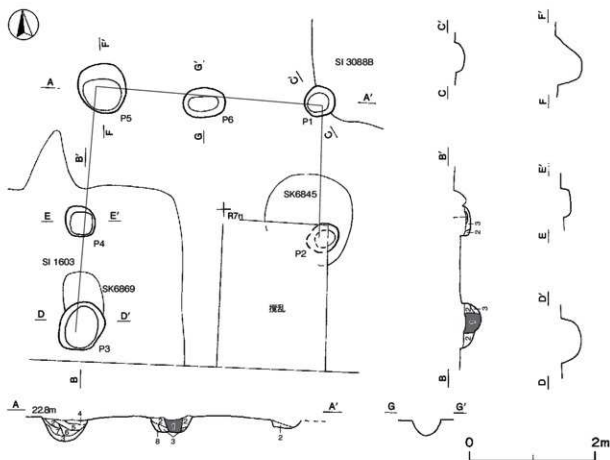
柱穴 6 か所。平面形は楕円形または円形で, 規模は長径 50 ~ 86 cm, 短径 46 ~ 74 cm である。深さは 16 ~ 42 cm で, 掘方の壁は, ほぼ直立または外傾している。P 3・P 6 の第 1 層は柱痕跡で, 第 2・3・8 層は埋土である。P 1・P 4・P 5 の第 1 ~ 7 層は柱抜き取り後の覆土である。

土層解説 (各柱穴共通)

1	暗褐色	ロームブロック少量	5	黒褐色	ロームブロック・炭化物少量
2	暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子少量	6	暗褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	暗褐色	ロームブロック中量	7	黒褐色	ロームブロック少量、炭化物微量
4	暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	8	黒褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片 13 点 (坏 3, 甕類 10), 須恵器片 7 点 (坏 5, 瓶 1, 甕類 1) が, P 1 ~ P 6 の埋土及び覆土中からまばらに出土している。いずれも小片で図示できない。

所見 時期は, 第 1603 号竪穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から 9 世紀前葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の西端部に位置し, これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は, 規模や形状から屋と考えられる。



第 167 図 第 567 号掘立柱建物跡実測図

第 569 号掘立柱建物跡 (第 168 図)

位置 12 区中央部の R7e4 区、標高 22 m の台地中央部に位置している。

重複関係 第 3086・3087・3095 号竪穴建物跡、第 6816・6819・6866・6867 号土坑を掘り込み、第 6863・6864 号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行 3 間、梁行 2 間の側柱建物跡で、桁行方向が N-9°-E の南北棟である。規模は、桁行 6.4 m、梁行 4.8 m で、面積は 30.72m² である。柱間寸法は桁行が北妻から 2.2 m (7 尺) の等間、梁行は 2.4 m (8 尺) の等間である。柱筋はほぼ揃っている。

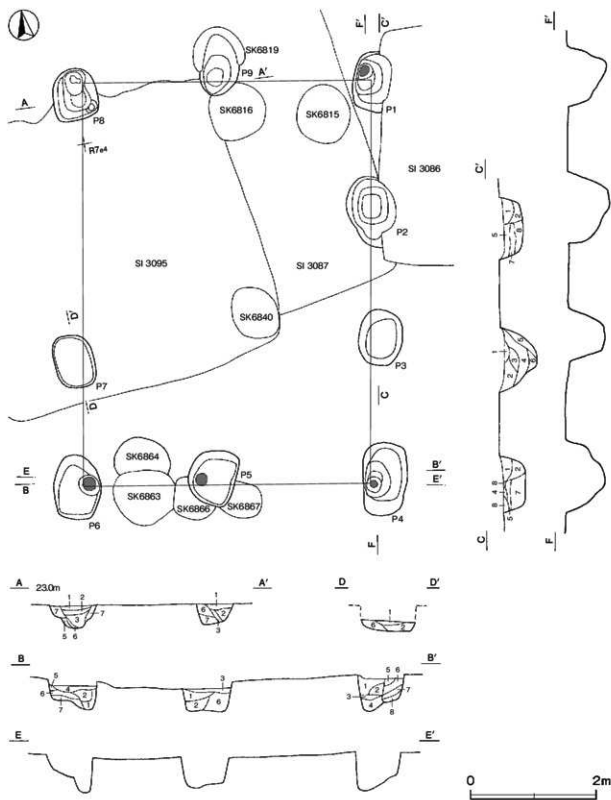
柱穴 9 か所。平面形は隅丸方形で、規模は長軸 82 ~ 116cm、短軸 62 ~ 82cm である。深さは 34 ~ 70cm で、掘方の壁はほぼ直立または外傾している。P1 ~ P9 の第 1 ~ 4 層は柱抜き取り痕で、第 5 ~ 8 層は覆土である。P1・P4 ~ P6 の底面で、柱のあたりを確認した。

土層解説 (各柱穴共通)

1 暗褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量	5 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3 灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量	7 黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
4 褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片 91 点 (環 17、高台付環 2、甕類 72)、須恵器 38 点 (環 19、蓋 10、短頸壺 1、甕類 8) が、P1 ~ P9 の埋土及び覆土中からまばらに出土している。いずれも細片で図示できない。

所見 時期は、第 3086 号竪穴建物跡を掘り込んでいることや出土土器から 9 世紀前葉以降と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の西部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。



第 168 図 第 569 号掘立柱建物跡実測図

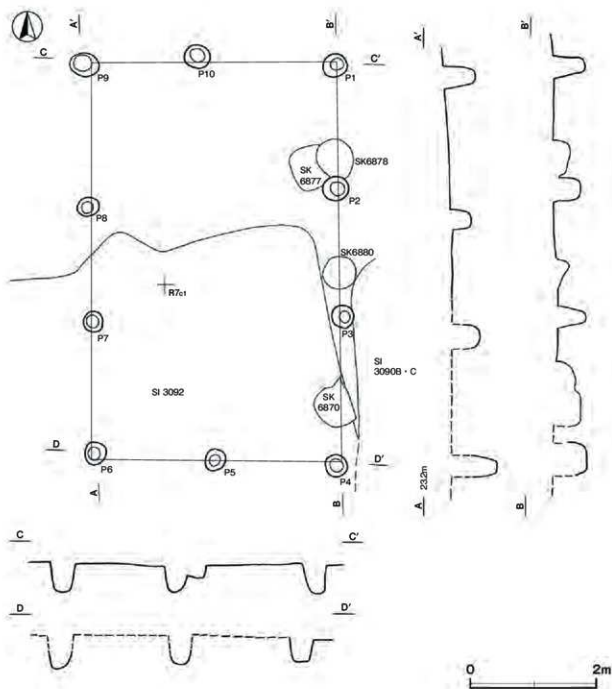
第 571 号掘立柱建物跡 (第 169 図)

位置 12 区中央部の R 7 b1 区、標高 23 m の台地中央部に位置している。

重複関係 第 3092 号竪穴建物跡、第 6877・6878 号土坑を掘り込んでいる。第 6870・6880 号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行 3 間、梁行 2 間の掘立柱建物跡で、桁行方向が N - 1° - W の南北棟である。規模は、桁行 6.4 m、梁行 4.0 m で、面積は 25.60m² である。柱間寸法は桁行が北妻から 2.0 m (7 尺)、2.0 m (7 尺)、2.4 m (8 尺)、梁行が 2.2 m (7 尺)、1.8 m (6 尺) で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 10 か所。平面形は円形で、規模は径 30 ~ 44cm である。深さは 26 ~ 50cm で、掘方の壁はほぼ直立している。



第 169 図 第 571 号掘立柱建物跡実測図

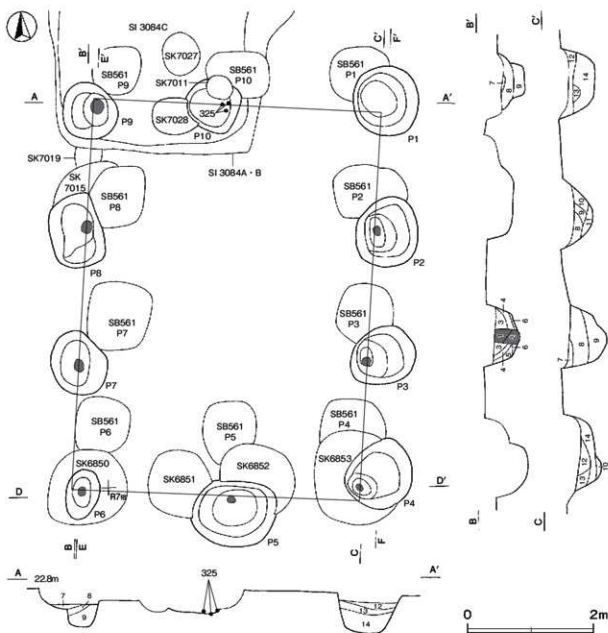
遺物出土状況 土師器片 14 点 (坏 1, 高台付坏 1, 甕類 12), 須恵器片 4 点 (坏 2, 甕類 2) が, P1~P3・P6~P8 の埋土中からまばらに出土している。いずれも小片で図示できない。

所見 時期は, 隣接して位置する第 3091 号竪穴建物跡と主軸方向がほぼ一致することや出土土器から 9 世紀後葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の西端部に位置し, これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は, 規模や形状から屋と考えられる。

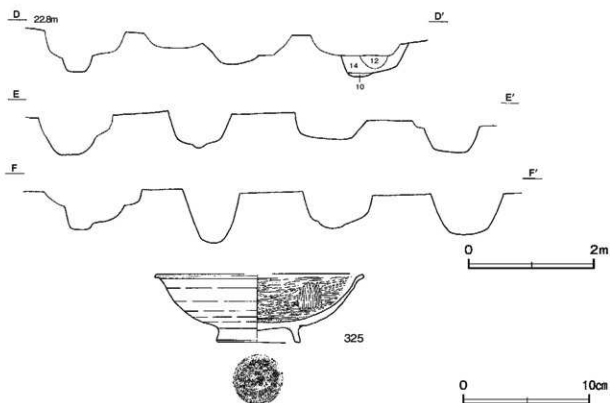
第 575 号掘立柱建物跡 (第 170・171 図 PL26)

位置 12 区中央部の R7e8 区, 標高 22 m の台地中央部に位置している。

重複関係 第 561 号掘立柱建物跡, 第 7015・7019 号土坑を掘り込み, 第 3084A・3084B 号竪穴建物, 第 6850~6853・7011・7028 号土坑に掘り込まれている。



第 170 図 第 575 号掘立柱建物跡実測図



第171図 第575号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

規模と構造 桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡で、桁行方向がN-4°-Eの南北棟である。規模は、桁行6.2m、梁行4.5mで、面積は27.90㎡である。柱間寸法は桁行が北妻から1.9m（6尺）、2.1m（7尺）、2.2m（7尺）で、梁行は2.5m（8尺）、2.0m（7尺）である。柱筋は揃っている。

柱穴 10か所。平面形は楕円形または隅丸方形で、規模は長径92～136cm、短径88～110cmである。深さは36～70cmで、掘方の壁は外傾している。P7の第1・2層は柱痕跡で、第3～6層は埋土である。P1～P4・P9の第7～14層は、柱抜き取り後の覆土である。P2～P9の底面で、柱のあたりを確認した。

土層解説（各柱穴共通）

1 黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	8 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック少量	9 褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	10 褐色	ロームブロック少量
4 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	11 暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量
5 黒褐色	ロームブロック少量	12 にぶい褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量	13 にぶい褐色	ロームブロック少量、炭化粒子・粘土粒子微量
7 褐色	ロームブロック中量	14 暗褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量

遺物出土状況 土師器片17点（高台付碗1、蓋1、甕類15）、須恵器4点（坏1、甕類3）が、P3・P7～P10の埋土中からまばらに出土している。325はP10の底面から出土しており、柱抜き取り後に意識的に置かれた可能性がある。

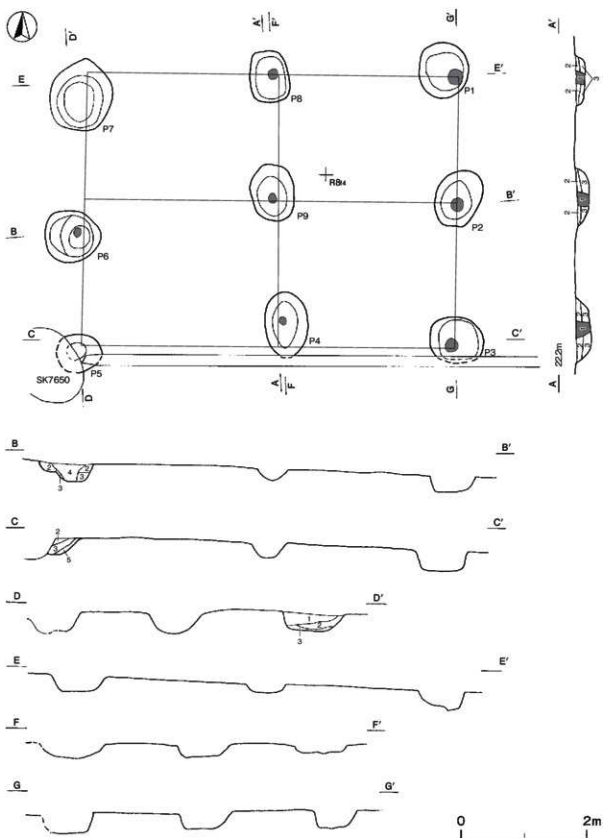
所見 時期は、第561号掘立柱建物跡を掘り込み、第3084A号竪穴建物に掘り込まれていることや出土土器から9世紀後葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中央部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。

第575号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第171図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	動土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
325	土師器	高台付碗	[366]	5.4	6.4	長石・石英・雲母	明黄緑	普通	体部外面ロクロナテ 体部内面へラ抜き焼、黒色処理 底面回転へラ削り焼、高台粘付	P10底面	60%

第 576 号掘立柱建物跡 (第 172 図)

位置 12 区中央部の R 8 f3 区, 標高 22 m の台地中央部に位置している。



第 172 図 第 576 号掘立柱建物跡実測図

重複関係 第7650号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行、梁行ともに2間の総柱建物跡で、桁行方向はN-0°の東西棟である。規模は、桁行5.8m、梁行4.3mで面積は24.94㎡である。柱間寸法は桁行が北妻から2.8m(9尺)、3.0m(10尺)、東梁行が2.0m(7尺)、2.3m(8尺)とばらつきがあり、兩個柱穴と中央柱穴との柱筋が揃っていない。

柱穴 9か所。平面形は楕円形または隅丸長方形で、規模は長径80～114cm、短径64～98cmである。深さは12～32cmで、掘方の壁は外傾している。P4・P8・P9の第1層は柱痕跡で、第2・3層は埋土である。P6の第4層は柱抜き取り痕で、第2・3層は埋土である。P5・P7の第1～3・5層は柱抜き取り後の覆土である。P1～P4・P6・P8・P9の底面で、柱のあたりを確認した。

土層解説 (各柱穴共通)

- | | | | |
|-------|------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 2 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片4点(坏1、甕頸3)、須恵器片2点(蓋、甕頸)、灰陶陶器片1点(長頸瓶)が、P2・P5・P9の埋土及び覆土中からまばらに出土している。いずれも小片で図示できない。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集積して配置されている地区の中央部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。

第577号掘立柱建物跡 (第173図)

位置 12区中央部のR87区、標高21mの台地中央部に位置している。

重複関係 第562号掘立柱建物跡を掘り込み、第3096号竪穴建物、第6876号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 遺構の重複により東部の柱穴は確認されていないが、桁行2間以上、梁行2間の側柱建物跡で、桁行方向がN-90°-Eの東西棟と推定される。柱間寸法は桁行が西妻から2.1m(7尺)、1.8m(6尺)で、梁行は1.6m(5尺)で等間である。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 5か所。平面形は隅丸方形または楕円形で、規模は長軸76～106cm、短軸68～86cmである。深さは6～34cmで、掘方の壁は外傾している。P1～P4の第1～4層はすべて柱抜き取り後の覆土である。

土層解説 (各柱穴共通)

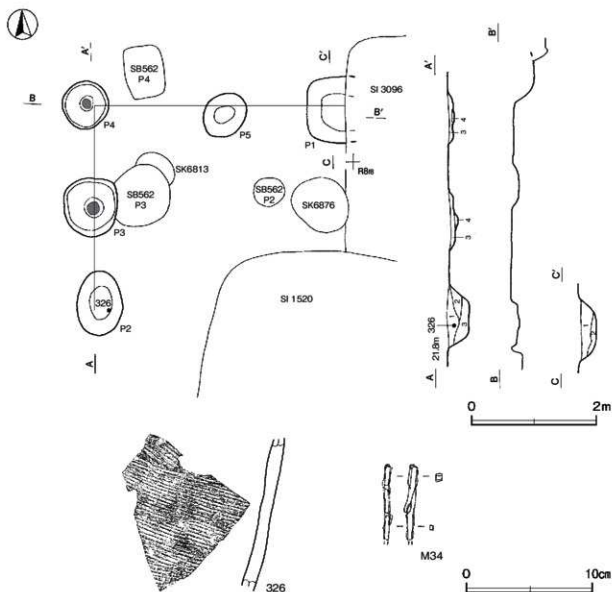
- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片11点(甕頸)、須恵器片6点(坏1、蓋2、鉢1、甕頸2)、金属製品1点(釘)が、P2～P4の覆土中からまばらに出土している。326はP2の覆土中層から出土しており、覆土に混入したものと考えられる。

所見 時期は、第562号掘立柱建物跡を掘り込み、第3096号竪穴建物に掘り込まれていることや出土土器から9世紀中葉以前と考えられる。本跡は掘立柱建物が集積して配置されている地区の中央部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。

第577号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第173図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
326	須恵器	鉢	-	(122)	-	長石・石英	褐色	普通	体部外面斜位の平行押き	体部内面当て具痕	P2 覆土中層	3% 新直産
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考	
M34	釘	(6.1)	07-13	04-06	(5.4)	鉄	断面長方形 一部割線			P2 覆土中		



第173図 第577号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

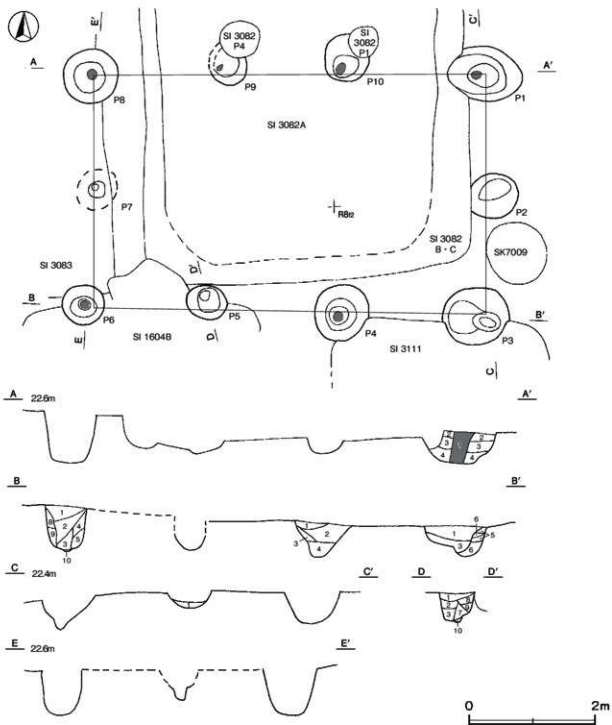
第578号掘立柱建物跡 (第174図 PL26)

位置 12区中央部のR8f1区、標高22mの台地中央部に位置している。

重複関係 第3082C号竪穴建物跡を掘り込み、第1604B・3082A・3082B・3111号竪穴建物、第7009号土坑に掘り込まれている。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の櫛柱建物跡で、桁行方向が $N-90^{\circ}-E$ の東西棟である。規模は、桁行6.2m、梁行3.8mで、面積は23.56㎡である。柱間寸法は桁行が北妻から2.2m(7尺)、1.9m(6尺)、2.1m(7尺)、東梁行が2.0m(7尺)、1.8m(6尺)で、柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 10か所。平面形は楕円形または円形で、規模は長径64~108cm、短径54~85である。深さは30~78cmで、掘方の壁はほぼ直立している。P1の第1層は柱痕跡で、第5~7層は埋土である。P3~P6の第1~4層は柱抜き取り痕で、第5~9層は覆土である。P2の第1層は抜き取り後の覆土である。P1・P4・P6・P8~P10の底面で柱のあたりを確認した。



第 174 図 第 578 号掘立柱建物跡実測図

土層解読 (各柱穴共通)

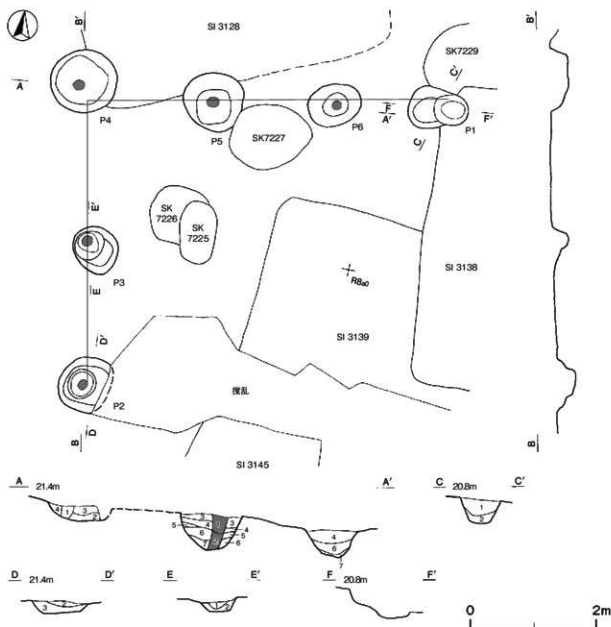
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・砂粒微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・砂粒微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量、砂粒微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 |
| 3 灰褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック少量、粘土粒子微量 | 9 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック少量 | 10 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 土師器片1点(坏)が、P8の覆土中から出土している。小片で図示できない。

所見 時期は、第3082A号竪穴建物に掘り込まれていることから9世紀前葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の中央部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。

第588号掘立柱建物跡(第175図)

位置 12区中央部のR8a9区、標高20mの台地縁辺部に位置している。



第175図 第588号掘立柱建物跡実測図

重複関係 第3128号竪穴建物跡、第7229号土坑を掘り込み、第3138・3139号竪穴建物、第7227号土坑に掘り込まれている。第7225・7226号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 桁行3間以上、梁行2間の銅柱建物跡で、桁行方向がN-78°-Eの東西棟と推定される。規模は、桁行5.8m以上、梁行4.6mである。柱間寸法は桁行が西妻から2.0m(7尺)、2.0m(7尺)、1.8m(6尺)で、西梁行は2.3m(8尺)の、等間である。柱筋はほぼ揃っている。

柱穴 6か所。平面形は楕円形または円形で、規模は長径78~102cm、短径62~98cmである。深さは20~56cmで、掘方の壁は外傾している。P5の第1・2層は柱痕跡で、第3~7層は埋土である。P1~P4・P6の第1~7層は、柱抜き取り後の覆土である。P2~P6の底面で、柱のあたりを確認した。

土層解説 (各柱穴共通)

1	黒褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	5	にぶい黄褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック少量	6	黒褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
3	灰黄褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	7	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量			

遺物出土状況 土師器片17点(蓋1、甕類16)、須恵器片4点(坏2、盤1、甕類1)が、P3~P6の埋土及び覆土中からまばらに出土している。いずれも小片で図示できない。

所見 時期は、第3139号竪穴建物に掘り込まれていることや出土土器から9世紀前葉と考えられる。本跡は掘立柱建物が集中して配置されている地区の東部に位置し、これまでに確認されている掘立柱建物と関連する建物と考えられる。性格は、規模や形状から屋と考えられる。

表8 平安時代掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数	規模	面積	柱間寸法			柱穴			主な出土遺物	時期	備考
						桁×梁 (m)	面積 (㎡)	桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数			
201	R 8a7	N-6°-W	3×2	6.6×4.8	31.68	2.1-2.3	2.4	銅柱	10	円形 隅丸方形	34-50	土師器、須恵器	9世紀前葉	
558A	R 7c0	N-0°	3×2	7.0×5.4	37.80	1.8-2.8	2.5-2.9	銅柱	10	隅丸方形	36-85	土師器、須恵器	9世紀前葉	SI1742・3081、 SI552→本跡、 →SI5590・660
558B	R 7c0	N-0°	3×2	6.5×4.9	31.85	2.0-2.3	2.4-2.5	銅柱	10	隅丸方形	36-85	土師器、須恵器	9世紀前葉	SI1742・3081、 SI552・559A→ 本跡、→SI5590、 SI381・3083、 SI550、563→ 本跡、→SI0987
560	R 8d1	N-90°-E	3×2	5.5×3.7	20.35	1.7-2.0	1.6-2.1	銅柱	10	隅丸方形 楕円形	28-48	土師器、須恵器	9世紀中葉	SI7015→本跡、 →SI0987、 SI3084A、SI4575
561	R 7e8	N-2°-W	3×2	5.8×4.2	24.36	1.8-2.0	2.1	銅柱	10	隅丸方形 隅丸長方形	32-70	土師器、須恵器	9世紀前葉	SI1603・3088→ 本跡、→SI6845
567	R 7c1	[N-6°-E]	2×2	(3.9)×3.6	-	1.8-2.1	1.8	銅柱	6	楕円形 円形	16-42	土師器、須恵器	9世紀前葉	SI006・3067 以降 3095→本跡
569	R 7e4	N-9°-E	3×2	6.4×4.8	30.72	2.2	2.4	銅柱	9	隅丸方形	34-70	土師器、須恵器	9世紀前葉	SI006・3067 以降 3095→本跡
571	R 7b1	N-1°-W	3×2	6.4×4.0	25.60	2.0-2.4	1.8-2.2	銅柱	10	円形	36-50	土師器、須恵器	9世紀後葉	SI0092→本跡
575	R 7e8	N-4°-E	3×2	6.2×4.5	27.90	1.9-2.2	2.0-2.5	銅柱	10	楕円形 隅丸方形	36-70	土師器、須恵器	9世紀後葉	SI561→本跡、 →SI3084A・B
576	R 8d	N-0°	2×2	5.8×4.3	24.94	2.8-3.0	2.0-2.3	銅柱	9	楕円形 隅丸長方形	12-32	土師器、須恵器 灰釉陶器	9世紀前葉	SI3111→本跡
577	R 8d	[N-90°-E]	2×2	(3.9)×(3.2)	-	1.8-2.1	1.6	銅柱	5	隅丸方形 楕円形	6-34	土師器、須恵器 金属製品	9世紀中葉 以降	SI562→本跡、 →SI1601B・3082 SI3128→本跡、 →SI3136・3139
578	R 8d	N-90°-E	3×2	6.2×3.8	23.56	1.9-2.2	1.8-2.0	銅柱	10	楕円形 円形	30-78	土師器	9世紀前葉	SI083C→本跡
588	R 8a9	[N-78°-E]	3×2	(5.8)×4.6	-	1.8-2.0	2.3	銅柱	6	楕円形 円形	30-56	土師器、須恵器	9世紀前葉	SI083C→本跡

(3) 土坑

第 6860 号土坑 (第 176 図)

位置 12区北部の R 7 区, 標高 23 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 6861・6862 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 1.77 m, 短径 1.67 m の円形である。

深さは 23 cm で, 壁は外傾している。底面は平坦である。

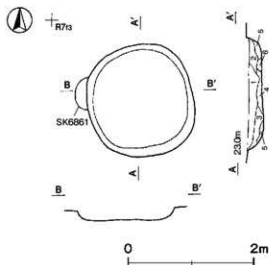
覆土 6 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物少量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量
- 5 黒褐色 ロームブロック中量
- 6 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片 20 点 (坏 3, 甕類 17), 須恵器片 5 点 (坏) が出土しているが, いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は, 出土遺物から 9 世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第 176 図 第 6860 号土坑実測図

第 6864 号土坑 (第 177 図)

位置 12区北部の R 7 区, 標高 22 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 569 号掘立柱建物跡を掘り込み, 第 6863 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部が第 6863 号土坑に掘り込まれているため,

長径は 0.87 m で, 短径は 0.57 m しか確認できなかったが,

楕円形と推定でき, 長径方向は, N - 77° - W である。

深さは 50 cm で, 壁は外傾している。底面は皿状である。

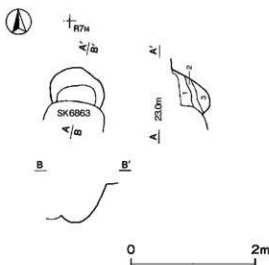
覆土 3 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 褐色 ロームブロック多量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片 9 点 (坏 3, 甕類 6) が出土しているが, いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は, 第 569 号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや, 出土遺物から 9 世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第 177 図 第 6864 号土坑実測図

第 6867 号土坑 (第 178 図)

位置 12区北部の R 7 区, 標高 23 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 3098 号竪穴建物跡, 第 6866 号土坑を掘り込み, 第 569 号掘立柱建物に掘り込まれている。

規模と形状 北西部が第 569 号掘立柱建物に掘り込まれているため, 短径は 0.57 m で, 長径は 0.80 m しか確認できなかったが, 楕円形と推定でき, 長径方向は N - 74° - W である。深さは 48 cm で, 壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

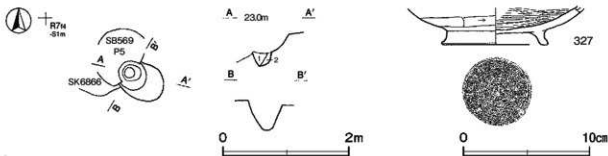
覆土 2 層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- 1 褐色 色 ロームブロック中量, 炭化物微量 2 暗褐色 色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片 1 点 (高台付坏) が出土している。327 は, 覆土中から出土していることから, 埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 第 3098 号竪穴建物跡を掘り込み, 第 569 号掘立柱建物に掘り込まれていることや, 出土遺物から 10 世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第 178 図 第 6867 号土坑・出土遺物実測図

第 6867 号土坑出土遺物観察表 (第 178 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
327	土師器	高台付坏	-	(29)	7.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部下側部位のへら削り, 体部内面へら磨き 底部同様にへら削り後, 高台削付け	覆土中	50%

第 7009 号土坑 (第 179 図 PL28)

位置 12区北部の R 8 区, 標高 22 m ほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第 578 号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 1.00 m, 短径 0.95 m の円形である。深さは 66 cm で, 壁は外傾している。底面は平坦である。

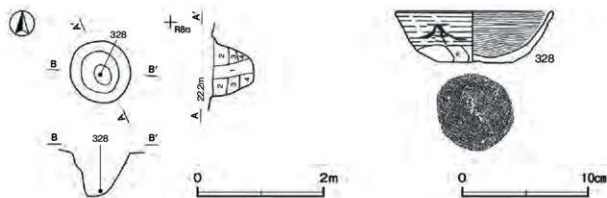
覆土 4 層に分層できる。第 2 ~ 4 層は埋土, 第 1 層は柱抜き取り後の堆積土である。

土層解説

- 1 黒褐色 色 ローム粒子微量 3 黒褐色 色 ロームブロック微量
2 暗褐色 色 ロームブロック・焼土粒子微量 4 暗褐色 色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片 12 点 (坏 6, 甕類 6), 須恵器片 4 点 (坏 2, 甕類 2) が出土している。328 は, 柱が抜き取られた後に投棄された可能性がある。

所見 時期は, 第 578 号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや, 出土遺物から 9 世紀中葉と考えられる。性格は, 周囲に関連する遺構は確認できなかったが, 覆土の堆積状況から柱穴と考えられる。



第179図 第7009号土坑・出土遺物実測図

第7009号土坑出土遺物観察表(第179図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
328	土師器	坏	126	4.1	6.0	長石・石英・雲母	にみ黄橙	普通	体部内面へつ磨き後、黒色処理 体部下 手持ちへつ磨り 底部へつ磨り 体部 外面に墨書「本」文字正位	覆土下層	70% PL44

第7019号土坑(第180図)

位置 12区北部のR7d7区、標高23mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3084A・3084B号竪穴建物、第575号掘立柱建物、第7015号土坑に掘り込まれている。

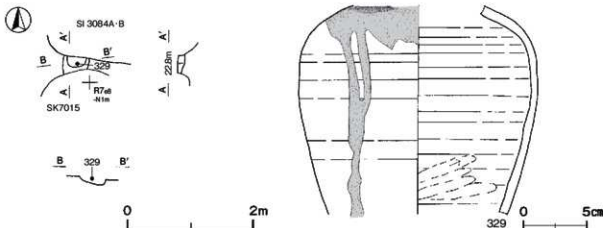
規模と形状 北部が第3084A・3084B号竪穴建物、南部が第575号掘立柱建物、第7015号土坑に掘り込まれているため、長径は0.43mで、短径は0.30mしか確認できなかったが、楕円形と推定でき、長径方向は、N-4°-Wである。深さは12cmで、壁は外傾している。底面は傾斜している。

覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 掘 色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片1点(甕類)、須恵器片1点(坏)、灰釉陶器片1点(長頸瓶)が出土している。329は、覆土下層から出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。



第180図 第7019号土坑・出土遺物実測図

所見 時期は、第3084A・3084B号竪穴建物、第575号掘立柱建物に掘り込まれていることや、出土遺物から9世紀後葉と考えられる。性格は不明である。

第7019号土坑出土遺物観察表（第180図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
329	圧縮陶器	長頸瓶	-	(16.0)	-	長石・白色粒子・黒色粒子	灰白	良好	体部外・内面ロクロナデ 体部内面指ナデ	体部下平回転ヘラ 没け掛け輪軸 軸垂れ	覆土下層	20% 乳濁産

第7027号土坑（第181図）

位置 12区北部のR7d8区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3084C号壺穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.69m、短径0.60mの楕円形で、長径方向は、N-4°-Eである。深さは38cmで、壁は外傾している。底面は皿状である。

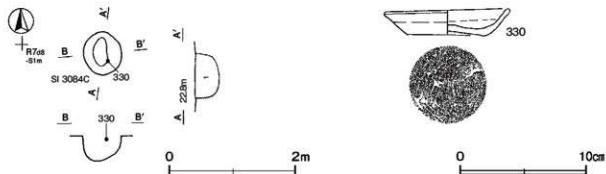
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 褐色 ロームブロック中量、炭化物微量

遺物出土状況 土師器片2点（小皿、甕類）が出土している。330は、完形で覆土上層から出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、第3084C号壺穴建物跡を掘り込んでいることや、出土遺物から10世紀後葉と考えられる。性格は不明である。



第181図 第7027号土坑・出土遺物実測図

第7027号土坑出土遺物観察表（第181図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
330	土師器	小皿	9.7	2.2	6.0	長石・石英・黒母・黒色粒子	にぶい橙	普通	底部回転車切り	覆土上層	100% PL44

第7180号土坑（第182図）

位置 12区北部のR9c3区、標高20mほどの台地傾斜部に位置している。

重複関係 第7181号土坑を掘り込み、第3149号壺穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 径0.90mの円形である。深さは46cmで、壁はほぼ直立している。底面は平坦である。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量

2 にぶい黄褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

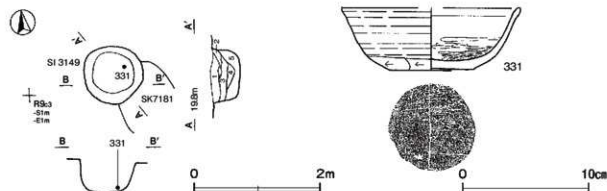
3 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量

4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

5 にぶい黄褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片 6 点 (環 2, 甕類 4), 須恵器片 2 点 (高台付環, 甕類) が出土している。331 は, 覆土下層から出土していることから, 埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 第 3149 号堅穴建物跡を掘り込んでいることや, 出土遺物から 9 世紀後葉以前と考えられる。性格は不明である。



第 182 図 第 7180 号土坑・出土遺物実測図

第 7180 号土坑出土遺物観察表 (第 182 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
331	土師器	環	140	5.0	6.6	長石・石英・雲母	橙	良好	体部内面へう磨き後, 黒色処理 体部下層 手持ちへう磨り, 底部一方向のへう磨り	覆土下層	60% PL44

第 7201 号土坑 (第 183 図)

位置 12 区北部の Q 9j1 区, 標高 20 m ほどの台地傾斜部に位置している。

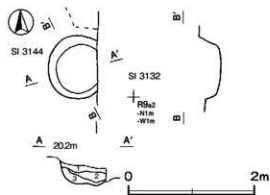
重複関係 第 3132・3144 号堅穴建物に掘り込まれている。

規模と形状 東部を第 3132 号堅穴建物に掘り込まれているため, 長径は 0.99 m で, 短径は 0.75 m しか確認できなかったが, 円形と推定できる。深さは 32 cm で, 壁は外傾している。底面は平坦である。

覆土 3 層に分層できる。ロームブロックなどが含まれていることから, 埋め戻されている。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量, 炭化物微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量
- 3 灰黄褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量



第 183 図 第 7201 号土坑実測図

遺物出土状況 土師器片 2 点 (環), 須恵器片 4 点 (環 2, 甕類 2) が出土しているが, いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は, 第 3132・3144 号堅穴建物に掘り込まれていることや, 出土遺物から 9 世紀後葉と考えられる。性格は不明である。

第 7222 号土坑 (第 184 図)

位置 12 区北部の R 8b9 区, 標高 21 m ほどの台地傾斜部に位置している。

重複関係 第 3145 号堅穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.89 m、短径0.57 mの不整楕円形で、長径方向は、N - 28° - Wである。深さは16cmで、壁は外傾している。底面は平坦である。

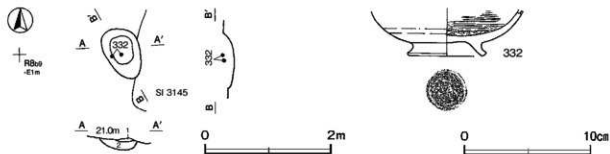
覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片2点(高台付杯)が出土している。332は、破片で覆土上層から出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、第3145号竪穴建物跡を掘り込んでいることや、出土遺物から10世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第184図 第7222号土坑・出土遺物実測図

第7222号土坑出土遺物観察表 (第184図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴ほか	出土位置	備考	
332	土師器	杯	-	(3.7)	5.5	長石・石英、 雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部内面へく磨き後、 切り後、高台形付け	黒色処理 底部回転へく	覆土上層	50%

第7225号土坑 (第185図)

位置 12区北部のQ 8 9区、標高21 mほどの台地傾斜部に位置している。

重複関係 第588号掘立柱建物跡、第7226号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径1.00 m、短径0.60 mの楕円形で、長径方向は、N - 7° - Wである。深さは48cmで、壁はほぼ直立している。底面は皿状である。

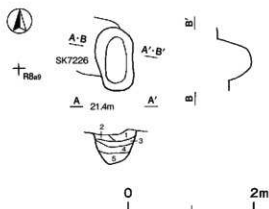
覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 灰黄褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
4 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量
5 黒褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片2点(莞類)、須志器片1点(蓋)が出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、第588号掘立柱建物跡を掘り込んでいることや、出土遺物から9世紀中葉と考えられる。性格は不明である。



第185図 第7225号土坑実測図

第 7233 号土坑 (第 186 図)

位置 12区北部の R 8 b0 区, 標高 20 m ほどの台地傾斜部に位置している。

重複関係 第 7230 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 東部が第 7230 号土坑に掘り込まれているが, 長径 0.79 m, 短径 0.67 m の円形である。深さは 18 cm で, 壁は外傾している。底面は平坦である。

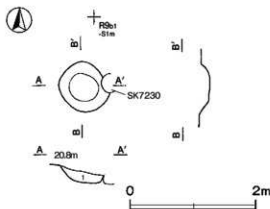
覆土 単一層である。堆積状況から自然堆積である。

土層解説

1 じい・黄褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片 3 点 (高台付坏), 須恵器片 1 点 (甕) が出土しているが, いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は, 出土遺物から 9 世紀後葉と考えられる。性格は不明である。



第 186 図 第 7233 号土坑実測図

第 7241 号土坑 (第 187 図 PL27)

位置 12区北部の R 9 c4 区, 標高 19 m ほどの台地傾斜部に位置している。

重複関係 第 3148 号堅穴建物, 第 7252 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南西部が第 7252 号土坑に掘り込まれているが, 長軸 0.97 m, 短軸 0.96 m の隅丸方形で, 長軸方向は, N-5°-E である。深さは 28 cm で, 壁は外傾もしくはほぼ直立している。底面は皿状である。

覆土 3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから, 埋戻されている。

土層解説

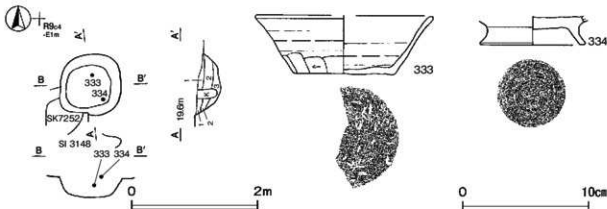
1 黒褐色 焼土粒子少量, ロームブロック微量

3 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック中量, 炭化物・焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片 19 点 (坏 3, 高台付坏 3, 甕類 13), 須恵器片 4 点 (坏 1, 蓋 1, 甕類 2) が出土している。333 は覆土中層, 334 は覆土上層からそれぞれ出土していることから, 埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 第 3148 号堅穴建物に掘り込まれていることや, 出土遺物から 9 世紀前葉と考えられる。性格は不明である。



第 187 図 第 7241 号土坑・出土遺物実測図

第7241号土坑出土遺物観察表 (第187図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地質	手法の特徴ほか	出土位置	備考
333	須恵器	坏	[142]	4.1	8.0	長石・石英・雲母	褐色	良好	体部下端手持ちへう張り 底部二方向の張り	覆土中層	30% 新治産 PL44
334	土師器	高台付杯	-	(2.3)	[84]	長石・石英・雲母	にぶ・橙	普通	体部内面へう張り後 切り後、高台貼付	覆土上層	30%

表9 平安時代土坑一覽表

番号	位置	主軸方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
6860	R 7 区	-	円形	1.77 × 1.67	23	平皿	外堀	人為	土師器, 須恵器	SK6860・6862 → 本跡
6864	R 7 区	N - 77° - W	[楕円形]	0.87 × 0.57	50	皿状	外堀	人為	土師器	SK6869 → 本跡 → SK6863
6867	R 7 区	N - 74° - W	[楕円形]	0.80 × 0.57	48	皿状	はげ直立	人為	土師器	SK6866 → 本跡 → SK6869
7009	R 8 区	-	円形	1.00 × 0.95	66	平皿	外堀	人為	土師器, 須恵器	SK7078 → 本跡
7019	R 7 区	N - 4° - W	[楕円形]	0.43 × 0.30	12	楕円	外堀	人為	土師器, 須恵器, 灰輪陶器	本跡 → SK3084A・ 3084B, SK3575, SK7015
7027	R 7 区	N - 4° - E	楕円形	0.69 × 0.60	38	皿状	外堀	人為	土師器	SK3084C → 本跡
7180	R 9 区	-	円形	0.90 × 0.90	46	平皿	外堀	人為	土師器, 須恵器	SK7181 → 本跡 → SK3149
7201	Q 9 区	-	[円形]	0.99 × 0.75	32	平皿	外堀	人為	土師器, 須恵器	本跡 → SK3132・ 3144
7222	R 8 区	N - 28° - W	不整形円形	0.89 × 0.57	16	平皿	外堀	人為	土師器	SK3145 → 本跡
7225	Q 8 区	N - 7° - W	楕円形	1.00 × 0.60	48	皿状	はげ直立	人為	土師器, 須恵器	SK3588, SK7226 → 本跡
7233	R 8 区	-	円形	0.79 × 0.67	18	平皿	外堀	自然	土師器, 須恵器	本跡 → SK7230
7241	R 9 区	N - 5° - E	隅丸方形	0.97 × 0.96	28	皿状	外堀 はげ直立	人為	土師器, 須恵器	本跡 → SK3148, SK7152

(4) 井戸跡

第218号井戸跡 (第188図 PL27)

位置 12区北部のR 8aD区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 確認面は長径1.18m、短径1.12mの円形で、円筒状に掘り込まれている。確認面から深さ1.45mまで掘り下げた段階で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

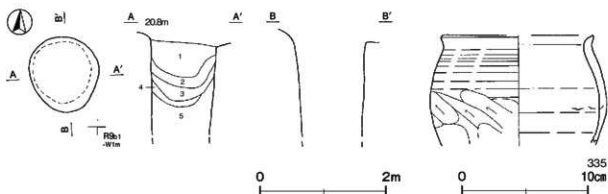
覆土 下層は様相を確認することができなかったが、確認できた範囲は5層に分層できる。ロームブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量、粘土 | 3 暗褐色 | ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化物中量 | 4 灰褐色 | ロームブロック少量、炭化物・粘土粒子微量 |
| | | 5 灰黄褐色 | 粘土ブロック多量、ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片4点(小形甕2、甕類2)、須恵器片2点(甕類)が出土している。335は、破片で覆土中から出土していることから、埋土と一緒に投棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土遺物から10世紀中葉と考えられる。



第188図 第218号井戸跡・出土遺物実測図

第218号井戸跡出土遺物観察表 (第188図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土位置	備考
335	土師器	小形甕	[120]	(87)	-	長石・石英・雲母	いり黄褐色	普通	器形外・内面ロクナテ	器形中位研削のヘラ	覆土中	10%

第251号井戸跡 (第189図 PL27)

位置 12区北部のR 7a6区、標高23mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 確認面は長径1.98m、短径1.54mの楕円形で、長径方向はN-55°-Eである。確認面から深さ1.00mまでは漏斗状に掘り込まれ、下部は長径1.45m、短径1.00mの楕円状に掘り込まれている。確認面から深さ1.60mまで掘り下げた段階で、崩落のおそれがあることから、下部の調査を断念した。

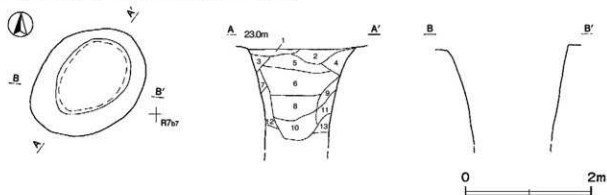
覆土 下層は様相を確認することができなかったが、確認できた範囲は14層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量 | 10 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 13 黒褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 7 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 14 黒褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片 27 点（坏 7、高台付坏 1、寛類 19）、須恵器片 9 点（坏 1、高台付坏 1、蓋 1、寛類 6）、
 灰軸陶器片 1 点（長頸壺）が覆土中から出土しているが、いずれも細片のため図示できない。

所見 時期は、出土遺物から 10 世紀代と考えられる。



第 189 図 第 251 号井戸跡実測図

表 10 平安時代井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
218	R 8 a0	-	円形	1.18 × 1.12	(1.45)	不明	直立	人為	土師器、須恵器	
251	R 7 a6	N - 55° - E	楕円形	1.98 × 1.54	(1.60)	不明	漏斗状	人為	土師器、須恵器、灰軸陶器	

4 時期不明の遺構

土坑

今回の調査で時期や性格が不明な土坑を146基確認した。以下、一覧表にて掲載する。

表11 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
6813	R 8f7	-	円形	0.96×(0.88)	26	平坦	外傾 ほぼ直立	自然	土師器	SE562 → 本跡
6815	R 7e4	-	円形	0.91×0.83	20	平坦	外傾	人為	土師器	SI3087 → 本跡
6816	R 7d4	-	円形	0.92×0.85	15	平坦	外傾	自然	土師器	SI3087・3095 → 本跡
6817	R 7e4	-	円形	0.93×0.86	10	平坦	外傾	自然	土師器	SI3005 → 本跡
6818	R 7d3	-	円形	0.89×0.65	7	平坦	外傾	自然	土師器、須恵器	SI3095 → 本跡
6819	R 7d4	-	円形	0.77×0.73	21	平坦	外傾	人為	土師器、須恵器	SI3087、SE569 → 本跡
6820	R 7d4	N-41°-E	溝丸長方形	0.85×0.73	30	平坦	外傾 ほぼ直立	人為	土師器、須恵器	SI3087 → 本跡
6821	R 7d4	-	円形	0.82×0.77	20	平坦	外傾	人為	土師器	SI3087 → 本跡
6822	R 7d4	N-61°-W	楕円形	0.80×0.69	23	平坦	外傾	人為	土師器、須恵器	SI3087 → 本跡
6823	R 7d3	N-19°-E	楕円形	0.94×0.84	27	平坦	外傾	人為	土師器	SI3087 → 本跡
6824	R 7d5	N-27°-E	楕円形	0.99×0.73	20	平坦	直立	人為	土師器、須恵器	SI3086 → 本跡
6825	R 7d3	-	円形	0.71×0.71	7	平坦	外傾	人為	土師器	SI3090C → 本跡
6826	R 7c3	-	円形	1.05×1.05	11	平坦	外傾	人為	土師器、須恵器	SI3090C、SI570 → 本跡
6829	R 7e4	N-5°-W	楕円形	0.85×0.64	27	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI3097 → 本跡
6831	R 7e4	N-60°-W	楕円形	0.86×0.72	30	平坦	ほぼ直立	人為	土師器、須恵器	SI3097 → 本跡
6834	R 7c2	-	円形	0.64×0.61	12	皿状	外傾	人為		SI3090C → 本跡
6835	R 7c1	N-10°-W	楕円形	0.61×0.55	8	皿状	外傾	自然	土師器、須恵器	SI3092 → 本跡
6836	R 7e5	-	円形	0.64×(0.44)	16	平坦	外傾	人為	土師器、須恵器	SI3086 → 本跡
6841	R 7a4	N-78°-E	楕円形	0.82×0.59	37	有段	ほぼ直立	人為		SI1740 → 本跡
6842	R 7e2	N-1°-E	楕円形	0.88×0.80	21	平坦	外傾	人為		SK6843 → 本跡
6843	R 7e2	N-71°-E	[楕円形]	0.88×(0.62)	19	平坦	外傾	人為		本跡→SK6842・6844
6844	R 7e2	-	円形	1.07×1.01	18	平坦	外傾	人為	土師器、須恵器、陶器	SK6843 → 本跡
6845	R 7e1	N-89°-W	[楕円形]	1.37×(0.77)	30	平坦	外傾	人為		
6850	R 7e7	-	円形	1.25×1.20	25	平坦	外傾	人為		SE561 → 本跡
6851	R 7e8	-	円形	1.06×1.06	23	平坦	外傾	人為		SE561 → 本跡
6852	R 7e8	-	円形	1.20×1.15	30	平坦	外傾	人為		SE561 → 本跡
6853	R 7e8	-	円形	1.50×1.45	14	平坦	外傾	人為		SE561・575 → 本跡
6854	R 7f7	N-77°-W	楕円形	1.14×(0.87)	14	平坦	外傾	人為		
6858	R 7c3	-	円形	0.61×0.61	18	平坦	外傾	人為		SI3089・3090C・3097 → 本跡
6861	R 7d5	-	円形	0.55×0.52	20	皿状	外傾	人為	土師器、須恵器	本跡→SK6860
6862	R 7d5	-	円形	0.45×0.42	16	皿状	外傾	人為		本跡→SK6860
6863	R 7f4	-	円形	0.96×0.93	40	有段	外傾	人為	土師器、須恵器	SK6864・6865 → 本跡
6865	R 7f4	N-81°-W	[楕円形]	1.65×(0.57)	53	有段	直立	人為	土師器、須恵器	本跡→SK6863
6866	R 7f4	N-17°-W	楕円形	0.74×0.64	46	直立	有段	人為	土師器、須恵器	本跡→SI569、SK6863・6867
6868	R 7f4	N-10°-W	楕円形	0.83×0.78	24	有段	外傾	人為	土師器	
6870	R 7c1	N-15°-E	不整楕円形	0.80×0.70	11	皿状	外傾	-		SI3092 → 本跡
6873	R 7c3	N-80°-W	楕円形	0.65×0.50	34	平坦	外傾	人為		SI3090C・3097 → 本跡
6876	R 8f7	N-48°-W	楕円形	1.00×0.83	32	皿状	外傾	人為		SI3006 → 本跡
6877	R 7b1	N-19°-W	楕円形	0.68×0.47	27	皿状	外傾	人為		本跡→SK6878
6878	R 7b1	-	円形	0.58×0.50	24	皿状	外傾	人為	土師器	SK6877 → 本跡
6879	R 7a3	-	円形	1.23×1.20	44	平坦	外傾	人為	土師器、須恵器	

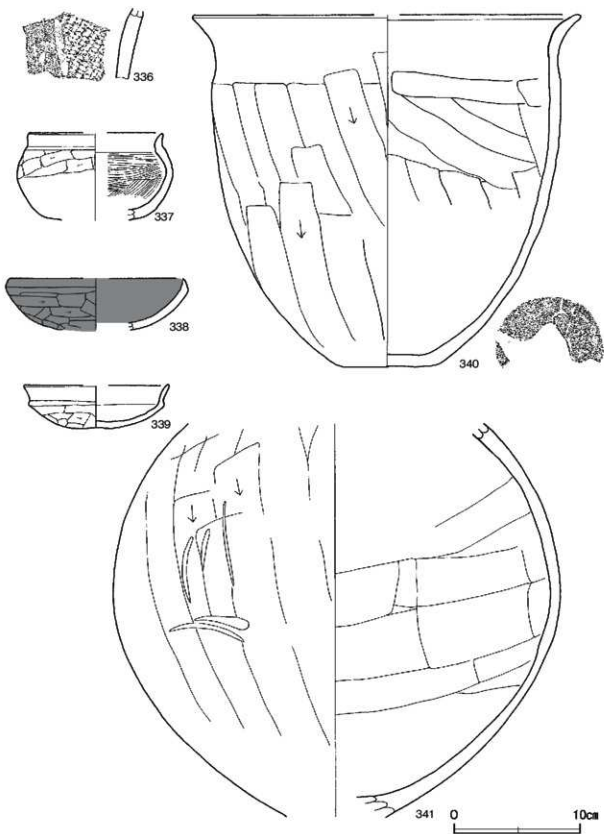
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
6880	R 7 b1	-	円形	0.53 × 0.53	17	皿状	外傾	人為	土師器	
6881	R 7 d7	-	円形	0.75 × 0.70	21	皿状	外傾	人為		SI3094B → 本跡
6882	R 7 d7	N - 42° - W	[楕円形]	(0.60) × 0.50	13	皿状	外傾	人為		SI3094B, SK6881 → 本跡
6883	R 7 d6	N - 35° - W	楕円形	0.97 × 0.52	17	凹凸	外傾	人為		
6880	R 8 b5	N - 65° - W	[楕円形]	(0.38) × 0.34	22	皿状	ほぼ直立	人為	土師器	本跡 → SI564
6881	R 8 c2	N - 2° - E	隅丸方形	0.59 × 0.58	17	平皿	外傾	人為	土師器, 須恵器	SI3080 → 本跡
6882	R 8 c3	N - 90°	[楕円形]	(0.71) × 0.69	9	平皿	外傾	人為	土師器, 須恵器	SI3080 → 本跡
6883	R 8 d4	-	円形	1.92 × 1.76	46	平皿	外傾	人為	土師器, 須恵器	SI3079 → 本跡
6887	R 7 d0	-	円形	0.76 × 0.71	24	平皿	外傾	人為	土師器, 須恵器	SI3083C, SI500 → 本跡
6889	R 8 e4	N - 29° - W	[楕円形]	0.78 × (0.50)	15	平皿	外傾	人為	土師器	SI558, SK6891 → 本跡 → SK6990
6890	R 8 e4	-	円形	0.51 × 0.51	15	皿状	外傾	人為	土師器, 須恵器	SK6889 → 本跡
6891	R 8 e4	N - 57° - W	[楕円形]	(0.41) × (0.38)	5	平皿	外傾	人為		SI558 → 本跡 → SK6889
6892	R 8 e6	N - 50° - W	[楕円形]	0.76 × (0.47)	12	皿状	外傾	人為		SI3078 → 本跡 → SI558
6893	R 7 e9	N - 59° - W	[不整楕円形]	(1.26) × 1.05	8	凹凸	外傾	人為	土師器, 須恵器	SI3083C → 本跡
6894	R 8 e4	N - 4° - E	[楕円形]	0.76 × (0.55)	20	平皿	外傾	人為		本跡 → SI558 SI574 上重版
6896	R 8 e7	N - 10° - E	不整楕円形	0.86 × 0.36	25	凹凸	外傾	人為	土師器	
6897	R 8 b6	N - 72° - E	楕円形	0.70 × 0.43	7	平皿	外傾	人為		SI3077 → 本跡
7002	R 8 c7	-	円形	0.38 × 0.36	39	皿状	ほぼ直立	人為		SI557 → 本跡
7005	R 8 b6	-	円形	0.59 × 0.56	50	凹凸	ほぼ直立	人為	土師器	
7008	R 7 e8	-	円形	0.64 × 0.56	20	平皿	外傾	人為		
7011	R 7 d8	-	円形	0.57 × 0.57	21	平皿	ほぼ直立	-	土師器	SI3084C, SI561・575 → 本跡
7014	R 8 a3	N - 72° - E	楕円形	1.16 × 0.96	14	皿状	外傾	人為		SI559 → 本跡
7015	R 7 d7	-	[円形]	(0.61) × (0.59)	20	平皿	外傾	人為		SK7019 → 本跡 → SI561・ 575
7016	R 7 b8	N - 88° - W	隅丸長方形	2.50 × 1.64	61	平皿	直立	人為	土師器, 須恵器	
7017	R 7 b7	N - 84° - W	不整楕円形	1.25 × 0.94	37	平皿	直立	人為	土師器	
7018	R 7 b7	N - 84° - W	楕円形	1.23 × 1.08	37	平皿	ほぼ直立	人為	土師器, 須恵器	
7024	R 7 e7	-	円形	1.11 × 1.02	11	平皿	外傾	人為	土師器, 須恵器	
7026	R 7 e9	-	円形	1.23 × 1.12	8	平皿	外傾	人為	土師器	SI563 → 本跡
7028	R 7 d8	N - 75° - W	楕円形	0.76 × 0.61	19	皿状	外傾	人為	土師器, 須恵器	SI3084C → 本跡
7029	R 7 d7	-	円形	0.76 × 0.72	36	皿状	外傾	自然		
7160	Q 8 b8	N - 86° - E	楕円形	0.82 × 0.73	27	平皿	外傾	人為		
7161	Q 8 b9	-	円形	0.26 × 0.26	24	皿状	ほぼ直立	人為	土師器	SI2970 → 本跡
7163	Q 8 b9	N - 81° - E	隅丸長方形	1.18 × 0.97	18	皿状	外傾	人為	土師器	
7165	Q 8 b8	N - 60° - E	隅丸方形	0.50 × 0.44	38	皿状	外傾	人為	土師器, 須恵器	SI2970 → 本跡
7167	Q 8 b8	-	円形	0.44 × 0.41	16	平皿	外傾	人為		SI3128 → 本跡
7168	R 9 b2	N - 89° - E	楕円形	1.36 × 0.98	50	凹凸	外傾	自然	土師器	SI3140, SI3589 → 本跡
7169	R 9 e3	N - 15° - W	楕円形	1.42 × 0.57	15	皿状	外傾	自然	土師器	SI3153 → 本跡
7174	R 9 f2	N - 25° - W	楕円形	0.43 × 0.36	23	皿状	外傾	人為		
7175	R 9 e2	-	円形	0.74 × 0.68	20	皿状	外傾	自然	土師器, 須恵器	
7177	R 9 e5	-	円形	0.69 × 0.69	13	傾斜	外傾 ほぼ直立	人為		SI2808 → 本跡
7181	R 9 e3	N - 20° - W	[楕円形]	(1.18) × 0.92	10	平皿	ほぼ直立	人為	土師器	SI3134・3149 → 本跡 → SK7180
7182	R 9 d3	-	円形	0.47 × 0.47	29	皿状	ほぼ直立	人為		
7183	R 9 d4	N - 3° - E	楕円形	1.02 × 0.88	39	皿状	外傾	人為	土師器, 須恵器	
7187	R 9 e1	N - 60° - W	楕円形	0.85 × 0.68	37	有段	外傾	人為	土師器, 須恵器	
7190	R 9 e4	-	円形	0.75 × 0.71	37	皿状	ほぼ直立 外傾	人為	土師器	SI3148・3149 → 本跡
7191	R 9 e3	N - 90°	楕円形	1.06 × 0.68	14	平皿	外傾	人為	土師器	SI3148・3149 → 本跡

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	土 全出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
7192	R 9c3	N-63°-E	楕円形	0.86×0.63	17	平坦	外傾	人為		SI3134・3148・3149→本跡
7193	R 8d	N-79°-E	長方形	2.50×0.62	42	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	SI1527・3141→本跡
7194	R 8a0	N-85°-W	楕円形	0.91×0.74	26	平坦	外傾	人為		SI3138・3139→本跡
7195	Q 8j0	-	円形	0.25×0.25	15	皿状	ほぼ直立	人為		本跡→SI3138・3144
7196	Q 8j0	-	[円形]	0.59×(0.45)	18	皿状	外傾	人為		本跡→SI3138・3144, SK7197
7197	Q 8j0	-	円形	0.73×0.67	36	平坦	外傾	人為	土師器	SK7196→本跡→SI3138・3144
7199	Q 9j1	N-30°-E	楕円形	0.72×0.53	19	平坦	外傾	人為		本跡→SI3138・3144
7200	Q 9j1	-	円形	0.54×0.50	17	平坦	外傾	人為		SI3144→本跡
7203	Q 9j1	N-90°	楕円形	0.63×0.48	14	皿状	外傾	人為	土師器、須恵器	SI3138・3144→本跡
7204	Q 9j1	N-13°-E	不整楕円形	0.44×0.31	12	皿状	外傾	人為		SI3144→本跡
7205	Q 9j1	N-31°-E	[隅丸長方形]	0.65×(0.62)	29	平坦	外傾	人為	土師器、須恵器	本跡→SI3138・3144, SK7206
7206	R 9a1	-	[円形]	0.66×(0.51)	26	皿状	外傾	人為	土師器、須恵器	SK7206→本跡→SI3138・3144
7207	R 8a0	N-32°-E	不整楕円形	0.64×0.55	25	平坦	外傾	人為		SI3138→本跡
7208	Q 9j1	-	円形	0.41×0.38	19	皿状	直立	人為		SI3134→本跡
7210	R 8e9	N-70°-W	楕円形	0.90×0.78	16	皿状	外傾	人為		SI1527→本跡
7211	R 9c3	N-5°-W	楕円形	1.32×1.09	15	平坦	外傾	人為		SI3134・3149→本跡
7212	R 8e8	-	円形	0.78×0.78	23	皿状	外傾	人為	須恵器	SI3130→本跡
7215	R 8d8	-	円形	0.73×0.73	30	平坦	外傾	人為	土師器	
7216	R 8c8	-	円形	1.27×1.27	12	平坦	外傾	人為	土師器	SI3136→本跡→SK7250
7217	R 8c8	-	円形	0.65×0.61	36	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	
7218	R 8c8	-	円形	0.63×0.63	14	平坦	ほぼ直立	人為	土師器	
7219	R 8c8	N-14°-W	楕円形	0.83×0.59	9	平坦	外傾	人為		
7221	R 8c8	N-8°-E	[楕円形]	1.14×(0.74)	5	凹凸	外傾 ほぼ直立	自然	土師器	SI3136, SK7220→本跡→SK7251
7223	R 9c1	N-3°-W	楕円形	1.11×0.85	36	皿状	外傾	人為	土師器、須恵器	SI3142・3143→本跡
7224	R 8b8	N-63°-W	楕円形	0.85×0.77	33	皿状	外傾	人為	須恵器	
7226	Q 8j9	N-2°-W	[円形]	0.93×(0.50)	10	平坦	外傾	自然		本跡→SK7225
7227	Q 8j9	N-68°-E	不整楕円形	1.43×1.04	18	皿状	外傾	人為		
7228	R 8d0	N-69°-E	楕円形	1.05×0.87	32	皿状	外傾	人為	土師器、磁器	SI3133・3137→本跡
7229	Q 8j0	N-33°-W	[楕円形]	1.40×(1.12)	19	皿状	外傾	人為	土師器、須恵器	SI3137・3138→本跡
7230	R 9b1	N-5°-E	楕円形	0.30×0.25	17	平坦	外傾	人為		SK7233→本跡
7231	R 9d1	-	円形	0.84×0.79	20	平坦	外傾	人為	土師器、須恵器	
7232	R 9c1	N-53°-E	楕円形	1.20×(0.48)	26	凹凸	外傾 直立	人為	土師器	SI3143→本跡
7234	Q 9j2	N-58°-W	楕円形	1.23×1.07	73	平坦	ほぼ直立	自然	土師器、須恵器	SI3132→本跡
7235	Q 9j1	N-69°-E	楕円形	0.94×0.58	38	凹凸	外傾 ほぼ直立	人為		SI3132・3144→本跡
7236	Q 9j2	-	不整円形	0.87×0.85	19	傾斜	外傾	人為		SI3132→本跡
7237	Q 9j1	N-58°-W	楕円形	0.65×0.57	17	皿状	外傾	人為		SI3132→本跡
7238	R 9a2	-	円形	0.80×0.80	29	皿状	外傾	人為	土師器、須恵器	SI3140→本跡
7239	R 9c4	-	円形	0.39×0.39	13	皿状	外傾	人為		SI3148・3149→本跡→SK7240
7240	R 9c4	N-86°-W	[楕円形]	(0.92)×0.73	12	皿状	外傾 ほぼ直立	人為	土師器、須恵器	SI3148・3149, SK7239→本跡
7243	R 9b3	N-12°-W	不定形	0.87×0.52	25	傾斜	外傾	人為	土師器、須恵器	
7244	R 9c2	-	円形	0.61×0.56	16	傾斜	外傾	人為	土師器	
7245	R 9c4	N-64°-E	楕円形	0.79×0.53	32	傾斜	外傾	人為	須恵器	SI3148・3149→本跡
7246	R 9c4	N-57°-W	楕円形	0.37×0.34	21	皿状	外傾	人為	土師器、須恵器	SI3148・3149, SK7252→本跡
7247	R 9c4	-	円形	0.55×0.52	30	皿状	ほぼ直立 外傾	人為	土師器、須恵器	
7248	R 9c4	N-36°-W	楕円形	0.51×0.47	26	皿状	外傾	人為		
7249	R 8a7	N-89°-W	楕円形	1.10×0.92	14	平坦	外傾	自然	土師器、須恵器	

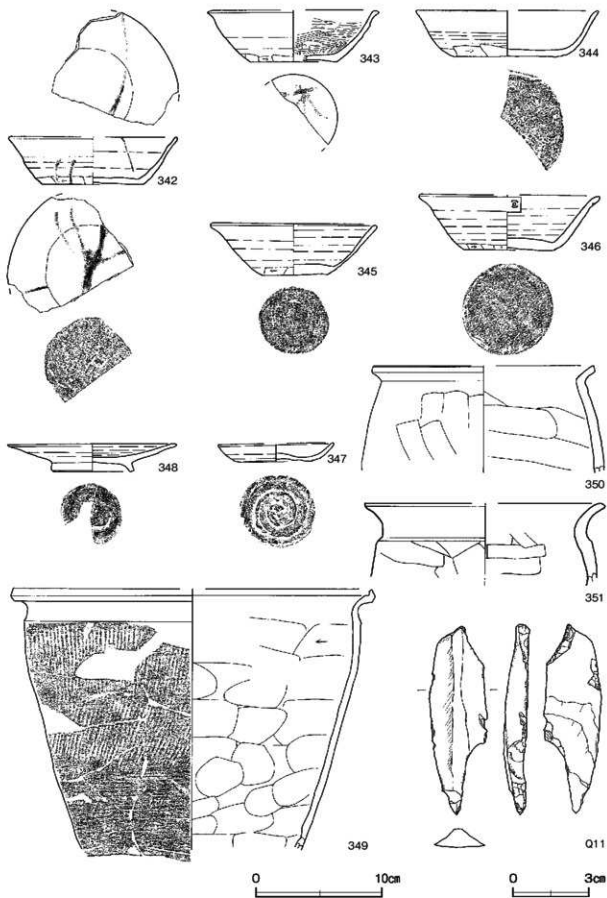
番号	位置	長径方向	平面形	概 観		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
7250	R 8 c8	-	[円形]	0.56 × 0.22	38	皿状	外桶	-	土師器	SI3136, SK7126 → 本跡
7251	R 8 c8	N - 3' - W	[楕円形]	0.37 × 0.18	38	平坦	外桶	人為		SI3136, SK7221 → 本跡
7252	R 9 c4	-	円形	0.61 × 0.61	29	皿状	外桶	人為		SI3148・3149, SK7141 → 本跡 → SK7246
7253	R 8 b8	-	円形	0.95 × 0.89	31	皿状	外桶	人為		
7260	R 9 a5	N - 90'	不整楕円形	1.69 × 1.28	27	平坦	外桶	人為		本跡 → SI3146
7644	R 8 e0	N - 12' - E	楕円形	0.48 × 0.41	10	平坦	外桶	人為		
7645	R 8 e0	N - 10' - E	楕円形	0.66 × 0.51	13	平坦	緩斜	-		SI3137 → 本跡
7646	R 7 f9	N - 88' - W	隅丸方形	0.93 × 0.91	25	平坦	ほぼ直立	人為	須恵器	
7647	R 7 f9	N - 7' - E	方形	0.90 × 0.88	24	平坦	外桶	自然		
7648	R 7 f8	N - 5' - E	隅丸長方形	1.02 × 0.53	68	皿状	ほぼ直立	人為		
7649	R 7 f9	N - 17' - E	楕円形	1.04 × 0.90	42	平坦	外桶	人為		
7650	R 8 f2	N - 26' - W	楕円形	1.25 × 1.02	32	平坦	外形	人為		SI3111 → 本跡

5 遺構外出土遺物

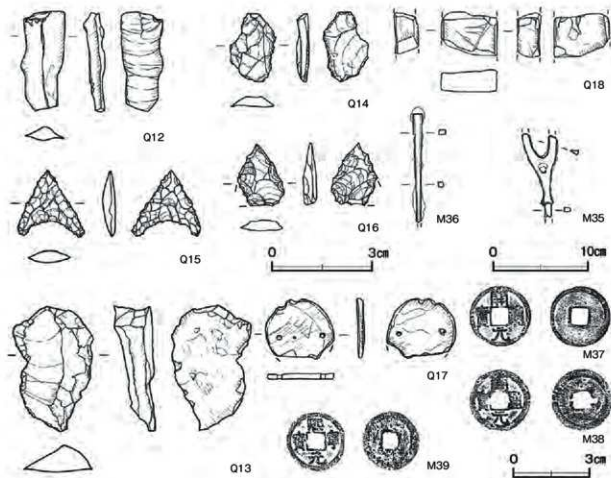
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物については、実測図(第190～192図)と観察表(表12)を掲載する。



第190図 遺構外出土遺物実測図(1)



第 191 图 遺構外出土遺物実測図 (2)



第 192 図 遺構外出土遺物実測図 (3)

表 12 遺構外出土遺物観察表

番号	種別	器種	胎土	色調	文様の特徴ほか	出土位置	備考				
336	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	太沈線区画による磨消し懸垂文 単脚縄文LJL (縦) 施文	表土					
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
337	土師器	碗	[106]	[70]	-	長石・石英・赤色砂子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位のヘラ削り 体部内面ヘラ書き	R 6e0	30% PL44
338	土師器	杯	[138]	(41)	-	石英・赤色砂子	赭灰	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 体部内面ヘラナデ	R 8c0	20%
339	土師器	杯	[114]	3.4	-	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 体部内面ヘラナデ	R 7#0	50% PL44
340	土師器	壺	[310]	28.0	[84]	長石・石英・赤色砂子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラ削り 体部内面横位・斜位のヘラナデ	表土	40%
341	土師器	壺	-	(312)	-	長石・石英・赤色砂子	にぶい橙	普通	体部外面縦位のヘラ削り 体部内面横位のヘラナデ	表土	60%
342	須恵器	杯	[133]	3.8	[81]	長石・石英・細礫	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後 一方削の削り 外・内面大器	R 8c9	40% 新治産
343	土師器	杯	[124]	4.1	[68]	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方削の削り 内面ヘラ書き後 黒色処理 底部に墨書「上」	表土	40%
344	土師器	杯	[148]	3.7	[90]	長石・石英・雲母	浅黄橙	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部一方削の削り	R 8c8	40%
345	須恵器	杯	130	4.2	5.2	長石・石英	灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後 一方削の削り	R 7e4	60% PL44 堀之内産
346	須恵器	杯	[142]	4.5	7.2	長石・石英・雲母	黄灰	普通	体部下端手持ちヘラ削り 底部ヘラ切り後 一方削の削り 口縁近く内影の墨書	R 7e4	70% PL44 新治産
347	土師器	小皿	[90]	1.4	5.8	長石・石英・細礫	にぶい黄橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部ヘラ切り後 口縁ヘラ削り	表土	70%
348	土師器	高台付皿	136	2.2	6.4	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部外・内面ロクロナデ 底部縁部ヘラ切り後 灰が貼付	表土	60%
349	須恵器	鉢	[286]	(207)	-	長石・石英・細礫	灰	普通	体部外面縦位の平行印子 下位横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ	表土	30%
350	土師器	壺	[174]	(85)	-	長石・石英・雲母・赤色砂子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位のヘラ削り 体部内面横位のヘラナデ	R 8c8	10%
351	土師器	壺	[190]	(65)	-	長石・石英・雲母	赭灰	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外・内面横位のヘラナデ	R 9a2	10%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 11	割片	(7.5)	(2.3)	(1.0)	(12.1)	頁岩	縦長割片 打面は準割離面	R 7 e3	PL46
Q 12	割片	(2.7)	(1.2)	(0.6)	(1.1)	黒曜石	縦長割片 打面は準割離面	表土	PL46
Q 13	割片	(5.0)	(3.2)	(1.6)	(15.5)	黒曜石	縦長割片 打面は準割離面	R 7 e0	PL46
Q 14	加工痕のある割片	(1.8)	(1.2)	(0.4)	(0.8)	黒曜石	打面は準割離面 側縁部かゝ加工痕 一部欠損	R 8 c5	PL46
Q 15	鏃	1.8	1.8	0.3	0.7	チャート	無茎鏃 表裏押圧割離	R 7 e4	PL46
Q 16	鏃	1.6	(1.2)	0.4	(0.7)	チャート	無茎鏃 表裏押圧割離 一部欠損	R 8 e5	
Q 17	有孔円板	2.6	2.4	0.3	(2.9)	滑石	両面研磨 2孔 一方からの穿孔 一部欠損	表土	PL46
Q 18	砥石	(3.6)	4.4	1.9	(42.8)	凝灰岩	砥面4面 他は破断面 表面、側面：条線状の研磨痕	表土	PL46

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M35	鏃	(6.6)	2.8	0.3	(12.4)	鉄	穂形 鐵身先端部欠損 頸部同台形開 茎部断面長方形	表土	PL47
M36	釘	(8.7)	0.7	0.4	(8.7)	鉄	先端部・頭部欠損 脚部断面長方形	表土	

番号	銭名	径	孔幅	重量	初周年	材質	特徴	出土位置	備考
M37	開元通寶	2.44	0.67	3.08	621	銅	厚さ 0.12cm 無背銭	R 7 e0	PL48
M38	開元通寶	2.42	0.75	2.74	621	銅	厚さ 0.11cm 無背銭	表土	PL48
M39	熙寧元寶	2.37	0.57	3.19	1068	銅	厚さ 0.12cm 真書 無背銭	表土	PL48

第4節 ま と め

1 はじめに

鳥名熊の山遺跡は、平成7年度から調査を実施し、これまでに『茨城県教育財団文化財調査報告』第120・133・149・166・174・190・214・236・264・280・291・322・328・360・380・389・390・403・431・432集の20冊の報告書を刊行している。今年度は、遺跡の南端部にあたる12区中央部の1,800㎡の報告で、当遺跡に関する最終報告である。今回の報告で、当遺跡の総調査面積は、271,155㎡となる。これまでに確認した主な遺構は、堅穴建物跡約2,600棟、掘立柱建物跡約450棟、古墳2基、方形堅穴遺構約110基、地下式坑約80基、堀・溝跡約400条、道路跡約30条、井戸跡約230基、大型堅穴遺構8基、火葬施設約40基、墓坑約80基、水田跡2か所、遺物包含層5か所などである。

遺跡の内容は、古墳時代(4世紀)から平安時代(11世紀)にかけての集落跡が中心である。6世紀中頃から11世紀に至るまで途絶えることなく生活が営まれ、律令期には「河内郡嶋名郷」の拠点集落となり、鳥名地区では当遺跡周辺だけに集落が集中している。

今回の報告区域である12区は、遺跡の南端部に位置しており、これまでに、『茨城県教育財団文化財調査報告』第214¹⁾・236²⁾・291³⁾・360⁴⁾・380⁵⁾集の5冊の報告書が刊行されている。今回のA地区・D地区で、12区の報告が終了するので、これまでの報告と合わせて12区の調査成果を概観することで、まとめとしたい。なお、本報告を含めた12区の総調査面積は30,634㎡で、確認されている遺構数は、堅穴建物跡353棟、掘立柱建物跡106棟、地下式坑6基、方形堅穴遺構10基、井戸跡25基、堀・溝跡79条などである。ここでは、南西端部の遺構や時期不明の遺構を除いた時期が確認されている堅穴建物跡302棟、掘立柱建物跡94棟から12区を概観する。

当遺跡の時期区分については、これまでの成果との整合性を保つため『第190集』⁶⁾で示されている土器変遷に基づいて、第5期=6世紀後葉、第6期=7世紀前葉、第7期=7世紀中葉、第8期=7世紀後葉、第9期=8世紀前葉、第10期=8世紀中葉、第11期=8世紀後葉、第12期=9世紀前葉、第13期=9世紀中葉、第14期=9世紀後葉、第15期=10世紀前葉、第16期=10世紀中葉とする。また、堅穴建物跡の規模については、『第291集』で示されているように、一辺の長さ4m未満=小型、4m以上6m未満=中型、6m以上8m未満=大型、8m以上=超大型とする。

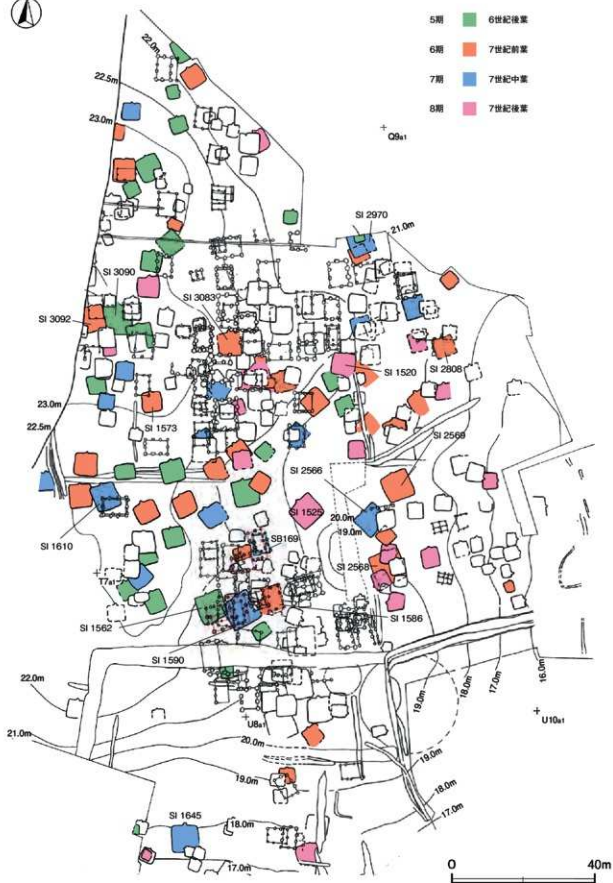
2 12区の各時代の様相

(1) 古墳時代

第5期(6世紀後葉)

本期には、堅穴建物跡28棟が該当し、前時期の堅穴建物跡は北部に2棟だけであったのが、突如として数を増やしている。ほぼ時期を同じくして鳥名前野東遺跡⁷⁾や鳥名八幡前遺跡⁸⁾においても集落が展開され、当遺跡を中心とする周辺一帯が大規模に開発された時期ともいえる。人口の自然増だけでこれだけ広範囲な集落の展開は考えにくく、国造クラスのかんりの力を持った者が強制的に移住させたと考えられる。

堅穴建物跡の規模別の棟数は、大型が6棟、中型が16棟、小型が6棟である。大型・小型が1・2棟、中型2~4棟の4~8棟でグループを構成し、台地全体にまばらに配置されている。主軸方向は、西へ25度前後振れているものが多い。主な遺物として、金属製品では耳環・刀子・鏃などが、土製品では鋤先形・



第 193 図 鳥名熊の山遺跡 12 区 集落変遷図 (1) [5~8 期]

勾玉などが出土している。土玉は上面・底面が平らで、小型のものである。石製やガラス製の白玉に似た形状で、土製白玉としてもよいと思われる。これは鋤先形土製品や土製勾玉などととも祭祀に用いられたものと思われ、それらを使用する祭祀は当該期頃が一番盛んだったと考えられる。

第6期（7世紀前葉）

本期には、堅穴建物跡37棟が該当する。本期は、当遺跡においても堅穴建物跡数が最大となり、遺跡全体に建物 distributes する時期である。規模別の棟数は超大型1棟、大型7棟、中型21棟、小型8棟である。超大型のものは第2568号堅穴建物跡で、8.52×8.30mの規模を有する。この単位集団には7.72×7.51mの大型のもう1棟も加わっているが、基本的には大型が1・2棟、中型が2～4棟、小型1棟の4～7棟ぐらゐをグループとするものである。堅穴建物跡の主軸方向は前時期と同様に、西へ25度前後振れているものが多い。その一方、第1573・1596・3083A号堅穴建物跡のように主軸を真北近くにとるものも出てきている。

当該期の主な遺物として、須恵器では坏・高坏・長頸瓶・甕・提瓶などが、金属製品として耳環・鎌・刀子・鎌・馬具（引手金具）などが、土製品として鋤先形・土玉・白玉・紡錘車などが出土している。その中で、鉄製品、須恵器、紡錘車⁹⁾の出土が目立っている。鉄製品の出土が多いのは、一挙に人口が増え、開墾や農業経営の上で、農具や馬具などの需要が急増し、必要度が高くなったからと考えられる。

第3092号堅穴建物跡出土の提瓶や第2808号堅穴建物跡出土の長頸瓶は胎土や技法から北関東地方の窯で、第3092号堅穴建物跡出土の甕は東海地方の窯で、それぞれ生産されたものと考えられる。これらの須恵器は祭祀に用いるものとして、あるいは古墳の副葬品として、当集落でも多く取り入れられている。このような鉄製品や須恵器などを手に入れるため、当集落では交換品として、農作物や布などを生産し、貯えていたと考えられる。また、集落の拡大の理由の一つは当集落の産物ばかりでなく、小貝川や谷田川沿いに入ってくる海産物や上流からの山の産物も扱う、交易の拠点となっていたからと考えられる。

第7期（7世紀中葉）

本期には、堅穴建物跡17棟、掘立柱建物跡1棟が該当する。堅穴建物跡は前時期に比べ半減し、当遺跡全体でも堅穴建物跡は減少している。規模別の棟数は大型3棟、中型12棟、小型2棟と前時期と似た割合である。堅穴建物跡は全体にばらついて配置されており、グループを捉えるのが難しい状況である。主軸方向は、以前として20度前後西へ振れているものが多いが、真北にとる割合も増えてきている。掘立柱建物跡は本区中央からやや南に位置し、大型の第1590号堅穴建物跡の北東約10mのところ、3×2間の南北棟が建てられている。桁行方向は他の同時期の堅穴建物跡と同じように西へ振れている。掘立柱建物跡は、位置や主軸方向などから第1590号堅穴建物跡に伴う建物と考えられ、この時期から穀物などを掘立柱建物へ納めることが始まったと考えられる。

主な出土遺物には、金属製品として刀子・鎌・鎌などが、須恵器として坏身・坏蓋・瓶・甕などが、そのほか手捏土器、土玉などが出土している。本区南端に位置する大型の第1645号堅穴建物跡からは東海産と考えられる坏蓋・フラスコ形瓶・甕などの須恵器や鎌・刀子などの鉄製品が出土している。本時期も交易により多くの品物を手に入れていたようである。

第8期（7世紀後葉）

本期には、堅穴建物跡17棟、掘立柱建物跡4棟が該当する。堅穴建物跡は前時期と数的には変化はないが、

掘立柱建物跡は増加している。竪穴建物跡の規模別割合は、大型1棟、中型12棟、小型4棟で、中型で大きめの2棟を大型に含めると、規模別割合はさほど変化していない。主軸方向については、竪穴建物跡、掘立柱建物跡ともに、真北から20度前後西へ振れるものが多く、伝統が受け継がれている。

南部では、前時期の大型の第1590号竪穴建物が廃絶し、その建物周辺が整備され、3×2間の南北棟2棟、東西棟1棟、4×2間の南北棟1棟の4棟が建てられている。第1590号竪穴建物跡は北東へ20mほどのところへ移動し、当該期で1棟だけの大型建物である第1525号竪穴建物跡となっている。第1525号竪穴建物跡や4棟の掘立柱建物跡の主軸方向は、すべて20度前後西へ振れており、第1525号竪穴建物跡の居住者は4棟の掘立柱建物の建立に関わったと思われる。数棟の掘立柱建物を所有する者は家父長層と考えられ、掘立柱建物は規模や構造から倉庫として使用されたものと推測される。この時期頃から家父長層は数棟の倉庫を持ち、農作物などを租税や交易のための品として貯えていたと考えられる。掘立柱建物が建てられたこの場所は、当該期以降、9世紀中葉まで竪穴建物は構築されずに、掘立柱建物のみが建てられていくことになる。当時の社会状況と照らし合わせて考えるならば、律令体制が整う前夜の様相を示していると思われる。

主な出土遺物には、金属製品として刀子・鏃・鎌・釘など、須恵器として坏・蓋・長頸瓶・甕などがある。大型の第1525号竪穴建物跡は遺物の面でも他の建物を優越しており、須恵器のほか、刀子1点、鏃6点、釘1点、不明鉄製品1点など多くの鉄製品が出土している。

(2) 奈良時代

第9期（8世紀前葉）

本期には、竪穴建物跡22棟、掘立柱建物跡8棟が該当し、前時期より建物が増加している。竪穴建物跡の規模別棟数は、大型4棟、中型17棟、小型4棟である。割合は前時期と同じようであるが、内容は異なっている。当該期の本区の中央部は空白地帯となっており、北グループと南グループに分けることが可能である。道路が整備されたことによると考えられる。前時期の南グループでは大型竪穴建物跡と掘立柱建物跡が組み合わさって一つのグループをなしていることを指摘したが、当該期の南グループには中型や小型の竪穴建物跡がなく、大型竪穴建物跡と掘立柱建物跡だけで、グループを構成している。一方、北グループは掘立柱建物跡を持たず、大型と中型で大き目の竪穴建物を中心とする竪穴建物だけでグループを構成している。

南グループは7.70×7.10mの大型の第1638号竪穴建物跡と8.65×7.15mの大型の第1649号竪穴建物跡の二つの竪穴建物跡とその北側の「コ」の字状に配置された8棟の掘立柱建物跡群で構成されている。西側と東側には南北棟が、北側には2×2間の総柱建物を中心に置き、その両側に東西棟が配置されている。その中の第179号掘立柱建物跡は、「コ」の字状に配置されている建物群の北東部に位置している4×2間の側柱建物跡で、北側桁行の外側には4間の底ない目隠し状の施設が確認されているものである。柱穴からは門が出土しており、この建物が収納倉庫であることを裏付けている。また、南グループの竪穴建物跡や掘立柱建物跡の主軸は真北から15度前後西へ振れており、古墳時代からの主軸方向を継承している。

北グループは大型の第3077号竪穴建物跡1棟と中型で大き目の第3078号竪穴建物跡を中心に中型9棟、小型のもの2棟からなっている。古墳時代後期に見られた4～6棟ほどのグループはなくなっている。第3077号竪穴建物跡からは円面硯1点、鉄鎌2点が出土しており、北グループの中心的建物と考えられる。円面硯は硯部がかなり摩耗しているばかりでなく、脚部や外堤が欠けても高さを調整して使用しているなど、かなり使い込まれているものである。当遺跡において、一番古い硯の出土例は前時期の8期のものであるが、当該期から出土例が多くなり、集落内での文字の使用が頻繁になったと考えられる。

そのほかの遺物としては、南グループの大型の第1638号竪穴建物跡から、刀子3点、鎌1点、不明鉄製品2点、石製紡錘車1点、炭化種子1点（桃）などが、もう一棟の大型の第1649号竪穴建物跡からは、刀子3点、鎌2点、鏃1点、不明鉄製品4点、炭化種子1点（桃）などが出土している。大型建物に鉄器・紡錘車などが保管され、その管理には居住者たる家父長層が当たったと想定することもできる。

第10期（8世紀中葉）

本期には、竪穴建物跡19棟、掘立柱建物跡16棟が該当する。前時期より竪穴建物跡の数は減っているが、掘立柱建物跡の数は急増している。北グループに、掘立柱建物群が出現した時期である。本期の竪穴建物跡の規模別棟数は大型3棟、中型7棟、小型9棟で、小型の占める割合が多くなっている。

南グループの「コ」の字状に配置された掘立柱建物の広場³⁰には大型竪穴建物跡1棟、その北に小型の竪穴建物跡1棟が置かれている。掘立柱建物跡は「コ」の字状配列の北側列に2×2間の総柱建物跡が、さらに、その北側に3×2間の南北棟が、東側列には桁行4間以上、梁行3間の身舎の東側に庇が付属する南北棟が確認されている。この庇付建物は第503号掘立柱建物跡で、本地区で最大の規模を有するものである。桁行方向は13度西へ振れており、古墳時代以来の南グループの主軸方向の伝統が守られている。前時期の広場で最大の第1638号竪穴建物跡の居住者が庇付建物に移ったと考えられる。

北グループには竪穴建物跡10棟（大型2棟、中型3棟、小型5棟）、掘立柱建物跡11棟（3×2間9棟、2×2間1棟、2×1間1棟）で、掘立柱建物群が並ぶようになる。掘立柱建物群の配列は大型の第1565号竪穴建物跡を南限とし、大型の第1549号竪穴建物跡を挟むように南北棟が2列並んで建てられている。北グループは大型竪穴建物に居住する者を家父長とする2グループが存在したと考えられる。この一グループは律令制の基本単位集団で、「戸」の概念に近いものと考えられる。

当該期から、北グループの竪穴建物跡も掘立柱建物跡も、主軸方向が真北を指すようになってきている。南グループの竪穴建物跡の主軸方向も一部を除いて、ほぼ真北に変化している。建物の構築にあたって、集落内に強い規制が働いていたものと推測され、真北規制は9世紀後葉まで続く。

北グループでは第1549号竪穴建物跡を挟むように、南グループでは第1637号竪穴建物跡を囲むように、掘立柱建物跡が配置されている。この二つの竪穴建物跡は、グループの中心的建物である。遺物として、第1549号竪穴建物跡から円面硯・丸軋・鉄釘・土玉などが、第1637号竪穴建物跡から鏃・不明鉄製品、転用硯などがそれぞれ出土している。硯・帯金具・鉄製品など家父長層にふさわしい遺物が出土している。

第11期（8世紀後葉）

本期には、竪穴建物跡14棟、掘立柱建物跡25棟が該当する。前時期より竪穴建物跡の数は減っているが、掘立柱建物跡の数は、本地区でピークとなっている。竪穴建物跡の規模別棟数は、大型1棟、中型8棟、小型4棟で、大型が1棟と少なくなっている。

南グループは竪穴建物跡3棟（大型1棟、中型1棟、小型1棟）、掘立柱建物跡2棟（2×2間）からなっている。「コ」の字状の掘立柱建物配置は崩れ、広場に大型の第1534号竪穴建物跡は存在するが、掘立柱建物跡は西側と東側に2×2間の総柱建物跡2棟だけとなっている。

北グループは竪穴建物跡7棟（大型1棟、中型3棟、小型3棟）、掘立柱建物跡11棟（4×3間1棟、3×2間9棟、2×2間1棟）からなっている。掘立柱建物跡は、西側列と東側列のほかに、東西棟が北側に2棟、南側に1棟加わり、大型の第3079A号竪穴建物跡を囲むように「ロ」の字状に配置されている。第3079A号

堅穴建物跡は、9期の南グループの第1638・1649号堅穴建物跡や10期の南グループの第1637号堅穴建物跡のような存在である。第3079A号堅穴建物跡は、掘立柱建物群に囲まれた広場の中心に位置しており、時によっては、グループ内・外の人々との饗應にあたった家屋と考えられる。

当該期の主な出土遺物には、刀子・鎌・釘・鏝などの鉄製品、石製紡錘車、転用硯などが出土している。転用硯は6点出土しており、文字の使用が広がっていることを知ることができる。

(3) 平安時代

12期（9世紀前葉）

本期には、堅穴建物跡22棟、掘立柱建物跡15棟が該当する。堅穴建物跡の規模別棟数は、大型1棟、中型13棟、小型8棟で、大型が1棟と少なくなっている。掘立柱建物跡の規模別棟数は、3×2間13棟、2×2間2棟で、本区においては大型掘立柱建物跡は見られなくなっている。

南グループの広場には中型で大き目の第1647号堅穴建物跡が配置され、グループのエリアは引き継がれているが、組み合わせられる堅穴建物跡はなく、第1647号堅穴建物跡1棟だけの存在となっている。掘立柱建物跡は西側列に3棟、北側列に1棟、第1647号堅穴建物跡の北に東西棟が1棟配置されている。

北グループでは、堅穴建物跡が7棟（大型1棟、中型4棟、小型2棟）で、第3079B号堅穴建物跡を建て替えた大型の第3079C号堅穴建物跡と中型で大き目の第3082A号堅穴建物跡を、掘立柱建物群の「口」の字状配置の広場に置き、掘立柱建物群の外側周辺に中型2棟、小型2棟が配置されている。掘立柱建物跡は11棟で、規模別では4×3間1棟、3×2間9棟、2×2間1棟である。

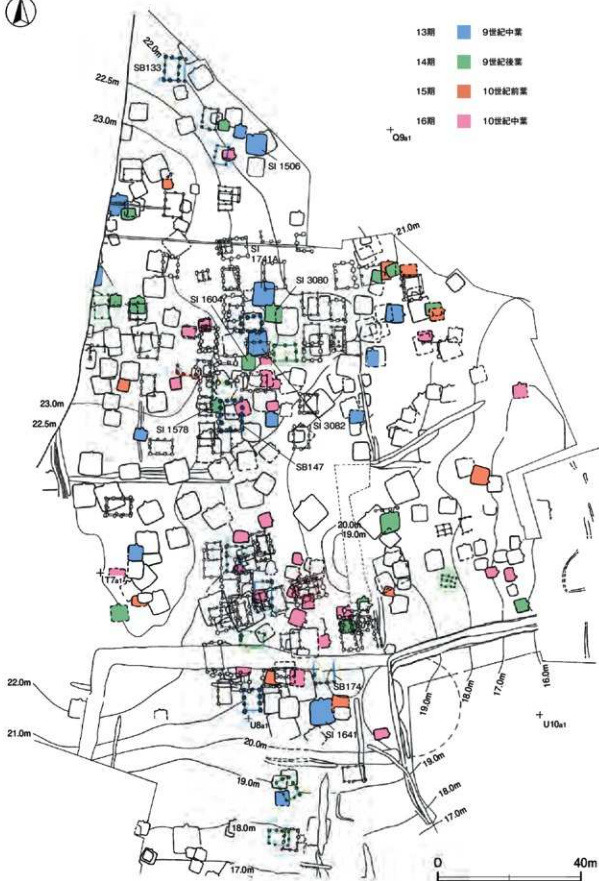
主な遺物として、南グループの中心的な建物である第1647号堅穴建物跡からは、転用硯、漆附着須恵器坏、灰釉陶器の長頸瓶などの土器のほか、鉄製品として、刀子・釘・鉄地金銅張で飯が3か所打たれている馬具の一部などが出土している。北グループの中心的な建物である第3079C号堅穴建物跡からは、多量の土器のほか、鉄製品として、刀子・鉈尾_ノが出土している。鉈尾_ノとしたものは、第1647号堅穴建物跡出土のものと同様の鉄製品で、革製の帯などを飾るものと考えており、北・南グループの中心的建物跡から同じようなものが出土していることは、興味深い。依然として、掘立柱建物群の広場の中心部に位置するやや大型の堅穴建物跡の居住者は鉄製品などを保管・管理し、文書を取り扱っていたようである。

13期（9世紀中葉）

本期には、堅穴建物跡23棟、掘立柱建物跡14棟が該当する。堅穴建物跡の規模別棟数は、大型1棟、中型11棟、小型11棟である。大型のものが1棟と少なくなり、小型の割合が増えている。掘立柱建物跡の規模別棟数は、4×3間1棟、3×2間で東側に庇がつくもの1棟、3×2間10棟、3×1間1棟、2×2間1棟である。

南グループの広場の位置には、大型の第1641号堅穴建物跡が配置され、古墳時代からのグループの区域を継続している。掘立柱建物群は、「コ」や「ロ」の字状には配置されていないが、西側に南北棟が3棟、北側に東西棟1棟が配置され、グループの倉庫群を構成している。

北グループでは掘立柱建物群の「ロ」の字状配置は崩れ、西側の列に東西棟1棟、西側列の南端に4×3間の南北棟1棟が配置されている。前時期までの広場の位置には、中型でやや大き目の第1741A号堅穴建物跡が配置され、2回の建て替えが確認されている。第1741A号堅穴建物跡はグループの中心的家屋となっており、同じグループと考えられる堅穴建物跡は、中型2棟、小型4棟で、小型の割合が多くなっている。



第195図 鳥名熊の山遺跡12区 集落変遷図(3) [13～16期]

本期には、最北に新たなグループが発生しており、最北グループとする。最北グループは、庇付建物跡1棟、2×3間1棟、3×1間1棟の3棟の掘立柱建物跡と中型の竪穴建物跡2棟、小型の竪穴建物跡1棟で構成されている。このグループの中心的竪穴建物跡は、掘立柱建物跡の東側に位置する第1506号竪穴建物跡で、中型で大き目のものである。しかし、前時期までのような掘立柱建物や竪穴建物の配置に企画性は認められなくなっている。

主な遺物は、当該期においてもグループの中心的建物から出土している。南グループの第1641号竪穴建物跡からは、灰軸陶器、刀子、鍬、鏝、油煙付着土器などが出土している。灰軸陶器は朱墨痕のある皿と小瓶で、小瓶については、第1641号竪穴建物跡の北側に位置する第174号掘立柱建物跡から鉄鉢形土器も出土していることから、仏具として使用された可能性がある。

北グループでは、第3082C号竪穴建物跡から墨書土器5点が出土している。この文字はすべて「**区**」で、「己と人の合わせ文字と考えられる」とされる文字である。「**区**」は本区の井戸や遺物集中地点から、179点も出土しており、当遺跡を代表する標識文字である。8世紀前葉から9世紀後葉まで確認され、8世紀中葉のものが一番多い。平川南氏から「夜刀(谷戸)の神(=蛇)と集落の人々との関わりを示唆する祭祀的な文字」とのご教示¹¹⁾をいただいているもので、谷に囲まれた当集落を象徴する文字といえる。

最北グループの第1506号竪穴建物跡からは、鎌、鍬、釘、不明鉄製品、砥石、火打石の他に、灰軸陶器、猿投産須恵器、油煙付着土器、畿内産土師器、「丕」と墨書された須恵器などが出土している。灰軸陶器は長頸瓶の破片で、井ヶ谷78壙式期と考えられる。猿投産須恵器は碗の破片で、鳴海32号壙式期と考えられるものである。他地域との交流に関与する有力者層の存在がうかがわれる。また、「丕」は当遺跡の標識文字の一つで、これまでに「城内丕」「丕」などと墨書された土器などが十数点出土している。

14期(9世紀後葉)

本期には、竪穴建物跡19棟、掘立柱建物跡9棟が該当する。竪穴建物跡の規模別棟数は、中型6棟、小型13棟で、大型がなくなり、小型の割合が増している。掘立柱建物跡の規模別の棟数は、3×2間の総柱建物1棟、3×2間6棟、2×2間2棟で前時期より少なくなっている。

南部では、古墳時代から続いていた大型の竪穴建物を広場に配置し、周辺に掘立柱建物群を配置する構成は姿を消し、中型の竪穴建物跡2棟、小型の竪穴建物跡3棟が間隔を置いて配置されている。掘立柱建物跡は中央部に東西棟が1棟、東側の斜面部に総柱建物1棟が配置されているだけとなっている。

北部においても、大き目の竪穴建物を中心とし、掘立柱建物群を企画性の基に配置する構成はなくなり、北グループ-最北グループとも消滅している。竪穴建物跡は10棟あり、中型の第3080号竪穴建物跡が北グループの広場の位置に置かれているが、そのほかの竪穴建物跡は2~4棟のまとまりで、グループを造っており、やや離れて配置されている。掘立柱建物跡は南側に2棟の東西棟が配置されている。

主な遺物としては、第1604号竪穴建物跡から朱墨痕のある転用硯が、第1578号竪穴建物跡からは鍬・刀子のほかに「子淡口」「宅」「**区**」と墨書や窺書された土器が出土している。当遺跡からは、有力者層の存在を示唆すると思われる「大殿墨研」「田部」「田前」「宅」「子鼻門」「門」「城内」「城内丕」「丕」などの墨書土器が出土している。仲山英樹氏が栃木県の文字資料の「門」「家」「殿」「宅」などの分析から、「宅(ヤケ)」は屋や倉を含む一区画の施設として、出家などに関わる農業経営の拠点であろう¹²⁾と論じている。本区に前時期まで存在した南グループや北グループなどのような律令制の中での「基本単位集団」と考えられる「戸」のまとまりがなくなり、「宅」に住む有力者が直接当地を治め、人と土地の支配に携わったとすれば、

この時期の「基本単位集団」の崩壊は、「公地公民制」の崩れの大きな要因であったと考えられる。

15期 (10世紀前葉)

本期には、堅穴建物跡18棟、掘立柱建物跡2棟が該当する。堅穴建物跡の規模別棟数は、中型4棟、小型14棟である。小型のものが全体の78%を占めていることに注意しておきたい。掘立柱建物跡は2棟で、激減しており、次の時期には見られなくなっている。こうした変化が漸移的ではなく唐突な観があることから、一般に言われているように、この時期に大きな社会変革があったと考えている。

南部では、堅穴建物跡は中型2棟、小型3棟で、ある程度の間隔を持って配置されている。配置に規則性は見て取れない。南部のほぼ中央に、2×2間の総柱建物跡が配置されている。

北部では、堅穴建物跡は中型1棟、小型6棟で、2・3棟のグループで、ある程度の間隔を持って配置されている。掘立柱建物跡は西側に1棟、東西棟が配置されているだけとなっている。

当該期の主な遺物は刀子・鎌などの鉄製品、灰軸陶器などで、量的には少ない。

本区の堅穴建物跡と掘立柱建物跡の状況から考えられることは、前時期で述べたように中心的建物がなく、小型建物が多いことから、家父長クラスの建物がないことを指摘できる。「戸」単位の集団から、支配される側の集団に変化していると考えられる。律令制の弱まりのなかで、「戸」の組織が崩れ、国郡里(郷)制の地方支配組織とは違った在地有力者の支配する地区、集落ができ始まっていると考えられる。

16期以降 (10世紀中葉以降)

本期には、堅穴建物跡24棟が該当するが、掘立柱建物跡は見られなくなっている。堅穴建物跡の規模別割合は中型2棟、小型22棟である。小型のものがほとんどとなり、支配される側の様相を濃く示している。

堅穴建物跡は前時期と比べ密集して配置されている。南部は旧南グループの広場や北側建物群辺りに13棟が集まっている。北部は9棟が旧北グループの西側建物群辺りに集まっている。以前からの道路や農地などの区割りがあり、建物群であったところや広場だったところに堅穴建物を建てたのであろう。

主な出土遺物は、刀子・鎌・釘などの鉄製品、石製紡錘車、砥石などであるが、本期も量的には少ない。堅穴建物跡の規模や遺物の面からも零細な営農状況がうかがえる。

当該期以降、本区には11世紀中頃まで、10棟前後の棟数で集落が営み続けられる。当遺跡全体でも、堅穴建物跡の棟数は減るが、11世紀後葉まで中央部を中心に集落は継続されている。支配者の居宅は不明で、遺構からは、寒村的な景観と言わざるを得ない。しかし、遺構や遺物からは集落内で機織り、鍛冶、土器造りなどを行っていたことを知ることができ、ある程度の人口を維持しながら、存在し続けたと考えられる。

3 当遺跡にみる大型掘立柱建物の出現とその背景

(1) 4区における7世紀代の大型堅穴建物と大型掘立柱建物

12区の集落変遷を概観したが、7世紀後葉には南グループが成立し、大型堅穴建物を中心として、掘立柱建物群が並ぶ景観が確認されている。8世紀中葉頃には、そのようなグループが当遺跡では全体では10か所程度あり、拠点的大集落を支えているのである。それでは、当遺跡の他の地区では7世紀代にどのような変化が起きているのか4区¹³⁾の例で解説する。

4区は、当遺跡中央からやや北寄りの台地の平坦部に位置している。4区においても、他の地区と同じように5期(6世紀後葉)になり、急激に堅穴建物跡の数が増す。

穴建物跡で、9.82 × 9.68 mの規模である。一グループの建物構成は超大型1棟を中心建物とし、そのほか大型1・2棟、中型2～4棟、小型2・3棟で、3グループ確認できる。主な遺物として、須恵器では坏身・長頸瓶・短頸壺・提瓶・甕が、鉄製品では、鎌・鐵・鋤・刀子が、石製品では紡錘車が、土製品では、土玉・白玉・輪羽口などが出土している。他の時期と比べて、須恵器、鉄製品、紡錘車の出土点数が多い。

7期（7世紀中葉）は16棟と棟数が減る。当遺跡全体でも7期・8期と堅穴建物数は減少する。規模別棟数は、超大型1棟、大型3棟、中型6棟、小型6棟で、中央のグループは超大型1棟、大型2棟、中型3棟、小型2棟の8棟で構成されている。前時期に3グループあったままとまりは維持されているが、中央のグループにだけ、超大型と大型が集まっている。一番大きいものは第1010号堅穴建物跡で、9.70 × 9.20 mの規模である。第1045号堅穴建物跡の居住者が移動したと考えられる。主な遺物は、須恵器では坏身・坏蓋・長頸瓶・平瓶・提瓶が、鉄製品では鐵・鎌・刀子・釘が、石製品では紡錘車が、土製品では土錐・白玉などが出土している。遺物は前時期と同じようで、須恵器、鉄製品、紡錘車の出土が目立つ。

8期（7世紀後葉）になると、4区は様相が一変する。当該期の堅穴建物跡は16棟で、規模別棟数は、大型1棟、中型9棟、小型6棟である。超大型が姿を消し、大型も1棟だけとなっている。

前時期、超大型1棟、大型2棟が存在した中央のグループには、当該期、7棟の堅穴建物跡が引き続いて存在するが、構成に大型はなく、中型4棟、小型3棟からなっている。超大型の第1010号堅穴建物跡の居住者は、20 m北に位置する大型の第57号掘立柱建物跡（6間 × 3間側柱式）へ移動したと考えられる。第57号掘立柱建物跡は南妻側に庇が張り出し、さらに南側部分の三方を目隠し状の施設（塼）が付属するもので、居住施設と考えられる。第57号掘立柱建物跡の桁行方向は、14度西へ振れており、前時期の大型堅穴建物跡の主軸方向も西へ10度前後振れているので、前時代の主軸方向を継承していると言える。これは、12区の南グループの建物でも受け継がれていたことで、古墳時代の紐帯を基に、掘立柱建物へ移ったからと考えられる。また、第57号掘立柱建物跡に対峙する位置に大型の第55号掘立柱建物跡（5 × 2間総柱式）と第56号掘立柱建物跡（2 × 2間総柱式）が存在する。第57号掘立柱建物跡に付属する倉と想定される。第55号掘立柱建物跡と時期や規模が似ている5 × 2間の総柱式で、東側と北側に柱穴列を伴う掘立柱建物跡が第55号掘立柱建物跡の南西約110 mの8区¹⁴⁾で確認されている。第559号掘立柱建物跡で、7世紀前葉の堅穴建物跡を掘り込み、8世紀前葉の堅穴建物に掘り込まれていることから、ほぼ同時期のものと考えられる。

このように、7世紀後葉頃、当遺跡には、超大型堅穴建物から大型掘立柱建物に移り、大型総柱建物の倉を持ち、いくつかの単位集団を配下に置くような有力者が出現してきているのである。

しかし、4区や8区においては、大型掘立柱建物や大型総柱建物は、一時期で姿を消している。次期に、当遺跡は再編成されるのである。大型堅穴建物を掘立柱建物群の広場に置く12区の南グループが9世紀中葉頃まで継続していくのと対照的である。

(2) 河内評と嶋名里

ここで、当集落に大型掘立柱建物や大型総柱建物が出現した7世紀後葉の時代背景を確認する。郡は、「7世紀半ば、いわゆる「大化改新」の際にそれまでの国造の「国」を再編成して「天下立評」された「評」に始まる地方行政区画である。評は管下に複数の「五十戸」をもっており、のちに五十戸は「里」と表記されるようになる。」¹⁵⁾とされ、大宝律令制定以前に、新しい中央集権的な制度として、国評里制の地方支配機構があったのである。この国評里制が東国に確実に及んでいたことは、那須国造碑の「評督」¹⁶⁾や「上毛

野国車評桃井里大贅帖」と記された藤原京の木簡¹⁷⁾などが証明している。また、「常陸国風土記」によると「新治・筑波・茨城・那賀・久慈・多珂などの国々が国造によって治められていたものを、惣領の高向臣・中臣・藤織田連がそれぞれの国造を評造とし、次いで、白雉4年(653)にその国を分割または再編して、新たに行方・白壁(真壁)・河内・信太の評を誕生させ、これらの評の上に常陸国を置いた」¹⁸⁾とされている。

7世紀後葉頃には、当集落も国評里制に組み込まれ、河内評の下の「五十戸」を単位とする「嶋名」の里として、存在していたと考えられる。新しい制度である国評里制のなかで、評家が河内評の中に造られ、里を支配するのである。当遺跡の家父長クラスの有力者層の中には、1～3程度の単位集団を掌握し、新しい支配制度とともに伝わってきた大型掘立柱建物に居住し、大型総柱建物の倉を持つ者も登場してきているのである。

しかし、4区や8区で確認されている大型掘立柱建物や大型総柱建物は、次期の8世紀前葉には引き継がれていない。それには、大宝律令の制定が関係していると考えられる。律令国家は、国郡里(717年以降は郷)制を確立し、中央集権的国家をさらに強化したのである。8世紀になり、当遺跡は国司・郡司・里(郷)長の新地方支配機構の中、郡司あるいは里長のもとで、再編成されるのである。

4 おわりに

本書は、当遺跡に関する最終報告書である。これまでに、当財団は270,000㎡を超える面積を調査し、確認した遺構数は、堅穴建物跡約2600棟、掘立柱建物跡約450棟、堀・溝跡約400条などとなっている。本書でこの膨大な遺構や遺物について総括することはできないが、まとめでは、報告の区である12区(30,634㎡)について概観した。「第190集」の「まとめ」は、当遺跡の報告書の指針となっており、本書の「まとめ」はその方法に従った。

そのなかで、当遺跡には4つの課題が残っている。一つ目は、6世紀後葉になぜ突然のように、島名の台地のほぼ全体に大集落が現れるのかということである。二つ目は、7世紀後葉に大型掘立柱建物や大型総柱建物が建てられながら、なぜ引き継がれずに消えたのかということである。三つ目は、8世紀前葉から9世紀後葉にかけて、堅穴建物や掘立柱建物がかなりの数存在しながら、大型掘立柱建物や大型総柱建物が少なく、総柱建物が列をなさないことなど官衙の様相がなぜ薄いかということである。四つ目は、堅穴建物跡や掘立柱建物跡からは家父長クラスなどの有力者層の家屋は考えられるが、9世紀後葉頃から律令制が弱まり、これ以降、有力者層の居宅と考えられる遺構が確認されないのに、なぜ集落がその後200年も続くのかということである。

その答えは、今回で21冊となる当遺跡の報告書に掲載されている遺構・遺物等が語っていると考えている。本書が「第190集」で述べているように「『常陸国風土記』に欠落している「河内郡条」の一部を補い」歴史解明の一助となってくれれば幸いである。

註

- 1) 稲田義弘・飯泉達司「島名熊の山道跡 島名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書X」茨城県教育財団文化財調査報告第214集 2004年3月
- 2) 松本直人「島名熊の山道跡 島名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XI」茨城県教育財団文化財調査報告第236集 2005年3月
- 3) 齋藤真弥・酒井雄一・渡邊浩実・松本直人・齋藤貴史・清水智「島名熊の山道跡 島名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XV」茨城県教育財団文化財調査報告第291集 2008年3月

- 4) 仲村浩一郎・坂本勝彦・江原美奈子 『鳥名熊の山道跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』茨城県教育財団文化財調査報告第360集 2012年3月
- 5) 清水智 『鳥名熊の山道跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』茨城県教育財団文化財調査報告第380集 2013年3月
- 6) 稲田義弘 『鳥名熊の山道跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』茨城県教育財団文化財調査報告第190集 2002年3月
- 7) a 寺門千勝・田原康司・梅澤貴司 『鳥名前野東道跡・鳥名境松道跡・谷田部漆道跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』茨城県教育財団文化財調査報告第191集 2002年3月
 b 飯泉達司 『鳥名前野東道跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』茨城県教育財団文化財調査報告第215集 2004年3月
 c 小松崎和治 『鳥名城松道跡・鳥名前野東道跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ』茨城県教育財団文化財調査報告第281集 2007年3月
- 8) a 青木仁昌 『鳥名八幡前道跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ』茨城県教育財団文化財調査報告第201集 2003年3月
 b 菊池直哉 『鳥名八幡前道跡 都市計画道路鳥名上河原崎線道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第283集 2007年3月
- 9) 註3) 文献で、当道跡の遺構・遺物について、数値的なデータを集成している。紡錘車の出土数については、第6期(7世紀前葉)がピークとなっている。
- 10) 佐藤信 『古代の地方官衙と社会』日本史リブレット」8 山川出版 2007年2月
- 11) 註5) 文献に同じ
- 12) 仲山英樹 『出土文字資料にみる「門」と「家」』研究紀要」第5号 (財)橋本県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 1997年3月
- 13) 藤田哲也・三谷正・原信田正夫・川上直登・稲田義弘 『鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告 熊の山道跡Ⅴ』茨城県教育財団文化財調査報告第174集 2001年3月
- 14) 佐藤一也 『鳥名熊の山道跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書ⅩⅡ』茨城県教育財団文化財調査報告第403集 2015年3月
- 15) 註10) 文献に同じ
- 16) a 吉原啓 『那須国造碑-時代と人とをむすぶもの-』大田原市なす風土記の丘湯津上資料館 2014年4月
 b 佐藤信 『律令地方行政と那須官衙道跡』『那須官衙の時代-律令期地域社会の移り変わり-』大田原市なす風土記の丘湯津上資料館 橋本県那珂川町なす風土記の丘資料館 2015年9月所収
- 17) 若狭徹 『グンマはタルマから始まった-なぜ解き「群馬」の名の由来-』かみつけの里博物館 2001年10月
- 18) 黒澤彰哉 『ヤマトケルと常陸国風土記』茨城新聞社 2017年4月

写 真 图 版



古墳時代土器集合



平成23年度 調査区遠景（南方向から）



平成23年度 調査区全景

PL2



平成22年度 A地区調査終了状況(1)



平成22年度 A地区調査終了状況(2)

第2808号竖穴建物跡
竈



第2808号竖穴建物跡
遺物出土状況



第2808号竖穴建物跡



PL4



第2969号竖穴建物跡



第2970号竖穴建物跡



第 3083B・C 号
竖穴建物跡竈

第 3083B·C 号
豎穴建物跡



第3083号豎穴建物跡
掘 方



第3087号豎穴建物跡
竈遺物出土状況



PL6



第3087号竖穴建物跡



第 3090B・C 号
竖穴建物跡竈
土層断面



第 3090B・C 号
竖穴建物跡
遺物出土状況



第3092号竖穴建物跡
遺物出土状況(1)



第3092号竖穴建物跡
遺物出土状況(2)



第3092号竖穴建物跡
遺物出土状況(3)

PL8



第3092号竖穴建物跡
遺物出土状況(4)



第3092号竖穴建物跡



第3099号竖穴建物跡



第3146号竖穴建物跡
竈土層断面



第3146号竖穴建物跡
遺物出土状況

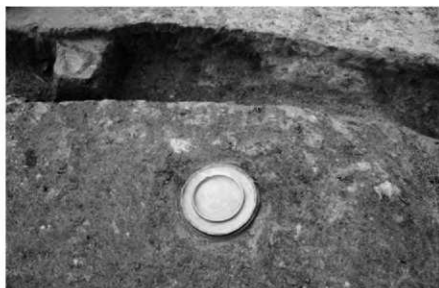


第3146号竖穴建物跡

PL10



第1603号竖穴建物跡



第3077号竖穴建物跡
遺物出土状況



第3077号竖穴建物跡



第3078号竖穴建物跡



第3081号竖穴建物跡



第 3 0 8 8 B 号
竖 穴 建 物 跡
遺 物 出 土 状 况

PL12



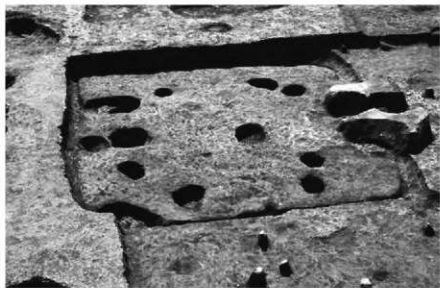
第 3088B 号
竖穴建物跡



第3095号竖穴建物跡
遺物出土状況(1)



第3095号竖穴建物跡
遺物出土状況(2)



第3095号竖穴建物跡



第3097号竖穴建物跡



第3098号竖穴建物跡

PL14



第3133号竖穴建物跡
竈 掘 方



第306号竖穴建物跡



第3151号竖穴建物跡
掘 方



第1741A·B·C号
竖穴建物跡



第3079C号
竖穴建物跡



第3080号竖穴建物跡

PL16



第 3079・3080 号
豎穴建物跡 掘方



第 3082B・C 号
豎穴建物跡
遺物出土状況(1)



第 3082B・C 号
豎穴建物跡
遺物出土状況(2)

第 3082B・C 号
竖穴建物跡



第3084号竖穴建物跡
掘方



第3085号竖穴建物跡





第3086号竖穴建物跡
遺物出土状況 (1)



第3086号竖穴建物跡
遺物出土状況 (2)



第3086号竖穴建物跡



第3089号竖穴建物跡
竈遺物出土状況



第3089号竖穴建物跡



第3091号竖穴建物跡
遺物出土状況

PL20



第3093号竖穴建物跡



第 3094 B 号
竖穴建物跡
遺物出土状況



第3139号竖穴建物跡
遺物出土状況



第3140号竖穴建物跡
遺物出土状況



第3141号竖穴建物跡
窟遺物出土状況



第3143号竖穴建物跡
遺物出土状況

PL22



第3143号竖穴建物跡



第3144号竖穴建物跡
遺物出土状況



第3138・3139・3144号
竖穴建物跡



第 557A・B 号
掘立柱建物跡



第558号掘立柱建物跡

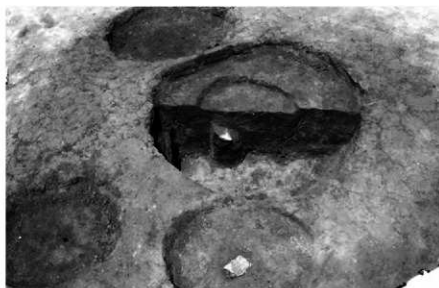


第 562・573 号
掘立柱建物跡

PL24



第562号掘立柱建物跡
確認状況



第563号掘立柱建物跡
P5土層断面



第563号掘立柱建物跡

第564号掘立柱建物跡
確認状況



第559A・B, 560号
掘立柱建物跡
確認状況(1)



第559A・B, 560号
掘立柱建物跡
確認状況(2)



PL26



第559A・B, 560号
掘立柱建物跡
確認状況(3)



第561・575号
掘立柱建物跡
確認状況



第578号掘立柱建物跡



第218号 井戸跡



第251号 井戸跡



第7241号 土坑
遺物出土状況



第6822号土坑遺物出土状況



第6823号土坑



第6824号土坑



第6840号土坑遺物出土状況



第6850~6854号土坑



第7009号土坑







SI 3090C-28



SI 3092-38



SI 3092-42



SI 3146-72



SI 3146-74



SI 3146-77



SI 3146-71



SI 3092-41

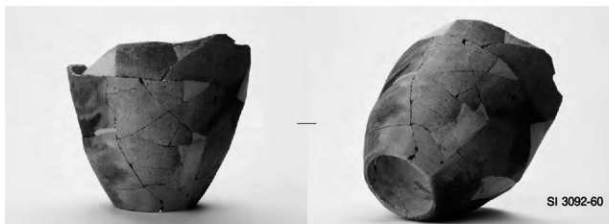


SI 3092-40



SI 3092-39







第3092号竖穴建物跡出土土器

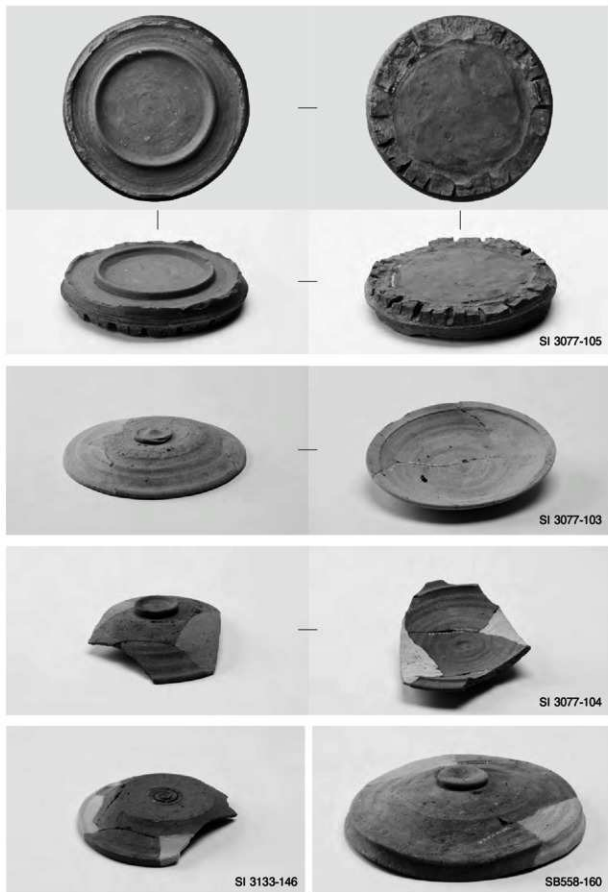




奈良時代土器集合



平安時代土器集合



第3077·3133号竖穴建物跡，第558号掘立柱建物跡出土土器







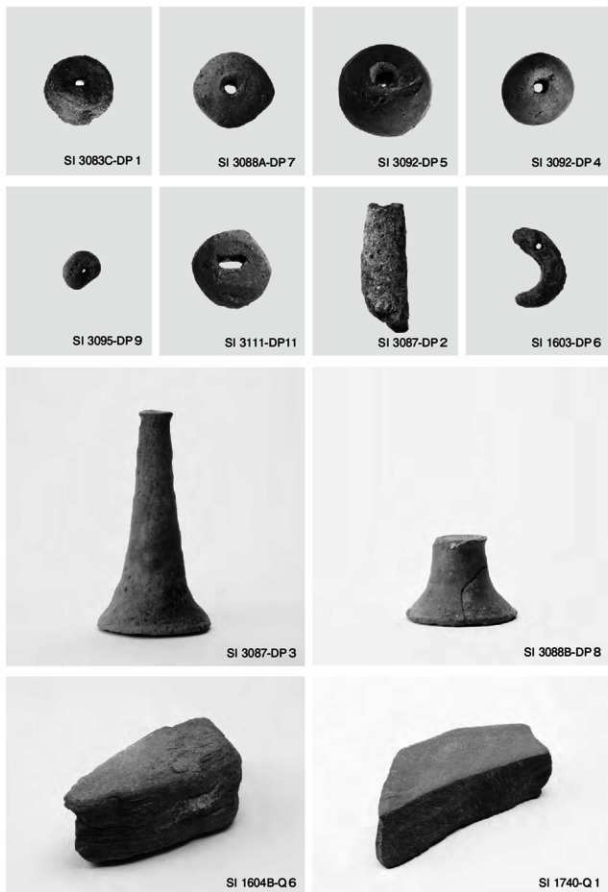


第3082C·3084C·3085·3086号竖穴建物跡出土土器





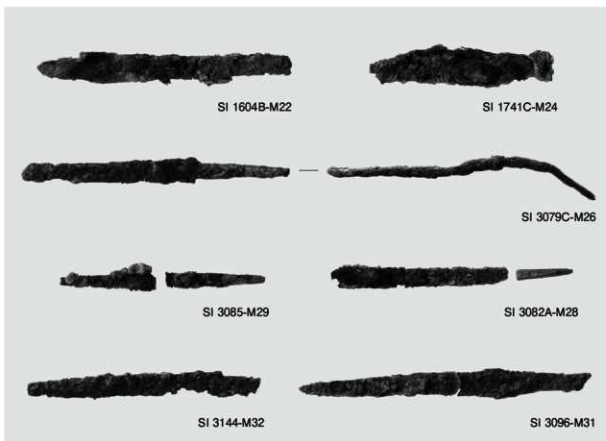
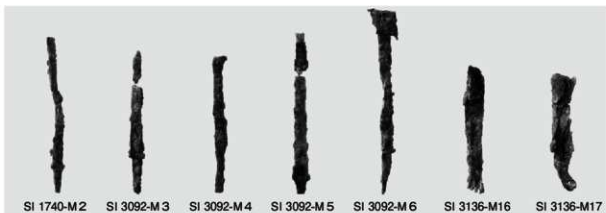
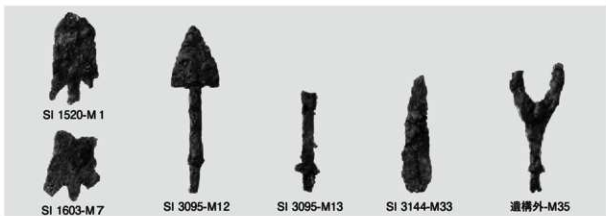




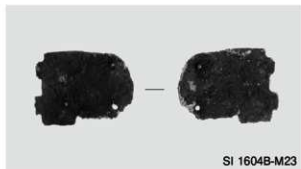
第1603・3083C・3087・3088A・3088B・3092・3095・3111号竪穴建物跡出土土製品，
第1604B・1740号竪穴建物跡出土石器



第1604B・3077・3088B・3091・3096・3132・3150号竪穴建物跡, 遺構外出土石器・石製品・剥片



第1520・1603・1604B・1740・1741C・3079C・3082A・3085・3092・3095・3096・3136・3144号
 竪穴建物跡，遺構外出土金属製品



第1604B・3077・3136号竪穴建物跡，第558号掘立柱建物跡，遺構外出土金属製品・銭貨

抄 録

ふりがな	しまなくまのやまいせき								
書名	鳥名熊の山遺跡								
副書名	鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第437集								
著者名	海老澤稔 見越広幸								
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587								
発行日	2019(平成31)年3月18日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
鳥名熊の山 遺跡	茨城県つくば市鳥名 字寺ノ前1672-3番地 ほか	08220 - 214	36度 3分 32秒 (36度 3分 36秒)	140度 3分 8秒 (140度 2分 55秒)	13 ~ 24m	20100401 20100630 20100801 20100930 20111101 20120331	1,137㎡ 663㎡	鳥名・福田 坪一体型特 定土地区画 整理事業に 伴う事前調 査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
鳥名熊の山 遺跡 (12区)	集落跡	古墳	堅穴建物跡	19棟	土師器(坏・高坏・鉢・甕・ 小形甕・甌)、須恵器(坏身・ 長頸瓶・提瓶・甕)、土製品 (土玉・白玉)、石器(紡錘車・ 砥石)、金属製品(鐵・鎌)				
		奈良	堅穴建物跡	16棟	土師器(坏・鉢・甕・甌)、				
			掘立柱建物跡	15棟	須恵器(坏・高台付坏・蓋・ 盤・高盤・円面硯・鉢・甌)、				
	土坑	6基	土製品(勾玉・土玉・支脚・ 羽口)、石器(砥石・紡錘車)、 金属製品(鐵・鎌・刀子・釘)						
平安	堅穴建物跡	35棟	土師器(坏・高台付坏・高 台付碗・蓋・小形甕・甕)、						
掘立柱建物跡	13棟	須恵器(坏・高台付坏・盤・ 高盤・鉢・甌)、灰釉陶器(長 頸瓶・高台付碗)、土製品(勾 玉・土玉・支脚)、石器(紡 錘車)、金属製品(鐵・鎌・ 刀子・釘・鉸具)							
土坑	12基	土師器(坏・高台付皿・甕)、 須恵器(坏・鉢)、 錢貨							
井戸跡	2基								
その他	時期不明	土坑	146基	石器(砥石・鐵)、縄文土器、 土師器(坏・高台付皿・甕)、 須恵器(坏・鉢)、 錢貨					
要約	総調査面積 271,155㎡の県内最大級の集落跡で、これまでに、堅穴建物跡約2600棟、掘立柱建物跡約450棟などが確認されている。今回報告の調査区は、遺跡南端部の12区の台地上に位置し、古墳時代後期から平安時代前半まで継続して集落が営まれている。古墳時代後期には、搬入品と考えられる須恵器が数多く出土している。中心の時期は奈良・平安時代で、堅穴建物跡からは、役人が使用したと考えられる帯金具・円面硯などが出土しており、当遺跡は河内郡嶋名郷の中心地域と考えられる。								

印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 10 Pro
	編集	Adobe InDesign CC
	図版作成	Adobe Illustrator CC
	写真調整	Adobe Photoshop CC
	Scanning	Film EPSON GT-X980
		図面類 RICOH MP W4002
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷	印刷所へは、	Adobe InDesign CCでレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第437集

島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

平成31(2019)年3月15日 印刷

平成31(2019)年3月18日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株高野高速印刷

〒310-0853 水戸市平須町1822-122

TEL 029-305-5588